

赤道渡呂寒原古墓群
神山後原丘陵古墓群
宜野湾シリガーラ流域古墓群
宜野湾後原遺物散布地

平成30年度・令和元年度

市道宜野湾11号整備における埋蔵文化財発掘調査報告書

赤道渡呂寒原古墓群
神山後原丘陵古墓群
宜野湾シリガーラ流域古墓群
宜野湾後原遺物散布地

2023(令和5)年2月

沖縄県 宜野湾市教育委員会

**赤道渡呂寒原古墓群
神山後原丘陵古墓群
宜野湾シリガーラ流域古墓群
宜野湾後原遺物散布地**

平成30年度・令和元年度

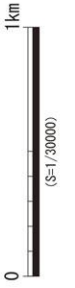
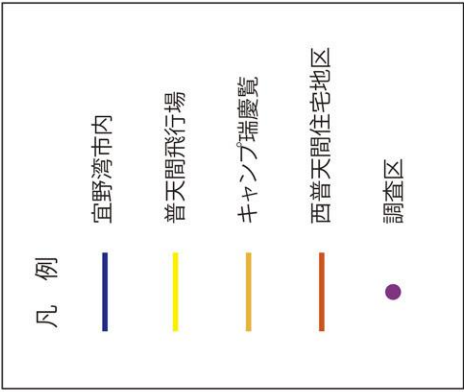
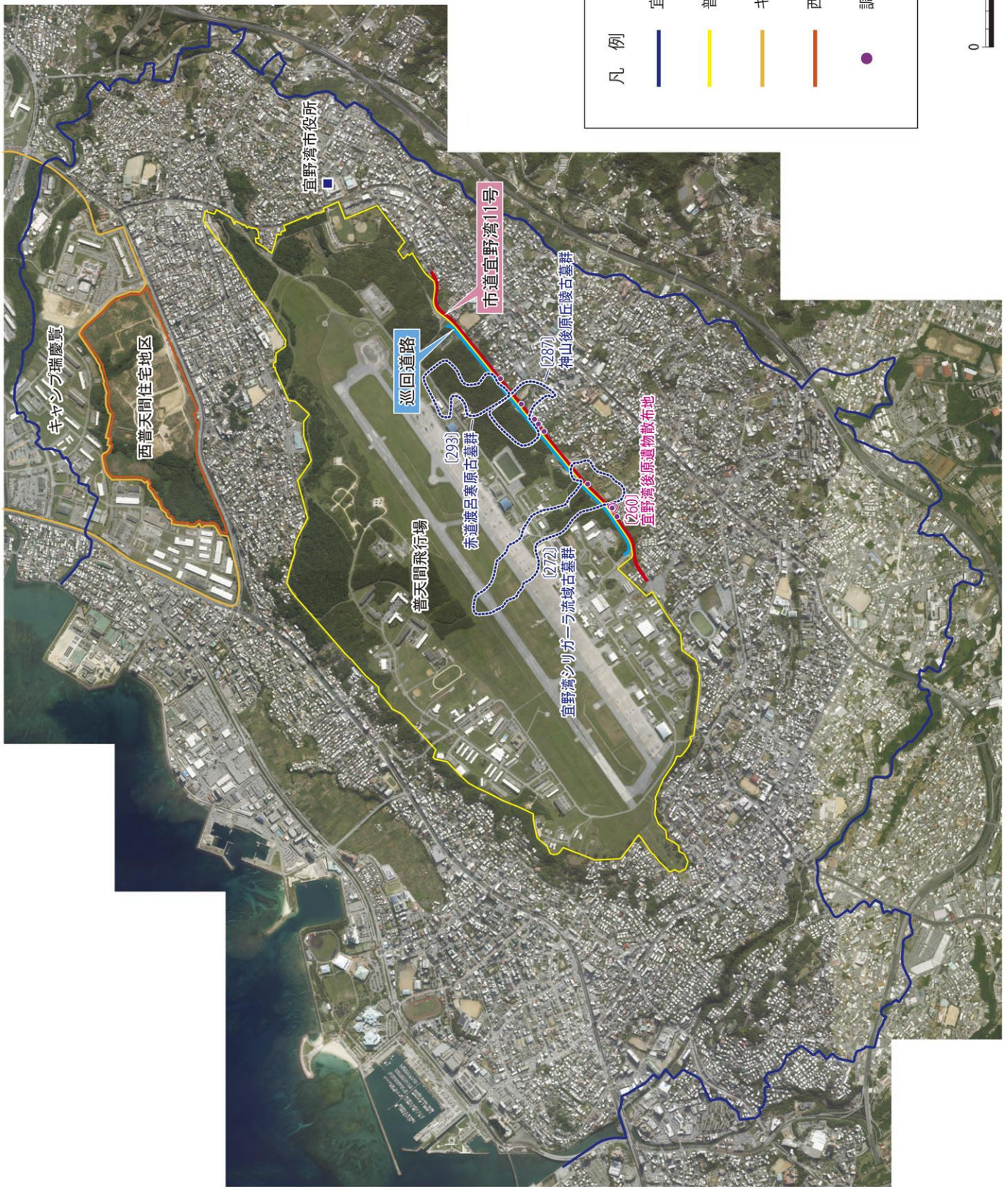
市道宜野湾11号整備における埋蔵文化財発掘調査報告書

2023(令和5)年2月

沖縄県 宜野湾市教育委員会



巻頭図版 1 報告書所収調査地位置





巻頭図版2 A-1区 AS-068～AS-072 検出状況〔西から〕



巻頭図版3 A-2区 AS-001～AS-004 検出状況〔南西から〕



巻頭図版4 C-1区 溝跡 完掘状況〔南から〕



巻頭図版5 C-1区 全景〔北東から〕



巻頭図版 6 E区 全景 調査終了状況〔北東から〕



巻頭図版 7 B区 123号墓 墓口検出状況〔南から〕



巻頭図版 8 B区 69号墓 厨子安置状況



巻頭図版 9 B区 69号墓 墓口検出状況〔南から〕



巻頭図版 10 D区 前景〔北西から〕



巻頭図版 11 D区 庭囲い石積 検出状況〔北東から〕

序

本報告書は、平成 30 年度から令和元年度にかけて宜野湾市教育委員会が実施した市道宜野湾 11 号整備予定地における埋蔵文化財発掘調査の成果報告です。

市道宜野湾 11 号整備予定地は平成 29 年度に返還されるまで普天間飛行場の一部であり、当該地区は字宜野湾、字神山、字赤道、字中原をまたがる地域となっております。基地として接收される前は、住宅やお墓、畑などがありましたがそのほとんどは基地建設に伴う造成工事で消失しました。

今回の調査によって、近世～近代にかけての遺跡が確認されております。特に字宜野湾の集落跡となる宜野湾後原遺物散布地では、建物に関係すると見られる柱穴や、その周辺から多くの陶磁器が出土しています。

また、戦前に作られた古墓も良好に残っており、基地接收によって失われた 4 ヶ字の生活の一端が垣間見える成果が得られております。

本調査成果が、広く市民の皆様に過去の歴史や文化を学ぶ教材として、また学術資料として沖縄の歴史学等の解明に広くご活用いただければ幸いに存じます。

末尾にはなりますが、調査にご協力いただいた沖縄防衛局ならびに関係部署の皆様に対して厚く御礼申し上げます。また、多大なご指導賜りました関係各位に対しまして、心から感謝申し上げます。

令和 5 年（2023）2 月

沖縄県 宜野湾市教育委員会
教育長 仲村 宗男

例 言

1. 本報告書は、普天間飛行場（東側沿い）（以下市道宜野湾 11 号整備予定地）において沖縄防衛局の支障除去措置に伴い、宜野湾市教育委員会が平成 30 年・令和元年度に実施した緊急発掘調査の成果を収録したものである。
2. 本書に掲載した地図は、基本的に宜野湾市都市計画課発行の都市計画図(1:2,500)を使用しており、他の情報図については、宜野湾市教育委員会が管理・運営している GIS データを主に使用している。
3. 本書で使用した土色は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色調』に準じた。
4. 本文中における遺跡の基準方位は、国土座標系（旧座標系）第 X V 座標系の座標北を用い、層位・遺構は海拔高（那覇）を基準とした高さである。
5. 本書の執筆は翁長和佳子の協力を得て、金城りお・池原悠貴・長濱健起が行った。
6. 現地調査で得られた実測図・写真・画像デジタルデータ・地形測量図等の各種調査記録は、全て宜野湾市教育委員会に保管している。

凡例 1

1 墓型式

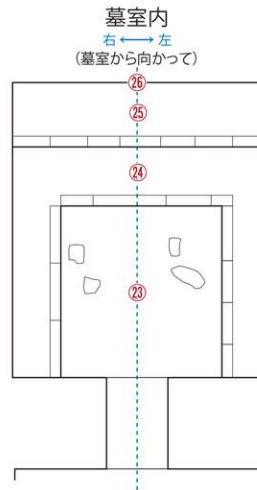
分類	墓型式	特徴	代表例／市内例	模式図
I	a ガマバカ 洞穴墓	自然洞穴を利用する墓。 洞穴開口部を石積みによって塞ぐものを「洞穴囲込墓」と呼ぶ。	・久米島町ヤッチのガマ ・宜野湾市喜友名山川原丘陵古墓群 フトウキヤブ洞窟	
	b 岩陰墓	自然の岩陰を利用する墓。 岩陰前面を石積みによって塞ぐものを「岩陰囲込墓」と呼ぶ。	・浦添市伊祖の高御墓 ・宜野湾市喜友名前原第一古墓群 岩陰A・D	
II	a フィンチャー 掘込墓 (正面装飾なし)	斜面や岩盤を掘り込んだ墓。 概ね、石積みや漆喰で入口が塞がれるのみで、正面は装飾されない。ただし、 屋根を構築するものや、例外的に正面のみを亀甲墓状に飾るものもある。	・宜野湾市小祿墓 ・宜野湾市奥間ノロ墓	
	b ファーファー 破風墓	正面を装飾した掘込墓で、屋根が破風形(切妻形)になるもの。 墓の背面が露出するものもある。	・那覇市玉陵 ・糸満市幸地腹門中墓	
	c ヒラフチバカ 平葺墓	正面を装飾した掘込墓で、平屋根を構築するもの。 眉石は直線状。	・浦添市伊祖の入れ御拝領墓 ・浦添市内間西原近世墓群1号墓	
	d カミナケバカ 亀甲墓	正面を装飾した掘込墓で、屋根が亀甲形になるもの。平地に建てられるものもある。 袖回りが省略されて、亀甲の盛り上がり強調されるものを「ボージャーバカ」と呼ぶ。	・那覇市銘苅古墓群 「伊是名御殿内の墓」 ・宜野湾市大山東方第V丘陵古墓群 「大山上江家古墓」	
III	a ヤーグバカ 家形墓	平地に建てられた墓で、外観が家の形を呈するもの。 屋根は概ね破風形(切妻形)であるが、中には亀甲形のものや塔を建てるものがある。	—	
	b カリハカ 仮墓	平地に建てられた簡易的な墓。 概ね小型で、市販のものど構築されたものがある。中にはやや大きなものもあり、 「箱形墓」と呼称されるものもある。	—	

『宇地泊西原丘陵古墓群』（宜野湾市教育委員会編 2008）より転載

2 亀甲墓の部位名称



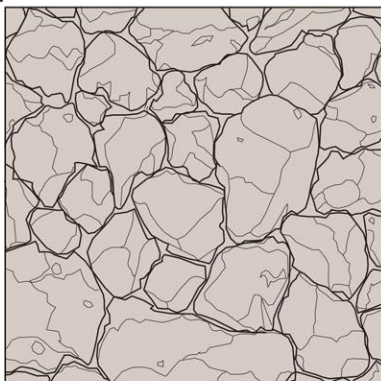
宜野湾市史編集委員会編 1985『宜野湾市史』第5巻 資料編4 参考



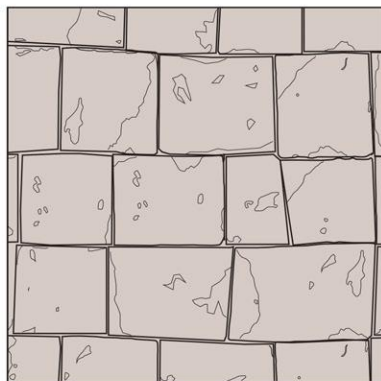
- | | |
|--------------------------|-----------------|
| ① 御香炉石
カウロウシ
シウウイン | ⑭ 袖石
ソウシ |
| ② 門石
カウイン | ⑮ 庭積み
チヤウジミ |
| ③ 隅石
シメイシ | ⑯ 庭囲い
チヤウカウイ |
| ④ 脇隅石
ワチシメイシ | ⑰ 三味台
サンミデー |
| ⑤ 門冠い
シウウカウイ | ⑱ カピアンジ
カピアン |
| ⑥ 鏡石
カウミシ | ⑲ 墓庭
カウチヤウ |
| ⑦ 眉
ケーン | ⑳ 墓の門
カウカウ |
| ⑧ 白
カウ | ㉑ 仮墓
カウバカ |
| ⑨ 子白
カウカウ | ㉒ 墓道*
カウチヤウ |
| ⑩ ムンチャ | ㉓ シルヒラジ* |
| ⑪ ボー | ㉔ 一番ダナ* |
| ⑫ 童の手
カウチヤウ | ㉕ 二番ダナ* |
| ⑬ 袖回り | ㉖ イケ |

*本報告では、この称とする

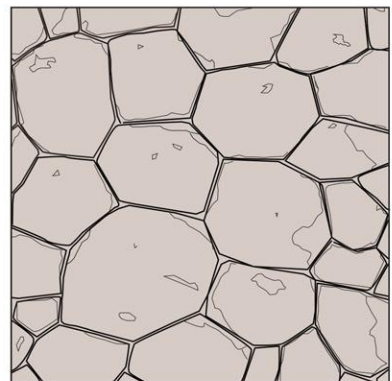
3 石積み技法



野面積み



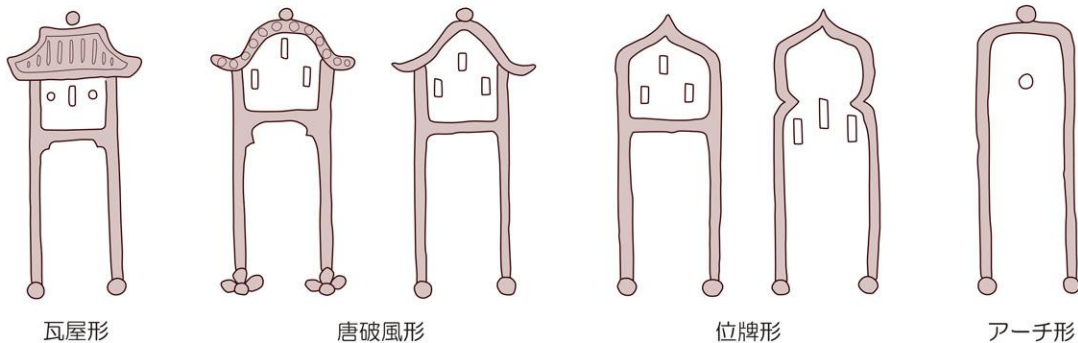
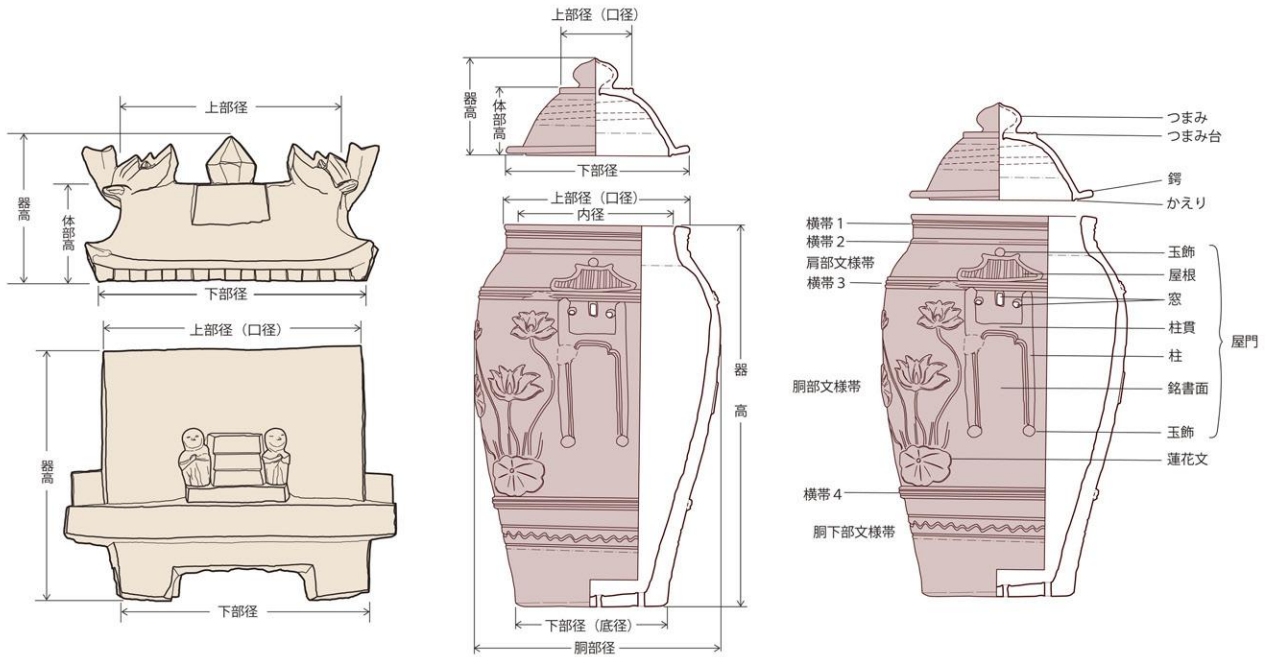
布積み



相方積み

凡例 2

- ・沖縄では、洗骨後の骨を納めておく甕のことを一般にジーシガーミ(厨子甕)というため(上江洲1982)、本書でも蔵骨器に「厨子」の表記を用いている。
- ・厨子の分類は、基本的に上江洲均(上江洲1982)・浦添市教育委員会(浦添市教育委員会1997、2006)に倣った。
- ・諸般の事情により、実測が出来なかった遺物などに関しては、オルソ画像や写真を用いている。
- ・遺物の実測図や図版などは紙幅の都合上、割愛したものもある。
- ・各厨子の計測位置および部位名称は以下のとおりである。



屋門の分類

目次

巻頭図版

序

例言

凡例

第I章 位置と環境	1
第1節 地理的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第3節 各地域の概要	4
第II章 事業概要	7
第1節 調査に至る経緯	7
第2節 調査体制	7
第3節 調査経過	9
第III章 A・C・E区の調査成果	13
第1節 調査区の設定と層序	13
1. 調査区の設定	13
2. 基本層序	13
第2節 遺構	21
1. A区	22
2. C区	36
3. E区	47
第3節 遺物	49
1. A区	60
2. C区	75
3. E区	80
第IV章 宜野湾シリガーラ流域古墓群（B区）の調査成果	81
第1節 調査概要	81
第2節 基本層序	81
第3節 遺構	81
1. 123号墓 墓状況	81
2. 69号墓 墓状況	85
第4節 遺物	98
1. 123号墓	98
2. 69号墓	101
第V章 神山後原丘陵古墓群（D区）の調査成果	131
第1節 基本層序	131
第2節 遺構	131
第3節 遺物	138
第VI章 自然科学分析の成果	141
第1節 平成30年度 市道宜野湾11号整備予定地の現地調査	141
第2節 令和元年度 市道宜野湾11号整備予定地における自然科学分析	146
第3節 令和2年度 市道宜野湾11号整備予定地における自然科学分析（69号墓）	156
第VII章 結語	159
参考・引用文献	166
報告書抄録	

巻頭図版

巻頭図版 1	報告書所収調査位置	巻頭図版 7	B区 123号墓 墓口検出状況〔南から〕
巻頭図版 2	A-1区 AS-068～AS-072 検出状況〔西から〕	巻頭図版 8	B区 69号墓 厨子安置状況
巻頭図版 3	A-2区 AS-001～AS-004 検出状況〔南西から〕	巻頭図版 9	B区 69号墓 墓口検出状況〔南から〕
巻頭図版 4	C-1区 溝跡 完掘状況〔南から〕	巻頭図版 10	D区 前景〔北西から〕
巻頭図版 5	C-1区 全景〔北東から〕	巻頭図版 11	D区 庭囲い石積 検出状況〔北東から〕
巻頭図版 6	E区 全景 調査終了状況〔北東から〕		

挿図目次

第I-1図	宜野湾市の位置	1	第III-30図	A-2区 出土遺物	74
第I-2図	宜野湾市の地質図	2	第III-31図	C-1区 出土遺物	75
第I-3図	発掘調査地位置図と周辺の文化財(昭和20年)	5	第III-32図	C-2区 出土遺物	77
第I-4図	発掘調査地位置図と周辺の文化財	6	第III-33図	C-3区 出土遺物	79
第I-5図	市道宜野湾11号位置図と周辺の文化財	6	第III-34図	E区 出土遺物	80
第III-1図	調査壁面(赤ライン)	13	第IV-1図	B区 123号墓 遺構平面図・立面図	83
第III-2図	A-1区 土層断面図	15	第IV-2図	B区 69号墓 遺構平面図・立面図	86
第III-3図	A-2区 土層断面図	17	第IV-3図	B区 69号墓 全体平面図・立面図・断面図	88
第III-4図	C-1区 土層断面図	19	第IV-4図	B区 69号墓 獣骨埋納遺構および墓外入口 平面図・断面図-1	89
第III-5図	A-1区 第1面遺構平面図	22	第IV-5図	B区 69号墓 獣骨埋納遺構および墓外入口 平面図・断面図-2	90
第III-6図	A-1区 第2面遺構平面図	23	第IV-6図	B区 69号墓 平面図・断面図-1	91
第III-7図	A-1区 個別遺構平面図・断面図-1	24	第IV-7図	B区 69号墓 平面図・断面図-2	92
第III-8図	A-1区 個別遺構平面図・断面図-2	25	第IV-8図	B区 69号墓 墓室内厨子甕出土状況図	93
第III-9図	A-1区 個別遺構平面図・断面図-3	26	第IV-9図	B区 123号墓 出土遺物-1	99
第III-10図	A-1区 個別遺構平面図・断面図-4	27	第IV-10図	B区 69号墓 厨子配置の復元 (2019.07.11時点)	105
第III-11図	A-2区 遺構平面図	33	第IV-11図	B区 69号墓 1号厨子(1)	107
第III-12図	A-2区 個別遺構平面図・断面図	34	第IV-12図	B区 69号墓 2号厨子(2)	109
第III-13図	C-1区 遺構平面図	36	第IV-13図	B区 69号墓 3号厨子(3) 4号厨子(4)	111
第III-14図	C-1区 個別遺構平面図・断面図・出土状況図-1	36	第IV-14図	B区 69号墓 7号厨子(5) 11号厨子(6)	113
第III-15図	C-1区 個別遺構平面図・断面図・出土状況図-2	37	第IV-15図	B区 69号墓 9号厨子(7)	115
第III-16図	C-2区 遺構平面図	40	第IV-16図	B区 69号墓 12号厨子(8) 13号厨子(9)	117
第III-17図	C-2区 出土状況図	41	第IV-17図	B区 69号墓 14号厨子(10) 15号厨子(11)	119
第III-18図	C-3区 遺構平面図	43	第IV-18図	B区 69号墓 16号厨子(12) 22号厨子(13)	121
第III-19図	C-3区 個別遺構平面図・断面図	44	第IV-19図	B区 69号墓 17号厨子(14) 21号厨子(15)	123
第III-20図	E区 遺構平面図	47	第IV-20図	B区 69号墓 出土遺物	129
第III-21図	E区 遺物出土状況	47	第V-1図	D区 遺構平面図・立面図	133
第III-22図	遺物出土割合	50	第V-2図	D区 出土遺物	139
第III-23図	A-1区 出土遺物-1	60	第VI-1図	調査地周辺の地形分類	142
第III-24図	A-1区 出土遺物-2	62	第VI-2図	暦年較正結果	150
第III-25図	A-1区 出土遺物-3	64	第VI-3図	各地点の種実遺体群集	152
第III-26図	A-1区 出土遺物-4	66	第VI-4図	暦年較正結果	157
第III-27図	A-1区 出土遺物-5	68			
第III-28図	A-1区 出土遺物-6	70			
第III-29図	A-1区 出土遺物-7	72			

図版目次

図版I-1	昭和20年 宜野湾市全体	2	図版III-5	A-1区-5	32
図版II-1	作業状況-1	9	図版III-6	A-2区-1	34
図版II-2	作業状況-2	10	図版III-7	A-2区-2	35
図版II-3	作業状況-3	11	図版III-8	C-1区-1	38
図版II-4	作業状況-4	12	図版III-9	C-1区-2	39
図版III-1	A-1区-1	28	図版III-10	C-2区-1	41
図版III-2	A-1区-2	29	図版III-11	C-2区-2	42
図版III-3	A-1区-3	30	図版III-12	C-3区-1	45
図版III-4	A-1区-4	31	図版III-13	C-3区-2	46

図版Ⅲ-14	E区-1	48	図版Ⅳ-11	B区69号墓(1)1号厨子	108
図版Ⅲ-15	A-1区出土遺物-1	61	図版Ⅳ-12	B区69号墓(2)2号厨子	110
図版Ⅲ-16	A-1区出土遺物-2	63	図版Ⅳ-13	B区69号墓3号厨子(3)4号厨子(4)	112
図版Ⅲ-17	A-1区出土遺物-3	65	図版Ⅳ-14	B区69号墓7号厨子(5)11号厨子(6)	114
図版Ⅲ-18	A-1区出土遺物-4	67	図版Ⅳ-15	B区69号墓9号厨子(7)	116
図版Ⅲ-19	A-1区出土遺物-5	69	図版Ⅳ-16	B区69号墓12号厨子(8)13号厨子(9)	118
図版Ⅲ-20	A-1区出土遺物-6	71	図版Ⅳ-17	B区69号墓14号厨子(10)15号厨子(11)	120
図版Ⅲ-21	A-1区出土遺物-7	73	図版Ⅳ-18	B区69号墓16号厨子(12)22号厨子(13)	122
図版Ⅲ-22	A-2区出土遺物	74	図版Ⅳ-19	B区69号墓17号厨子(14)21号厨子(15)	124
図版Ⅲ-23	C-1区出土遺物	76	図版Ⅳ-20	B区69号墓5号厨子(16)6号厨子(17)	125
図版Ⅲ-24	C-2区出土遺物	78	図版Ⅳ-21	B区69号墓8号厨子(18)10号厨子(19)	126
図版Ⅲ-25	C-3区出土遺物	79	図版Ⅳ-22	B区69号墓18号厨子(20)19号厨子(21)	127
図版Ⅲ-26	E区出土遺物	80	図版Ⅳ-23	B区69号墓20号厨子(22)	128
図版Ⅳ-1	B区123号墓遺構平面オルソ	82	図版Ⅳ-24	B区69号墓出土遺物	130
図版Ⅳ-2	B区123号墓-1	84	図版Ⅴ-1	D区遺構平面オルソ	134
図版Ⅳ-3	B区123号墓-2	85	図版Ⅴ-2	D区-1	134
図版Ⅳ-4	B区69号墓遺構平面オルソ	87	図版Ⅴ-3	D区-2	135
図版Ⅳ-5	B区69号墓-1	93	図版Ⅴ-4	D区-3	136
図版Ⅳ-6	B区69号墓-2	94	図版Ⅴ-5	D区-4	137
図版Ⅳ-7	B区69号墓-3	95	図版Ⅴ-6	D区出土遺物	140
図版Ⅳ-8	B区69号墓-4	96	図版Ⅵ-1	花粉化石・微粒炭	154
図版Ⅳ-9	B区69号墓-5	97	図版Ⅵ-2	種実遺体	155
図版Ⅳ-10	B区123号墓出土遺物	100	図版Ⅵ-3	炭化材	158

挿表目次

第Ⅲ-1表	A・C・E区基本層序対応関係	14	第Ⅳ-4表	B区69号墓厨子観察表-3	103
第Ⅲ-2表	統一層序一覧	14	第Ⅳ-5表	B区69号墓厨子観察表-4	104
第Ⅲ-3表	A-1区検出遺構一覧(SP)	25	第Ⅳ-6表	B区69号墓厨子観察表-5	105
第Ⅲ-4表	A区検出遺構一覧(SD・SK)	28	第Ⅳ-7表	B区69号墓出土遺物観察表	106
第Ⅲ-5表	C区検出遺構一覧(SD・SK)	41	第Ⅴ-1表	D区古墓基本層序対応関係表	132
第Ⅲ-6表	C区検出遺構一覧(SP)	44	第Ⅴ-2表	D区出土遺物観察表	138
第Ⅲ-7表	沖縄産無釉陶器分類一覧	51	第Ⅵ-1表	試料一覧	145
第Ⅲ-8表	アカムヌー分類一覧	51	第Ⅵ-2表	試料一覧および分析項目一覧	145
第Ⅲ-9表	A-1区出土遺物観察表-1	52	第Ⅵ-3表	放射性炭素年代測定結果	149
第Ⅲ-10表	A-1区出土遺物観察表-2	53	第Ⅵ-4表	花粉分析・微粒炭分析結果	151
第Ⅲ-11表	A-1区出土遺物観察表-3	54	第Ⅵ-5表	微細物分析結果	151
第Ⅲ-12表	A-1区出土遺物観察表-4	55	第Ⅵ-6表	放射性炭素年代測定結果	157
第Ⅲ-13表	A-1区出土遺物観察表-5	56	第Ⅶ-1表	69号墓厨子甕銘書一覧	160
第Ⅲ-14表	A-1区出土遺物観察表-6	57	第Ⅶ-2表	遺物集計表	161
第Ⅲ-15表	A-2区出土遺物観察表	58	第Ⅶ-3表	沖縄産施釉陶器集計表-1	162
第Ⅲ-16表	C-1区出土遺物観察表	58	第Ⅶ-4表	沖縄産施釉陶器集計表-2	163
第Ⅲ-17表	C-2区出土遺物観察表	59	第Ⅶ-5表	沖縄産無釉陶器集計表	164
第Ⅲ-18表	C-3区出土遺物観察表	59	第Ⅶ-6表	アカムヌー集計表	164
第Ⅲ-19表	E区出土遺物観察表	59	第Ⅶ-7表	本土産陶磁器集計表	165
第Ⅳ-1表	B区123号墓出土遺物観察表	98	第Ⅶ-8表	中国産陶磁器集計表	165
第Ⅳ-2表	B区69号墓厨子観察表-1	101	第Ⅶ-9表	蔵骨器集計表	165
第Ⅳ-3表	B区69号墓厨子観察表-2	102			

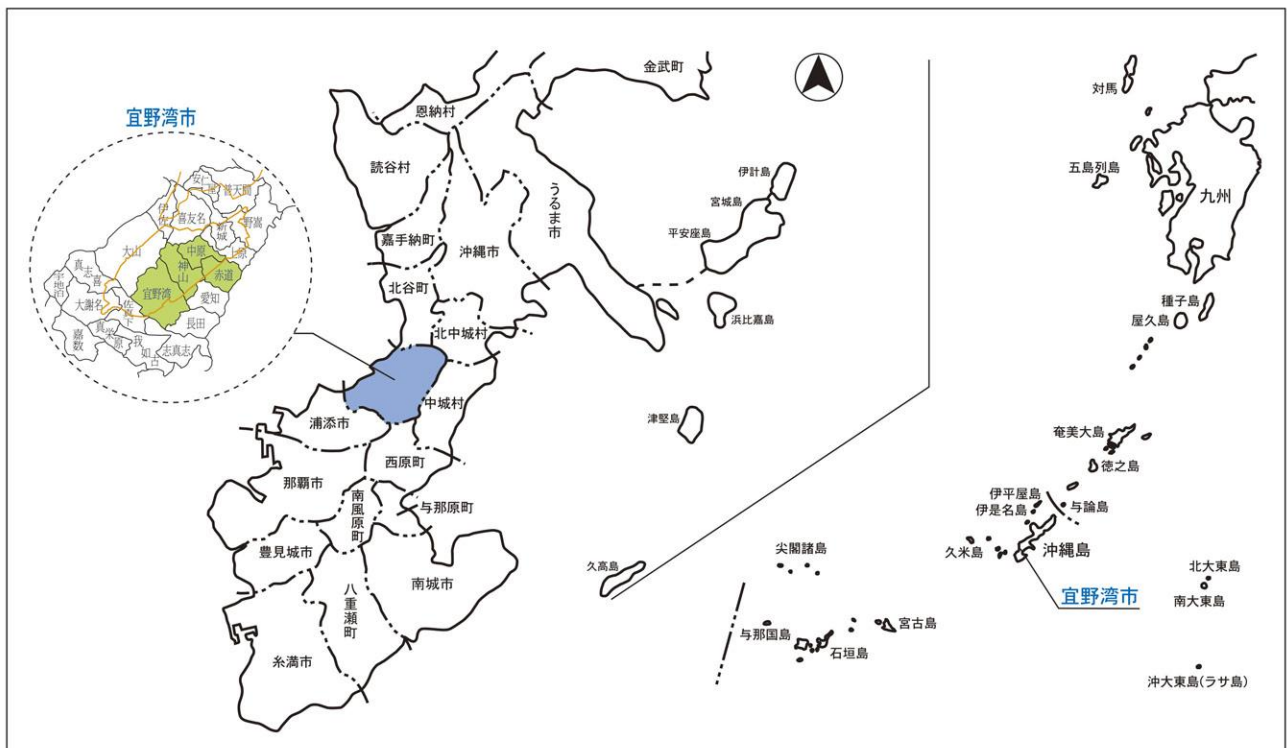
第 I 章 位置と環境

第 1 節 地理的環境

宜野湾市は、沖縄本島の中部西海岸にあって、東シナ海に面し、北は北谷町、北東は北中城村、東は中城村、東南には西原町、南は浦添市が隣接する。市域の総面積は、約 19.8 km²で、市域北西にはキャンプ瑞慶覧、中央には普天間飛行場基地が占有し、米軍基地の面積は市面積の 29.4%を占めている（2020 年 3 月時点）。市域には沖縄本島を縦断する国道 58 号や 330 号が通り、市域を横断する道路は沖縄自動車道北中城 IC・西原 IC へのアクセス道路としても利用され本島北部、中部と南部地域を繋ぐ交通の要となっている。

本市の主な地質は琉球石灰岩で、土壌はクチャと呼ばれる島尻層群を基盤としている。不透水層の島尻層の上に不整合に琉球石灰岩が覆っており、その境界を地下水が流れ湧泉として湧き出している。また、東シナ海に面した海岸低地である西側は、砂層である沖積層から成り、内陸部の丘陵地では島尻層群が風化してできたジャーガル土壌や台地上には島尻マーヅと呼ばれる土壌が広く分布している。地形をみると、西側の海岸から東側の内陸に向かって雛壇上の海岸段丘から成り、市域の段丘は中位段丘（約 20 万年前に形成）と低位段丘（約 12 万年前に形成）に大別され、それぞれに下位面と上位面に区別する 4 つの段丘面を有している（宜野湾市市史編集委員会編 2000）。低位段丘下位面（第 1 面）は、比屋良川河口から宇地泊、真志喜、大山、伊佐に連なる標高 3～30 m の海岸低地である。低位上位面（第 2 面）は、国道 58 号周辺と普天間基地に挟まれた標高 30～40 m の石灰岩段丘で、中位段丘下位面（第 3 面）は、国道 330 号周辺からなる標高 90 m 以上の高地となる。

また、市内には 133 か所の洞穴があり、県内でも有数の洞穴地帯といえる。このような洞穴は石灰岩が雨などの影響を受けて作り上げた「カルスト地形」の一つである。市内では鍾乳洞、ドリーネ、ウバーレな



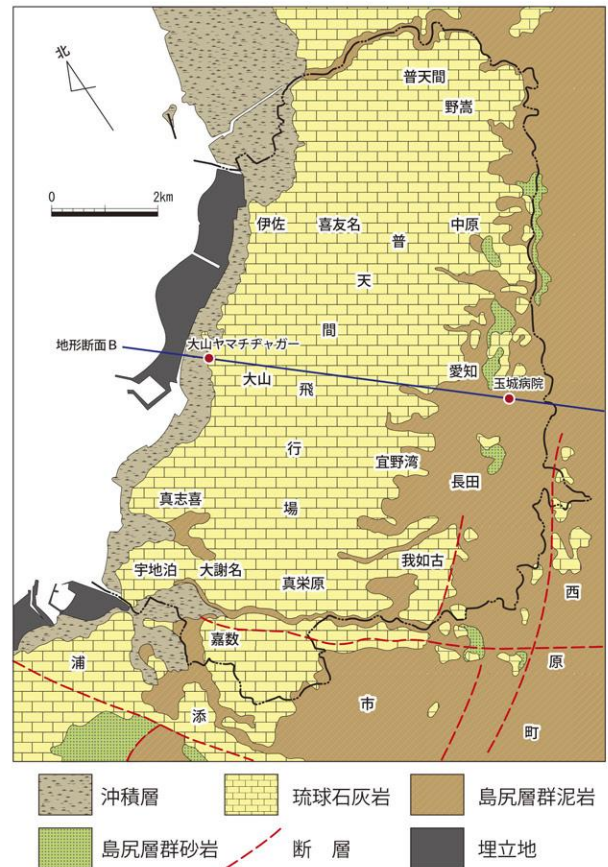
第 I - 1 図 宜野湾市の位置

どのカルスト地形が作りだす自然が多くみられる。また、東側の中位段丘面で降った雨水は、地下水として流れながらカルスト地形を作り出し、西側の低位段丘面で琉球石灰岩と島尻層群の境界から湧水として流れ出している。その量は豊富で、戦前の西海岸一帯には湧水を利用した水田が広がっていた。

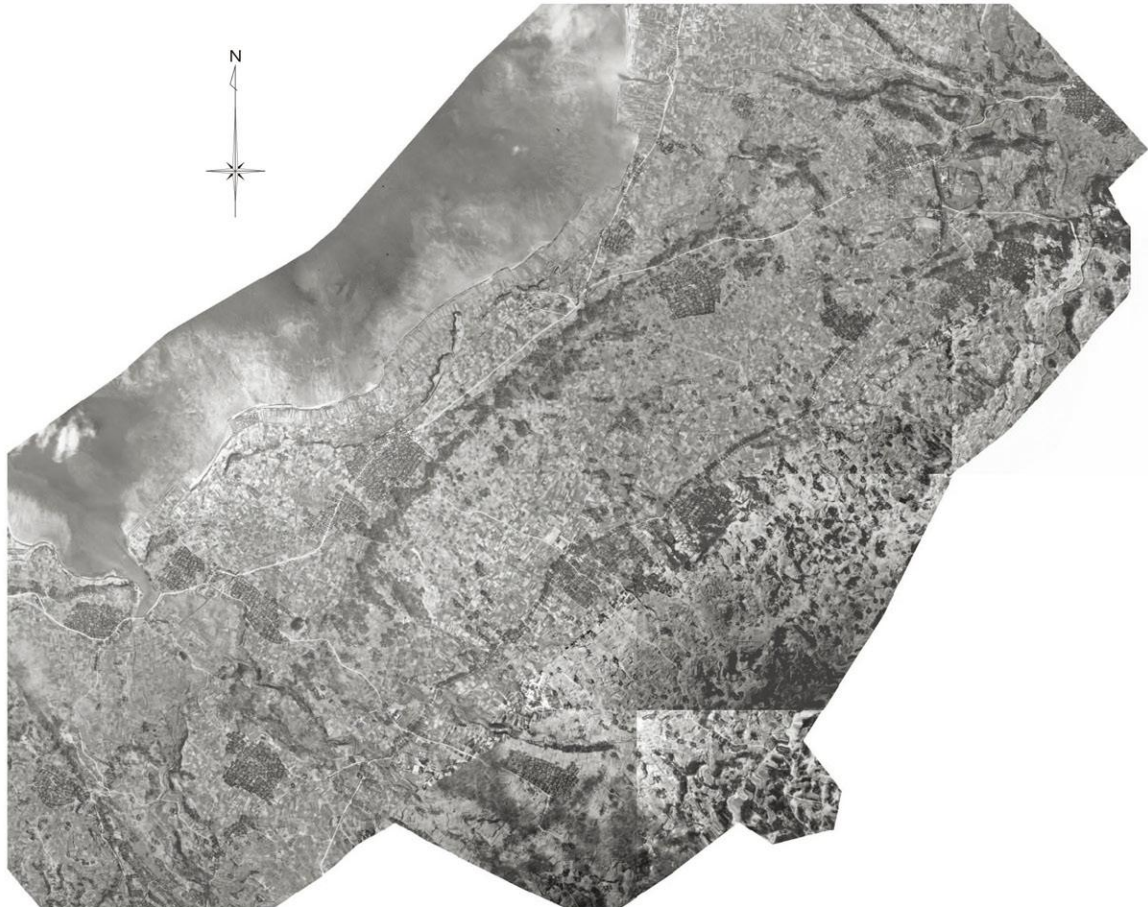
市道宜野湾 11 号の予定地は中位段丘下位面（第 3 面）にあり、標高 90～100 m あたりに位置する。石灰岩台地上にあるため、ガマ（洞穴）が発達しており、多くの洞穴が見られる。洞穴は雨水などの水の吸い込み口となり、大雨時には氾濫することもしばしばあった。今回、市道宜野湾 11 号予定地で行われた支障除去の際にも普天間飛行場方面に続く洞穴がいくつか確認されている。

第 2 節 歴史的環境

沖縄諸島に人々が住み始めたのは今から 3 万年程前に遡り、旧石器時代と呼称される時代で宜野



第 I - 2 図 宜野湾市の地質図



図版 I - 1 昭和 20 年 宜野湾市全体

湾市においても、工事中に開口した大山名利瀬原の洞穴から「大山同人」と称される更新世（200～1万年前）に由来する20歳前後の男性の下顎骨が発見されている（高宮ほか1975、鈴木1975）。また、普天満宮洞穴遺跡等では、リュウキュウムカシキョン等のシカ類の化石が多数発見されている（宜野湾市教育委員会1989）。

現在からおよそ6000～7000年前から1000～800年前までの数千年に及ぶ時代を沖縄貝塚時代と称する狩猟・採集の時代となる。沖縄貝塚時代は、遺跡の立地・出土遺物等の違いから早期・前期・中期・後期に大別されている。前期は市域を含め、沖縄諸島域に当時の土器形式が広く分布していることから、定着的な集団により各地域に遺跡が形成される時期と考えられる。貝塚時代中期は、拠点的な大規模集落が平地に展開し、小規模遺跡がその周縁に点在しており市域では、西側琉球石灰岩地帯で顕著にみられる。後期には、前述の西側琉球石灰岩地帯に加えて、海岸低地の砂地にも居住域が拡散しており、その規模も一律的に大きくなっていくようである（宜野湾市教育委員会1989）。

12世紀から15世紀に及ぶグスク時代は、沖縄において初めて農耕を基礎とする社会が形成・発達した時期である。市域のグスク時代の遺跡は、迫地や河川流域の谷底低地を控える平地・丘陵斜面・段丘縁の高所に立地しており、市域の伝統的集落である近世の“村”の形態がこの時期に形成され始める。生産的農耕社会を基盤とした社会が展開されていく中で、農耕の基盤である土地・その生産を支える道具の入手や制作・同時期に展開された日本や中国・朝鮮・東アジア地域との交易などを通して各地域の集団は共同化したと考えられ、その中から“按司”と称される在地支配者層が出現する。按司を中心とした各地域の集団は、相互に抗争を繰り返しながら次第に淘汰され、14世紀ごろには、中山・山北・南山の3つの小国家が成立する。市の真志喜区に所在する県指定文化財の森の川には、中山の王として1372年に明朝に朝貢した「察度」の出自が記された石碑が残されている。その後1429年には尚巴志が三山を統一し、琉球王国誕生へと至る。グスク時代から第二尚氏王朝前期の1609年島津侵入までを歴史学では古琉球と称し、中世に相当する。

琉球王国は島津の支配を受けながらも王国としての体裁は保ちつつ、中国（明・清）との交易を行っていた。近世琉球と称される時代である。市域の集落は、碁盤型の集落と屋取集落が存在していた。この集落形態は、近世に開始され、耕作地を増やすために小規模に転々と存在した集落を一箇所に集め、平地を田畑へと開墾していった。さらに18世紀以降、首里や那覇の士族の移住により屋取集落が形成されていった。

近代になると、1872（明治5）年に琉球藩、1879（明治12）年には沖縄県の設置が強行され、1881（明治14）年6月には中頭一帯を管轄する中頭役所が美里間切りから宜野湾間切の普天間に移設された（宜野湾市史編集委員会編1985）。その後、中頭郡教育事務所、中頭郡組合農事試験場などの官公署が相次いで設置されたことにより市域は本島中部地域の政治・経済・教育の中心となった。1902（明治35）年には首里から普天間に至る普天間街道、1922（大正11）年には県営鉄道嘉手納線（軽便鉄道）が開通した。1908（明治41）年の「沖縄県及び島嶼町村制」施行により従来により従来の間切は町・村に、村は字に改められ、宜野湾間切は宜野湾村となった。

1945（昭和20）年4月1日、中部西海岸に上陸した米軍に対する日本軍の前線基地として、本市域も壊滅的な打撃を被り、さらには戦後の軍用地接収と度重なる基地造成によって市域の景観は大きく変貌することとなった。他地域に比べ僅かに焼失を免れた野嵩地区が住民の収容所の一つとなり、その後、1946（昭和21）年9月以降、元の集落ないしはその近隣に帰住が許可され、社会基盤の復活が果たされると米軍基地関連産業の活況により市域の人口も急増した。1962（昭和37）年7月1日には村から市に昇格した。

第3節 各地域の概要

宜野湾

宜野湾区は宜野湾市のほぼ中央に位置し、戦前は「ジノードゥームラ（宜野湾同村）」と呼ばれ、宜野湾村の中心であった1671年、宜野湾間切が新設された際に間切番所が置かれ、宜野湾間切の中心地となった。廃藩置県後、沖縄県になってからも村役場や中頭役所・学校・郵便局等の公共施設が集中し、宜野湾村の政治・経済・文化の中心地であった。宜野湾は琉球石灰岩の台地上に位置し、石灰岩地帯の特徴であるガマ（洞窟）やカー（泉）が発達している地域である。標高は東側から西側にかけて緩やかに傾斜しており、集落北東側の神山区との境界にはシリガーラが流れている。いくつかの小川が東側の高台から流れ、小さな谷間をつくり、谷底は水田に利用された。

集落は、大きな松の並木道であるナンマチ（並松街道）に沿ってその東側に広がり、公共施設が置かれ、行政の中心地となっていた。ナンマチに並行して、ウマイー（馬場）が集落北西側にあり、ウマハラシー（競馬）などの催し物が行われた。主な生業は農業で、サトウキビ栽培が中心で、小さな谷間には水田もあった。耕地面積が広く、他に牛・馬・豚・山羊などの家畜も多く飼育されていた。宜野湾村の中心地として交通の要所であったため、ほかの集落に比べ商業を営む者も多く、特にナンマチ沿いは商店が集中し、ナンマチとウマイーの付近ではマチグラー（市場）が開かれ、食料品などが取引され、周辺の村をはじめ、那覇・首里からも商売をする人々が来て賑わっていた。

宜野湾は戦後、集落のほぼ全てと地域の約3分の2を普天間飛行場に接収されており、集落の南に位置する、前田原、薄倉原、山川原の耕地に宅地を造成し居住することになった。1964（昭和39）年の行政区再編で、志真志区の一部が分割され、宜野湾区に統合された。

神山

神山区は宜野湾区と隣接していて、「ジノーン・カミヤマ（宜野湾・神山）」と呼ばれていた。中規模の集落ではあったが、大きな屋敷もあり比較的裕福で、闘牛が盛んであった。東側から南側にかけて小高い丘陵をなし、西側、北側は平坦な地形で、大部分は宜野湾のひな壇状の4つの海岸段丘のうち標高50～90m（中段段丘下位面）にある。集落は中央部の神山原にあり、東側高台の無手原、後原との間には「カンミンモー」と呼ばれる南北にのびる琉球石灰岩の山があった。カンミンモーの東の麓には多くのガマがあり、周囲の雨水が流れ込んで地下を通り、集落のあるカーから湧き出てきた。また集落の中央部分には「ダキヤマドゥガマ」と呼ばれるガマがあり、ンジュ（溝）に集まった集落内の水を排水していた。西側端は谷底低地が発達しており、その中央にはシリガーラが流れ、字宜野湾との境界でもある。石灰岩の山が多く、集落の北側、東西にのびるウフミチ（大道）沿いで集落の西にある「ミーハギウシモー」と呼ばれる闘牛場の近くに数カ所の採石場があった。南は石灰岩台地と島尻層群の境があり耕作地が続いていた。

集落は丘陵の北側の麓に、ナンマチに沿って碁盤目状の地割がなされていた。集落の西側から北側にかけて平坦で広い農耕地が広がっていた。生業はサトウキビが主でサツマイモ、大豆などが多く生産された。サトウキビは7ヶ所のサーターヤー（製糖小屋）で自家製糖したが、トロッコで北谷村の嘉手納製糖工場へ直接搬入する農家もいた。昭和以前にはシンバルダーなど谷底の湿った地域はもともと水田地帯であったが、沖縄戦の直前にはほとんど畑になっていたという。

神山も戦後、かつての集落を普天間飛行場に接収されて、元集落の南、カンミンモーをはさんで無手原や愛知の懇良増原などの耕地に宅地を造成して居住することになった。1964（昭和39）年の行政区再編で、神山と愛知が統合し、19区となり、2014（平成24）年に19区から愛知区へと名称を変更する。

赤道

現在は宜野湾市の中央部東側に位置する住宅地域で行政区は中原区である。中央部に国道 330 号が通り、宜野湾中学校などが所在する。戦前の道路や地形を残している場所もあり印部土手石などの文化財も残っている。

戦前は士族層が形成したヤードゥイ（屋取）集落で、中城村北上原から移住した一族が多く住んでいた。1939（昭和 14）年に、新城・喜友名・神山・宜野湾の一部が分離独立し、赤道となっている。

おもな産業はサトウキビで集落内のサーターヤーで自家精糖するものや嘉手納の精糖工場に搬入するものもいたという。闘牛場もあり、隣接している上原と組合を作って闘牛を開催しており、闘牛が盛んであったことが窺える。戦前の闘牛場は軍道 5 号線（現 330 号）建設で破壊されたため、今の位置に移動している。近年までは大会が開かれていたが、現在は閉鎖されている。

中原

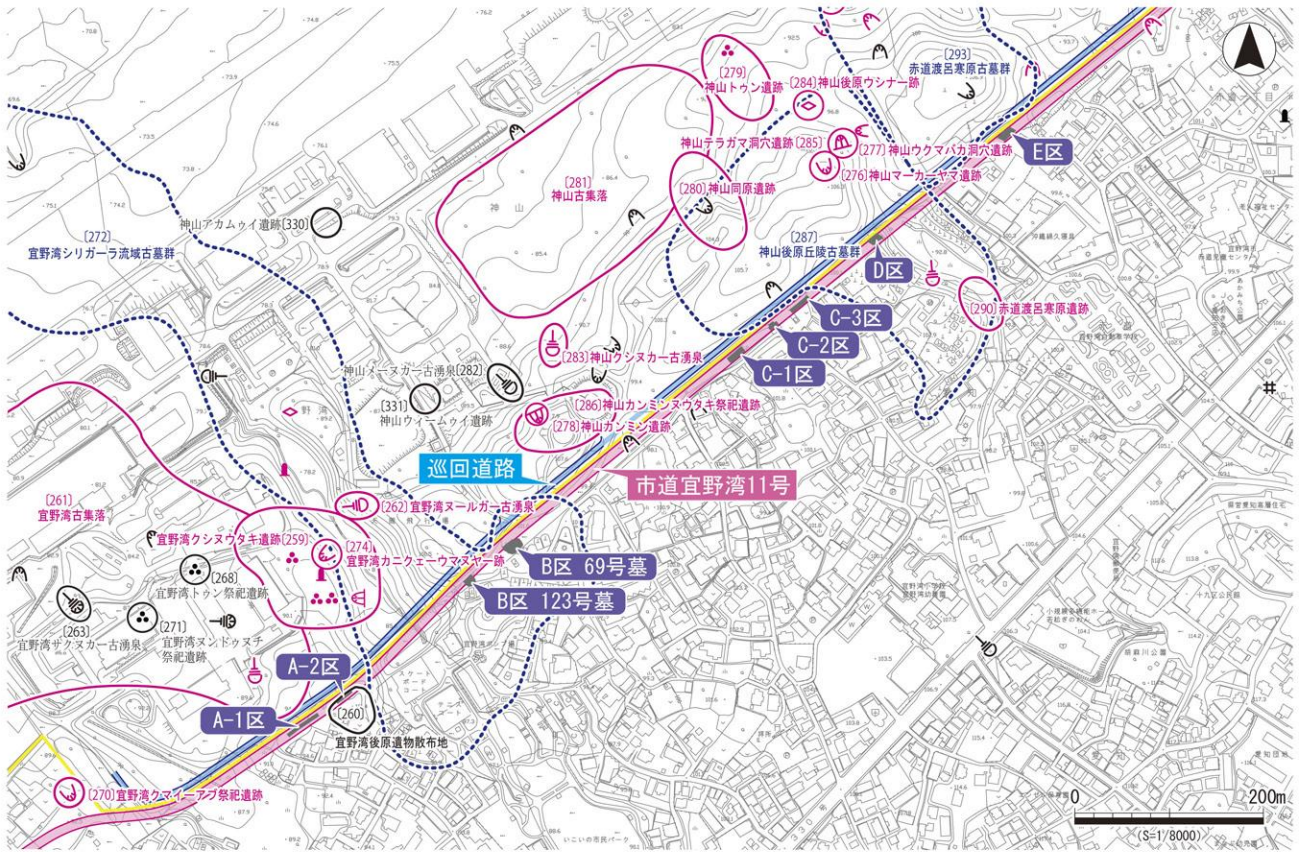
集落のすべてを普天間飛行場に接収されており、現在は隣接する赤道・上原とともに中原区を形成している。

石灰岩台地上にあったヤードゥイ（屋取）集落で戦前は主にサトウキビを生産していた。集落には大山駅までのトロッコ軌道が敷かれており、嘉手納の精糖工場まで搬入し製糖するものもいた。農業以外にもバサムチャー（馬車引き）や帽子仲買・石大工などの生業にするものもいたという。

中原はバーサクヤードゥイ（芭蕉迫屋取）と呼ばれ、元々は喜友名・神山地番であった。喜友名地番か神山地番かでメーヤードゥイ・クシヤードゥイに分かれ学校もそれぞれ 2 ヶ所に分かれて通っていたという。1939（昭和 14）年に分離・独立している。



第 I - 3 図 発掘調査地位置図と周辺の文化財（昭和 20 年）



第 I - 4 図 発掘調査地位置図と周辺の文化財



第 I - 5 図 市道宜野湾 11 号位置図と周辺の文化財

第Ⅱ章 事業概要

第1節 調査に至る経緯

市道宜野湾11号道路整備予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査事業（以下当該事業）は、市道宜野湾11号道路整備事業に伴うものである。市道宜野湾11号道路整備事業は、国道330号の補完及び地域内における交通量緩和や地域住民の生活環境の改善が目的とされた。その経緯は、昭和54年度に普天間飛行場周辺補修事業として事業採択がなされたことによって始まり、その後事業は断続的に進捗する。平成8年3月に「沖縄に関する特別行動委員会」（SACO）において普天間飛行場内における既存巡回道路等の移設を条件とした普天間飛行場東沿いの土地返還の承認がなされたが、同年12月のSACO最終報告で普天間飛行場の全面返還が合意されたことに伴い、東側沿いの土地返還に係る事業は中断した。平成14年度に宜野湾市より那覇防衛施設局に対し、市道宜野湾11号道路整備事業の促進等を要請し、平成17年度には、市道宜野湾11号道路整備事業は当該地の返還ありきであり、既存巡回道路移設が完了した後に返還となる旨の調整がなされた。その後、道路線系等を検討し、平成25年度には宜野湾市教育委員会と沖縄防衛局で「普天間飛行場（東側沿い土地）の返還に伴う工作物移設予定地区埋蔵文化財に関する協定書」を締結し、平成26・27年度には巡回道路移設工事予定地における埋蔵文化財緊急発掘調査を実施している。

当該事業は巡回道路移設後の返還部分にあたる土地で行われた緊急発掘調査である。平成29年度に沖縄防衛局より沖縄県における駐留軍用地跡地の有効かつ適切な利用の推進に関する特別措置法（平成7年法律第102号）第8条に基づく支障除去措置を計画しているため埋蔵文化財の有無についての照会があり、同年宜野湾市教育委員会が、「中原同原遺跡」「赤道シキロー流域古墓群」「赤道渡呂寒原古墓群」「神山後原丘陵古墓群」「宜野湾シリガーラ流域古墓群」「宜野湾後原遺物散布地」の遺跡が所在すると回答を行った。その後、平成29年12月に「普天間飛行場（東側沿い）における埋蔵文化財調査に関する協定書」を締結し、緊急発掘調査を実施するに至った。

第2節 調査体制

市道宜野湾11号整備に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査は平成30年・令和元年度に実施し、資料整理及び報告書作成に係る整理業務は令和元～4年度に実施した。その調査体制は下記の通りである。

事業主体	沖縄県宜野湾市教育委員会	
事業責任者	教育長	知念 春美（平成30～令和3年度） 仲村 宗男（令和4年度）
事業総括	教育部 教育部長	比嘉 透（平成30～令和元年度） 嘉手納貴子（令和2～4年度）
	教育部 教育次長	桃原 忍子（平成30年度） 真志喜若子（令和元～3年度） 宮城 葉子（令和4年度）
	文化課 文化課長	比嘉 洋（平成30～令和2年度） 津波古良幸（令和3年度）

事業事務	文化課	文化財保護係長	浜里 吉彦 (令和4年度)
			仲地 真俊 (平成30～令和2年度)
			長濱 健起 (令和2年度)
			比嘉 高志 (令和3・4年度)
		文化財保護係担当主査	長濱 健起 (平成30～令和3年度)
			伊藤 圭 (令和4年度)
		文化財保護係主任主事	仲村 毅 (平成30～令和4年度)
			森永 穰英 (令和4年度)
			田中 梓 (平成30～令和3年度)
			金城 りお (令和2～4年度)
調査業務		文化財保護係主事	金城 りお (令和元年度)
			末吉 飛鳥 (令和2～4年度)
		文化財保護係長	仲地 真俊 (平成30～令和元年度)
		文化財保護係主任主事	長濱 健起 (平成30～令和元年度)
		文化財保護係主事	金城 りお (平成30～令和元年度)
資料整理業務		文化財保護指導員	池原 悠貴 (平成30～令和元年度)
		文化財保護係長	仲地 真俊 (平成30～令和2年度)
			長濱 健起 (令和2年度)
			比嘉 高志 (令和3・4年度)
		文化財保護係担当主査	長濱 健起 (令和元～3年度)
			伊藤 圭 (令和4年度)
		文化財保護係主任主事	金城 りお (令和元～4年度)
	会計年度任用職員	池原 悠貴 (令和元～4年度)	

委託業務

令和元年度 発掘調査支援業務委託 (株)島田組 宜野湾営業所

令和3年度 資料整理業務委託 (株)島田組 宜野湾営業所

令和2年度 パリノ・サーヴェイ株式会社

調査指導及び調査協力 (職名等は現在)

調査指導及び調査協力として下記の方々に指導・協力をいただいた。

沖縄防衛局 管理部 返還対策課

第3節 調査経過

【平成30年度】

- 4月23日 A-1・2区の調査区設定を行う。重機による除草除去。
- 4月25日 A-2区で人力による掘削の開始。
- 5月7日 A-1区で人力による掘削の開始。
- 5月15日 A-2区で磁気探査(-0.5mの経層探査)を行う。
- 5月25日 A-2区の完了状況の写真撮影。
- 5月29日 A-2区の記録作業・確認作業を終え、調査完了となった。
- 6月8日 台風5号の接近に伴い養生作業を行った。
- 6月11日 A-1区で磁気探査(-0.5mの経層探査)を行う。C-1区で重機による掘削を開始した。
- 6月13日 A-1区の溝状遺構検出状況の撮影。
- 6月15日 台風6号の接近に伴い養生作業を行った。
- 6月19日 C-1区で人力による掘削作業を行う。
- 6月21日 A-1区の溝状遺構の完掘。記録作業を行う。C-1区で不発弾を検出する。宜野湾署の警察官が確認・回収を行う。
- 6月25日 A-1区西の完掘状況の写真撮影。記録作業を行う。
- 6月26日 A-1区東で重機掘削を行う。磁気探査(-1mの経層探査)を行う。
- 6月27日 A-1区東の遺構検出作業を行う。
- 6月29日 A-1区東の遺構検出状況の写真撮影を行う。台風7号の接近に伴い養生作業を行う。



重機による表土掘削



遺構検出作業



不発弾磁気探査



人力による遺構掘削

図版Ⅱ-1 作業状況-1

- 7月9日 台風8号の接近に伴い養生作業を行う。
- 7月11日 A-1区東の遺構掘削を行う。
- 7月19日 パリノ・サーヴェイ（株）による自然科学分析のためのサンプル採取作業を実施。台風10号接近のため養生作業を行う。
- 7月24日 A-1区東の遺構完掘状況の写真撮影。記録作業を行う。
- 7月25日 C-2、3区の調査区設定を行う。
- 7月26日 A-1区の調査を完了する。C-1区の遺構検出状況の写真撮影を行う。D区（古墳）の調査を開始する。
- 7月27日 C-1区の遺構掘削を行う。不発弾を検出し、警察が確認・回収を行う。
- 7月30日 C-2区で重機による掘削を行う。
- 7月31日 C-1区、石列の検出状況の写真撮影・記録作業を行う。
- 8月7日 C-1区の溝状遺構の検出状況の撮影・記録作業を行う。D区（古墳）検出状況の撮影・記録作業を行う。
- 8月8日 D区（古墳）の開口作業を行う。
- 8月9日 D区（古墳）墓室内の調査を行う。
- 8月10日 台風14号の接近に伴い養生作業を行う。
- 8月13日 D区（古墳）墓庭のトレンチ掘削を行う。
- 8月17日 C-1区の完掘状況の写真撮影。記録作業を行う。
- 8月20日 C-1区全ての調査を完了する。
- 8月22日 C-3区で重機による掘削を行う。



写真測量



完掘状況の写真撮影



ドローンによる写真測量



高所作業車による写真撮影

図版Ⅱ - 2 作業状況 - 2

- 8月24日 C-2区の溝状遺構の検出状況を撮影・記録作業を行う。E区の調査区設定を行う。
- 8月29日 C-2区で不発弾を検出。警察が確認し、回収する。
- 8月31日 D区(古墳)墓庭・墓室の完掘状況の撮影・記録作業を行う。
- 9月3日 E区で人力による掘削を行う。D区(古墳)でドローンによるオルソ写真撮影を行う。
- 9月7日 C-3区で磁気探査(-0.5m経層探査)を実施。
- 9月12日 E区で重機による掘削を行う。
- 9月13日 C-2、3区の遺構検出状況をスカイマスターを使用して写真撮影を行う。E区で磁気探査(-1m経層探査)を実施する。
- 9月14日 E区で、パリオ・サーヴェイによるサンプリング作業を行う。
- 9月19日 D区(古墳)の墓屋根トレンチ掘削を開始する。E区の調査完了状況の写真撮影・記録作業を行う。
- 9月20日 E区の調査を終了した。
- 9月21日 D区(古墳)屋根後方掘方のトレンチ掘削を行う。
- 9月27日 C-3区の遺構検出状況の写真撮影、記録作業を行う。台風24号、接近のため養生作業を行う。
- 10月2日 C-2、3区の遺構完掘状況をスカイマスターにより写真撮影を行う。記録作業を行う。
- 10月3日 C-2、3区で重機による確認掘削を行い、調査を完了した。台風25号、接近のために現場の養生を行う。
- 10月4日 現場撤収を完了する。
- 10月10日 道路建設予定地内に古墳(3基)が不時発見され、その内1基が工事で破壊されることから古墳の追加調査が必要になった。調査対象になった古墳はB区123号墓とする。



業者によるサンプリング作業



古墳 測量風景



墓外観の測量



123号墓 作業風景

図版Ⅱ - 3 作業状況 - 3

- 10月11日 B区123号墓の検出作業を開始する。
- 10月16日 B区123号墓の検出状況の写真撮影を行う。
- 10月18日 B区123号墓の追加の写真撮影を行う。調査を完了した。

【令和元年度（平成31年度）】

- 7月8日 宜野湾シリガーラ流域古墓群、69号墓の伐採作業を行う。
- 7月10日 墓屋根のトレンチ掘削に着手する。
- 7月16日 墓庭の米軍造成を重機により除去する。
- 7月17日 墓庭のトレンチを重機により掘削を行う。台風5号、接近のため現場を養生する。
- 8月5日 墓室内の出土状況の写真撮影・記録作業を行う。天井の崩落により数基の蔵骨器が倒れている状況を確認。
- 8月7日 69号墓の検出状況の写真撮影・記録作業を行う。台風9号の接近に備えて、養生を行う。
- 8月13日 三味台の西半の掘り下げを行う。三味台の西端で、ブタの下顎骨を検出する。
- 8月19日 墓室内の蔵骨器の取り上げを開始した。
- 8月20日 崩落した天井の落石を重機を使用して除去し、残りの蔵骨器を取り上げた。21基の蔵骨器を確認する。
- 8月21日 シルヒラシの掘り下げを実施。
- 8月22日 磁器探査（-0.5m 経層探査）を実施。
- 9月3日 墓室内の完掘状況の写真撮影・記録作業を行う。
- 9月4日 追加の撮影・記録作業を実施。調査を完了する。



安全祈祷



掘削作業



蔵骨器の搬出



出土蔵骨器

図版Ⅱ - 4 作業状況 - 4

第三章 A区・C区・E区の調査成果

第1節 調査区の設定と層序

1. 調査区の設定

ここではA区・C区・E区の調査結果をまとめる。B区・D区に関しては古墓となるので別章に分けて記述する。

これらの調査区は普天間飛行場東沿いの土地返還に際し、普天間飛行場内にあった既存の巡回道路の移設を行う過程で試掘・本調査を行った結果から設定した調査区である。

A区は宜野湾後原遺物散布地、C・D区は神山後原丘陵古墓群、E区は赤道渡呂寒原丘陵古墓群がそれぞれ所在している。

以下A区・C区・E区の調査結果を概観する。

2. 基本層序

敷地内の地形については、普天間飛行場基地の南東側の海岸段丘の中位段丘上位面（第4面）に位置し、北西側には段丘崖斜面が確認できる。調査地周辺は、石灰岩堤、埋没の痕跡を示す谷状凹地、埋没したドリーネの可能性のある溶食凹地が、これまでの調査などで確認され、比高30m未満の起伏丘陵をなしている。

全体的に米軍造成で削平されている部分も多く、A-2、C-1、C-3区ではⅡ層の残りが悪かった。Ⅱ層の中でも粒子の細かさや砂質の強弱の違いがあり、耕作期間の長短に関係するとみられる。A-1、A-2、C-1区で石灰岩の岩盤を確認している。

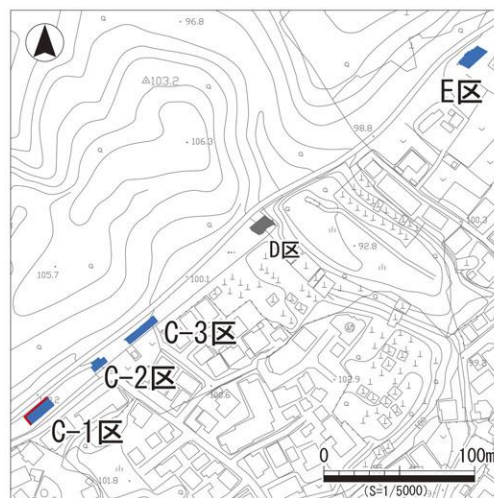
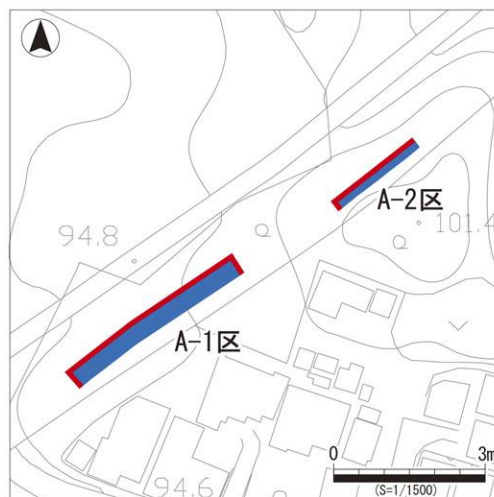
遺構はマージ（地山）を掘削して構築したものが多く、戦後に構築したとおもわれる遺構もみられた。

E区でのみⅢ層を確認した。神山の歴史（宜野湾市教育委員会 2012）で、戦前に谷を埋めて水田としていたが、後に水田から畑に変えてサトウキビの耕作をしていたということなのでE区の堆積はその影響も考えられる。自然科学分析調査で、下部は島尻層群泥岩が母材の谷埋め堆積物であり、その上位は母材がマージとされている。この境界は不整合となっており、掘削後に周辺マージを盛土したと考えられる。またこの堆積が均質であることから耕作地の造成の可能性があるが、E区での栽培種は検出されなかった。

以下に基本層序を示す。また層序については、普天間飛行場とその周辺の遺跡の関係性を理解しやすくするために、普天間飛行場の調査で使用している沖縄県と宜野湾市の試掘調査の層序を統一した「統一層序」についても記載する。

I層：表土。米軍接収以後の造成層及び黙認耕作土も含まれる（統一層序 I a層）。

Ⅱ層：にぶい褐色（7.5YR5/3）～黄褐色（2.5Y5/4）のシルト。戦前の耕作層で、主に地山を削平して耕作する。耕作期間が長いほど、粒子が細かく砂質が強くなる。E区ではクチャを包含する（統一層序 II a層）。



第Ⅲ - 1 図 調査壁面（赤ライン）

III層：E区にみられる谷埋堆積層。島尻層群の泥岩を使用した埋土とおもわれる。自然科学分析調査では、基盤はさらに下位と想定される。

IV層：地山。マージ層。

IVa層：橙色（7.5YR6/6）～黄褐色（10YR5/8）のシルト。普天間飛行場基地内における統一層序VII層に相当する。米軍造成や耕作の影響を受けることが多く、粘質や砂質の強弱がみられる。場所によってマンガンの含量が異なる。

IVb層：にぶい褐色（7.5YR5/3）～黄褐色（10YR5/6）の粘質土。普天間飛行場基地内における統一層序VIIe層に相当する。米軍造成や耕作の影響で粘質の強弱はみられるが、マンガンの包含はみられない。

V層：琉球層群の石灰岩。普天間飛行場基地内における統一層序VIII層に相当する。

第Ⅲ－1表 A・C・E区 基本層序対応関係

	A-1区		A-2区		C-1区		C-2区		C-3区		E区	
	調査時	報告	調査時	報告	調査時	報告	調査時	報告	調査時	報告	調査時	報告
I層	Ia～g、IIa～d	I	Ia～d	I	Ia～d、IIa	I	Ia～g	I	Ia～d、IIa	I	Ia～d、IIa	I
II層	IIe～h	II			IIb、d	II			IIc	II	IIb～c	II
III層											IVa～b	III
IV層	IIIa1～2	IVa	IIIa1～2	IVa	IIIa1～2	IVa	IIIa1～2	IVa	IIIa1～2	IVa	IIIa1～2	IVa
	IIIb1～2	IVb	IIIb	IVb	IIIb	IVb					IIIb	IVb

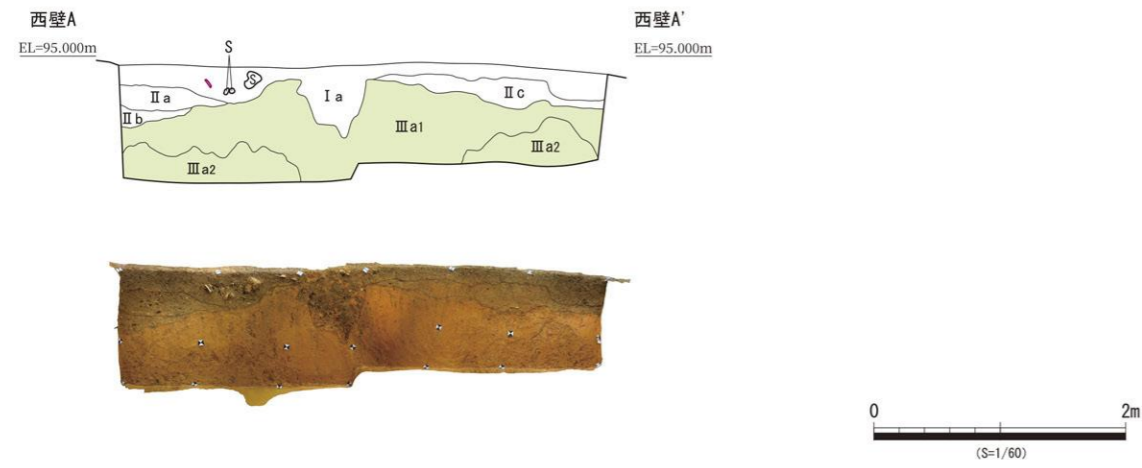
※A-2区のII層は地山掘削で、時期がはっきりしない。C-1区のIIcとC-3区のIIdは落ち込みのため、時期不明。

第Ⅲ－2表 統一層序一覧

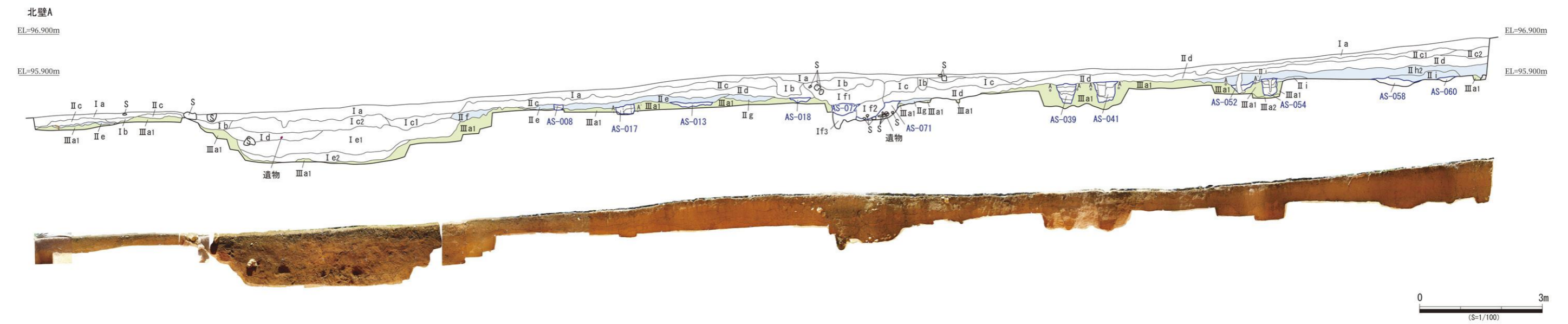
統一層序	時代	解釈	土の色・質
Ia層	現代 基地造成後	表土、攪乱層	
Ib層	現代 基地造成時	基地造成土	
II層	近・現代 基地造成前	耕作土など	灰褐色 砂質シルト
III層	近世	耕作土など	褐色～灰褐色 砂質シルト
IV層	グスク時代	耕作土など	暗灰色～黒灰色 砂質シルト～シルト
V層	古代～グスク時代初期	耕作土など	灰黄褐色～鈍い黄褐色 シルト～粘土質シルト
VI層	縄文時代後期・晩期	谷への堆積土など	黄褐色 粘質シルト
VIIa層		マージ	褐色 砂質シルト
VIIb層		マージ	明黄褐色（褐色） 砂質シルト
VIIc層		マージ	明黄褐色（明褐色） 砂質シルト
VII d1層		マージ	明黄褐色 砂質シルト
VII d2層		マージ	明黄褐色 砂質シルト
VII d3層		マージ	明黄褐色 砂質シルト
VIIe層		マージ	暗褐色 砂質粘土質シルト
VIII層		琉球層群 石灰岩	灰白色 石灰岩
IX層		島尻層群の風化層 クチャ	灰オリーブ色 泥岩風化土
X層		島尻層群 クチャ	灰色 泥岩

「沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第112集 基地内文化財9」（沖縄県立埋蔵文化財センター2022）より抜粋の上、一部加筆

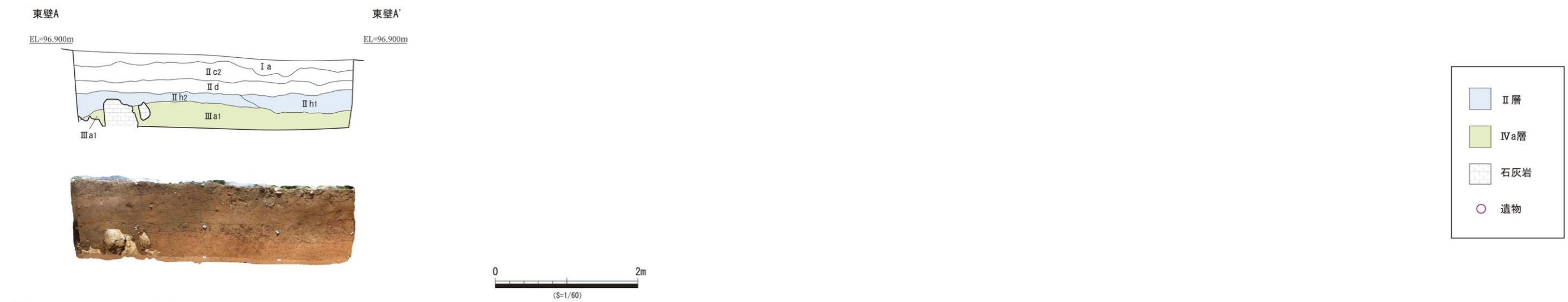
A-1区 西壁土層断面图



A-1区 北壁土層断面图

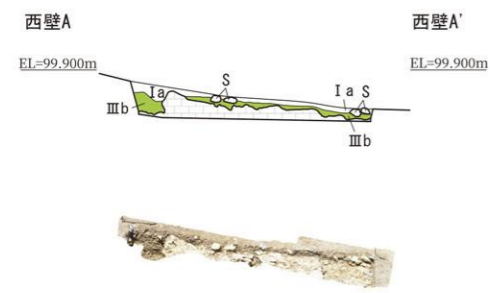


A-1区 東壁土層断面图

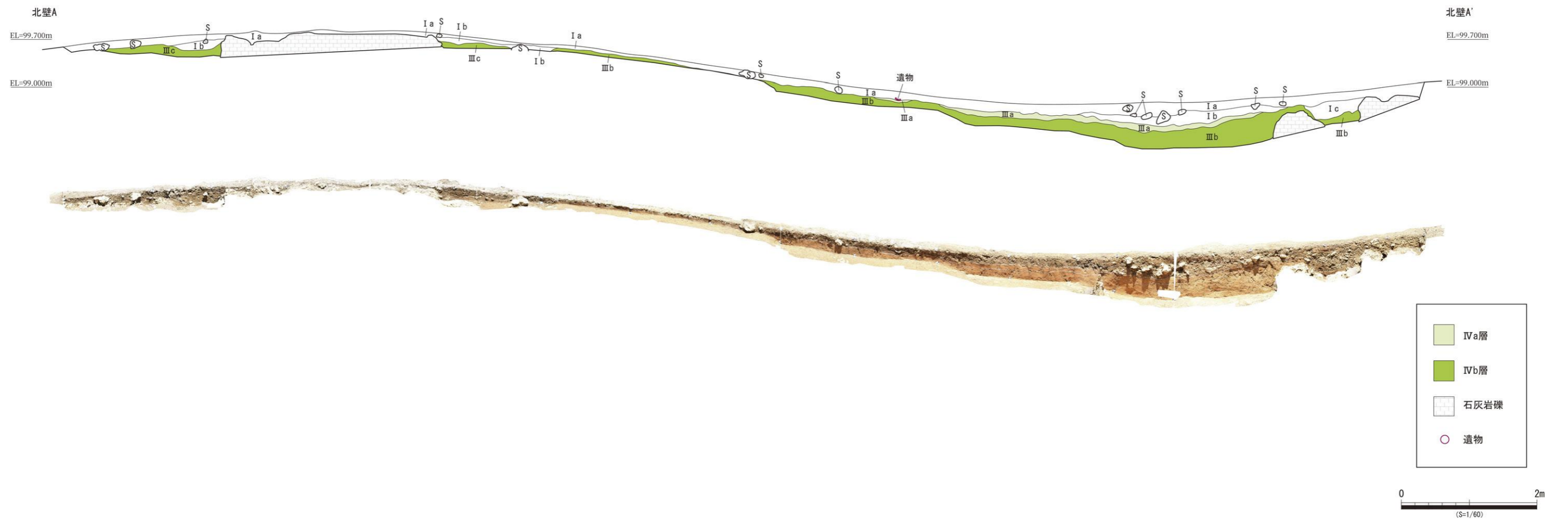


第Ⅲ - 2 图 A-1区 土層断面图

A-2区 西壁土層断面図

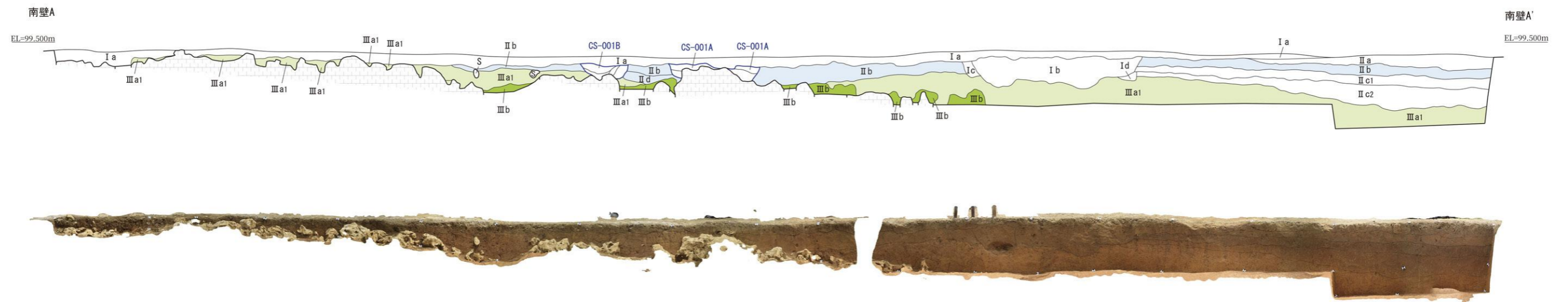


A-2区 北壁土層断面図

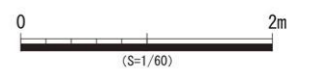
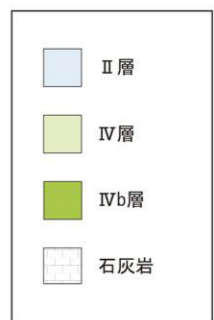
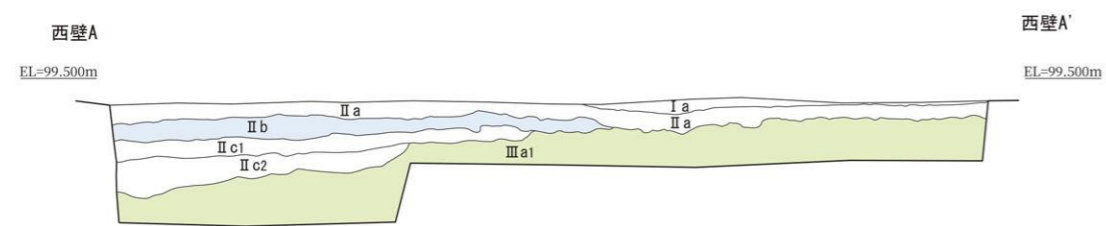


第Ⅲ - 3 図 A-2区 土層断面図

C-1区 南壁土层断面图



C-1区 西壁土层断面图



第三 - 4图 C-1区 土层断面图

第2節 遺構

A・C・E区の調査では総数101の遺構が確認された。遺構の種類は主に柱穴跡・畝状遺構・土坑・溝状遺構である。遺構番号は検出時点で地区ごとに任意で振っているがその後木の根等の腐植痕や現代の攪乱として欠番になった番号もある。以下地区ごとに遺構を概観する。

A区

A区はA-1区で49基の遺構が検出された。その中でピット状の遺構は29基、溝や土坑と見られる遺構が19基確認できている。

明確な建物プランは見えないが、溝状遺構（AS-022）から北東側5m以内に柱穴跡が集中している。また溝状遺構（AS-022）は浅く、柱穴跡群と逆方向の南西側がやや低くなっていることから、建物側から排水する為の溝と考えられる。またAS-011、012、013については畝状遺構で戦前から戦後すぐ頃の畑の跡だと考えられる。

A-2区ではほとんど遺構は見られなかった。米軍基地の造成で破壊されたと見られる。

C区

C区では遺構が8ヶ所確認された。C-1区では南北方向に走る2条の溝状遺構（CS-001A・B）が検出されている。用途は不明だが水の影響を受けた層が見られるため、排水の為の溝であった可能性が高い。

E区

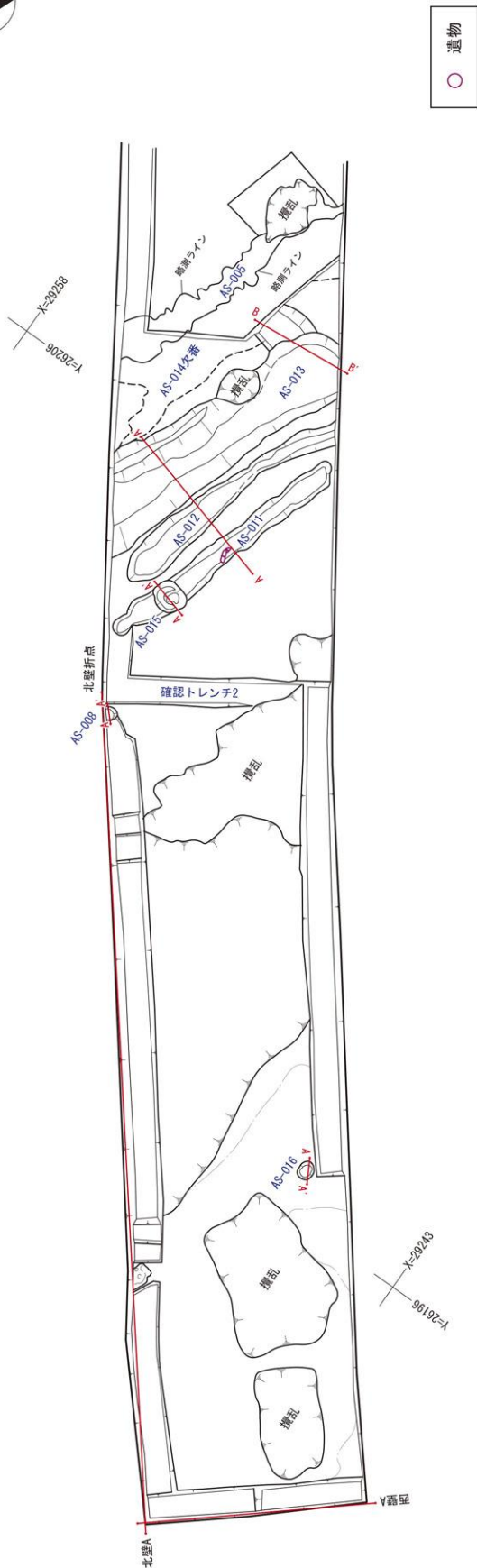
E区については表土では切石が集積している状況が見られたため、当初古墓が埋もれている可能性も考え掘削をし確認を行ったが、明確な遺構は検出されなかった。

壁面では凹地を埋めて耕作をした可能性が窺える層が見られ、自然科学分析でもその所見（153p）が述べられているが、耕作土と見られる層が米軍造成で大きく破壊されており、また調査区も極小なためはっきりとした結論を出すことはできなかった。

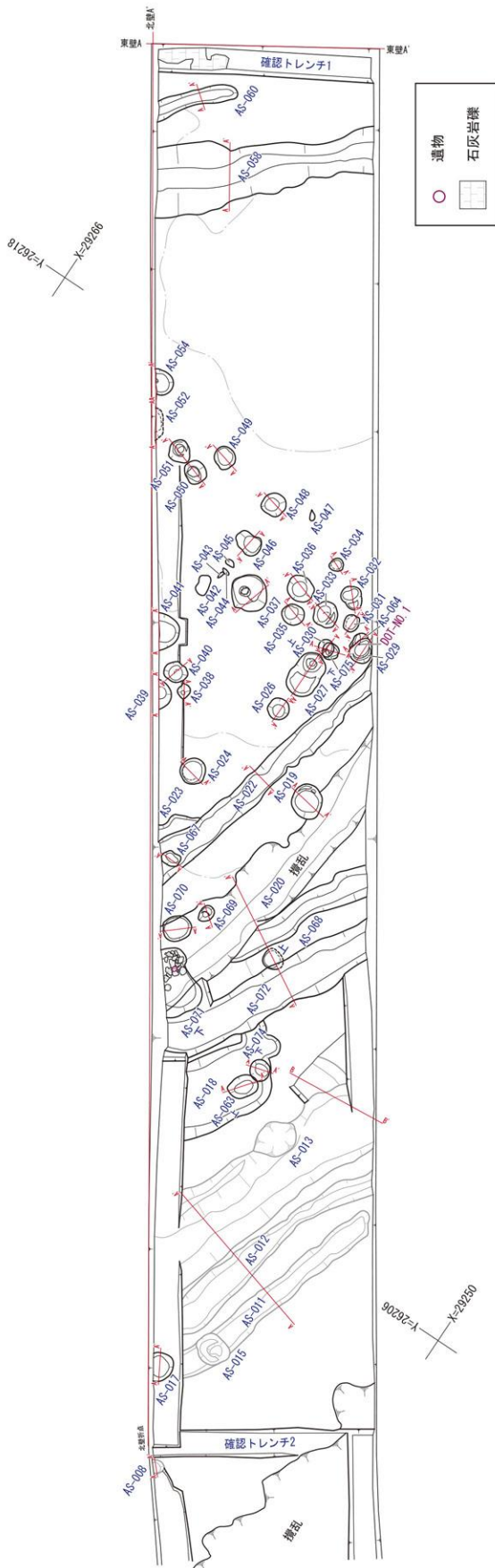
以上、A・C・E区の遺構について概観した。今回の調査の結果、全ての調査区で地山まで米軍基地造成の影響を受けていることが分かった。特に今回の調査区はフェンス沿いで管理用道路が敷かれていた場所であることも影響したと考えられる。それでも地山に掘りこまれた遺構は残存しておりピットや溝状遺構などが確認されている。遺構の詳細については第III-3～6表に示す。

1. A区

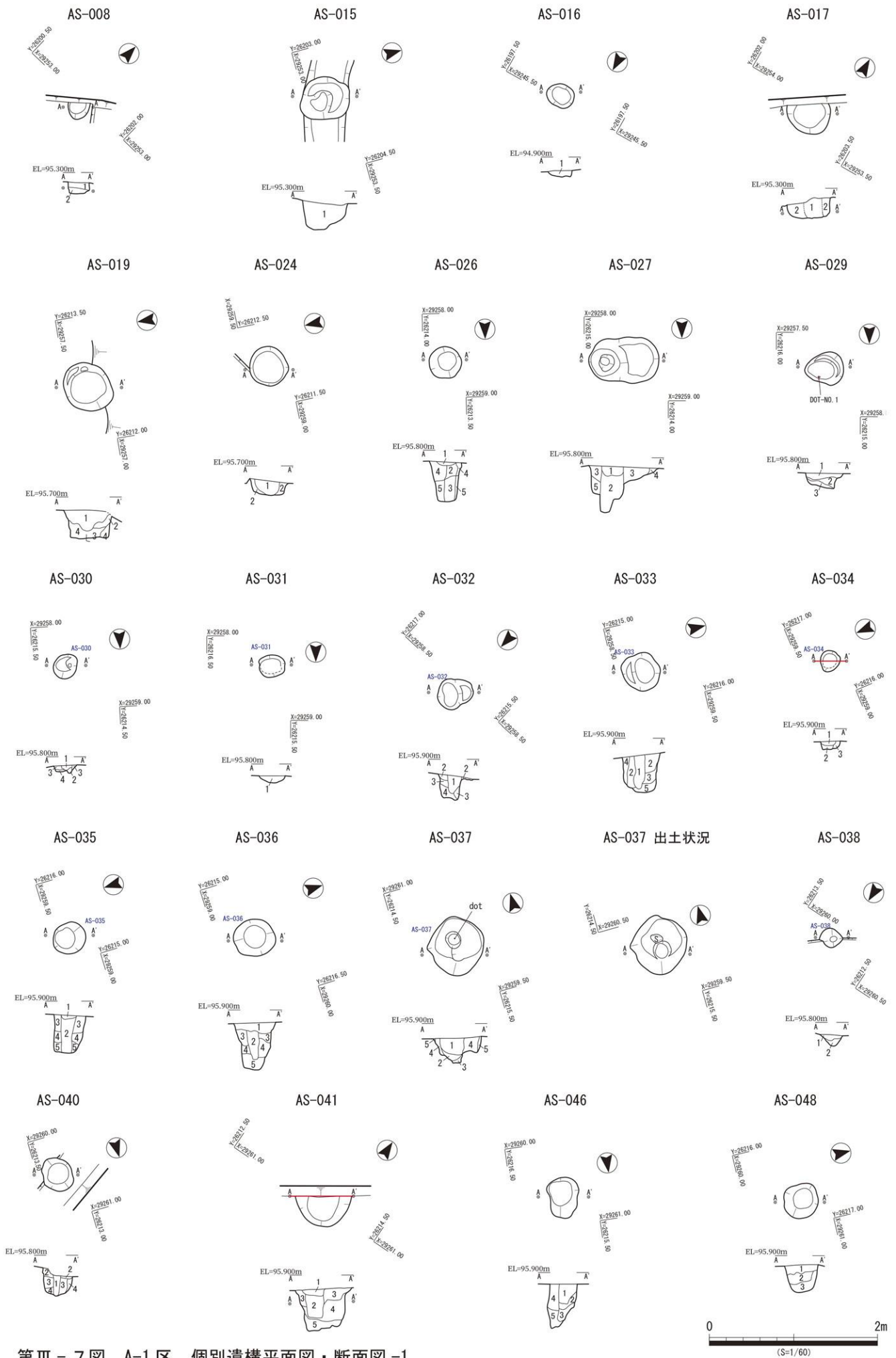
(1) A-1区



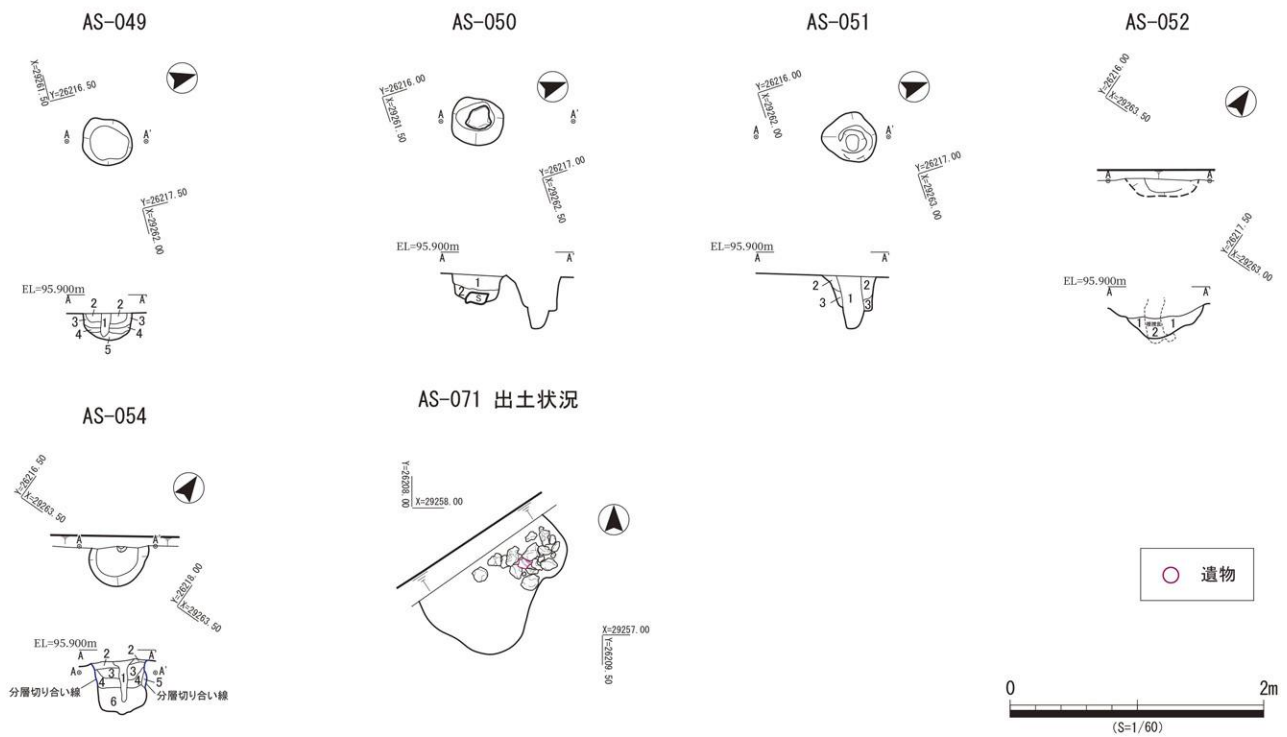
第Ⅲ - 5図 A-1区 第1面遺構平面図



第Ⅲ - 6図 A-1区 第2面遺構平面図



第三 - 7 図 A-1 区 個別遺構平面図・断面図 - 1

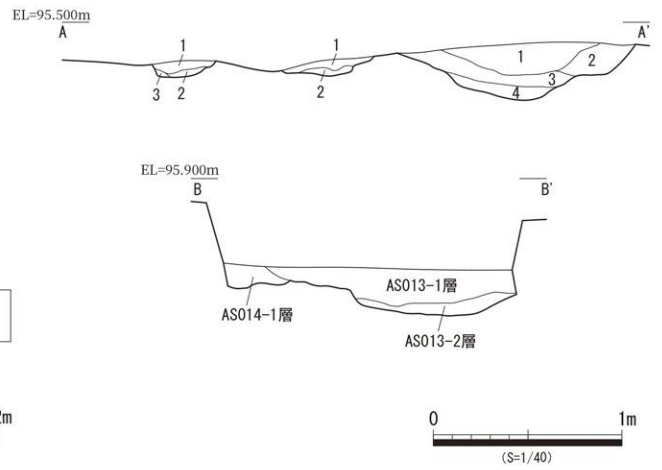
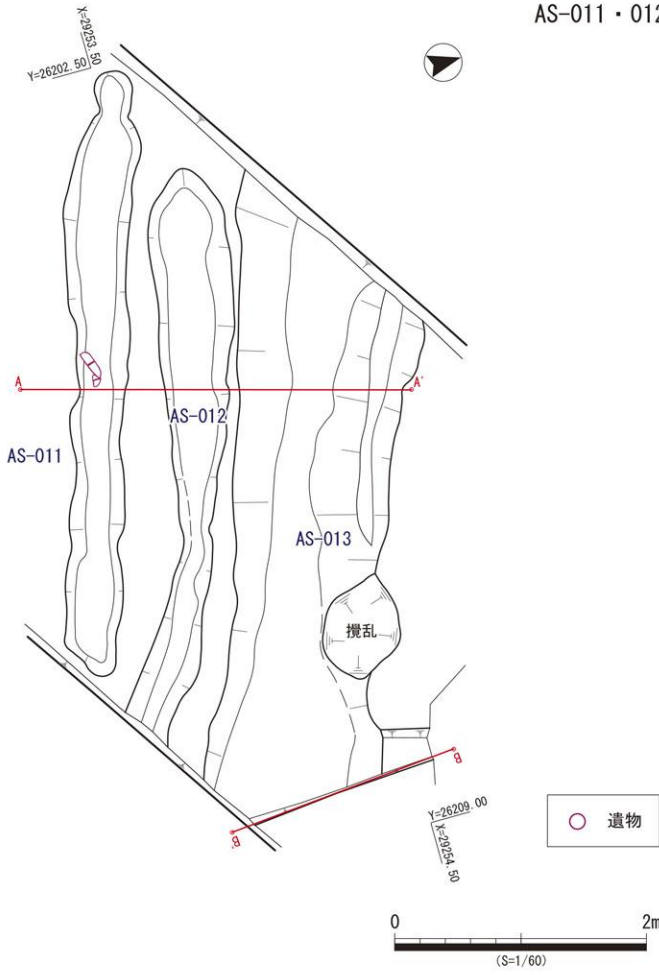


第三 - 8 図 A-1 区 個別遺構平面図・断面図 -2

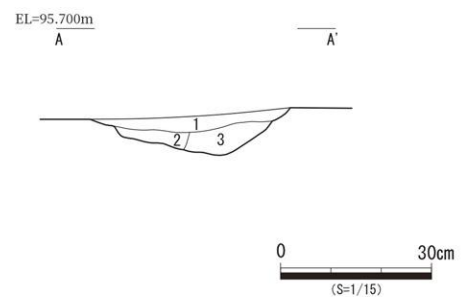
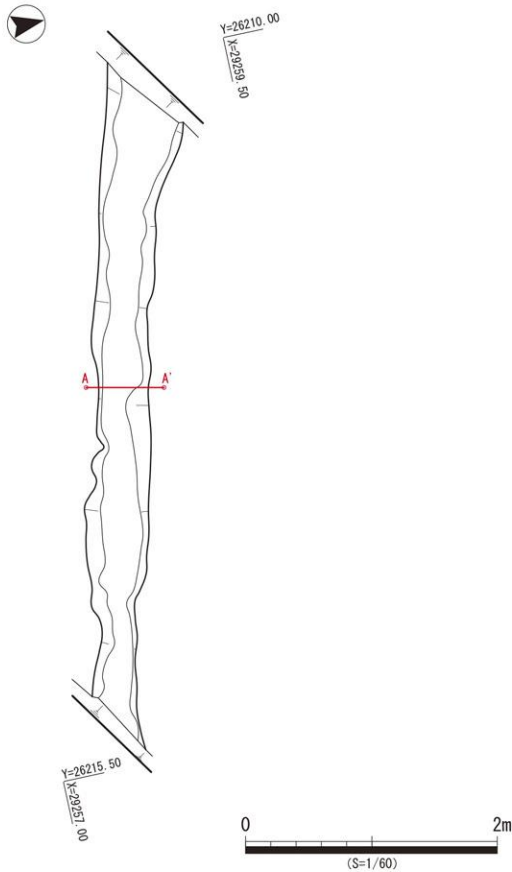
第三 - 3 表 A-1 区 検出遺構一覧 (SP)

遺構名	堆積	法量 (cm)				底面の標高 (m)	断面分類	柱穴の可能性	出土遺物	備考
		検出	深さ	比率	柱径					
AS-008	2	26	15	26 : 15	—	95.05	Ab類	×		
AS-016	1	30	7	30 : 7	—	94.66	Cb類	×	獣骨	
AS-017	2	50	30	5 : 3	20	94.95	Ab類	◎		
AS-019	4	56	32	7 : 4	18	95.2	Ac類	○	沖無	
AS-024	2	44	20	11 : 10	30	95.35	Ab類	○		
AS-026	5	35	48	35 : 48	13	95.19	Aa類	◎		
AS-027	5	75	35	15 : 7	25	95.15	Ad類	◎		柱穴の可能性は低い。
AS-030	4	28	10	7 : 2	6	95.0	Ad類	○		
AS-031	1	30	10	3 : 1	—	95.58	Bb類	×	沖施	
AS-032	4	40	27	40 : 27	13	95.42	Ca類	◎		
AS-033	5	43	48	43 : 48	14	95.25	Ac類	◎	青花・沖無・本磁	
AS-034	3	22	10	11 : 5	—	95.65	Cb類	×		
AS-035	5	35	45	7 : 9	18	95.29	Aa類	◎	沖施	
AS-036	5	48	55	48 : 55	15	95.19	Aa類	◎		
AS-037	5	67	30	67 : 30	30	95.43	Ad類	◎		かませ石あり。
AS-038	2	25	15	5 : 3	—	95.51	Bc類	×		
AS-039	5	53	48	53 : 48	—	95.2	Ac類	×		
AS-040	4	40	35	8 : 7	8	95.32	Ac類	◎		小さい柱痕が斜めに傾斜している。杭痕か？
AS-041	5	54	52	27 : 26	17	95.24	Ac類	◎		
AS-046	5	35	48	35 : 48	20	95.24	Ad類	◎	沖無	
AS-049	5	38	23	38 : 23	8	95.54	Ac類	◎		柱は抜かれずに放置された可能性あり。
AS-050	2	40	20	2 : 1	18	95.5	Ac類	○		礎石？
AS-051	3	40	35	8 : 7	20	95.3	Ad類	◎	青花・沖施	
AS-052	2	60	13	60 : 13	—	95.5	Bc類	×		
AS-054	6	45	32	45 : 32	8	95.4	Ac類	◎		
AS-064	3	40	37	40 : 37	18	95.27	Ad類	◎		AS-029に切られる。
AS-069	2	30	26	15 : 13	15	94.99	Ad類	◎		
AS-074	1	35	12	35 : 12	—	95.18	Bc類	×		
AS-075	4	30	35	6 : 7	14	95.33	Ac類	◎		AS-030に切られる。

AS-011・012・013

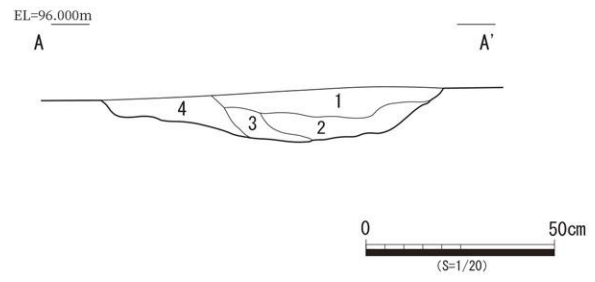
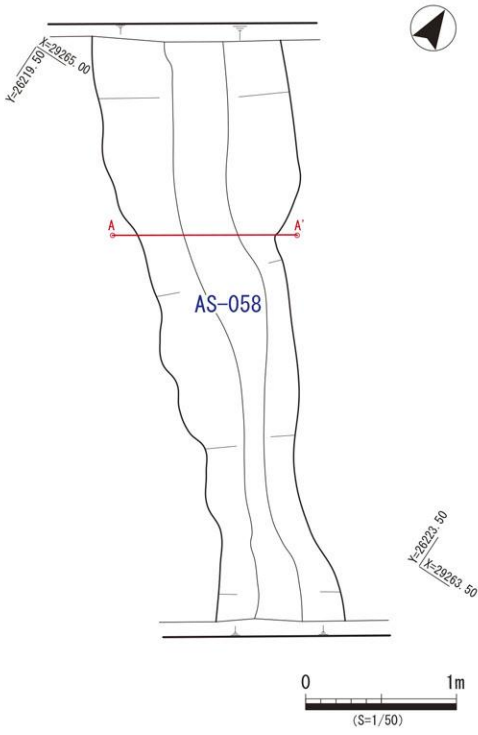


AS-022

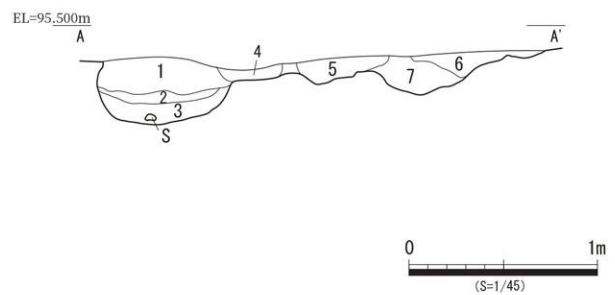
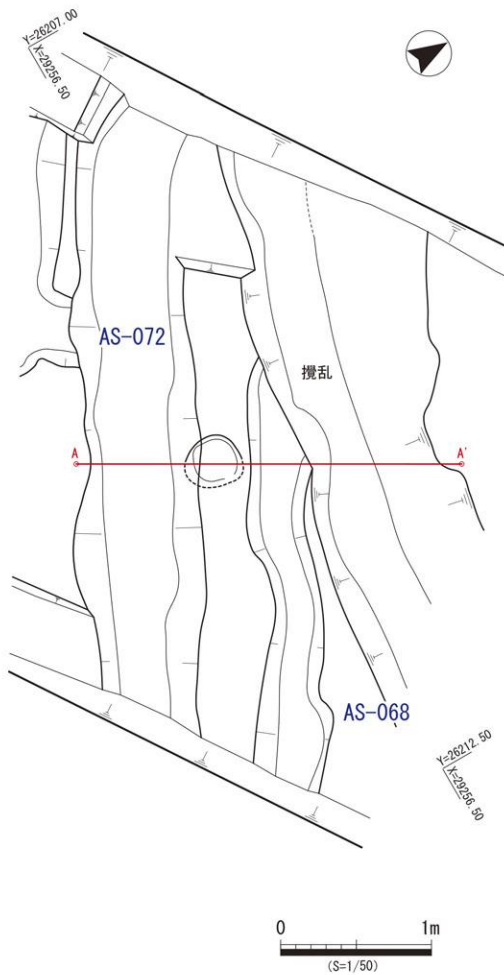


第三 - 9 図 A-1 区 個別遺構平面図・断面図 -3

AS-058



AS-068 · 072



第三-10图 A-1区 个别遺構平面図・断面図-4

第三 - 4 表 A 区 検出遺構一覧 (SD・SK)

遺構名	地区名	堆積	法量 (cm)			断面分類	平面形状	軸	出土遺物	備考
			検出	深さ	比率					
AS-001	A-2区	1	75	5	15 : 1	Cb	楕円形	西-東		SK
AS-002	A-2区	2	165	25	33 : 5	Cb	不定形	北-南	沖施・沖無・本磁・ガラス・プラスチック	SK
AS-011	A-1区	3	34	9	34 : 9	Bb	直線状	北西-南東	沖施・沖無・アカムヌー・陶質	SD
AS-012	A-1区	2	50	10	5 : 1	Cb	直線状	北西-南東	褐釉・本磁・沖施	SD
AS-013	A-1区	4	130	30	13 : 3	Cb	直線状	北西-南東	青花・沖施・沖無・アカムヌー・本磁・青銅品	SD
AS-014	A-1区	1	35	11	35 : 11	Cb	直線状	北-南		SD。AS-013に切られる。
AS-015	A-1区	1	50	32	50 : 32	Ac	隅丸方形	北-南	青花・沖施・本磁	SK
AS-018	A-1区	1	60	13	60 : 13	Bb	直線状	北西-南東	青花・沖施・沖無	SD
AS-020	A-1区	2	63	21	3 : 1	Cb	直線状	北西-南東	青花・青磁・沖施・沖無・アカムヌー・本磁・ガラス・鉄製品・歯ブラシ・獣骨・石材	SD。AS-068に切られる。
AS-022	A-1区	3	40	10	4 : 1	Bb	直線状	北西-南東	沖施・沖無・アカムヌー・鉄製品	SD
AS-029	A-1区	3	42	19	42 : 19	Ad	楕円形	西-東		SK
AS-048	A-1区	3	40	30	4 : 3	Ac	隅丸方形	西-東		SK
AS-058	A-1区	4	91	14	13 : 7	Bb	直線状	北西-南東	青花・青磁・沖無・本磁・鉄製品	SD
AS-060	A-1区	1	28	6	14 : 3	Bb	直線状	北西-南東		SD
AS-063	A-1区	2	53	13	53 : 13	Cb	楕円形	北西-南東		SK
AS-067	A-1区	1	30	10	3 : 1	Ab	不定形	北-南	沖施	SK
AS-068	A-1区	1	57	12	19 : 4	Cb	直線状	北西-南東	沖施・沖無	SD
AS-070	A-1区	1	50	12	25 : 6	Cb	円形状	北西-南東		SK
AS-071	A-1区	1	120以上	48	—	Bb	不定形	—	青花・沖施・沖無・アカムヌー・ガラス	SK。米軍の攪乱に切られる。
AS-072	A-1区	3	72	35	72 : 35	Cb	直線状	北西-南東	沖施・沖無・アカムヌー・本磁・ガラス	SD



着手前現況 (南西から)



北西側拡張部設定状況 (南西から)



南西側拡張部設定状況 (南西から)



AS-005 土層 (東から)



AS-006 検出状況〔南東から〕



AS-011・012・013 検出状況〔東から〕



AS-071・072 遺物検出状況〔略西より〕



AS-071 検出状況〔磔だまり〕〔南東から〕



AS-008 土層〔南東から〕



AS-016 土層〔北西から〕



AS-016 土層〔北西から〕



AS-017 土層〔南東から〕



AS-019 〔西から〕



AS-024 土層〔西から〕



AS-026 土層〔北から〕



AS-027 土層〔北から〕



AS-029 土層〔北から〕

図版Ⅲ - 2 A-1 区 -2



AS-030 土層〔北から〕



AS-031 土層〔北から〕



AS-032 土層〔北西から〕



AS-033 土層〔東から〕



AS-034 土層〔西から〕



AS-035 土層〔西から〕



AS-036 土層〔東から〕



AS-037 支え石検出状況〔略南から〕



AS-038 土層〔北西から〕



AS-039 完掘状況〔略南から〕



AS-040 土層〔北から〕



AS-041 土層〔南東から〕



AS-046 土層〔北から〕



AS-048 土層〔東から〕



AS-049 土層〔東から〕



AS-050 土層 礎石?〔東から〕



AS-050 完掘状況〔東から〕



AS-051 土層〔東から〕



AS-052 土層〔南東から〕



AS-054 土層〔南東から〕



AS-058 土層〔南東から〕



AS-060 土層〔南東から〕



AS-063 土層〔南東から〕



AS-064 遺物出土状況〔北から〕



AS-064 土層〔南から〕



AS-067 土層〔東から〕



AS-069 土層〔東から〕



AS-070 土層〔北東から〕



AS-074 土層〔西から〕



AS-075 土層〔西から〕

図版Ⅲ - 4 A-1 区 -4



溝状遺構群・ピット群 検出状況〔東から〕



ピット群 完掘状況〔東から〕



東半部 遺構全景 検出状況〔南西から〕



東半部 遺構全景 検出状況〔北東から〕



西半部 全景 完掘状況〔南西から〕



西半部 全景 完掘状況〔北東から〕



東半部 全景 完掘状況〔北東から〕

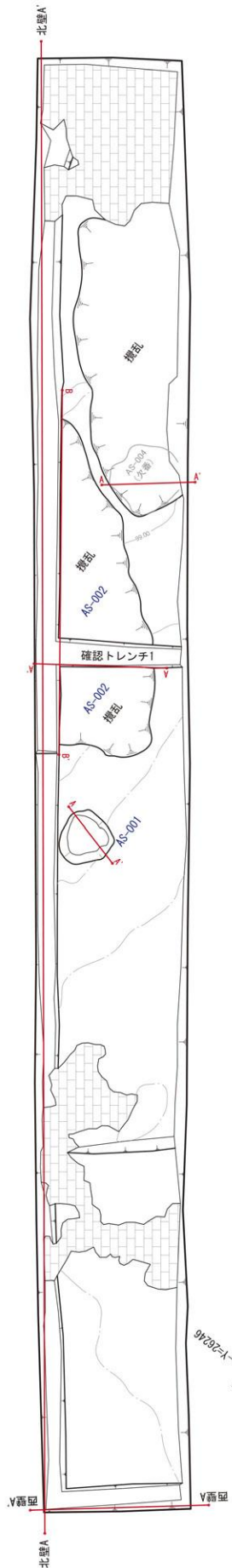


東半部 全景 完掘状況〔南西から〕

(2) A-2区

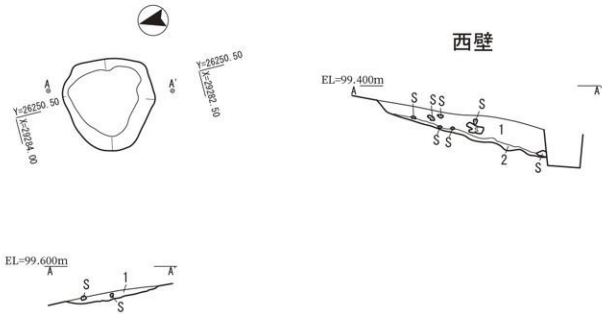


952027
K-202300

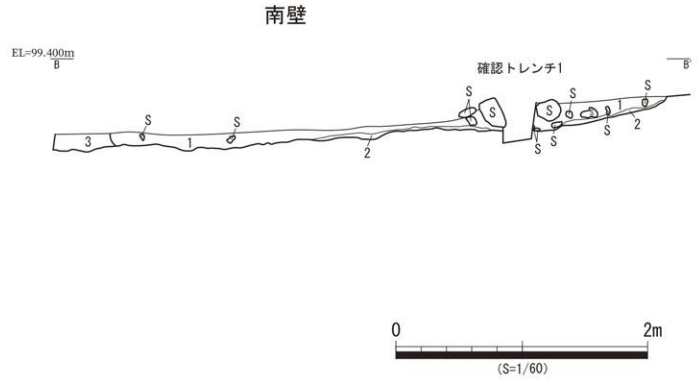


第Ⅲ-11図 A-2区 遺構平面図

AS-001



AS-002



第三-12図 A-2区 個別遺構平面図・断面図



着手前状況〔南西から〕



拡張部設定状況〔南西から〕



南西側拡張部設定状況〔北東から〕



西壁土層〔北東から〕



遺構検出状況〔南西から〕



AS-001 検出状況〔略北〕

図版Ⅲ-6 A-2区-1



AS-001 土層 [北西から]



AS-002 検出状況 [略北から]



AS-002 西壁 堆積状況 [略東から]



AS-002 南壁 土層 堆積状況 [北西から]



AS-002 南壁 堆積状況 [略北西から]



AS-002 完掘状況 [略北から]



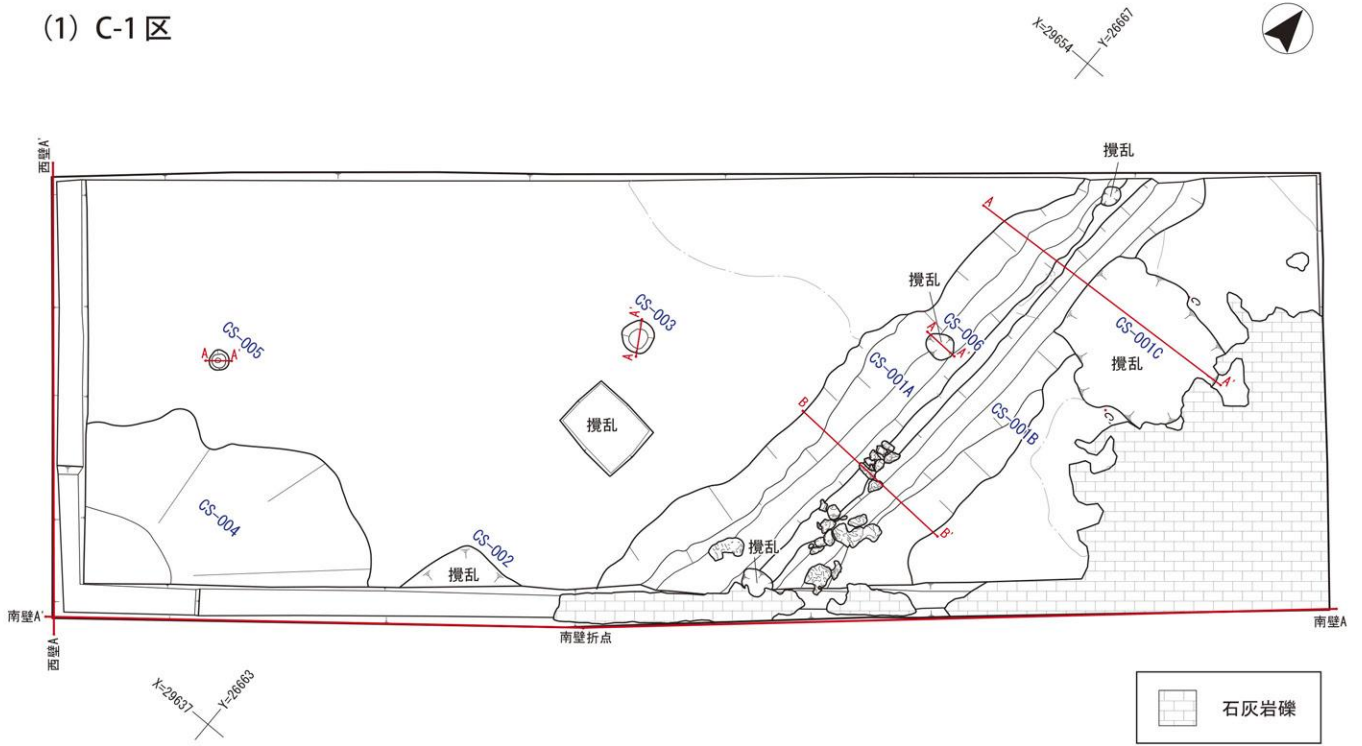
調査完了状況全景 [南西から]



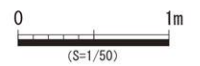
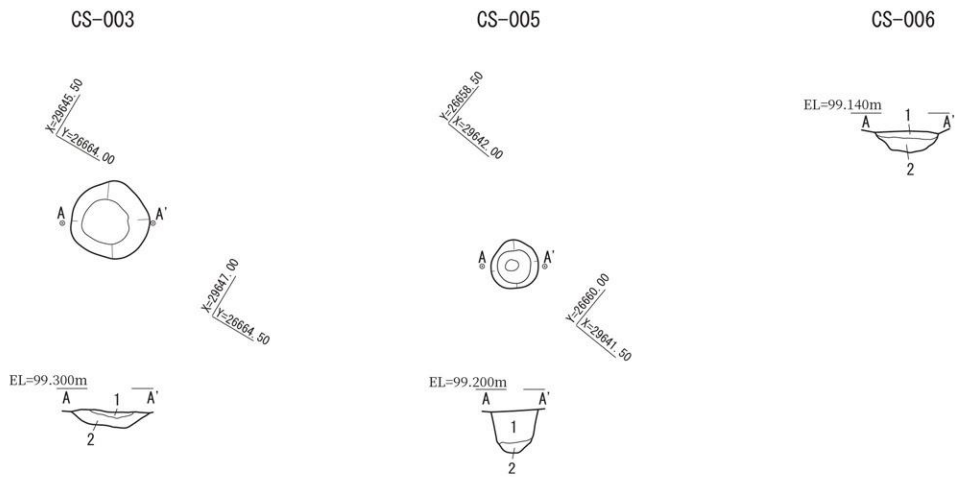
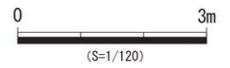
調査完了状況全景 [北東から]

2. C区

(1) C-1区



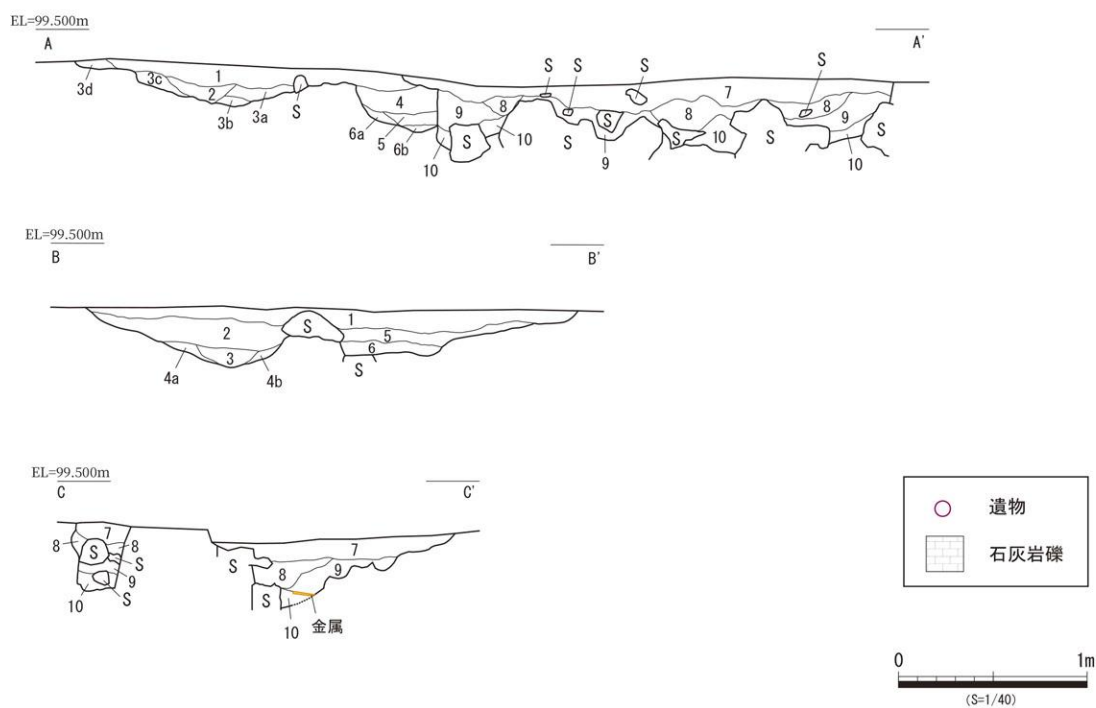
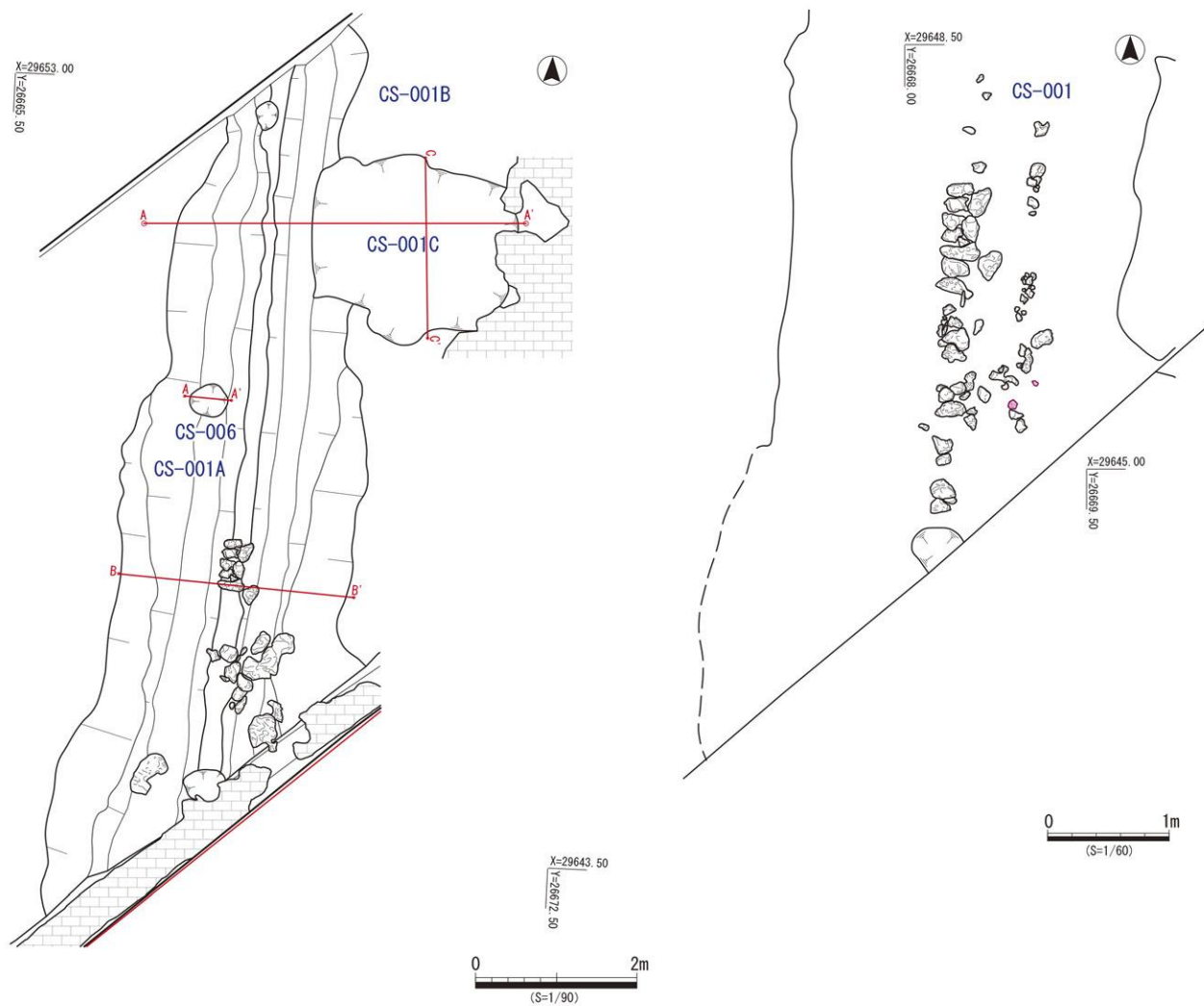
第三-13图 C-1区 遺構平面図



第三-14图 C-1区 個別遺構平面図・断面図・出土状況図-1

CS-001

CS-001出土状況図



第Ⅲ-15图 C-1区 個別遺構平面図・断面図・出土状況図-2



着手前現況〔南西から〕



全景 検出状況〔北東から〕



拡張部状況〔南西から〕



溝状遺構 検出状況〔南から〕



CS-001 石列〔南から〕



CS-001 ベルト 2〔南から〕



CS-001C 南北ベルト〔西から〕



CS-001AB・ピット群 検出状況〔南から〕



CS-001C 南北ベルト (西から)



CS-001 ベルト 1 (南から)



CS-001 ベルト 1 (南から)



CS-001 ベルト 1 (南から)



CS-001 ベルト 1 (南から)



CS-001 完掘状況 (南から)

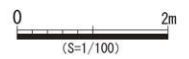
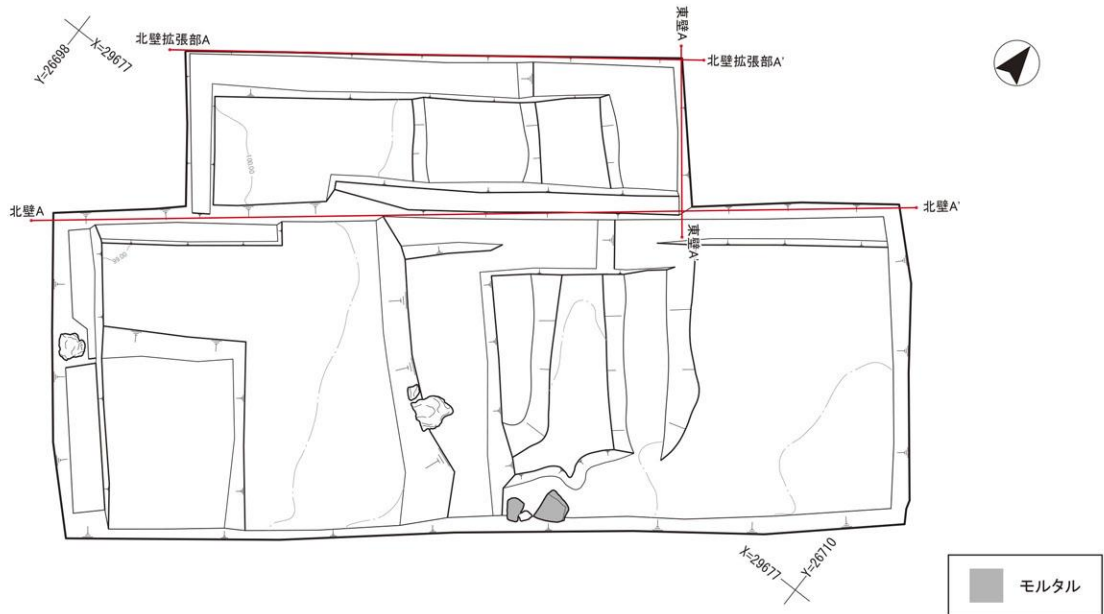


CS-001 完掘状況 (北から)



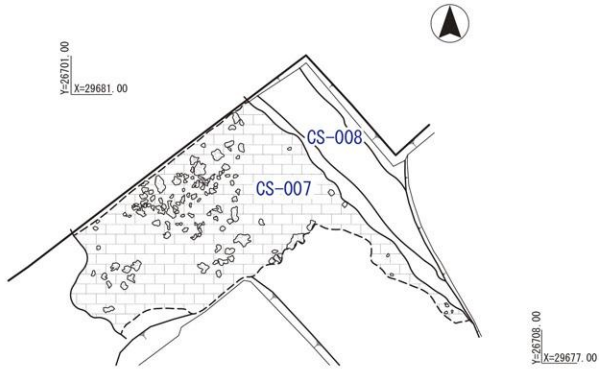
全景 完掘状況 (南西から)

(2) C-2 区

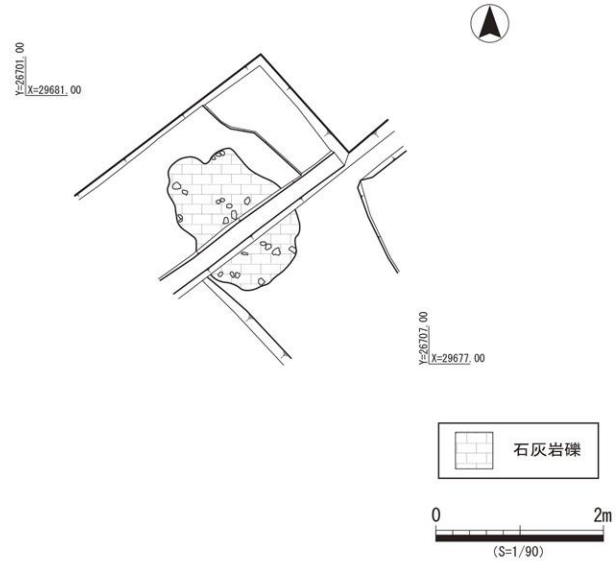


第Ⅲ-16 図 C-2 区 遺構平面図

CS-007 上面出土状況図



CS-007 下面出土状況図



第Ⅲ-17図 C-2区 出土状況図

第Ⅲ-5表 C区 検出遺構一覧 (SD・SK)

遺構名	地区名	堆積	法量 (cm)			断面分類	平面形状	軸	出土遺物	備考
			検出	深さ	比率					
CS-001A	C-1区	3	85	10	17:2	Cb	直線状	北-南	青花・沖施・アカムヌー・本磁・獣骨	SD
CS-001B	C-1区	3	40	20	2:1	Cb	直線状	北-南	青花・沖施・沖無	SD
CS-001C	C-1区	4	-	40	-	Cb	不定形	西-東	本磁・沖施・沖無・アカムヌー・鉄製品・銅製品	米軍の攪乱。
CS-007	C-2区					Cb	不定形	北西-南東	外磁・本磁・沖施・沖無・アカムヌー・貝類・鉄製品	米軍の攪乱に切られる。
CS-008	C-2区	2	130以上	28	-	Bb	直線状	北西-南東	本磁・沖施・沖無・アカムヌー・鉄製品・貝類	SD。堆積は米軍の造成。



調査区設定状況〔北東から〕



拡張部設定状況〔略西から〕



CS-007・008 検出状況〔南東から〕



CS-007・008 検出状況〔南西から〕

図版Ⅲ-10 C-2区-1



CS-008 ベルト 土層 (南東から)



CS-007(カクラン) 堆積状況 (南東から)



東壁拡張部 (南西から)



拡張北壁 堆積状況 (略南東から)



北壁 堆積状況 (略南西から)



北壁 深掘りトレンチ 堆積状況 (略南東から)

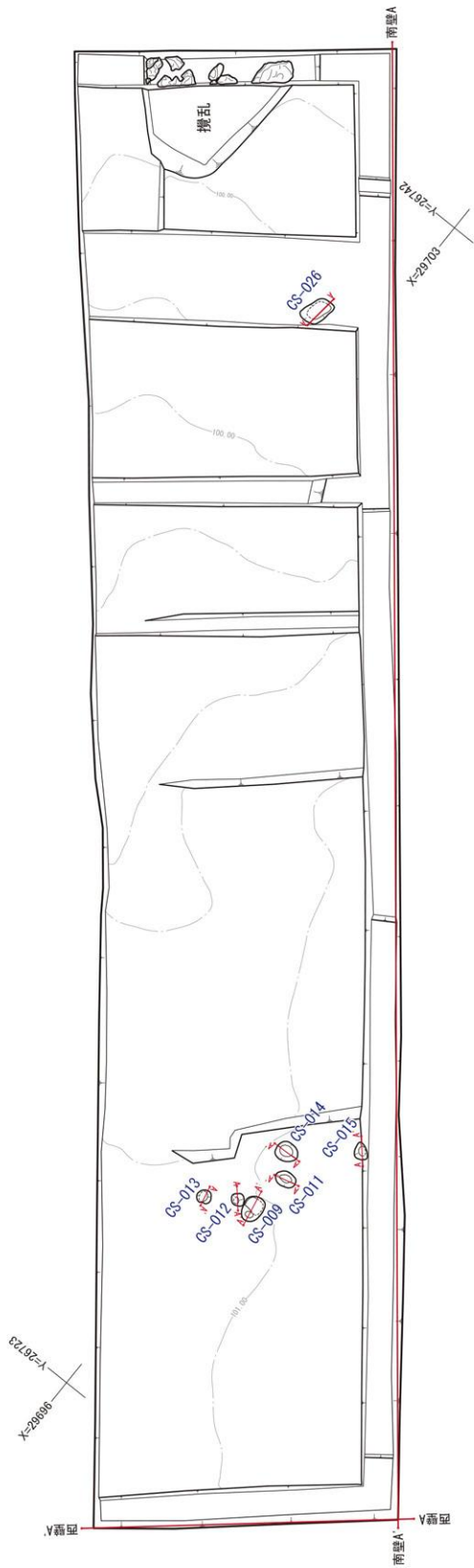


遺構検出状況 (略北東から)

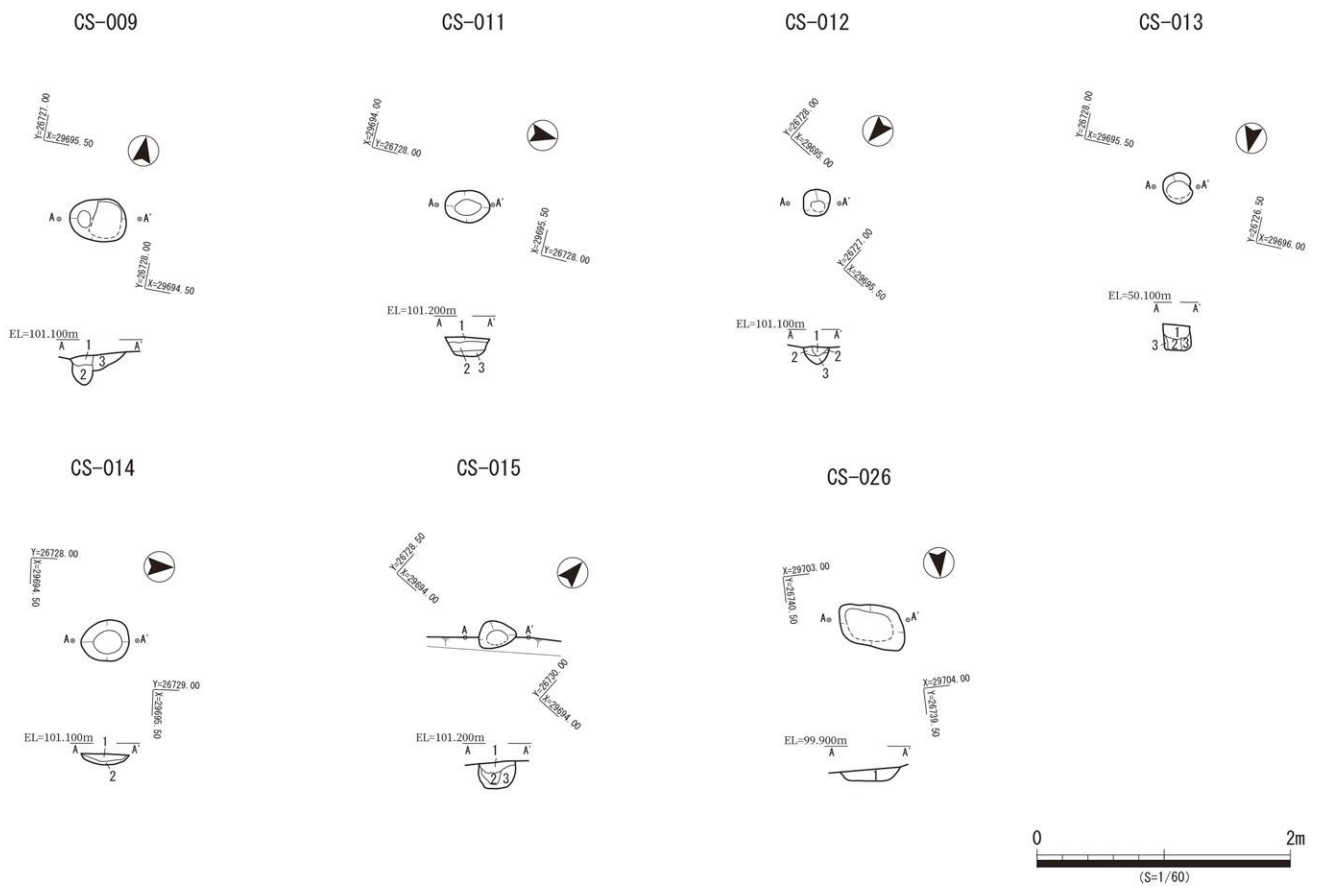


全景 完掘状況 (北東から)

(3) C-3区



第Ⅲ-18图 C-3区 遺構平面図



第Ⅲ-19図 C-3区 個別遺構平面図・断面図

第Ⅲ-6表 C区 検出遺構一覧 (SP)

遺構名	地区名	堆積	法量 (cm)			断面分類	柱穴の可能性	出土遺物	備考
			検出	深さ	比率				
CS-003	C-1区	2	45	10	9 : 2	Bb	×	鉄片	
CS-005	C-1区	2	18	26	9 : 13	Ba	×		
CS-006	C-1区	2	40	15	8 : 3	Bb	×		
CS-009	C-3区	3	44	22	2 : 1	Ad	×		2つの遺構の切り合いか。
CS-011	C-3区	3	30	15	2 : 1	Ac	×		
CS-012	C-3区	3	25	15	5 : 3	Bc	×		2つの遺構の切り合いか。
CS-013	C-3区	3	24	24	1 : 1	Ac	○		
CS-014	C-3区	2	35	10	7 : 2	Bb	×		
CS-015	C-3区	3	28	20	7 : 5	Bc	×		
CS-026	C-3区	1	44	10	22 : 5	Bb	×		



調査区設定状況〔南西から〕



全景検出状況〔南西から〕



全景検出状況〔南西から〕



東半部遺構〔北東→北西から〕



東半部遺構〔北東→北西から〕



東半部遺構〔北東→北西から〕



CS-009 土層〔南西から〕



CS-011 土層〔北東から〕



CS-012 土層 [北西から]



CS-012 土層 [北から]



CS-013 土層 [北から]



CS-013 土層 [北から]



CS-015 土層 [南東から]



東壁 北から南へ連続撮影 [南東から]

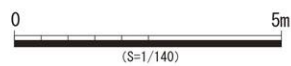
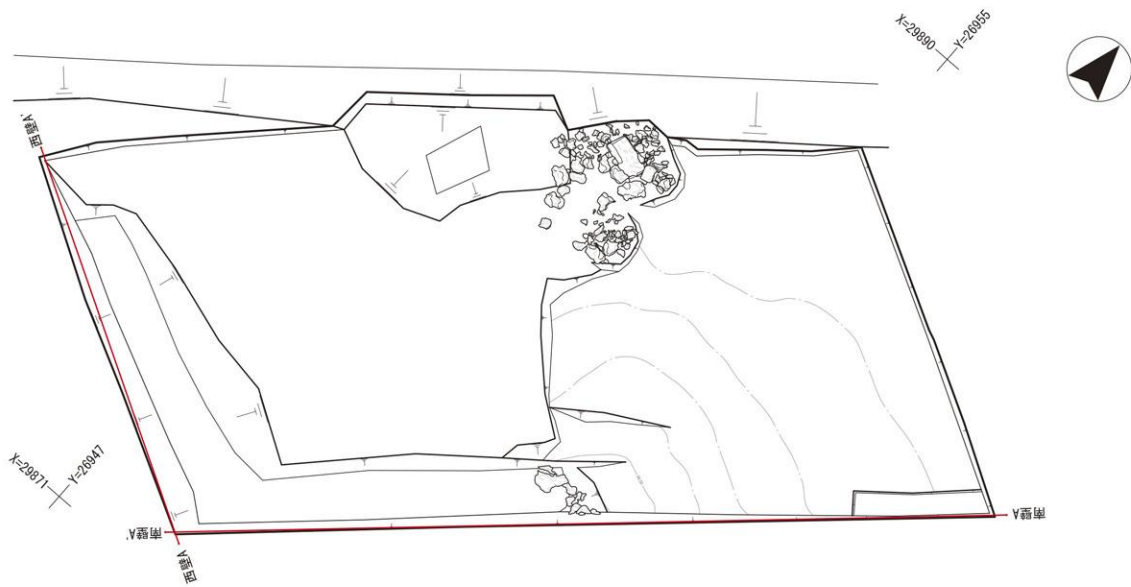


東壁 北から南へ連続撮影 [南東から]

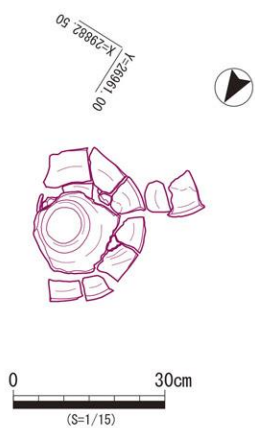


全景 完掘状況 [南西から]

3. E区



第Ⅲ-20图 E区 遺構平面図



第Ⅲ-21图 E区 遺物出土状況



調査区設定状況〔南西から〕



確認トレンチ〔西から〕



西壁土層〔北東から〕



西壁土層〔北東から〕



南壁 堆積状況〔略西から〕



切石等集積状況〔南東から〕



切石等集積状況〔南西から〕



E区 全景 調査終了状況〔北東から〕

図版Ⅲ -14 E区 -1

第3節 遺物

A~E 区の近世～近代の遺構からは総数 7576 点の遺物が出土した。A-1 区のみで全体の 9 割の遺物を占める。最も多く出土したのは、沖縄産施釉陶器で 2453 点、次にアカムヌーで 2133 点と沖縄産施釉陶器とアカムヌーで全体の半数を占める。遺物の出土傾向から近世をさかのぼるものではないとおもわれ、本土産磁器がアカムヌーの点数の約 1/4 から戦後以降の活動は薄いとおもわれる。以下にそれぞれの調査区の遺物について述べる。

A-1 区は計 6863 点が出土し先に述べたように、調査区全体の 9 割の遺物が出土している。出土量は沖縄産施釉陶器が 2281 点で最も多く、アカムヌーも 2072 点と 2000 点以上出土している。次いで沖縄産無釉陶器が 1376 点、本土産磁器が 360 点、中国産陶磁器が 176 点の出土があった。他の遺物としては円盤状製品、青銅製の簪、煙管、アルミのスプーン、セルロイド製の歯ブラシのほか獣骨・貝類等の自然遺物も出土している。遺物が出土している遺構では柱穴の AS-019 から沖縄産無釉陶器、AS-033 から青花・沖縄産無釉陶器、AS-035・AS-051 から沖縄産施釉陶器、AS-046 から沖縄産無釉陶器が出土している。柱穴以外の Pit では AS-031 から沖縄産施釉陶器が出土している。他に遺構では AS-012・013・015・020・022・058・067・068・072 から遺物が出土している。全てを記述はできないが、主なものとして AS-012 から中国産褐釉陶器、AS-013 から青花、AS-020 から青磁・青花、AS-058 から青花などが出土している。

A-2 区は計 124 点で、A-1 区の隣接する調査区でありながら A-1 区の約 1 割の出土量である。もっと多く出土しているのは本土産磁器で 48 点、沖縄産施釉陶器が 29 点、沖縄産無釉陶器が 17 点出土している。アカムヌーの出土が少なく、本土産磁器が沖縄産施釉陶器の約 1.5 倍出土していることから、戦後のなんらかの活動が窺える。遺物が出土している遺構では、AS-002 から沖縄産とその他に本土産磁器、ランプ笠片、プラスチック製品が出土している。

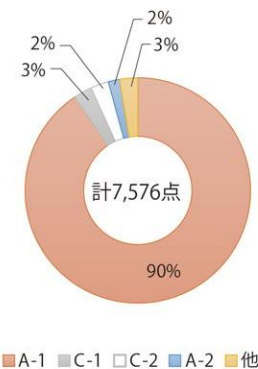
C-1 区は計 197 点で A-1 区の約 3 割の出土量ではあるものの、全体としては A-1 区に次いで出土量となっている。主な出土遺物は沖縄産施釉陶器が 85 点、次いで沖縄産無釉陶器が 79 点、アカムヌー 29 点、本土産磁器 22 点となっている。他には青花、中国産褐釉陶器、円盤状製品、薬品瓶等が出土している。遺物が出土した遺構は CS-001 で、沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器・アカムヌー・本土産磁器が出土している。

C-2 区で確認された遺物は 196 点であった。本土産磁器が 36 点ともっとも多く、次いで沖縄産施釉陶器が 32 点、沖縄産無釉陶器 21 点、アカムヌー 19 点となる。その他の遺物では南ベトナムの 1 ドン銭貨やボタン等が出土している。C-2 区では、本土産磁器が最も出土が多いことやプラスチック製品、ガラス製品などから基地接收後も活動があったとおもわれるが南ベトナム銭貨、金属製の蓋、プラスチック製品等の出土から米軍の活動の可能性も考えられる。

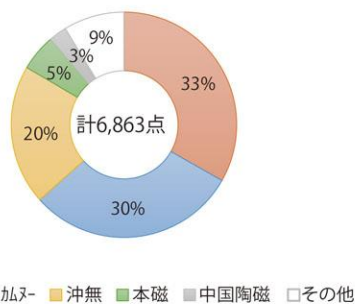
C-3 区の遺物点数は 20 点で、B 区に次いで出土量が少ない調査区である。主な内訳はアカムヌーが 7 点、沖縄産施釉陶器が 6 点と 10 点以下で、沖縄産無釉陶器・本土産磁器がともに 2 点の出土量と少なさである。他の遺物としてはホオジロザメとおもわれるサメ歯が出土しているが、加工痕はなく古い時期の遺物とは考えられない。

E 区は計 25 点で、遺物別では沖縄産施釉陶器が 10 点ともっとも多い出土ではあるが、他は 5 点以下の出土量である。欠損はしているが、ワンブーと称される大型の鉢がほぼ一固体出土した。

全体の遺物の出土割合



A-1区遺物の出土割合



第Ⅲ-22 図 遺物出土割合

沖縄産施釉陶器

沖縄産施釉陶器の出土総数は 2453 点で、器種は碗、小碗、小杯、鉢、瓶、皿、壺、鍋、急須、酒器、徳利、火炉、火入、香炉、蓋などが得られている。

沖縄産施釉陶器の分類に関しては、施釉技法および釉色などは各器種に共通する大分類として扱い、細分類については器種ごとにそれぞれ行った。主な器種についてのみ以下に記す。以下に示す分類基準は『大山前門原第一遺跡』（2012 年）を基本としている。

施釉技法

I 類：灰釉（イ）・鉄釉（ロ）・黒釉（ハ）を単掛けするもの

II 類：内外面の釉葉を掛け分けるもので、①内面の白化粧がなされないものと、②内面の白化粧後に透明釉を掛けるものがある。

III 類：器面に白化粧し、透明釉を掛けるもの。

碗

碗の出土総数は 535 点で、これらの資料には口縁部が A 直口するもの、B 外反するものがあり、胴部が張らないもの（a）と張るもの（b）がある。

小碗

小碗の出土総数は 238 点で、小碗 I・II 類の細分類は碗の分類に準じており、口縁形態の A 直口するもの、B 外反するものがある。小碗 III 類の細分類も碗の分類に準じ、口縁形態に加え、器面の①面取りなし、②面取りありがある。

皿

皿の出土総数は 18 点で、大分類は I 類と III 類が得られている。口縁形態から A 直口するものと B 外反するものがある。

鉢

鉢の出土総数は 35 点で、I 類と II 類がある。『大山前門原第一遺跡』（2012 年）では口縁形態を A 逆 L 字、B 外反するもの、C 波形のもの、D 玉縁口縁の 4 つに分類されるが、今回の調査では A 逆 L 字のみがみられた。

その他の器種は I～III 類がみられるのが香炉で、I 類・III 類がみられるのは瓶・急須・酒器・火炉・火入・蓋である。I 類のみがみられるのは壺・鍋・徳利で、III 類のみみられるのは小杯である。

第三 - 7 表 沖縄産無釉陶器分類一覧 (宜野湾市教育委員会編 2009)

器種	分類		備考	
	記号	基準		
壺	I 類	口縁断面が逆L字状を呈す長頸のもの。	大 口径 20 cm 前後	
			中 口径 12 cm 前後 口径 9 cm 前後	
			小 口径 6 cm 前後	
	II 類	a	1 有頸で口縁断面玉縁状を呈し、直状に立ち上がるもの。	大 口径 21 cm 前後
			2 有頸で口縁断面玉縁状を呈し、外反するもの。	小 口径 15 cm 前後
		b	無頸で口縁断面玉縁状を呈すもの。	大 口径 17 cm 前後
				小 口径 13 cm 前後
				大 口径 16 cm 前後
				小 口径 12 cm 前後
	III 類	口縁断面が逆L字状を呈する短頸あるいは無頸のもの。		
IV 類	口縁が僅かに肥厚し (あるいは無肥厚)、外反するもの。口径は概ね10 cm 以内。	大 口径 7 cm 前後 小 口径 4 cm 前後		
甕	I 類	口縁が断面三角状を呈し、口縁部からすぐに胴部へと移行するもの。		
	II 類	口縁断面が逆L字状で、口縁上面の幅が広いもの。		
	III 類	口縁断面が方形状に肥厚するもの。	大 口径 32 ~ 35 cm 中 口径 26 ~ 30 cm 小 口径 21 ~ 25 cm	
播鉢	I 類	a 口縁断面が「く」の字状で、口縁直下に稜が施されるものうち、口縁がやや直状に角度を変えて立ち上がるもの。		
		b 口縁断面が「く」の字状で、口縁直下に稜が施されるものうち、口縁が外傾するもの。		
	II 類	I 類に比して、口縁断面が緩やかに「く」の字状をなすもの。		
	III 類	口縁断面が逆L字状で口唇の幅が狭いもの。櫛目の上端ラインが一様で整然と施される。		
IV 類	口縁断面が逆L字状で口唇の幅が広いもの。口唇部に圏線が廻る。	『嘉数トゥンヤマ遺跡』I の播鉢III類。		
鉢	I 類	a 口縁部が内彎し、外面に篋描きの波状線を描くもの。	ミジクブサー (水鉢)。	
		b 口縁部が内彎するもので、無文のもの。	ミジクブサー (水鉢)。	
	II 類	a 口縁部が内彎し、断面形が玉縁状を呈するもので有文のもの。	ミジクブサー (水鉢)。	
		b 口縁部が内彎し、断面形が玉縁状を呈するもので無文のもの。	ミジクブサー (水鉢)。	
	III 類	口縁断面が逆L字状を呈すもの。		
	IV 類	口唇を平坦に成形し、口縁両端が張り出すもの。	『嘉数トゥンヤマ遺跡』I の甕IV類。	
V 類	水鉢同様に、口縁が底部から開いて立ち上がるが、口縁は内彎しないもの。大型の浅鉢。			

第三 - 8 表 アカムヌー分類一覧 (宜野湾市教育委員会編 2009)

器種	属性	分類		備考			
		記号	基準				
鍋	蓋受け	I 類	滑り止めがないもの。				
					a 蓋受け部をヨコナデによって窪ませることで、滑り止めを作るもの。		
		II 類	b 蓋受け端部を成形することによって、ツメ (滑り止め) を作り出すもの。				
	大きさ	大	大 口径 26 cm 以上のもの。	撮径約 9 cm 以上、または底端部径約 23 cm 以上の鍋蓋が概ね対応。			
			中 口径 24 ~ 25 cm のもの。	撮径約 8 cm ~ 9 cm、または底端部径約 21 ~ 23 cm の鍋蓋が概ね対応。			
			中 口径 21 ~ 23 cm のもの。	撮径約 7 cm ~ 8 cm、または底端部径約 19 ~ 21 cm の鍋蓋が概ね対応。			
小 口径 19 ~ 20 cm のもの。			撮径約 6 cm ~ 7 cm、または底端部径約 18 ~ 19 cm の鍋蓋が概ね対応。				
小 口径 18 cm 以下のもの。	撮径約 6 cm 以下、または底端部径約 18 cm 以下の鍋蓋が概ね対応。						
鉢	口縁部	I 類	a 口縁部が内彎し、外面に篋描きの波状線を描くもの。	ミジクブサー (水鉢)。			
			b 口縁部が内彎するもので、無文のもの。	ミジクブサー (水鉢)。			
		II 類	内彎口縁で、口唇が平坦のもの。	ミジクブサー (水鉢)。『嘉数トゥンヤマ遺跡』I でII類として報告されている			
III 類	口縁断面が逆L字状を呈すもの。						
急須	頸部	I 類	無頸のもの。				
		II 類	有頸のもの。				
急須	口縁	a 類	蓋受けを作らないもの。				
			b 類		蓋受けをつくるもの。		
		I 類	急須 Ia 類		急須 II a 類 (長頸)	急須 II a 類 (短頸)	急須 II b 類
			急須 II a 類 (長頸)		急須 II a 類 (短頸)	急須 II b 類	
火炉	器形	I 類	器形球状で、胴部中央から口縁へ大きく内傾するもの。				
			a 胴部から「く」の字状に折れて口縁が内傾するもの。				
			b 胴部から「く」の字状に折れて口縁が内傾するもので、口縁に突帯が廻るもの。				
		c 胴部上位で「く」の字状に折れて口縁が直状に立上るもの。					
		II 類	円筒状の器形を呈すもの。				
III 類	浅鉢状になるもの。						
IV 類	上面観が馬蹄形を呈し、大型のもの。	火炉 II c 類 火炉 III 類 火炉 IV 類 火炉 V 類					

第三 - 9 表 A-1 区 出土遺物観察表 -1

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm)		観察事項	出土地点	
				口径	器高 底径			
第三 ・ 23 図 ・ 図版 III ・ 15	1	青磁	碗	胴部～底部	口径 器高 底径	— 4.25 4.30	全面施釉後、畳付けを釉剥ぎし見込みを蛇の目釉剥ぎする外面に線描きによる施文。外面にナデ痕が残る。焼成が悪い粗製品。	AS-058
	2	青磁	盤	底部	口径 器高 底径	— 1.7 —	内面に櫛描蓮弁文、見込みに印花文。外底部を釉剥ぎするとおもわれる。	AS-005の カクラン
	3	青磁	盤	底部	口径 器高 底径	— 2.1 11.2	内面は施釉し、釉垂はみられるので外面も施釉しているとおもわれるが、残存している底部から高台外面は無釉。	AS-006
	4	青花	碗 VII類	胴部～底部	口径 器高 底径	— 6.2 6.8	胴部が大きく張り出す。内面は2条の圏線と蕨手文を施す。外面は丸文と草花文、1条の圏線、高台外面に2条の圏線、外面底部に2条の圏線と字款？を施す。福建・広東系。	表土 北壁
	5	青花	碗	口縁部	口径 器高 底径	— 2.75 —	口縁端部が外反する。呉須による施文で外面に圏線と菊唐草文、内面に圏線を施す。外面の圏線の呉須が薄い。外面にナデ痕がわずかに残る。	表土
	6	青花	碗	口縁部	口径 器高 底径	— 3.35 —	口縁が直口。文様は呉須で、外面は1条の圏線と団花文、内面に2条の圏線を施す。内面の圏線は細いが線がしっかりしている。	北壁
	7	青花	小碗	胴部～底部	口径 器高 底径	— 4.0 1.8	厚い底部から腰折れする胴部とおもわれるが、屈曲は弱い。見込みを蛇の目釉剥ぎする。呉須で施文する。	旧表土
	8	青花	皿	口縁～底部	口径 器高 底径	14.4 3.6 8.4	太めの胴部に細めの高台が付く。口唇は丸味を持つ。外面は胴部に文様、腰部に圏線、高台に2条の圏線、外底部に圏線が確認できる。内面は文様と圏線が確認できる。	カクラン
	9	本土産磁器	碗	口縁～底部	口径 器高 底径	13.0 6.0 5.0	大きめの低い高台で、口縁が外反する。胴部下半は型成形による剣頭文。胴部上半に色絵で笹・梅花・松葉文と圏線を施すが、色が剥落している。全面施釉後、畳付けを釉剥ぎする。	旧表土
	10	本土産磁器	碗	口縁～底部	口径 器高 底径	13.4 6.3 4.6	型紙刷りによる文様で、外反の砥部産碗。全面施釉後に、畳付けを釉剥ぎする。見込みに五足のハマ痕が残る。外面は点描地で菱形窓に菊花文、腰に三角文を施す。内面は口縁に点描三角と梅花帯、見込みに松竹梅を施す。	旧表土
	11	本土産磁器	小碗	口縁～底部	口径 器高 底径	8.0 4.6 4.0	銅版転写の直口の小碗。瀬戸・美濃系。全面施釉後に畳付けを釉剥ぎする。外面に山水文、腰に2条の圏線、高台に圏線を施す。胴部に銘があるが破損しているため不明。	旧表土
	12	本土産磁器	小碗	口縁～底部	口径 器高 底径	9.0 5.0 4.2	低い高台に長めの胴部で、口縁が外反する。全面施釉後、内面口唇と畳付けを釉剥ぎするが、畳付けは部分的に釉が残る。	遺構検出
	13	本土産磁器	皿	口縁～底部	口径 器高 底径	11.2 1.83 6.4	銅版転写。瀬戸・美濃系。やや内湾気味の直口口縁で、胴部にちょこんとした高台が付く。全面施釉後、畳付けを釉剥ぎする。内面に点描地に桜花文を施す。口鏝。	北壁トレンチ
	14	本土産磁器	鬚盥	口縁～底部	口径 器高 底径	— 4.5 —	楕円形のベタ底の底部に直線的にのびる胴部で、口縁が内湾して端部を平らに成形する。全面施釉後、底部を釉剥ぎする。色絵で草花文を施文する。	表土 旧耕作土
図 第 版 III ・ 24 16 図	15	沖縄産施釉陶器	碗 I類イAa	口縁～底部	口径 器高 底径	13.8 6.9 7.4	低い高台に段をつけて胴部が付く。やや外側に開く胴部で直口縁の口唇は丸味を持つ。フィガキー（浸し掛け）で灰釉を胴部に施し、高台まではおよばない。見込みや畳付けに重ね焼の痕跡はみられない。生焼けて摩滅している箇所がみられる。	旧表土

第Ⅲ-10表 A-1区 出土遺物観察表-2

挿図番号 図版番号	種類・器種	部位	法量 (cm)	観察事項	出土地点
第Ⅲ、 24図・ 図版Ⅲ、 16	16	沖縄産施釉陶器 碗 Ⅰ類ⅠA a	口縁～底部 口径 器高 底径 12.8 6.5 6.0	口縁直口で腰は張らず直線的な胴部にしっかりした高台が付く。外面底部はヘラケズリ調整で、真ん中がやや盛り上がる。フィガキー（浸し掛け）で胴部まで灰釉を施す。見込みにアルミナ痕が明瞭に残る。焼成は良好で硬い。	AS-071
	17	沖縄産施釉陶器 碗 Ⅱ類口②b	胴部～底部 口径 器高 底径 — 3.75 6.8	真っ直ぐのびる高台にやや段をつけて腰が張る胴部。外面は鉄釉を施し、底部までおよぶ。畳付けは釉剥ぎし、アルミナが付着する。内面は白化粧を施し、透明釉を施文する。見込みは蛇の目釉剥ぎで、透明釉のみ釉剥ぎする。アルミナ痕が残る。	旧耕作土
	18	沖縄産施釉陶器 碗 Ⅲ類B b有	口縁～底部 口径 器高 底径 13.4 6.6 5.6	口縁は外反する。腰が張り、丸みを帯びて立ち上がる胴部に太めの高台が付く。全面に白化粧後、透明釉を掛ける。畳付けを釉剥ぎする。そこにアルミナがべったりと付着する。見込みは透明釉のみを蛇の目釉剥ぎする。見込みにもアルミナが付着する。外面には点花文を3ヶ所に施す。	耕作土
	20	沖縄産施釉陶器 鉢 Ⅰ類口	胴部～底部 口径 器高 底径 — 7.7 8.4	丸味をおびる胴部に太めの高台が付く。内面から胴部外面に鉄釉を施す。高台内面にも鉄釉がみられるが、施釉か露胎かは不明。畳付けにアルミナが付着する。焼成はやや不良。	旧表土
	22	沖縄産施釉陶器 皿 Ⅰ類ⅠB有	口縁～底部 口径 器高 底径 19.5 5.8 9.0	口縁が外反し、なだらかな胴部にしっかりした高台が付く。ヘラケズリ調整で、胴部と高台、高台と外面底部との間に段がつく。フィガキー（浸し掛け）で胴部まで灰釉を掛ける。見込み、畳付けにアルミナはみられない。内面の口縁と胴部下半に鉄釉で圏線を廻す。内面中央にも鉄釉で丸文を施すが、他は不明。焼成は良好で硬い。	旧耕作土
	21	沖縄産施釉陶器 皿 Ⅲ類B有	口縁～底部 口径 器高 底径 18.4 5.1 8.4	口縁が外反し、ややふくらむ胴部に太めの高台が付く。全面を白化粧後、透明釉を掛ける。畳付けは釉剥ぎ後に、アルミナを塗る。見込みは透明釉のみを蛇の目釉剥ぎする。見込みにアルミナがきれいに残存する。内面中央部に呉須で円文、その周りに2条の圏線を施す。見込みの外側に2条の圏線、口唇にも圏線を廻す。胴部内面にも文様を施すが、意匠は不明。	重機掘削中
	23	沖縄産施釉陶器 瓶 Ⅰ類口	胴部～底部 口径 器高 底径 — 4.3 6.2	斜めに立ち上がる胴部に成形がしっかりした底部がつく。胴部内面にナデ調整が残る。胴部外面に鉄釉を掛け、高台に露胎する。外面底部にも鉄釉を施す。畳付けにアルミナが付着する。焼成は良好。	耕作土 a
	24	沖縄産施釉陶器 香炉 Ⅱ類口②	口縁～胴部 口径 器高 底径 10.6 5.3 —	小型の香炉。口縁は逆L字で、頸部は直立し、胴部は強く張る。内面は白化粧で、外面は鉄釉を施す。外面はさらに濃い緑釉を重ね施す。	表土
	25	沖縄産施釉陶器 酒 Ⅰ類口	口縁～胴部 口径 器高 底径 2.3 5.9 —	玉縁の口縁にやや長めの頸部で丸味のある胴部がつくとおもわれる。外面に鉄釉を掛け、頸部内面に露胎する。内面につよいナデ痕が残る。焼成は良好。	旧表土
	26	沖縄産施釉陶器 蓋 Ⅲ類	体部～笠部 口径 器高 底径 4.8 1.4 —	急須の蓋。水平の笠に長めのかえりがつく。撮みは欠損していて、不明。丁寧な成形で、全体に白化粧を施し上面に緑釉を掛ける。笠に圏線を入れるが、施釉で不明瞭。	旧耕作土
27	沖縄産施釉陶器 火入 Ⅰ類口	胴部～底部 口径 器高 底径 — 8.6 11.2	ドラム缶状の胴部に高台がつくが、欠損のため高台の形状は不明。外面は幅約20cmの強いナデにより両側を隆起させる。隆起した部分に圏線を廻す。内面はナデ調整が明瞭に残り、内底面をヘラケズリする。胴部外面に鉄釉を掛け、高台まではおよばないとおもわれる。	AS-020	
図第Ⅲ、 Ⅲ、 25 17図	28	沖縄産施釉陶器 火入 Ⅲ類	胴部～底部 口径 器高 底径 — 4.7 —	胴部外面は白化粧し、透明釉を掛ける。高台から外底面、胴部内面は白化粧を施す。胴部と高台の間は釉剥ぎされ、器面を露出する。	表土

第Ⅲ-11表 A-I区 出土遺物観察表-3

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm)		観察事項	出土地点	
第Ⅲ・ 25図 図版Ⅲ・ 17	29	沖縄産施釉陶器	鍋 I類口	口縁 器高 底径	17.2 6.45 —	口縁は胴部から「く」の字に屈曲しやや内湾する。口縁の外側にヒモ状の取っ手を貼り付ける。胴部は丸く張り出し、内面のナデ調整が明瞭に残る。胴部外面から内面にかけて鉄釉を掛ける。口縁内側は丁寧に釉剥ぎする。	AS-013	
	30	沖縄産施釉陶器	壺 I類イ	口縁 器高 底径	12.8 6.0 —	小型の壺。逆L字状の口縁で、短い頸部から丸味をおびる胴部。外面頸部から肩部にかけてのナデ調整以外は不明瞭。外面から内面にかけて鉄釉を掛ける。雑な施釉で薄い部分がみられる。	AS-005の カクラン	
	31	沖縄産無釉陶器	壺 I類	口縁～胴部	口径 器高 底径	16.9 8.8 —	逆L字状の口縁で頸部からなだらかに胴部が張る。頸部と胴部の境に3?条の凹線を廻す。内外面をナデ調整するが不明瞭。	AS-071
	32	沖縄産無釉陶器	壺	胴部	口径 器高 底径	— 20.4 —	太い頸部からあまり張らない胴部。頸部から胴部に横棒が弓なりに長い漢字の十と一の窯印をへら描きで入れる。窯印の下に圏線を2条廻す。内面はナデ調整が明瞭に残る。破断面に巻貝痕がみられる。	旧耕作土
	33	沖縄産無釉陶器	甕 III類	口縁～頸部	口径 器高 底径	32.7 9.4 —	断面縦長の方形状に肥厚した口縁から太めの頸部がのびる。方形状の口縁の下半に2条の圏線、頸部に5条の圏線を廻す。内面はナデ調整が残る。	重機掘削中
	34	沖縄産無釉陶器	鉢 II a類	口縁部	口径 器高 底径	— 3.35 —	丸味をおびる太めの胴部から内湾した口縁を玉縁状にして端が外面に突出する。口唇部はナデ調整により丸味を持つ。胴部は欠損しているが、外面にクシ描き波状文が確認できる。内面はナデ調整が残る。	旧耕作土
	35	沖縄産無釉陶器	鉢 III類	口縁～胴部	口径 器高 底径	57.4 11.6 —	大型の鉢。やや斜めに立ち上がる胴部から逆L字状にのびて舌状を呈する口縁。口唇部に圏線が1条廻る。内面の口縁曲部に突帯を貼り付ける。突帯上にナデ調整による凹線文状のくぼみが廻る。外面頸部にナデ調整により段をつける。胴部にクシ描き波状文+3条の沈線文を施すが不明瞭。内外面ともにナデ調整で不明瞭だが、内外面の頸部部分のナデ調整は明瞭。	旧耕作土
第Ⅲ・ 26図 図版Ⅲ・ 18	36	沖縄産無釉陶器	鉢 IV類	口縁～胴部	口径 器高 底径	— 9.25 —	やや直線状の胴部から口唇を平坦に成形し、口縁両端が張り出す口縁。口唇部に凹線が1条廻る。口縁部に2条の凹線と少し間を空けて貼り付け突帯が1条廻る。内外面をナデ調整で、内面は外面に比べて調整がやや明瞭に残る。	AS-005 検出面
	37	沖縄産無釉陶器	鉢 IV類	口縁～胴部	口径 器高 底径	— 6.9 —	直線状の胴部から口唇を内外に肥厚し、口縁断面がラップ状を呈する。口唇部を強いナデによりわずかにへこむ。口縁に2条の沈線と6条のクシ描き波状文と突帯が1条廻る。内外面にナデ調整で、内面は明瞭に残る。	AS-020
	38	沖縄産無釉陶器	播鉢 I a類	口縁～胴部	口径 器高 底径	— 4.6 —	斜めにのびる胴部から口縁が直状に立ち上がる。口唇は平坦で、口縁は丸味をもって、屈曲する。この下位はヨコナデによって凹線を施すため、屈曲部と間に突帯状の稜線が成形される。口縁の一部をへこませて片口を造る。内面屈曲部から播目が施されているがナデ調整により消されている。内外面にナデ調整。	重機掘削中
	39	沖縄産無釉陶器	播鉢 IV類	口縁～胴部	口径 器高 底径	— 7.4 —	やや斜めに立ち上がる胴部から逆L字状にのびる口縁で、口唇部に2条の沈線が廻る。ナデ調整により口端が下に突出する。また、内面の口縁屈曲部もナデ調整により突帯状に張り出す。内面の突帯部から播目を施すがナデ調整により消され、突帯下約2.2cmから播目がみられる。内外面をナデ調整。	AS-005 検出面
	40	沖縄産無釉陶器	播鉢	胴部～底部	口径 器高 底径	— 3.9 12.0	外側にひらく器形で、ベタ底の底部。ヘラケズリの調整で、底部を平坦にする。外面はナデ調整と底部付近をヘラケズリ調整をする。内面に幅狭の9目の播目で密に施される。	耕作土 a
	41	沖縄産無釉陶器	火入	口縁～底部	口径 器高 底径	11.0 7.0 6.0	やや上げ底の底部から斜めに立ち上がり屈曲して直状にのびる胴部。口唇は内傾して、ナデ調整により内側にわずかに突出する。内外面をナデ調整で、底部は無調整。底部付近の外面はヘラケズリを行う。全体的に焼成は良好だが、一部生焼けがみられる。	AS-018

第Ⅲ-12表 A-1区 出土遺物観察表-4

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm)		観察事項	出土地点	
第Ⅲ・26図・図版Ⅲ・18	42	沖縄産無釉陶器	火炉	口縁部	口径 器高 底径	18.4 2.6 —	内傾にのびて、口唇部はナデ調整によりわずかにへこむ。また、内面のナデ調整により口唇部が内側にやや張り出す。口縁部に2孔確認でき、共に外側から内側に穿孔される。内外面をナデ調整。アカムヌーの火炉Ⅱa類に相当する器形。	重機掘削中
	43	沖縄産無釉陶器	火炉	口縁部	口径 器高 底径	— 2.4 —	やや内傾した胴部からわずかに両端を突出させた口縁で口唇部がやや内傾する。外面の突出下部分に刻み目を施すが、摩滅のため不明瞭。刻み目の下位に突帯が2条廻る。外面にナデ調整で、内面は強いナデにより弱い段がつく。内アカムヌー火炉Ⅱb類に相当する器形を呈する。口唇部から内面にかけてスス付着。	北壁
	44	沖縄産無釉陶器	碗	口縁部	口径 器高 底径	12.6 1.8 —	ややひらく胴部から、口唇が丸味をもつ。碗とおもわれるが、破片のため全体像は不明。焼成は良好。	重機掘削中
	45	アカムヌー	鍋蓋	撮み～体部	撮径 器高 口径	6.2 2.05 —	回転ヘラ成形とナデ調整。畳付けの雑な調整と高台から横にのびる胴部から皿の可能性はあるが、内底面の雑な調整から蓋とした。撮みの内側はヘラケズリにより低い円錐状になる。内外面にスス付着。焼成は良好。	北壁
	46	アカムヌー	火炉?	胴部～底部	口径 器高 底径	— 3.1 9.6	方形状のしっかりした高台からひらく胴部で、底部の厚さは薄め。外面の調整により胴部と高台の境に突帯状の稜線を成形する。内外面をナデ調整、高台から外底面をヘラケズリをおこなう。焼成はやや不良。	重機掘削中
	47	アカムヌー	鍋Ⅰ類	口縁部	口径 器高 底径	— 2.5 —	胴部からくの字状に屈曲する厚めの口縁で、内面のナデ調整により断面が舌状を呈する。把手はやや下向きで口縁につけられる。内外面、ナデ調整。内外面にスス付着。	表土
	48	アカムヌー	鉢Ⅰa類	口縁部	口径 器高 底径	— 2.5 —	内湾する口縁で、外面がやや肥厚し断面が舌状を呈する。口縁に5条のクシ描波状文を施し、波状文の上部をけすように圏線を廻す。内外面をナデ調整。	礫だまり
	49	アカムヌー	火炉	胴部～底部	口径 器高 底径	— 5.45 14.7	隅丸台形状の高台から丸味をおびる胴部。内外面をナデ調整で、内底面は強いナデにより、弱い段がつく。高台から底面はヘラケズリ。焼成は不良で、器面が摩滅している。スス付着。	AS-013
	50	アカムヌー	火炉Ⅴ類	口縁部	長軸 短軸 厚さ	7.8 5.2 2.0~1.2	上面観が馬蹄形の火炉で、方形状の部位。胴部から逆L字に屈曲して厚めの口縁がのびる。全体的にナデ調整で、上面と端を丁寧な調整を行う。口唇から内面にかけてススが付着する。焼成は良好。	礫だまり
第Ⅲ・27図・図版Ⅲ・19	51	アカムヌー	火炉Ⅴ類	胴部～底部	長軸 器高 厚さ	7.4 7.5 0.7~2.2	馬蹄形の火炉で、方形状の部位とおもわれるが、口縁が逆L字状にのびず、上方で閉じる。方形状の胴部に縦に潰したような饅頭形の高台が付く。畳付けはユビナデで簡単な調整をおこなう。胴部は板ナデやナデ調整をおこない、胴部外面は丁寧な調整がみられる。外面、高台周辺にスス付着。	耕作土
	52	陶質土器	植木鉢	口縁～底部	口径 器高 底径	12.85 10.5 7.8	小型の植木鉢。やや上方に開く胴部に、幅広の肥厚した口縁。胴部と底部に境はなく、底部中央に約2cmの穿孔で、畳付け3ヶ所にえぐりを入れる。内面はヨコナデ調整で、口縁から胴部にかけて4つほどの単位がみられる。内底面に径3cmのケズリがみられるが、途中でやめたとおもわれる。	旧表土
	53	瓦質土器	火炉	口縁部	口径 器高 底径	14.5 2.3 —	胴部からくの字状に外反した短い口縁で、外面が玉縁状に肥厚し、内面がやや内湾する。内面頸部に上をむく受け口がつくとおもわれる。外面頸部の下に穿孔が一つ確認できる。内外面をヨコナデ調整する。受け部はナデで、接合部をけす。焼成はやや不良。	確認トレンチ2

第三 -13 表 A-1 区 出土遺物観察表 -5

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm)		観察事項	出土地点	
第三、 27 図・ 図版 III、 19	54	円盤状製品	青花製	胴部	長軸 短軸 厚さ	3.4 3.0 0.5	重量6.9g。外面に菊花文。内面から大きな剥離調整を行い、2ヶ所のみ外面から剥離調整を行う。1ヶ所のみ細かい剥離調整がみられる。	AS-005の カクラン
	55	円盤状製品	瓦	—	長軸 短軸 厚さ	3.6 3.45 1.1	重量17.8g。明朝系赤瓦の転用。内外面からの剥離調整。研磨により方向や順序は不明だが、剥離面を残したままの雑な研磨。内外面は丁寧な研磨で、瓦の布目をやや残してはいるがほぼ平らに研磨している。	重機掘削中
	56	円盤状製品	沖繩無釉 陶器製	—	長軸 短軸 厚さ	4.35 4.35 1.3	重量31.9g。沖無の胴部を転用したもの。内外面からほぼ交互に剥離を行い、やや円形に成形する。外面から細かい剥離調整を行う。外面に沈線がみられるが胴部に対して縦に入れられているため、文様かは不明。	清掃中
	57	円盤状製品	瓦	—	長軸 短軸 厚さ	4.45 4.3 1.2	重量30.9g。明朝系赤瓦の転用。剥離調整が行われたおも呈する。内外面を研磨するが、一部に研磨されていない箇所があり、特に内面の布目痕は意図的に残しているとおもわれる。	北壁
	58	円盤状製品	沖繩施釉 陶器製	—	長軸 短軸 厚さ	8.0 7.75 2.2	重量は106.3g。沖施の碗の底部を転用したもの。胴部除去のため外面から内側にむかって打割して、大きめな剥離が全周する。角を取るための細かい剥離調整がみられ、ほぼ円形の形状となる。	重機掘削中
	19	円盤状製品	沖繩施釉 陶器製	—	長軸 短軸 厚さ	4.3 3.7 2.1	重量は24.2g。胴部が残存具合からⅢ類の面取り小碗とおもわれたが、剥離面の数から円盤状製品とした。全体の約2/3を欠損していて、ほぼ交互に内外面から剥離調整を行う。角が残り、略円形と想定される。	表土
	59	円盤状製品	沖繩無釉 陶器製	—	長軸 短軸 厚さ	7.8 7.2 1.0	重量は59g。文様の施文法から壺の肩部を加工したものとおもわれる。全体の約1/3を欠損していて、外面からの打割が多くほぼ円形の形状をなす。外面からの細かい剥離調整により整形されている。	北壁
第三、 28 図・ 図版 III、 20	60	煙管	雁首 青銅製	—	火皿径 長さ 小口径	0.95 5.0 0.85	重量は6.0g。屈曲した首のない脂反しに変形した火皿がつく。短い脂反しからやや肩が張り小口にのびる。首部の横に接合部分が脂反しから小口までみられる。ソケット上部に敲打痕があり、羅字を接合させたいにつけられたものと想定される。	耕作土
	61	煙管	吸口 青銅製	—	小口径 長さ 口付径	0.65 3.2 0.55	重量は1.8g。小型の吸口。小口からのびて、半分ほどから細くなり、口付でややふくらむ。小口から口付にかけて接合部分がみられる。内部に布片が残存しており、フィルターの役割か。	攪乱
	62	簪	押差 青銅製	—	長軸 短軸 厚さ	10.9 6.5 0.3	重量は5.2g。男性用の副簪。耳掻き状のカブとおもわれるが、先端が欠損している。頸はカブから段々細くなり、断面は六角形となる。茎はやや平たく加工され、先は剣先状になる。頸と茎の境でL字状に屈曲する。竿に2ヶ所の亀裂がみられ、さらに折り曲げようとしていたことが想定される。使用時のものかは不明。	表土
	63	銭貨	寛永通寶	—	直径 方孔幅 厚さ	2.38 0.64 0.1	重量は2.3g。新寛永通寶のマ通字の銭貨。背面は無文である。「永」の字の一部が欠損している。銭文は細く明瞭だが、「寛」の上部がやや潰れている。銭厚が薄いわりには、輪や郭ともに凹凸がある。	礫だまり
	64	銭貨	無文銭	—	直径 方孔幅 厚さ	1.65 0.8 0.1	重量0.5g。小型で薄い銭貨。角径が大きく、全径の約1/2となる。縁に鑄造時のバリを除去しきれずに残っている。	礫だまり
65	銭貨	一銭	—	直径 厚さ 重量(g)	2.29 0.13 3.2	昭和二年銘の桐一銭青銅貨。全体的に青錆で覆われており、文字が不明瞭。外縁も一部欠損がみられる。	旧表土	

第Ⅲ-14表 A-1区 出土遺物観察表-6

挿図番号 図版番号		種類・器種		部位	法量 (cm)		観察事項	出土地点	
第Ⅲ 28 図版Ⅲ 20	66	石製品	敲石	—	長軸 短軸 厚さ	9.8 6.3 2.5	重量は207g。石材は輝緑岩。平面観は楕円形。背面と側面と上部を破損する。上部の破損は他の面と違って磨耗が少ないことから、後世のものとおもわれる。当初は主に敲石と使用して、一部を磨石に使用する。背面を破損後に上面の頂部でくぼみ石と使用されるが、使用頻度は低いとおもわれる。多機能に使用される石器。近世でも古い時期のものとして想定される。	北壁トレンチ	
	第Ⅲ 29 図版Ⅲ 21	67	ガラス製品	瓶 薬品 (コバルト)	口縁～底部	口径 器高 底幅	1.1 5.1 1.3	玉縁口縁に下部にむかってやや太くなる頸部で、なで肩で隅丸長方形の胴部に薄い高台がつく。胴部に「横山製薬」と「イボコロリ」のエンボス。口縁から胴部にかけて鑄型線がみられる。大きめの気泡がみられる。口縁の一部を欠損する。	重機掘削中
		68	ガラス製品	瓶 薬品 (無色)	口縁～底部	口径 器高 底径	1.3 5.4 2.0	口縁がやや内湾して、外面に肥厚する。口唇を平坦にすく。胴部がなで肩の円柱状で、上げ底の底部。胴部中央に鑄型線がみられるが、頸部にはなく別々のつくりで接合されたものと想定される。大きめの気泡がみられる。	南壁トレンチ
		69	ガラス製品	瓶 化粧瓶 (白色)	口縁～底部	口径 器高 底径	3.6 6.6 4.3	ネジ栓の口縁で、口唇を研磨する。胴部は10角柱状で、上げ底の底部。口縁から胴部にかけて鑄型線がみられる。	表土
		70	ガラス製品	瓶 化粧瓶 (白色)	口縁～底部	口径 器高 底径	2.8 4.8 2.4	ネジ栓の口縁は胴部から内側に屈曲して、やや外反して立ち上がる。頸部に高めの突帯を廻す。いかり肩の胴部に低い高台がつく。いかり肩を波状に施文する。口縁内面と突帯上面にバリが残る。胴部から底部にかけて鑄型線がみられる。突帯から口縁にかけて鑄型線がみられないので、別つくりで接合したものと想定される。	AS-072
		71	ガラス製品	ステム (白熱電球)	—	長軸 短軸 径	5.6 1.5～1.2 1.2～0.3	白熱電球の一部で、ステムと呼ばれている部品。	旧耕作土
72	歯ブラシ	セルロイド製	—	長軸 短軸 厚さ	14.6 1.2 0.6	重量は9.7g。ブラシ部はのびて舌状を呈して内湾する。ブラシ部に4列の植毛穴で、中央が21穴の2列、両サイドに20穴の1列ずつで、計82穴である。整然と配列されているが、右側の列は外側により過ぎたため、側面に亀裂が入る。柄に○印の中に「山」のマークとその下に「百貨店製」の不明瞭の刻印。柄尻に孔。頸が折り曲げられ、横に亀裂が入る。	AS-020の ベルト		
73	スプーン	ステンレス製	—	長軸 短軸 厚さ	10.3 3.4 0.15	重量は17g。卵状のさじから頸がしまり、さじの約2倍の長さのある平たい柄で柄尻が内湾する。柄表面に「Morinaga Drymilk」の文字、裏面に「森永奶粉粉乳約三. 〇g」のプレス文字。柄側面にバリが残る。頸を中心にVの字に折れ曲がる。	表土		

第Ⅲ-15表 A-2区 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量(cm)		観察事項	出土地点	
第Ⅲ・30図・図版Ⅲ・22	74	本土産磁器	碗	口縁～底部	口径 器高 底径	9.8 4.8 3.2	胴部がややふくらむ直口縁で、断面が舌状を呈する。胴部の割りに小さい底部。外面に色絵による楼閣の文様を施すが、色が剥落して輪郭のみが残存する。高台端部を釉剥ぎして、重ね焼きの際の付着防止のための砂が付着する。	表土
	75	本土産磁器	小碗	口縁～胴部	口径 器高 底径	7.8 4.0 —	「へ」の字状に曲げた胴部からの直口縁でわずかに開く。底部を欠損する。口縁部下に緑の2重圏線を施す。国民食器。瀬戸・美濃系。	表土
	76	本土産磁器	小碗	胴部～底部	口径 器高 底径	— 3.4 3.4	太めの胴部で、底部は胴部の半分ほどの厚さしかない。外面に草花文?を施し、高台内外面に圏線を廻す。	表土
	77	本土産磁器	小杯	口縁～胴部	口径 器高 底径	5.2 2.35 —	胴部から口縁に厚さが薄くなり、やや外反する。外面に連続円文と口縁下に2条の圏線を施す。	確認トレンチ3
	78	本土産磁器	急須?	底部	口径 器高 底径	— 1.2 9.0	鑄込み成型。内外面を施釉し、外面豊付けから底面を釉剥ぎする。	旧表土
第Ⅲ・30図	79	ガラス製品	ランプ笠	上部開口部片	口径 器高 底径	7.4 3.0 —	上部開口部から屈曲して、丸味のある胴部。外面に横位の筋が入る。	AS-002 北壁トレンチ 掘削中

第Ⅲ-16表 C-1区 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm/g)		観察事項	出土地点	
第Ⅲ・31図・図版Ⅲ・23	80	本土産磁器	皿	口縁～底部	口径 器高 底径	12.6 2.7 7.3	銅版転写(青色)。口鏽。花文。瀬戸・美濃系。	北西側拡張部 表土
	81	沖縄産施釉陶器	小碗 Ⅲ類②	胴部～底部	口径 器高 底径	— 2.75 3.8	胴部は1.5cm幅の面取りされる。全面に厚めの白化粧と透明釉を施す。見込みを釉剥ぎする。高台と見込みにアルミナ痕。	CS-001
	82	沖縄産無釉陶器	播鉢	底部	口径 器高 底径	— 4.0 10.0	底部からやや開いた外傾した胴部。底部は粗めの調整。体部外面はナデ調整でナデ痕が残る。約1.5cm幅の播目を施す。甘めの焼成。	CS-001
	83	アカムヌー	鍋 Ⅰ類	口縁部	口径 器高 底径	19.4 2.4 —	ナデ調整で、口縁端部が丸みを帯びる。角度のきつめの頸部で胴部は欠損。	CS-001
	84	アカムヌー	火炉 Ⅰ類	口縁部	口径 器高 底径	— 4.6 —	やや内傾した口縁に受け部を貼付けする。胴部外面はヨコナデ調整。受け部の先端がやや上に外反するとおもわれるが、欠損していて確認できない。スス付着。	北西側拡張部 表土
	85	円盤状製品	沖無製 播鉢	胴部	長さ 幅 厚さ	2.30 2.25 1.0	重量は5.5g。小型の製品。播鉢の胴部を転用したもの。内側から打ち欠いて成形。1辺のみを研磨する。形はややいびつ。	CS-001
	86	ガラス製品	薬瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	1.95 6.65 3.65	ネジ栓の口縁に、肩が張るものなので肩で長方形の胴部で、浅いあげ底の底部。胴部下半に「NAKAJIMA SEIROGAN」のエンボス。	清掃中
	87	ガラス製品	薬瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	0.8 4.9 1.5	ネジ栓の口縁に頸部がすばまり、円筒状の胴部に、低い高台を成形する。口唇部が一部欠損する。	清掃中
	88	青銅製品	髪飾り?	—	長さ 幅 厚さ	16.8 4.6 1.12	重量は7.0g。平らな長い棒の中心でねじりの加工を施す。文様は一面のみで巴文と4条の横線を施す。両端が欠損する。	CS-001

第Ⅲ-17表 C-2区 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm/g)		観察事項	出土地点	
第Ⅲ、 32図・ 図版Ⅲ、 24	89	沖縄産施釉陶器	火炉	口縁部	口径 器高 底径	— 4.0 —	やや直立気味に立ち上がり、口唇を平坦にする。口縁直下に2条の圈線が廻る。口縁内部に先端が欠損しているものの、上向きの受け部を貼付する。外面と内面の受け部までを鉄釉で施釉する。口唇は釉剥ぎし、アルミナが付着する。	北壁トレンチ
	90	明朝系赤瓦	丸瓦	筒部	長さ 幅 厚さ	15.9 9.6 1.7	焼成やや不良。内面に布目・紐痕が明瞭にみられる。外面はナデ調整が丁寧におこなわれ、にぶい稜線がみられる。	清掃中
	91	ガラス製品	化粧瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	2.5 2.7 3.0	ネジ栓の口縁に口縁より約1cm大きい短い円筒状の胴部。底部はやや細り、上げ底に加工する。底部に「m」と「2」のエンボス。	北壁トレンチ
	92	ガラス製品	薬品瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	1.25 6.5 1.8	ネジ栓の口縁。頸部は口縁より太く1条圈線が廻る。やや長い長方形の胴部の上下に3条の圈線が廻る。底部はやや上げ底。底部に「ABBOTT」「14? 目のようなマーク3」「9を横にしたもの。LAB」の3段のエンボス。米国製か?	拡張部 北壁トレンチ
	93	ガラス製品	薬品瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	1.6 3.9 2.0	ネジ栓の口縁で、頸部に一条の突帯が廻る。口縁よりわずかに大きく短い円筒状の胴部。上げ底の底部で、縦に接合線が残る。	拡張部 北壁トレンチ
	94	銭貨	ベトナム銭 1DONG	—	直径 厚さ 重量	22.52 1.28 3.88	1面には人物像と「VIET-NAM」「CONG-HOA」、もう1面には竹林文と「1DONG」「1960」の銭文。	重機掘削

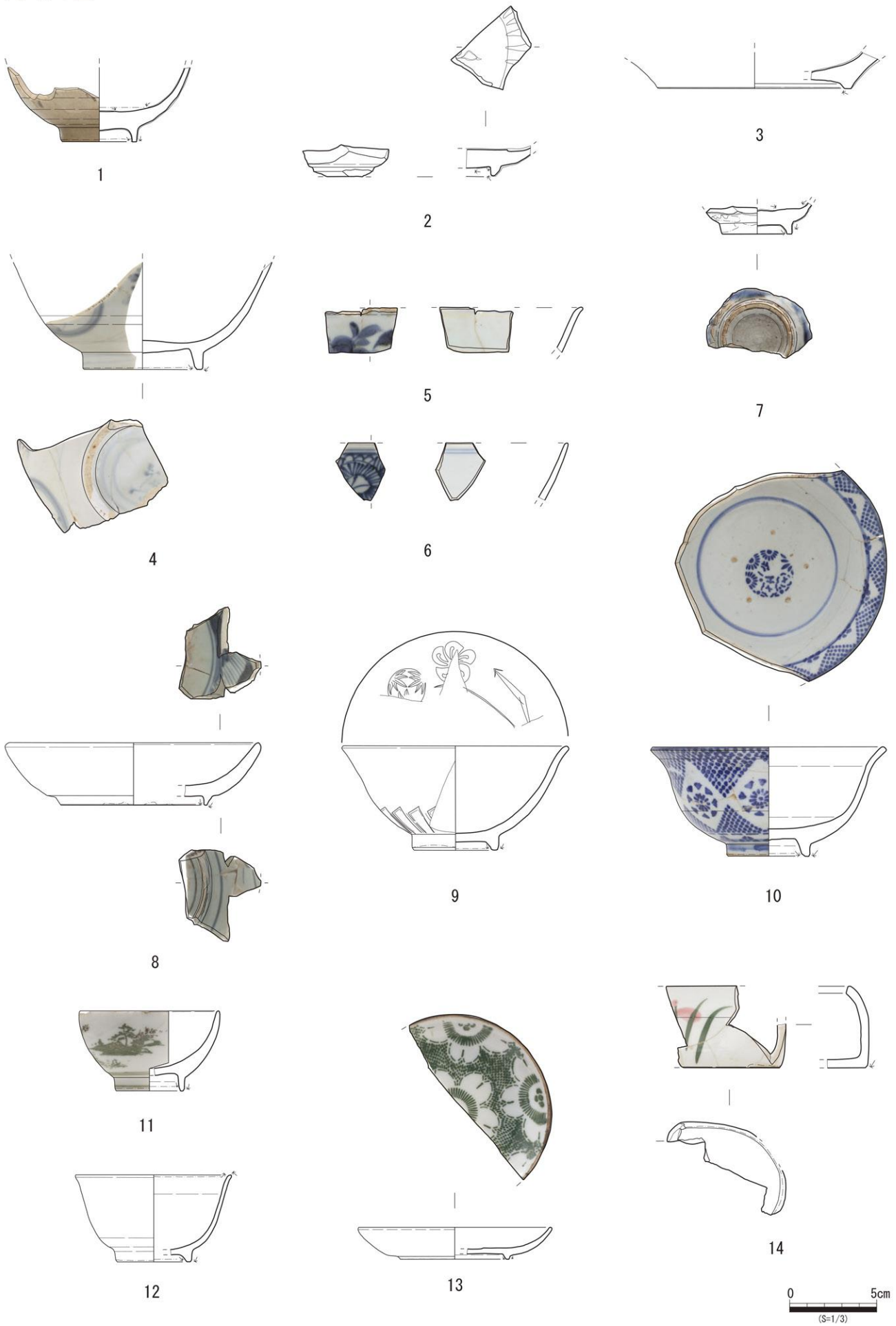
第Ⅲ-18表 C-3区 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm/g)		観察事項	出土地点	
第Ⅲ、 33図・ 図版Ⅲ、 25	95	アカムヌー	鉢	胴部～底部	口径 器高 底径	— 2.45 —	膨らむ胴部に低い平坦の底部を成形する。底部に糸切り痕を確認。ナデ調整。	南壁トレンチ
	96	海生哺乳類	サメ	歯	長さ 幅 厚さ	4.45 3.7 0.8	出土層から古代のものではなく、現生のサメ歯とおもわれる。ホオジロザメの歯か。	カクラン

第Ⅲ-19表 E区 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm/g)		観察事項	出土地点	
第Ⅲ、 34図・ 図版Ⅲ、 26	97	本土産磁器	小碗	口縁～底部	口径 器高 底径	8.2 4.15 3.4	クロム青磁。膨らむ胴部から立ち上がる口縁で口縁端部が舌状になる。胴部外面に飛び鉋有り。やや開く高台で内面をヘラケズリ。瀬戸・美濃産。	表土
	98	沖縄産施釉陶器	碗 I類イA	口縁部	口径 器高 底径	14.2 3.3 —	灰釉碗。フィガキー(浸し掛け)。胴部より外側に開く口縁で、ナデ調整によりやや外反気味。	表土
	99	沖縄産施釉陶器	碗 II類ロ②b	胴部～底部	口径 器高 底径	— 3.9 6.2	鉄釉の碗。腰の張りがやや弱めの胴部で、外面はナデ調整痕が残る。内面は白化粧後に、透明釉を施す。見込みは蛇の目釉剥ぎし、細かい釉剥ぎ痕が残る。所々にアルミナ痕が付着する。	表土
	100	沖縄産施釉陶器	鉢 II類ロ②A	口縁～底部	口径 器高 底径	24.3 11.65 8.6	ワンブーと呼ばれる、大型の鉢。やや胴部が張り開く形状で、口縁が逆L字で下方に向く。外面から高台内面まで鉄釉を施し、高台端部を釉剥ぎする。口縁端部から内面は白化粧後に、透明釉を施す。	攪乱

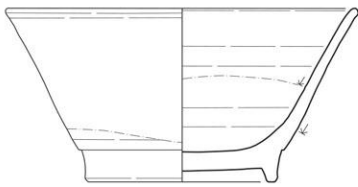
1. A区
 (1) A-1区



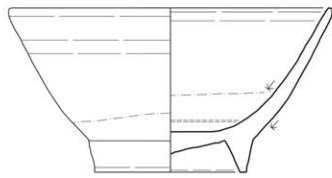
第Ⅲ-23图 A-1区 出土遺物-1



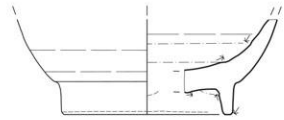
图版 III-15 A-1 区 出土遺物 -1



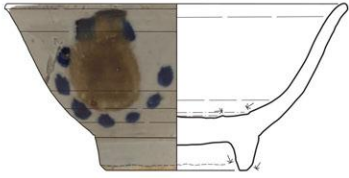
15



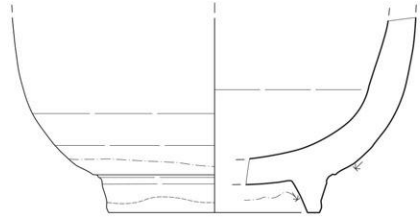
16



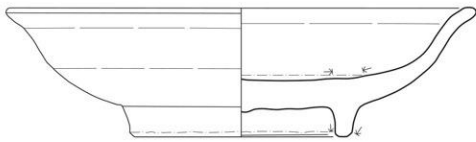
17



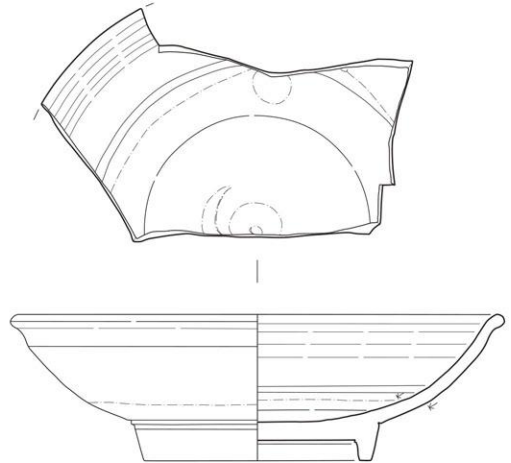
18



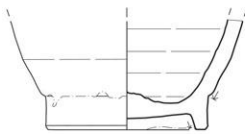
20



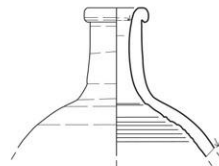
21



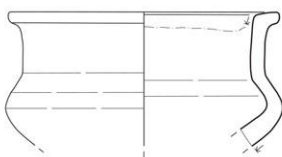
22



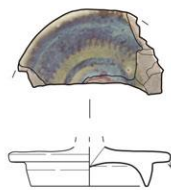
23



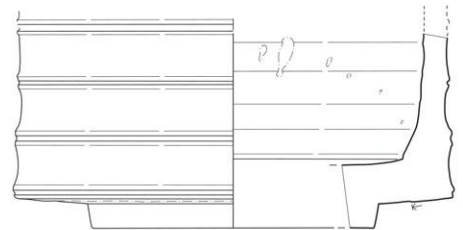
25



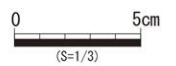
24



26



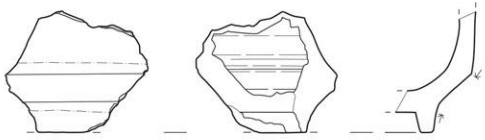
27



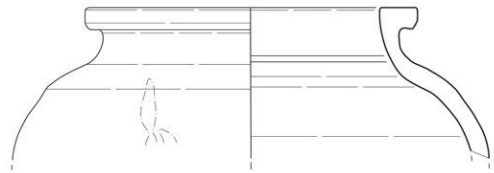
第Ⅲ-24図 A-1区 出土遺物-2



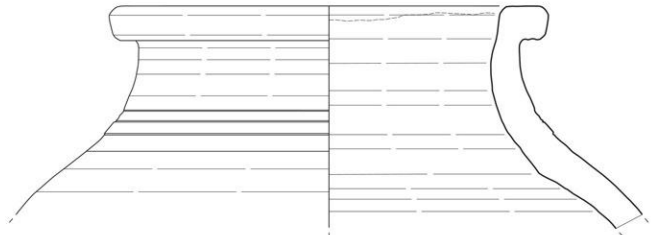
图版 III -16 A-1 区 出土遺物 -2



28



30



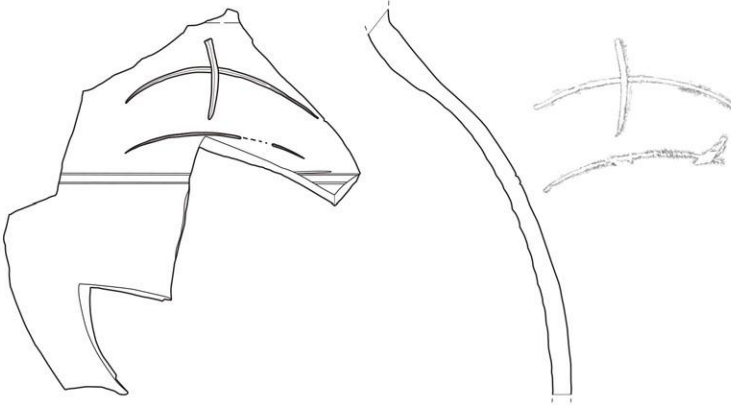
31



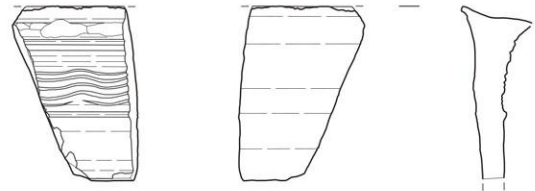
29



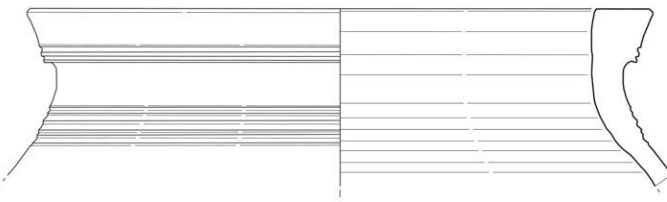
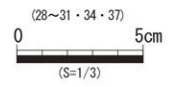
34



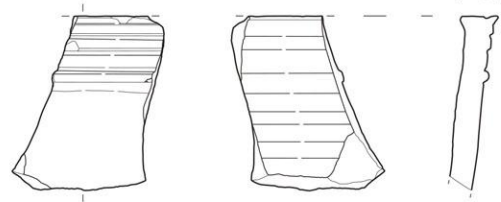
32



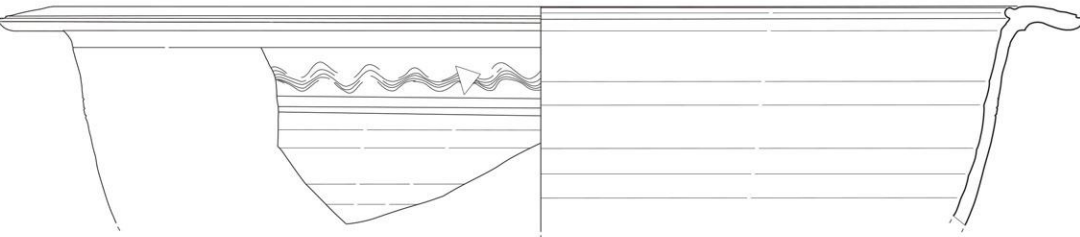
37



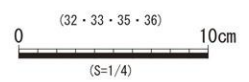
33



36



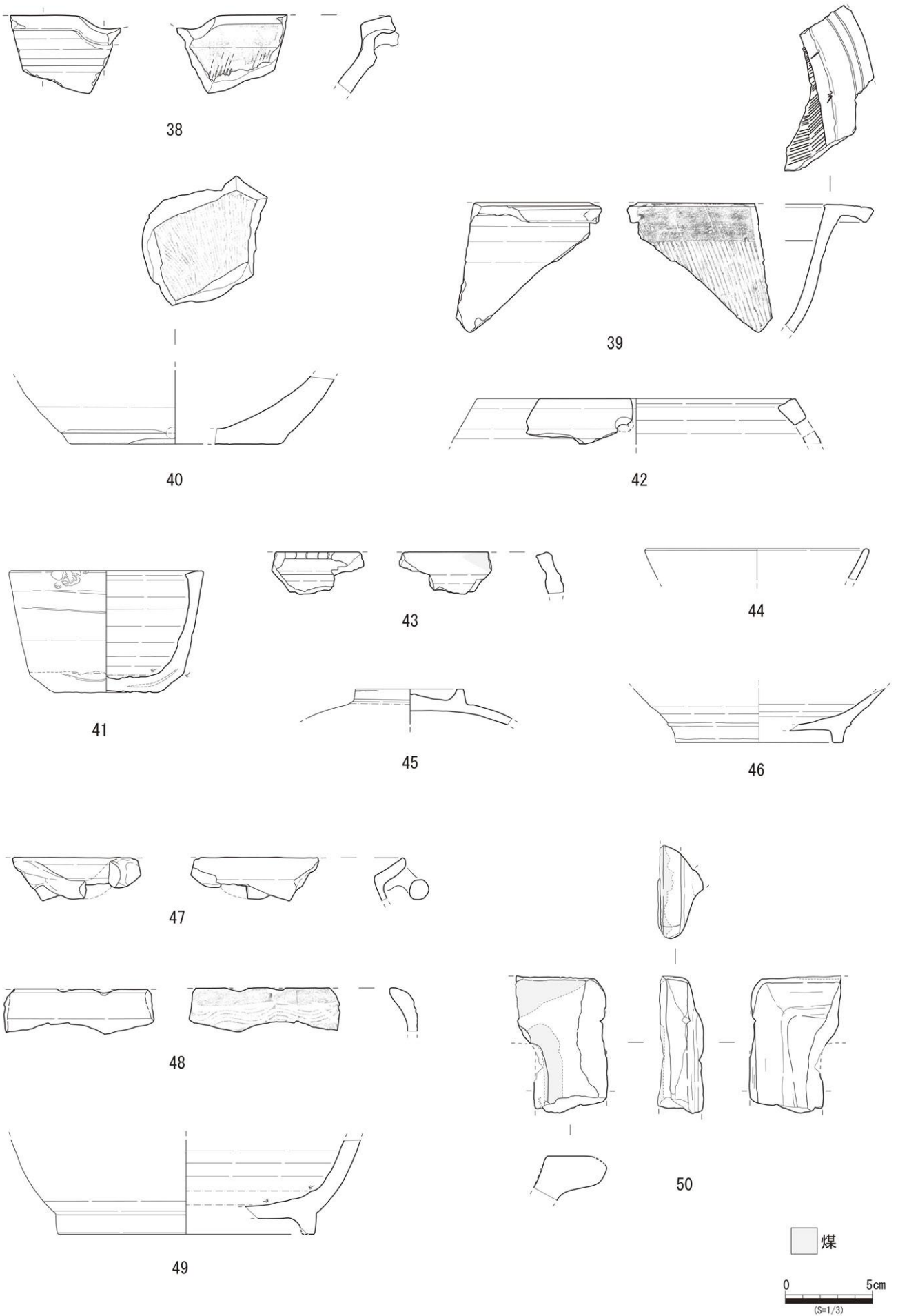
35



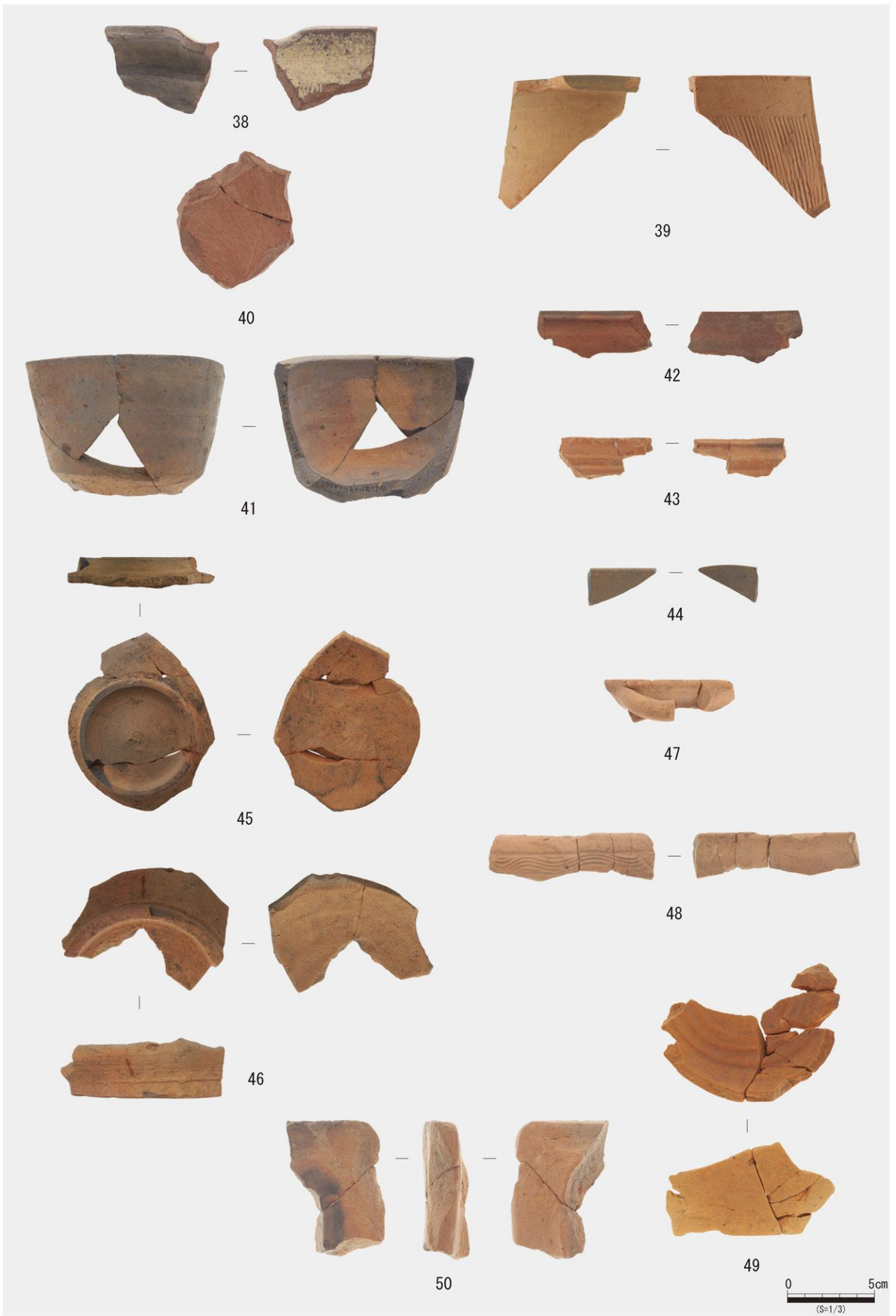
第Ⅲ-25图 A-1区 出土遺物-3



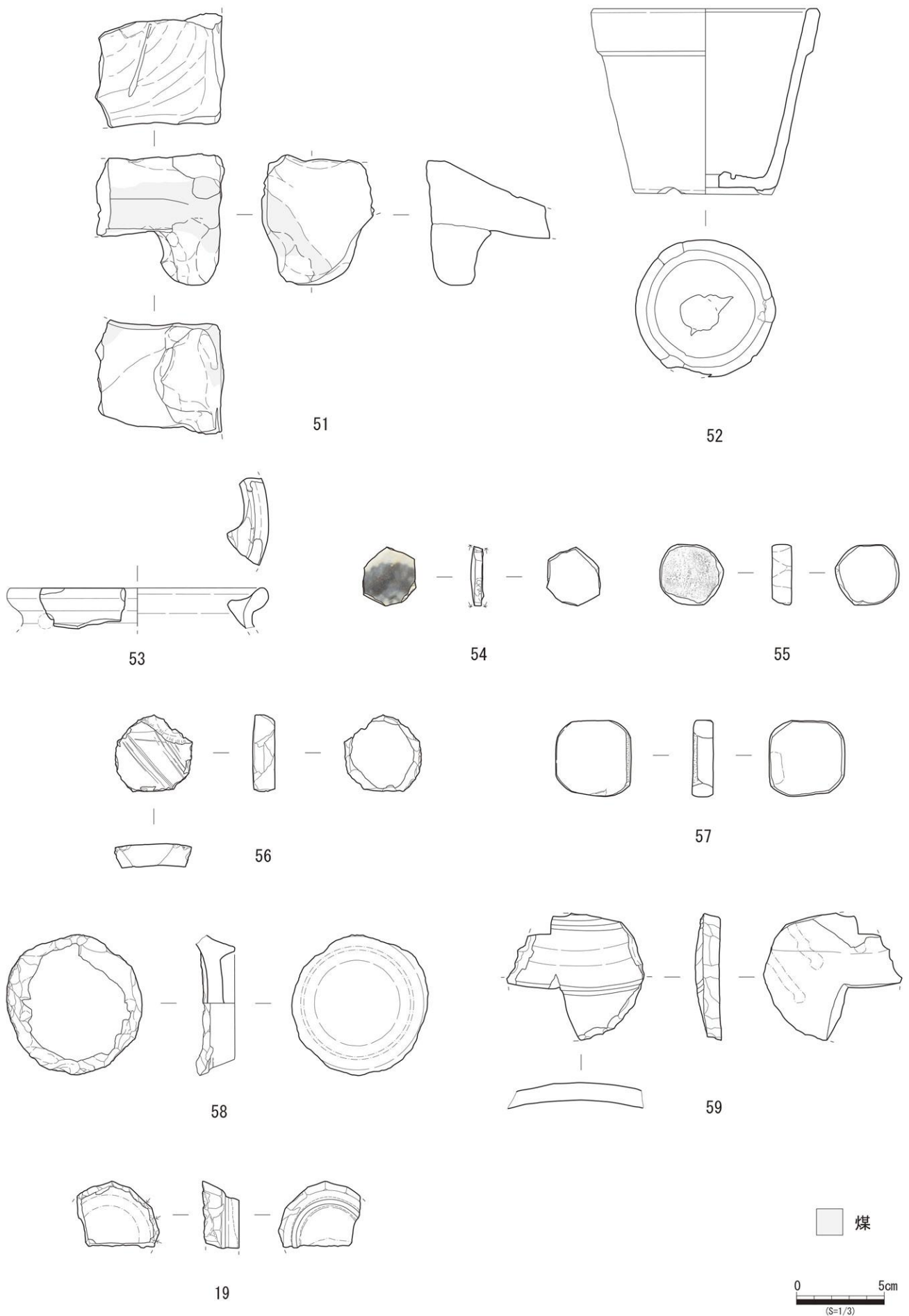
图版Ⅲ-17 A-1区 出土遺物-3



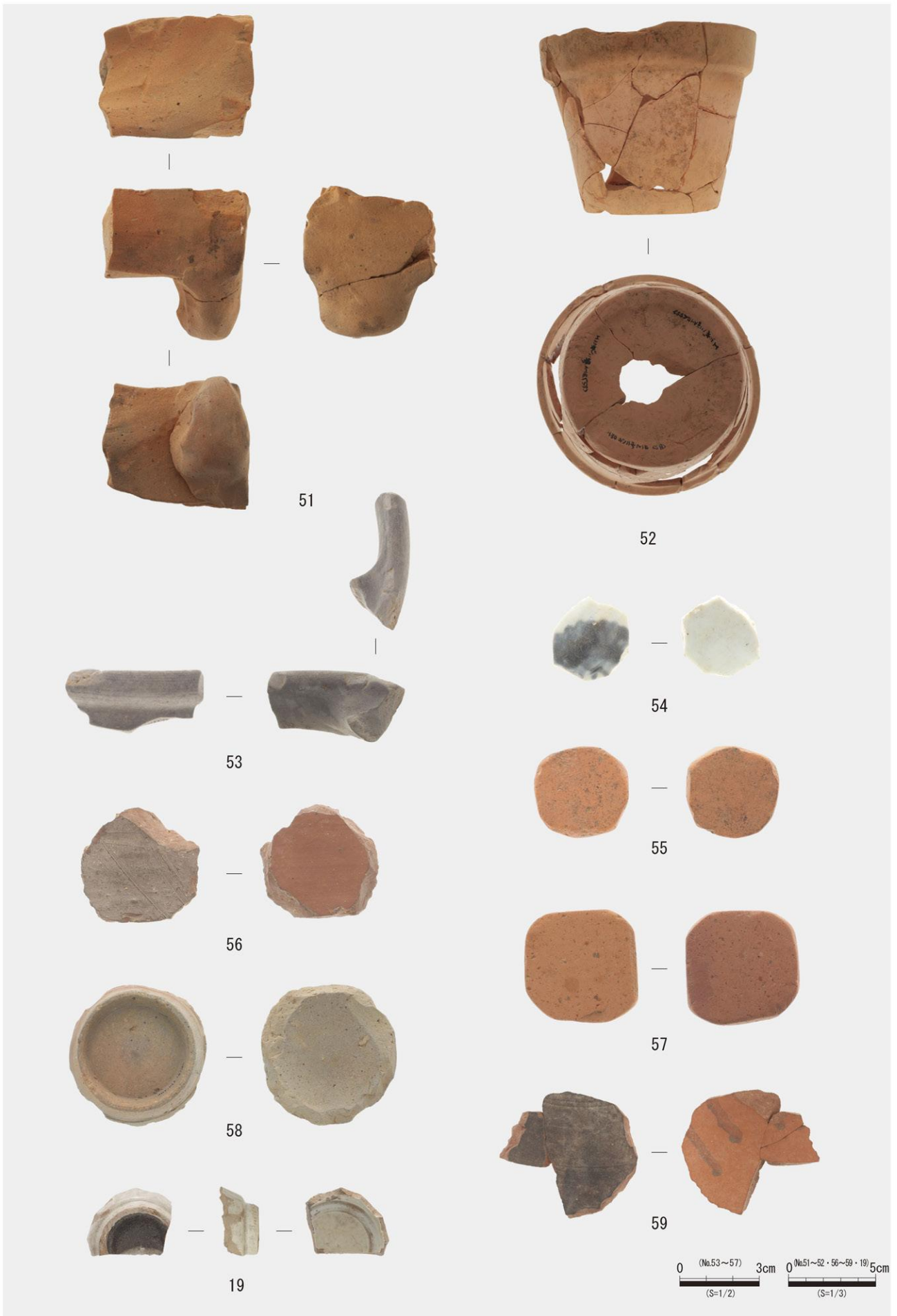
第Ⅲ-26 図 A-1 区 出土遺物-4



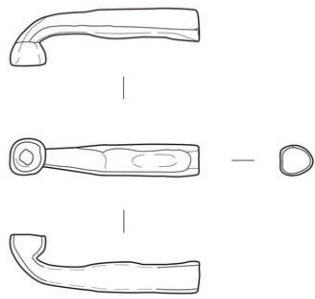
图版Ⅲ-18 A-1区 出土遺物-4



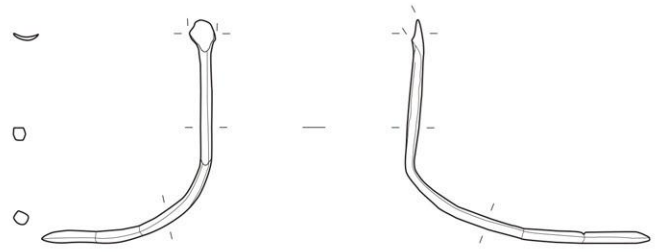
第Ⅲ-27图 A-1区 出土遺物-5



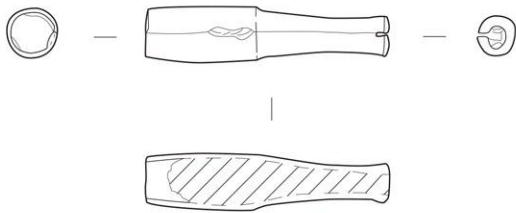
图版Ⅲ-19 A-1区 出土遺物-5



60



62



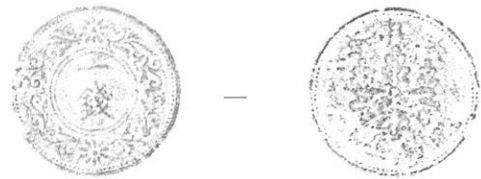
61



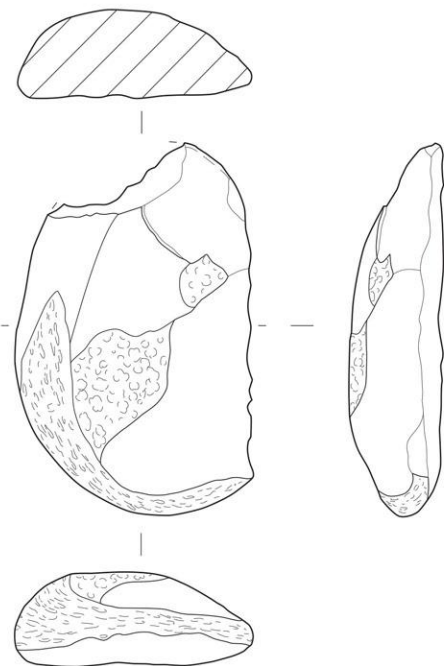
63



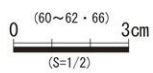
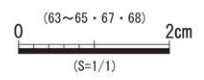
64



65



66





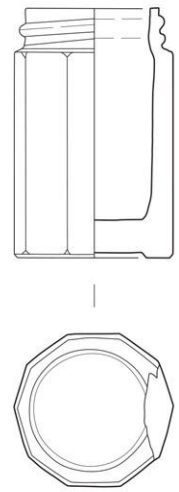
图版Ⅲ -20 A-1 区 出土遺物 -6



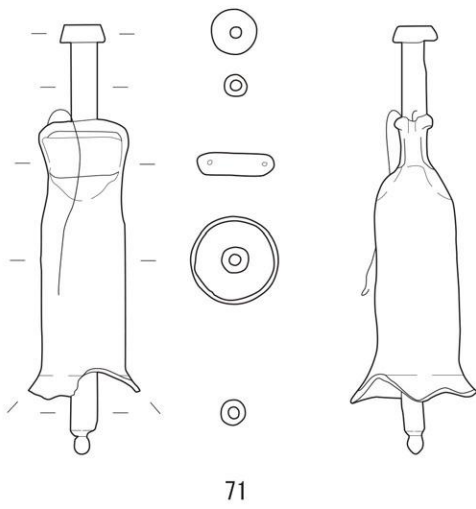
67



68



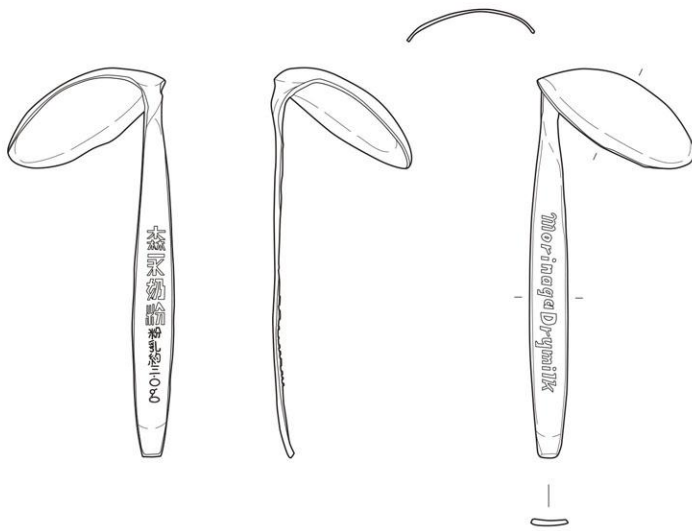
69



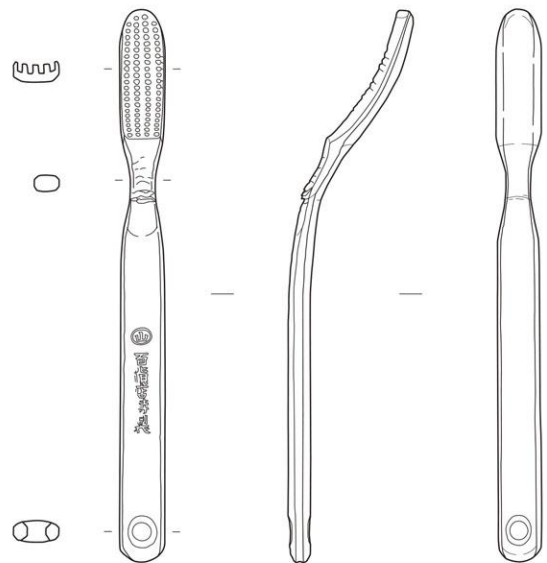
71



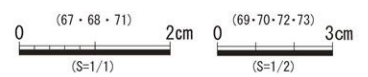
70



73



72

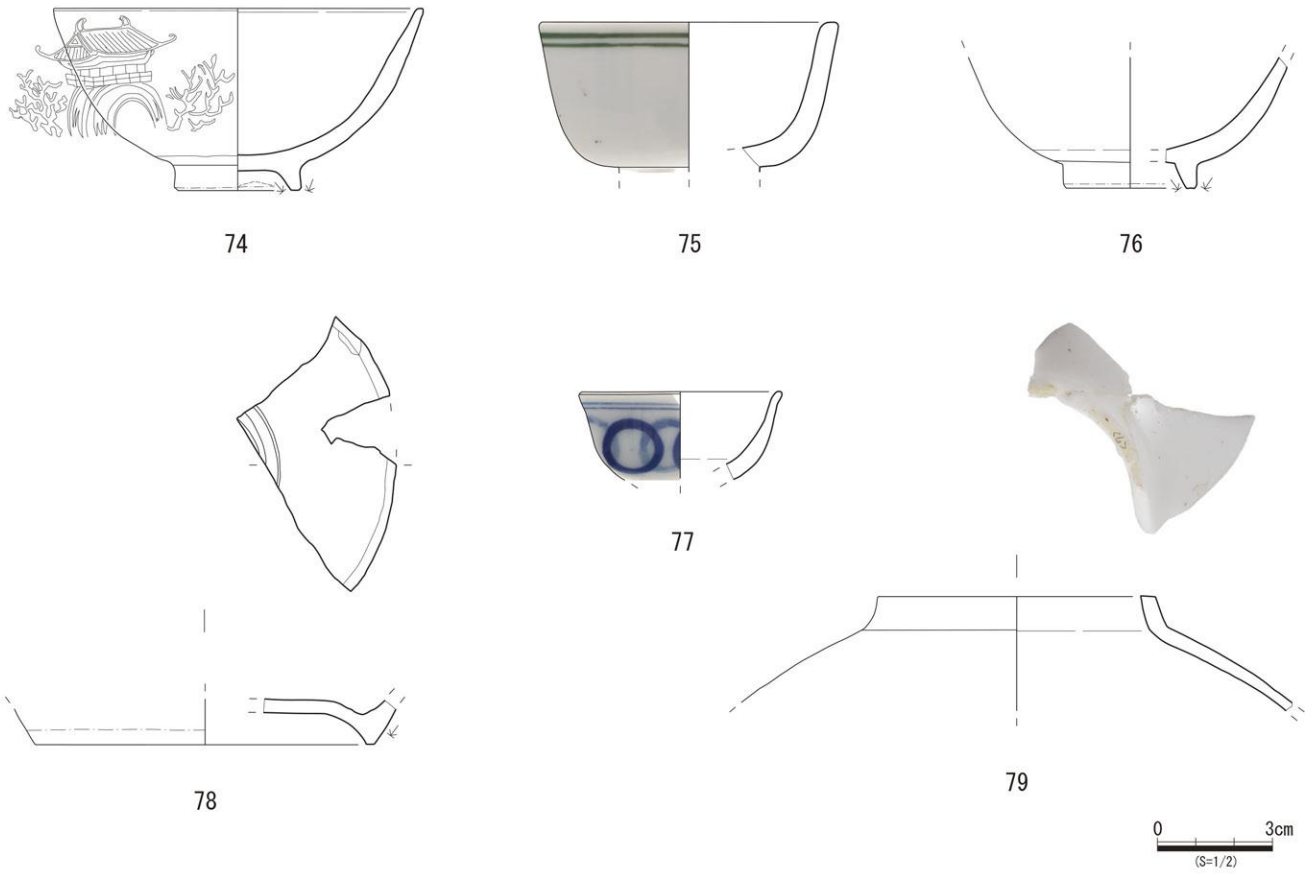


第Ⅲ-29図 A-1区 出土遺物-7



图版Ⅲ -21 A-1 区 出土遺物 -7

(2) A-2 区

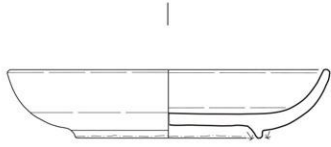


第Ⅲ-30 图 A-2 区 出土遺物

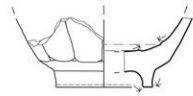


图版Ⅲ-22 A-2 区 出土遺物

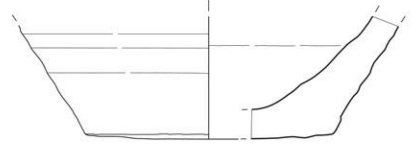
2. C区
 (1) C-1区



80



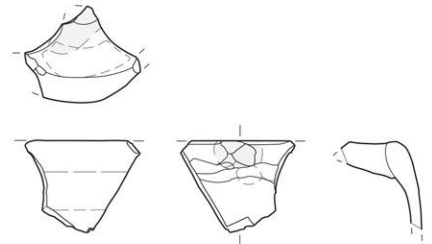
81



82

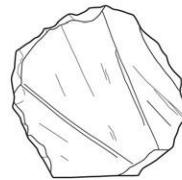


83

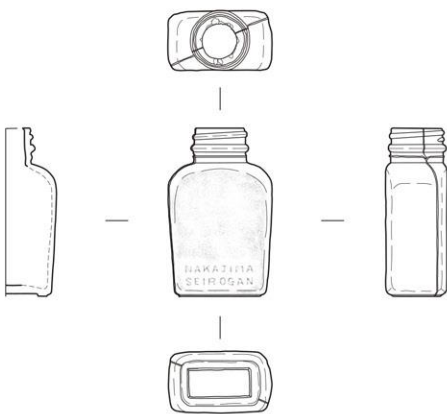


84

■ 煤



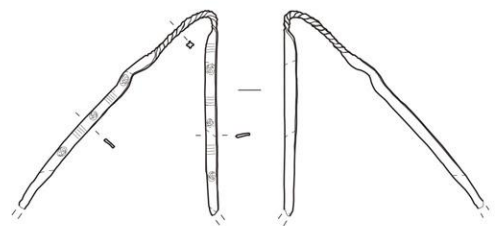
85



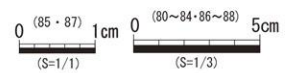
86



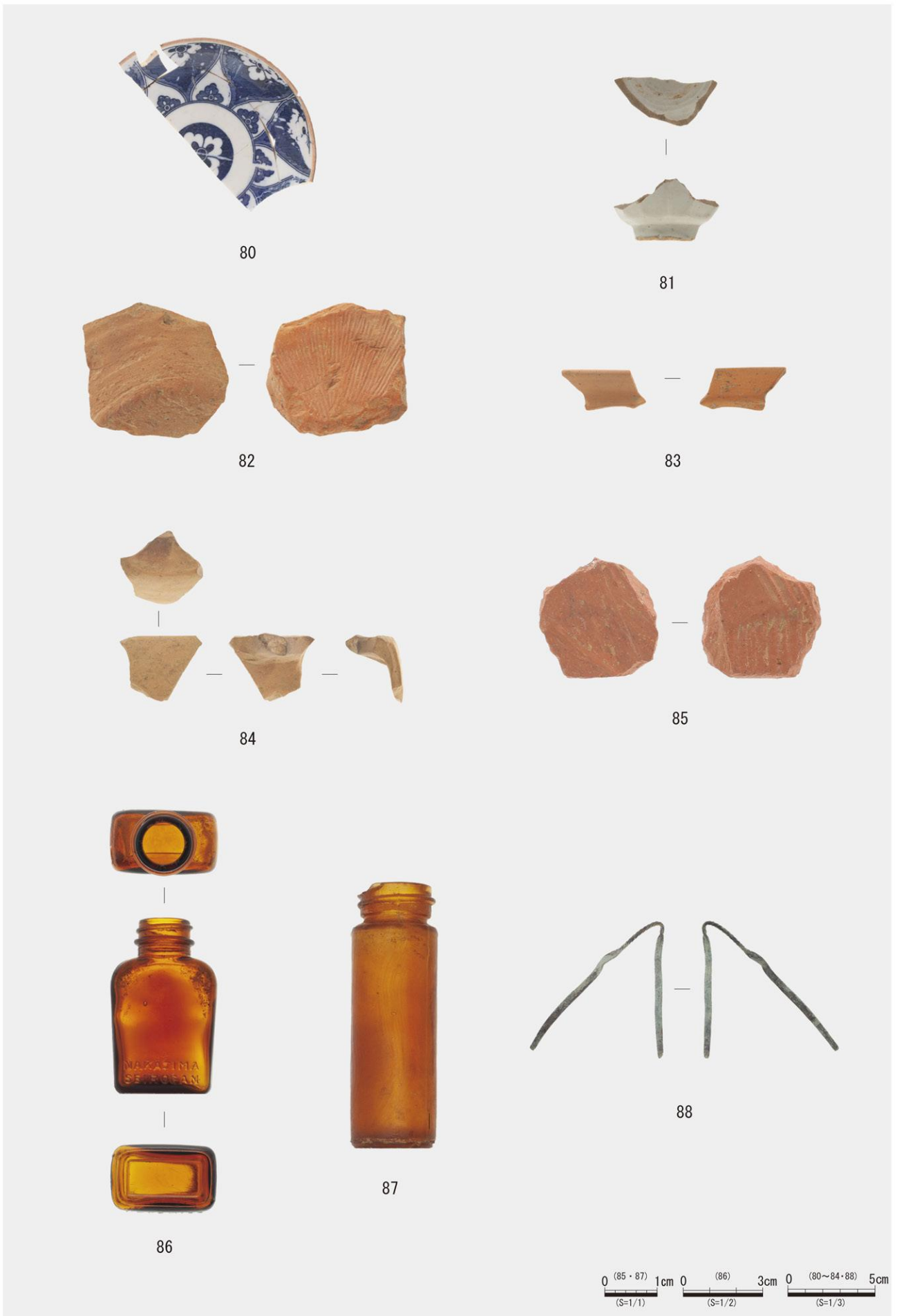
87



88

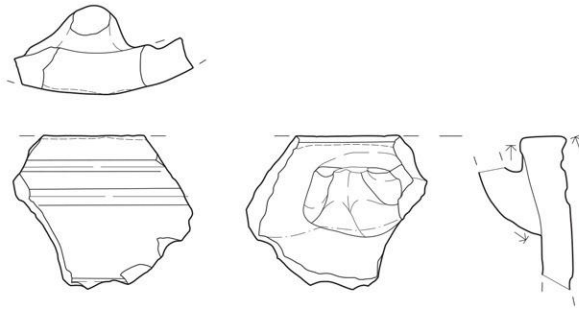


第Ⅲ-31图 C-1区 出土遺物

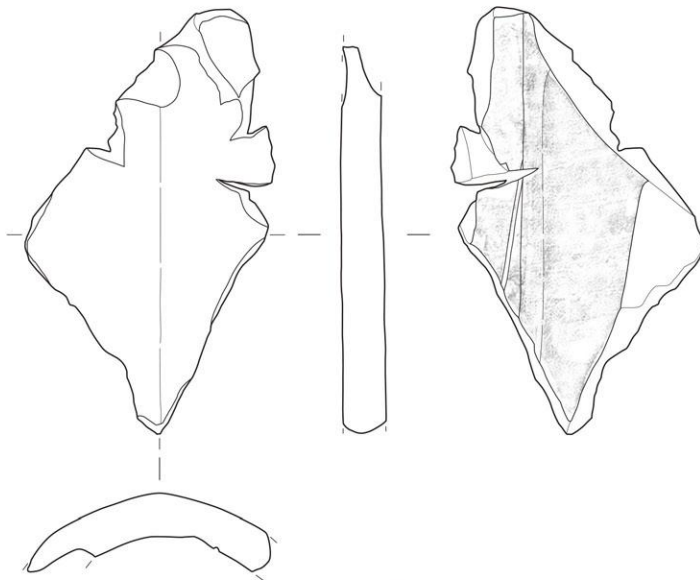


图版Ⅲ-23 C-1区出土遺物

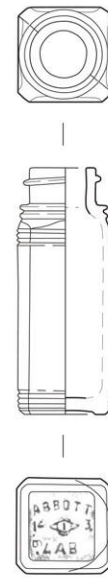
(2) C-2区



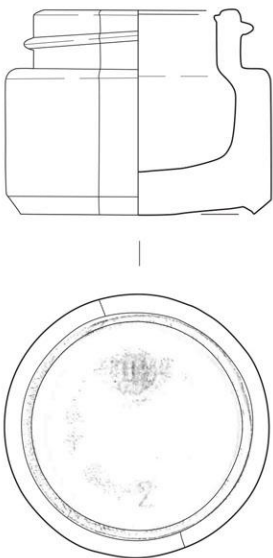
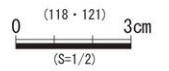
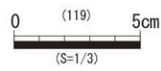
89



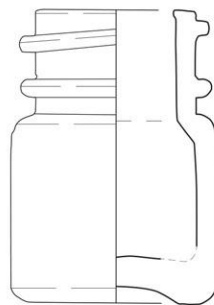
90



92



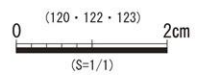
91



93



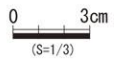
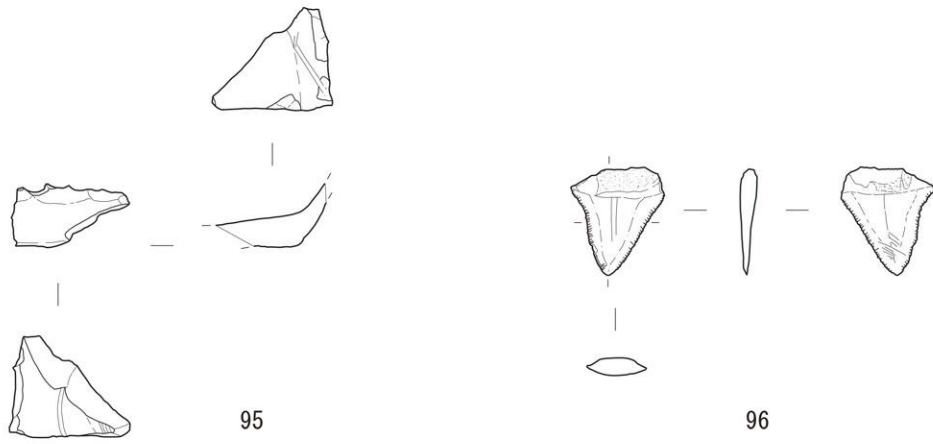
94





图版Ⅲ-24 C-2区 出土遗物

(3) C-3 区

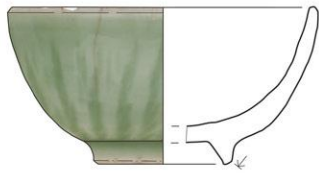


第Ⅲ-33图 C-3区 出土遺物

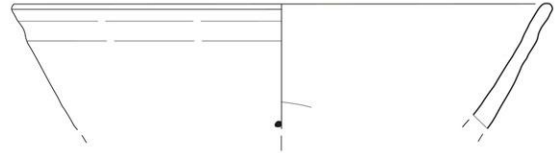


图版Ⅲ-25 C-3区 出土遺物

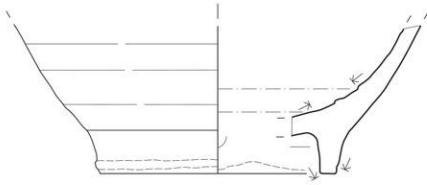
3. E区



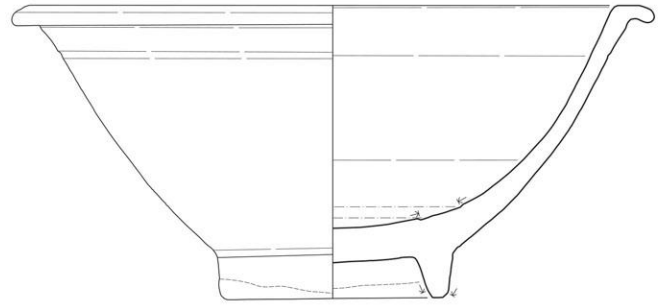
97



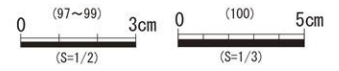
98



99



100



第Ⅲ-34图 E区 出土遺物



图版Ⅲ-26 E区 出土遺物

第IV章 宜野湾シリガーラ流域古墓群（B区）の調査成果

第1節 調査概要

宜野湾シリガーラ流域古墓群は字宜野湾と神山にまたがる遺跡で、シリガーラと呼ばれる小川の左右にある石灰岩丘陵崖面に所在する古墓群である。現在一部は滑走路下となっており、全体を窺うことはできないが平成16（2004）年度には分布調査がなされており、122基の古墓が確認されている。

69号墓は平成16（2004）年度に行われた分布調査で確認された亀甲墓で、宜野湾シリガーラ流域古墓群の中心から大きく東側にそれた場所に所在する。現在では69号墓が遺跡の中心からそれているように見えるが、地籍上の墓は古墓群の中心から69号墓まで連続しているため、周辺古墓は基地造成で破壊された可能性が高い。123号墓はB区の調査中に不時発見された古墓である。調査中は1号墓としていたが本報告書では宜野湾シリガーラ流域古墓群に含まれる古墓として2004年に確認された122基の古墓に追加し、123号墓とする。

第2節 基本層序

123号墓は掘削を行っていないため、69号墓の層序をここでは基本層序とする。

I層：表土・造成土1。現表土である。表土のため腐植している。墓使用時の使用面の高さは現地表と同じとみられる。

II層：造成土2。墓構築のための造成土である。場所によってしまりに強弱があり、混礫層や礫がほとんど入らない層が見られる。基本的には岩盤上に構築されており、一部岩を削り、上に礫等を敷いて平らにし、古墓を構築している。また、袖石（東側）の3層、墓屋根縦断トレンチの4層は礫による裏込め等と見られる。

III層：墓室内造成土。以下の通り細分できる。

III a層：表層。墓使用時の床面。

III b₁層：10 cm大の石灰岩レキ層で、しまりが悪い。タナの石列の裏込めとして、充填される。

III b₂層：コーラル層。岩盤の上に敷かれる。

IV層：地山のマージ。墓庭でのみ確認。

V層：石灰岩の岩盤。

第3節 遺構

1. 123号墓 墓状況

今回は検出のみの調査で、掘削での調査は行っていない。掘込式の小型の破風墓で、空き墓で、墓口はほぼ南向きである。正面の石積みが崩落していて、開口部が露出している状況で装飾などは不明である。屋根も崩落しているが、切り石積みで構築しモルタルを施し切妻屋根になるとおもわれる。屋根の周りに野面積みで石列を構成し、モルタルを施している。

三味台は正面の石の崩落により詳細は不明だが、モルタルを敷いていて、庭より一段高く構築している。袖石は切石の石積みをモルタルで覆う。左袖石から野面の石積みの庭囲いを構築する。右の庭囲いは確認で

きず、コンクリートブロックを並べて一段積みし、その前に小さな香炉石が置かれていたために袖墓の可能性をおもわせるが、大木が根を張っていて伐採できず、詳細は不明である。

墓庭は三味台同様にモルタルを敷き、長 3.0 m、短 2.5 m で歪な楕円形を呈する。一段低く、三味台とは繋げずに間を空けて構築している。墓庭からはずれて、墓口に置いていたとおもわれる香炉石が転がっていた。

墓室内の平面形は略長形状を呈する。一番ダナのみの造りで、地山（マージ）を掘削してモルタルを敷いている。一番ダナとシルヒラシはほぼ同じ大きさで、シルヒラシには目立った加工はみられない。壁面は野面の石積みで、モルタルで補強する。1.1 m の低い天井は切り石でアーチ状に構築するが、墓口崩落にともない天井がやや落ちている。



図版IV - 1 B区 123号墓 遺構平面オルソ



第IV - 1図 B区 123号墓 遺構平面図・立面図



着手前状況〔南から〕



墓室内 検出状況〔南から〕



墓口 検出状況〔南西から〕



墓室内 検出状況〔南東から〕



袖石 庭積み検出状況〔西から〕



上部左側面 検出状況〔西から〕



屋根 後方 検出状況〔北から〕



屋根 後方 検出状況〔北から〕

図版Ⅳ - 2 B区 123号墓 -1



墓庭 検出状況〔北から〕



墓庭 遺物散布状況〔西から〕

図版IV - 3 B区 123号墓 -2

2. 69号墓 墓状況

今回調査したB区の古墓は平成15年度に宜野湾市が実施した宜野湾シリガーラ流域古墓群の分布調査で確認された墓で、宜野湾シリガーラ流域古墓群の南東側に位置し、東側に離れた場所にある亀甲墓である。琉球石灰岩を基盤とする丘陵の斜面に、横穴を掘り込んで造られた墓である。

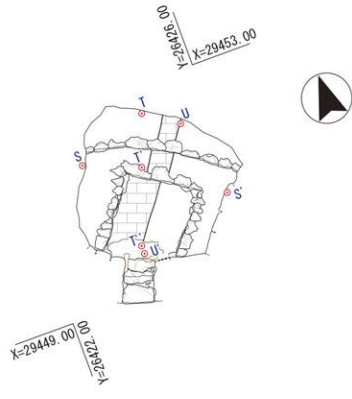
正面の眉は端部で反り上がる。両側に白（ウーシ）が残る。正面や屋根、袖石などに漆喰が施されている。墓口は幅約60cm、高さ約90cm、奥行き約80cmで、門石（ジョウイシ）を掛かるための段が上下にみられる。屋根は盛土によって構築し、周囲には袖回り（ヤジョマイ）の2列の石列が一部残る。三味台は1段で、切石を配する。墓口正面は切石の布積みで、袖石は切石の相方積みで構築する。庭囲いは岩盤を加工して構築される。

墓室は幅約2.8m、奥行き約2.8m、高さ約1.5mで、平面形状は馬蹄形を呈する。平坦コの字の奥タナ2段で、ドーム状に岩盤を削り出して構築され、東側の壁面は切石の相方積みで隙間をモルタルで埋める。また、1号の石厨子を納めるさいに蓋が入るように追加で、岩盤を削り出している状況が確認できる。シルヒラシは幅約1.7m、奥行き約1.5mで、岩盤の隙間をコーラルで埋めて平坦にし、タナには縁石が配置されている。墓室は墓全体の軸と異なり、やや東側に軸を傾ける。

獣骨埋納遺構（第IV - 4図）

獣骨埋納遺構はサンミデー西隅にあり、ブタの下顎骨が出土した。土層は3層からなり、1層目はしまりが良く粘質が強い砂質シルトの層で、手のひら～人頭大のレキが見られる。2層は1mm～10mm程度の石灰岩が多く入り、3層は石灰岩をほとんど含まない層となっている。すべて獣骨を埋納するために掘りこんだ後の埋め土と見られ、時代的な差はない。下顎骨は、吻端を墓口側（北）とし正位に据えられていた。歯の萌出状況からみて、幼～若獣とみられる。

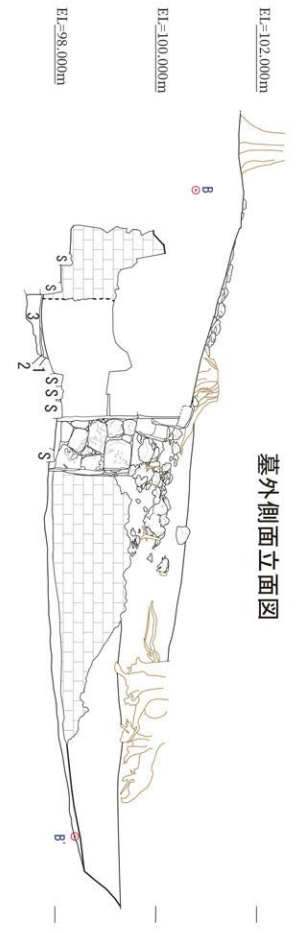
宜野湾市では、今回調査した69号墓以外に喜友名後原丘陵古墓群の諸見里墓、普天間下原古墓群の19号墓で獣骨埋納遺構が確認されている。



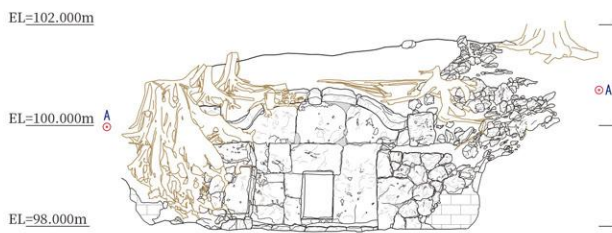
入口床・墓中床平面図



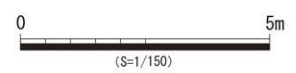
全体平面図



墓外側立面図



墓外正面立面図



第IV-2図 B区 69号墓 全体平面図・立面図



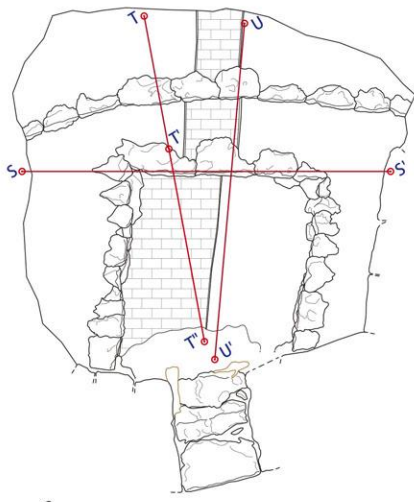
0 5m
(S=1/150)

図版IV - 4 B区 69号墓 遺構平面オルソ

00 97997.00
X=29453.00

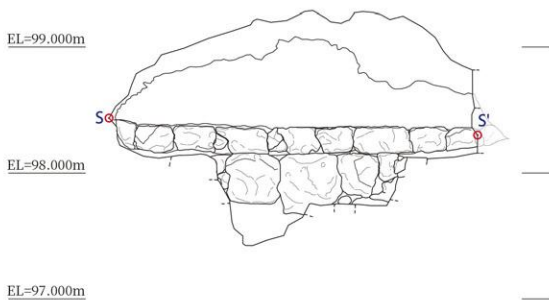


入口床・墓中床平面図

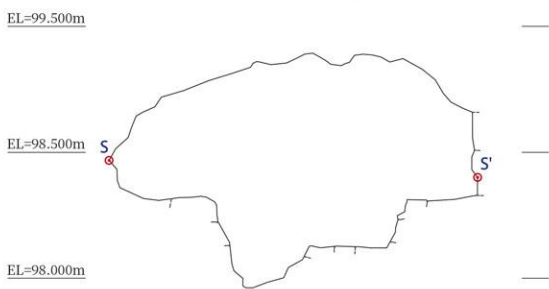


00 72362.00
Y=29449.00

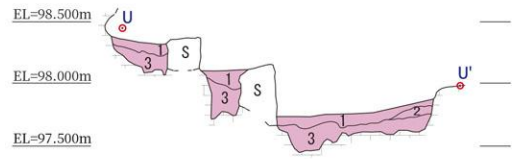
墓中正面立面図



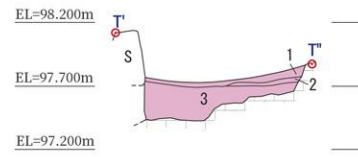
墓中横断面図



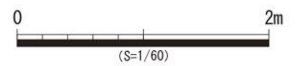
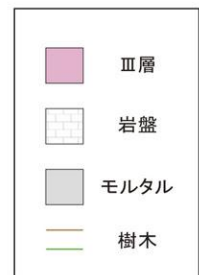
墓中中心断面図



墓軸断面（墓室内）断面図

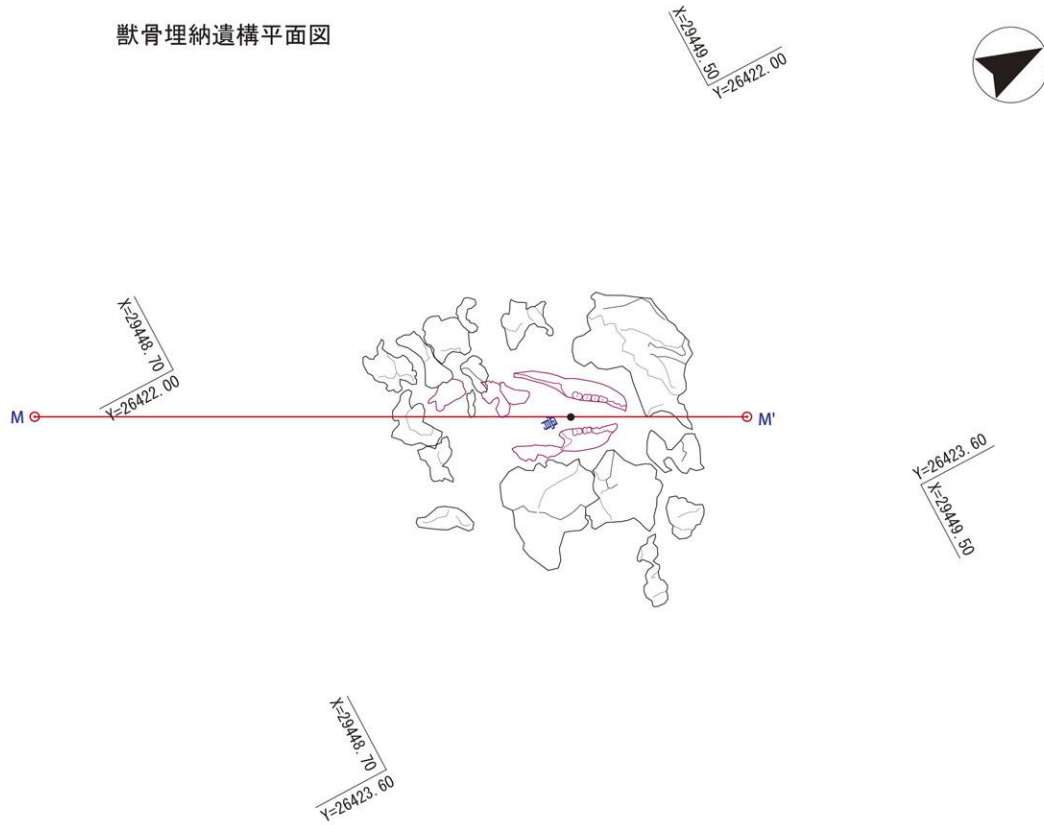


墓中側面立面図

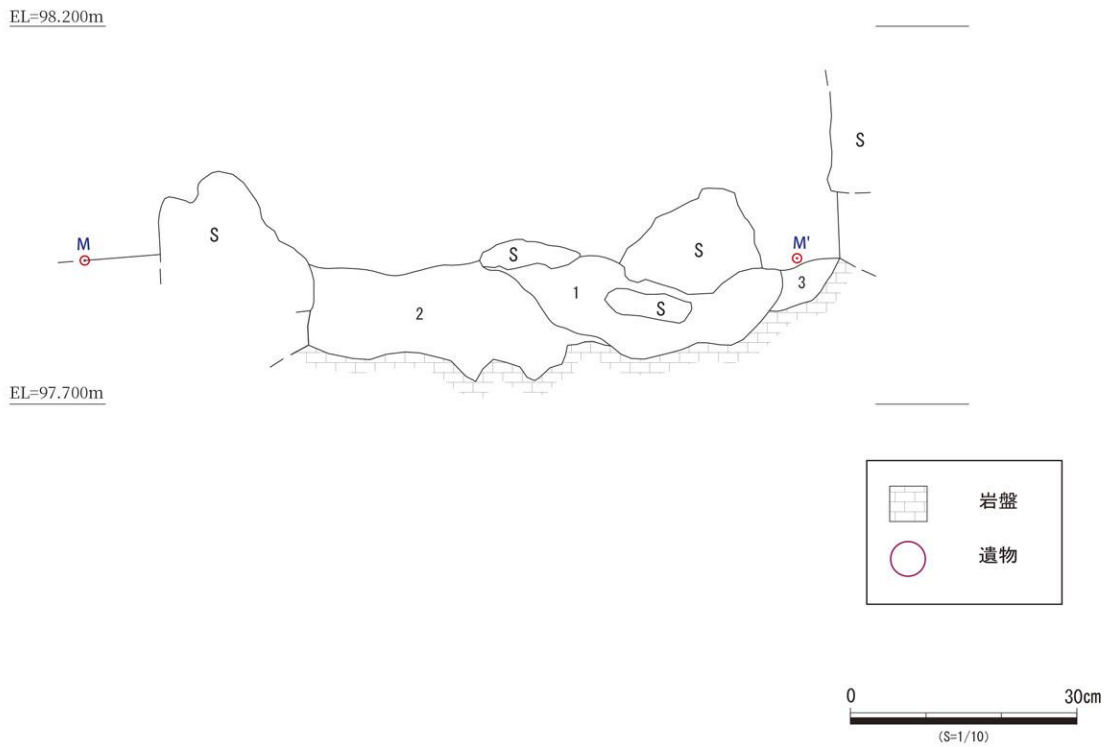


第IV-3図 B区 69号墓 全体平面図・立面図・断面図

獸骨埋納遺構平面図

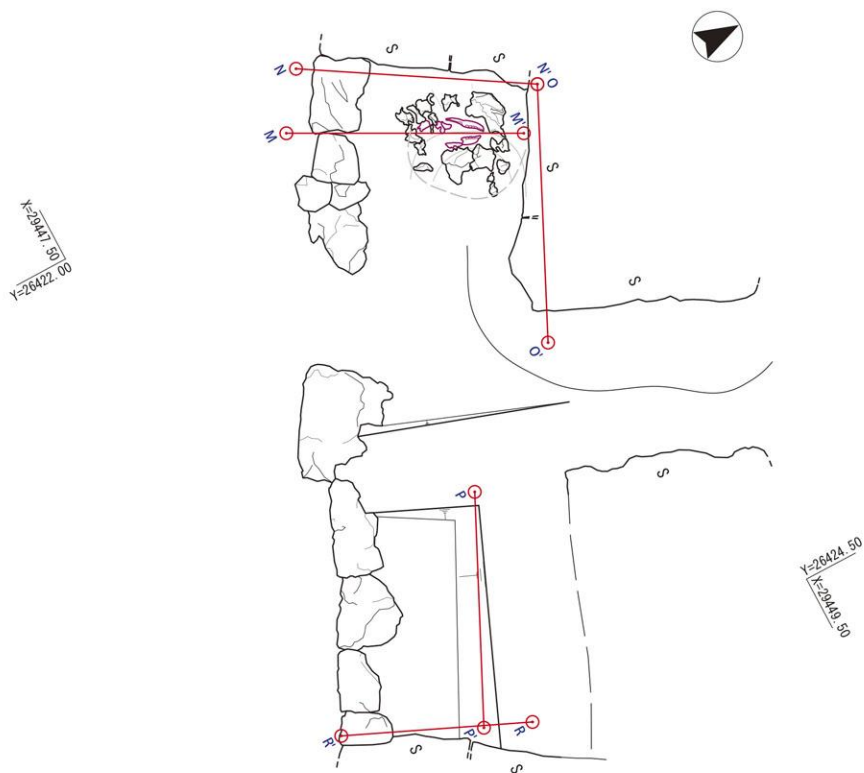


獸骨埋納遺構断面図

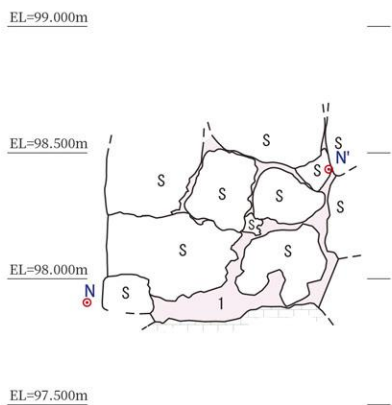


第IV - 4 図 B 区 69 号墓 獸骨埋納遺構および墓外入口平面図・断面図 -1

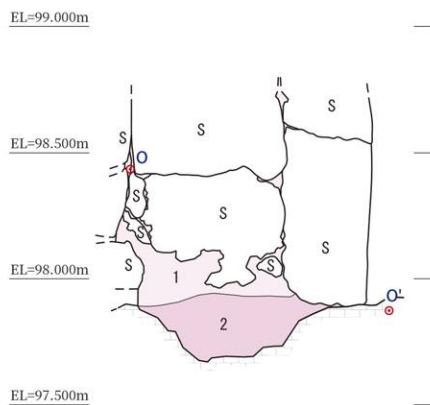
墓外入口 平面図



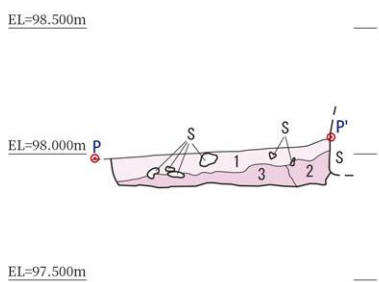
N断面図



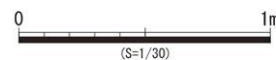
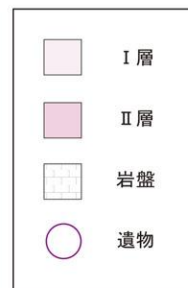
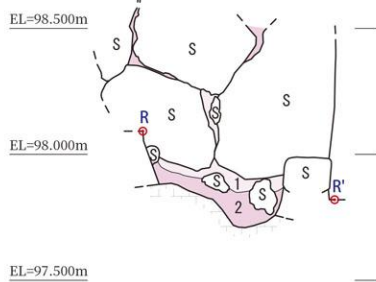
O断面図



P断面図

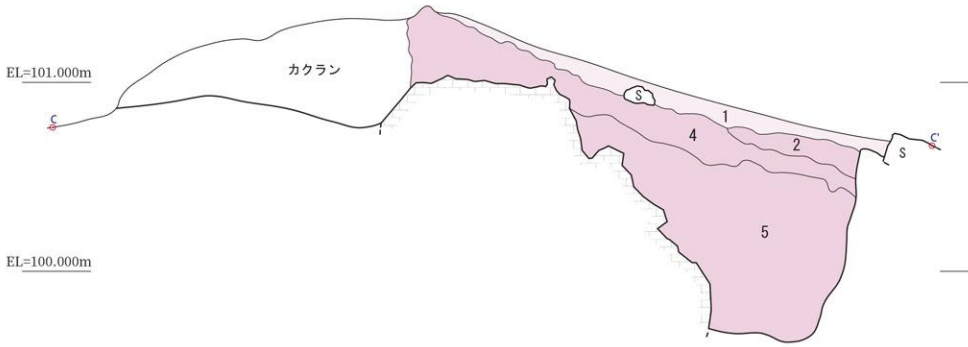


R断面図

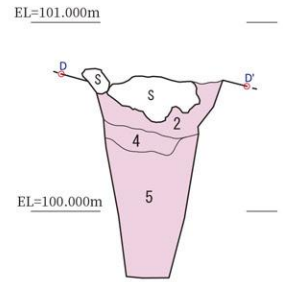


第IV-5図 B区 69号墓 獣骨埋納遺構および墓外入口平面図・断面図-2

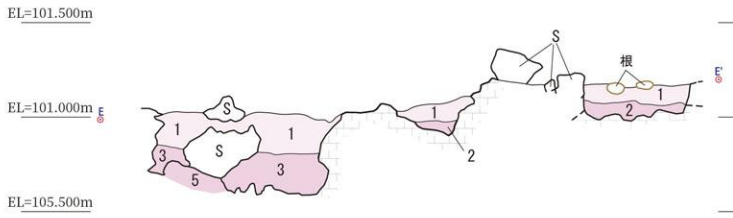
縦断トレンチ（屋根）東壁断面図



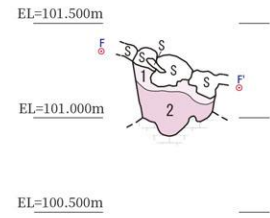
縦断トレンチ（屋根）南壁断面図



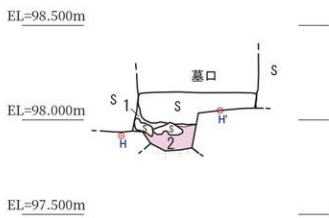
横断トレンチ（屋根）南壁断面図



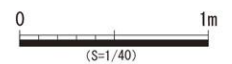
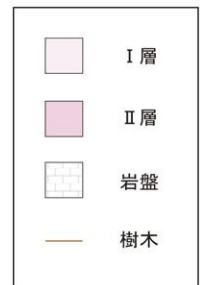
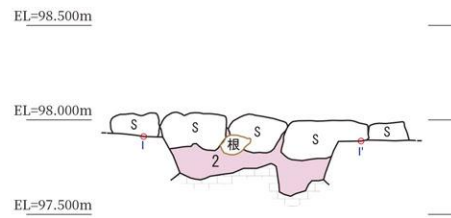
横断トレンチ（屋根）東壁断面図



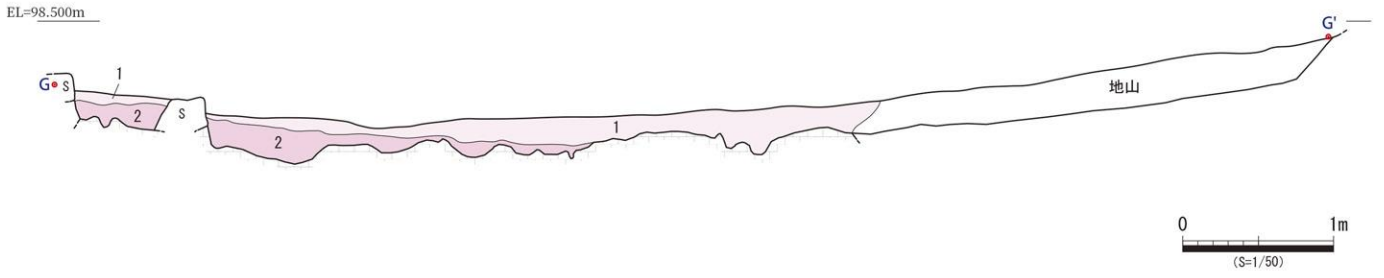
墓口下部断面



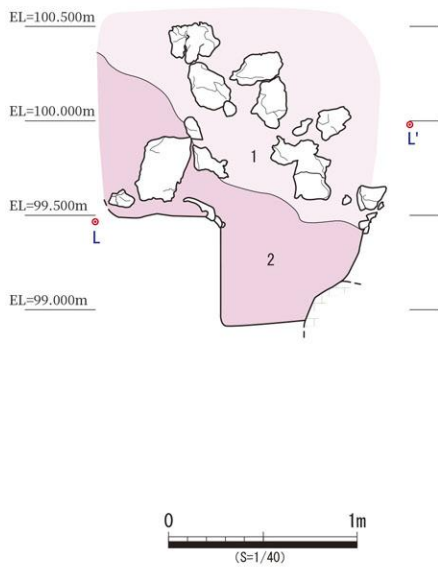
サンミデー下部断面



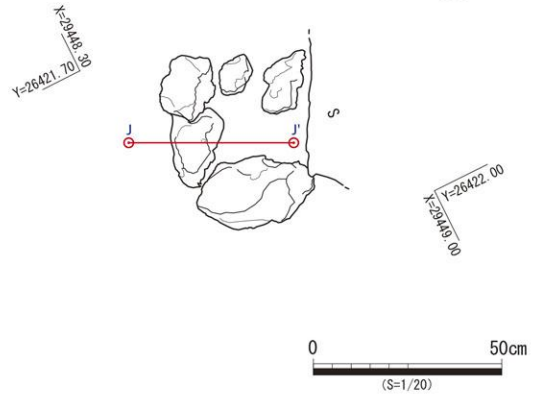
縦断トレンチ（庭）東壁断面図



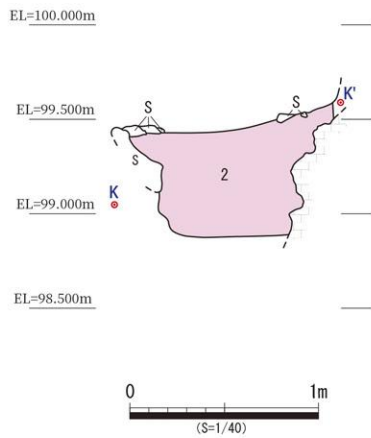
L断面図



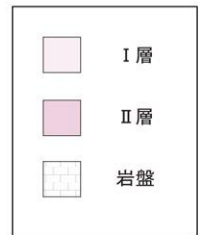
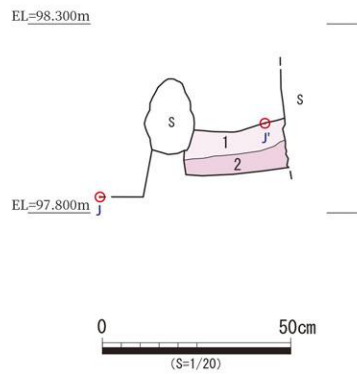
石組遺構平面図

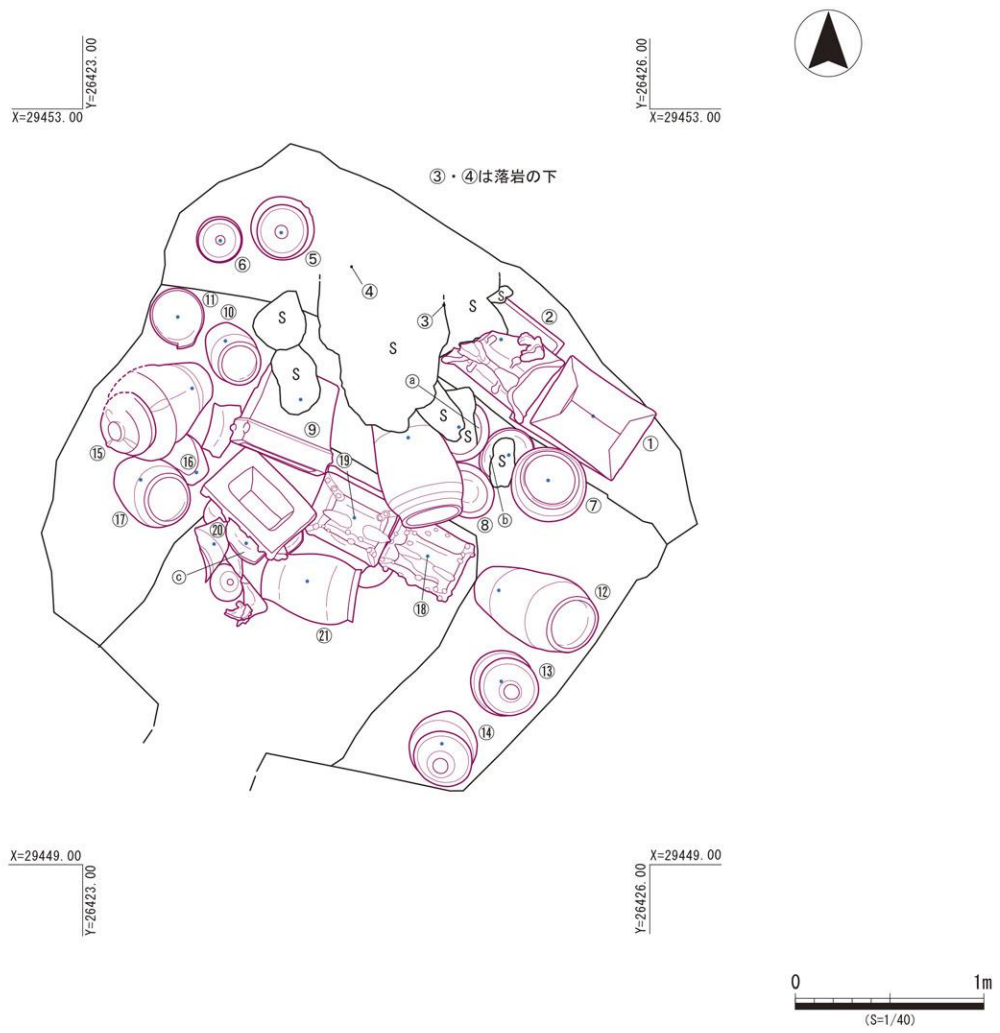


K断面図



石組遺構断面図





第IV - 8 図 B区 69号墓 墓室内厨子甕出土状況図



屋根トレンチ断面 [西から]



屋根トレンチ断面 [北から]

図版IV - 5 B区 69号墓 -1



御香炉台検出状況



遺物出土状況〔南から〕



遺物出土状況〔南西から〕



遺物出土状況〔南東から〕



遺物出土状況〔南から〕



古墓 検出状況



右袖石 検出状況〔南から〕



左袖石 検出状況〔南から〕



左袖垣 検出状況〔西から〕



右袖垣 検出状況〔南から〕



三味台 検出状況〔南から〕



石組遺構 検出状況〔南から〕



三味台 獸骨検出状況〔東から〕



袖回り〔南東から〕



左袖石 検出状況〔北から〕



厩石〔北より〕



袖回り〔北より〕



墓室内 裏正面



羨道 検出状況〔南から〕



墓庭トレンチ断面〔南西から〕



墓室内より遺物搬出状況



出土蔵骨器



墓口（化粧前）〔南から〕



墓室完掘状況〔南から〕



左袖石際トレンチ断面〔西から〕



三味台 掘削状況〔東より〕



墓室 断面〔東から〕



石組み遺構断面〔東より〕



作業風景〔略南東より〕



東側袖石石積み岩盤状況〔略南西より〕



墓屋根造成堆積状況〔略東より〕



西側袖石 遺構状況〔略東より〕

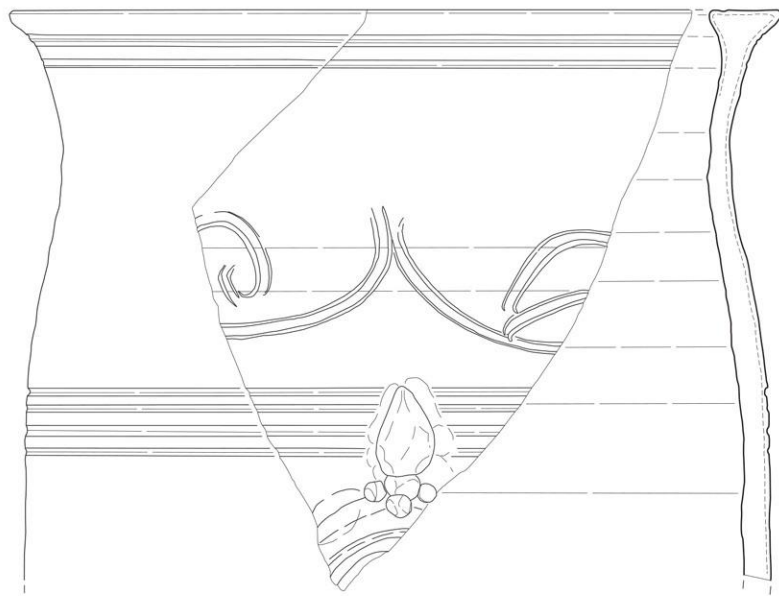
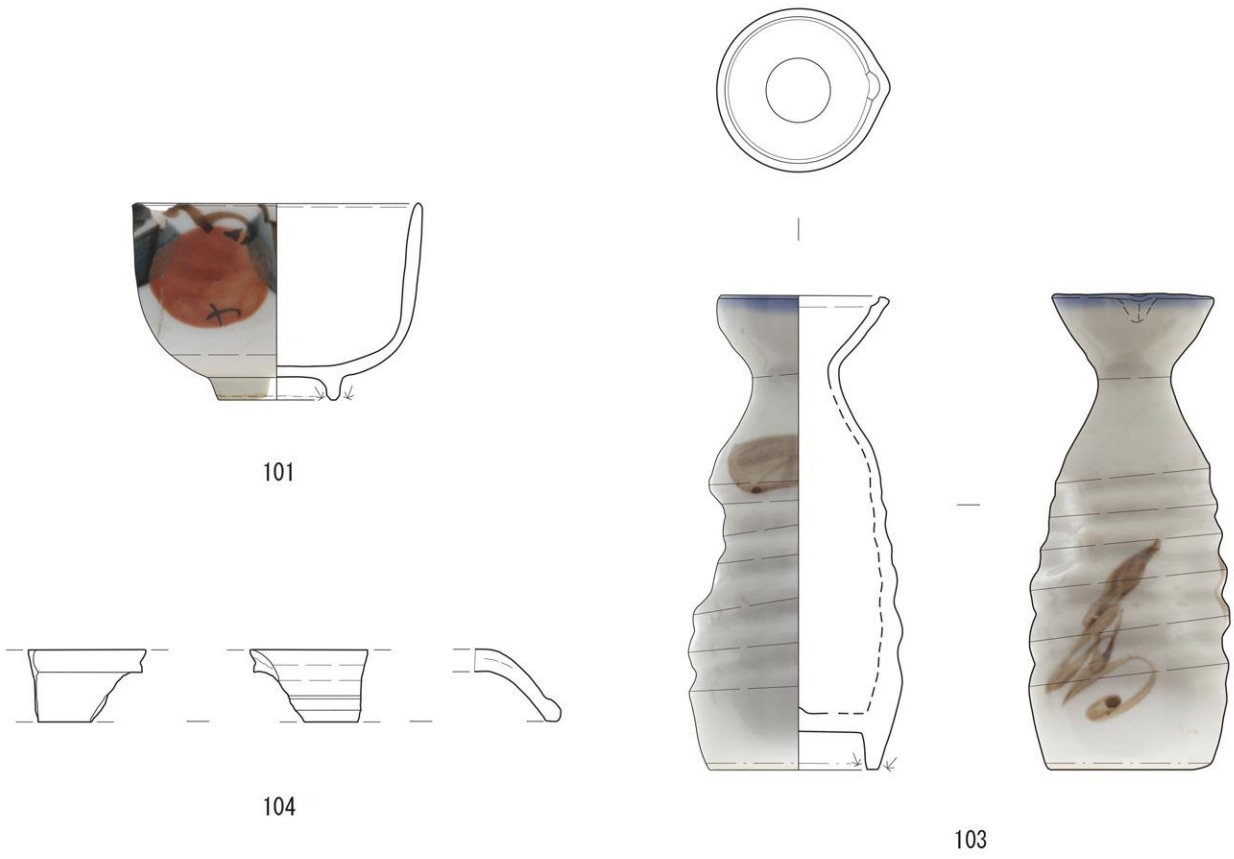
第4節 遺物

B区は古墓で、平成30年度の調査した123号墓は、厨子がなく改葬されているため遺物の点数は今回の調査区でも最も少なく計13点である。出土した遺物は廃棄されたとおもわれる小型のマンガン掛け焼き締め厨子片の身と蓋が出土したが、銘書はみられなかった。他には本土産磁器が出土している。また、69号墓は亀甲墓で、平成27年度の調査で確認されている。平成30年度に天井の一部が崩落したため蔵骨器の数基が破壊されたが、全基を検出することが出来た。検出した厨子は22基で、その内訳はサンゴ石製石厨子1、赤焼御殿型厨子1、上焼きツノ型厨子3、ボージャー厨子4、マンガン掛け庇付焼き締め厨子1、マンガン掛け焼き締め厨子10、転用厨子2で、その内14基で銘書がみられた。石厨子は蓋・身ともに朱と黒の文様を施すが、不明瞭な部分が多い。ボージャー厨子は窓枠が平葺形と唐破風形の2種類がみとめられ、後者が1基のみであった。マンガン掛け焼き締め厨子の屋門の分類では、アーチ形が5基と最も多く、次に瓦屋形が3点、唐破風形が2点となる。転用厨子は2点で、一つが小型の壺の側面を打ち欠いていて、打ち欠いた部分を上に器を横にして使用していたとおもわれる。もう一つは甕の下半で、使用のためか打ち欠いた部分がみられる。蔵骨器以外の遺物は28点得られていて、墓室内で14点、墓室外で14点出土している。墓室内はほとんどが蔵骨器内で簪が8点、銭貨が6点出土している。他は墓庭で沖縄産施釉陶器5点、沖縄産無釉陶器2点、アカムヌー1点、銭貨が3点で、墓前で銭貨2点、獣骨埋設遺構からブタの下顎骨が1点出土している。厨子の銘書から18世紀後半から20世紀前半に使用された墓とおもわれる。

1. 123号墓

第IV-1表 B区123号墓 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm)		観察事項	出土地点	
第IV・9図・ 図版IV・10	101	マンガン掛け厨子	身	口縁～胴部	口径 器高 底径	30.4 23.2 —	弱い外反の口縁で口唇を平坦に両端が突出する。口縁直下に2条の圏線が廻る。肩部に線彫りの蔦状?の文様を施す。文様の下に4条の圏線が廻る。涙状の玉飾りのみ残存で屋門の分類は不明。	1号墓右袖垣
	102	本土産磁器	小碗	口縁～底部	口径 器高 底径	7.45 5.2 3.1	外面は腰が張り、体部が直線状にのびる。内面は腰から体部がやや膨らみ、口縁が舌状になる。高台は短く、丸い端部は釉剥ぎを行う。色絵による柿の木文。	墓清掃中
	103	本土産磁器	徳利	口縁～底部	口径 器高 底径	4.3 12.5 4.5	小碗状の口縁で、片口。頸部がしまり、胴部が筒状になる。胴部を3ヶ所凹ませ、凹線文を螺旋状に一周巡らせる。胴部に4字の字款があり、「一・味・諸・喬」か?高めの高台で、回転ケズリで釉剥ぎを行う。内面は頸部まで施釉し、胴部までは及ばない。口縁端部を呉須で施釉する。	墓清掃中
	104	本土産陶器	蓋?	鏝～体部	撮径 器高 口径	— 1.9 —	逆L字状でやや外側に開き、鏝の外面が玉縁状になる。外面は横ナデで、内面はミガキ調整がみられる。重ね焼きが断面で観察できる。	墓清掃中



第IV - 9图 B区 123号墓 出土遺物-1



图版IV -10 B区 123号墓 出土遗物

2. 69号墓

第四 - 2表 B区 69号墓 厨子観察表 -1

単位：cm

挿図番号 図版番号	厨子 番号	分類	器種	上部径 器高 下部径	器形・成形など	文様・銘書など	出土地	
第IV・11図・図版IV・11	1	石厨子	蓋	29.2	入母屋形の蓋、側面が二等辺三角状の高い屋根で、4つの軒部がやや反りあがる。ケズリ出し後に研磨し、平坦に仕上げる。内面はノミ跡が残る粗い調整で、石灰を塗布する。	棟上部、降棟、軒上部に朱色で緑取りをおこなうが、不明瞭。軒面に朱色で垂木を表現し、緑取りを墨で彩色する。側面に釣り針状の文様を2つ組み合わせたような文様を描く。	二番ダナ	
				24.2				
				49.4				
			身	47.1	箱状の形態をなし、底部4隅に脚を有する。正面は小さめの方形状のマドとなる2ヵ所の孔を穿孔する。正面下部に削り出しによる帯を設ける。外面はケズリ出し後に研磨し平坦に仕上げるが、側面は正面に比べてやや粗く、背面はややノミ痕が残る。底面外面はノミ跡が残る粗い調整で、石灰を塗布する。内面もノミ跡が残る粗い調整で、石灰が付着し骨片などが固着している。	正面は朱色で9分割の区画線を描き、その線の緑を墨で線引きする。帯も朱色で彩色しているとおもわれるが、色落ちして不明瞭。	二番ダナ	
				48.1				
				44				
第IV・12図・図版IV・12	2	赤焼御殿型	蓋	36.7	入母屋形で、左右側面に方形状の2点のマドを穿孔し、庇を設ける。正面及び側面の軒下には、垂木が浮き彫りで表現される。蓋の内面縁が内側に突き出る。外面全体をハケ状工具などでマンガン釉を施す。内面の縁をミガキ、内面をナデ調整する。	大棟には一対の型取り鯉を配する。下り棟の先には型取り獅子頭を貼り付ける。棟の外面を半裁竹管文状の工具により文様を配する。両面の屋根上部に2対の型取り獅子頭を貼り付ける。屋根と庇には半裁竹管文状の工具により瓦葺が表現される。左右側面の2対のマドの間に2対の下向きの嵌手文を合わせた粘土の間に棒状の粘土を貼り付けた文様を配する。体部内面に銘書が認められる。	二番ダナ	
				39.5				
				48				
	身	46.5	方形の体部に4つの脚を有する。1方4円のマドを穿孔する。銘書面を設けるが、銘書は記されていない。底部には34点の半円状の穿孔。全面をナデ調整する。外面の銘書面以外はマンガン釉を施す。裏面に炭が付着した部分がみられる。	正面は、四角い枠を貼付し、上の枠外に五角形の幾何学文様を押文、横は線彫り鋸歯文を配置する。枠内は唐破風の屋門で、屋門の左右は型取り法師像とその下に型取り蓮華文が配される。花文は貼付で、茎は線彫りする。脚は2条の線取り文と型押しの花形と蓮華文を配置する。体部の両側面は四角い枠を貼付し、枠外の上と左右の縁に線彫りの鋸歯文を配する。枠内は法師像の下に蓮華文と、周りに花文を配する。法師・花文を貼付し茎を線彫りする。背面は蓮華文と花文を配し蓮華・花文を貼付し、茎を線彫りする。	二番ダナ			
		47.1						
		42.9						
	第IV・13図・図版IV・13	3	マンガン掛け	蓋	12.5	鐙を有する蓋で、やや低い体部に饅頭形の撮みを付ける。撮みの下には2段の撮み台があり、1段目は低く、2段目は高く成形される。また体部にしっかりした突帯のかえりが付く。内外面ともに回転ナデ調整し、外面にマンガン釉を施す。体部を中心に石灰が付着する。	墨書による銘書が体部内面に記される。また、体部外面に墨書による△記号が記される。当初は正面のシルシとおもわれたが、銘書の読みやすさを考えると裏を指すシルシではないかと想定される。	一番ダナ
					14.8			
					30.7			
身		33.7	方形にややのびた口縁に胴部が丸く膨らみ、底部へとしまる形状はボージャーに似たプロポーションとなる。マドは3方で、長方形に穿孔される。外面調整はマンガン釉や石灰が付着して不明瞭だが、ロクロナデで、胴部下半をヘラケズリをおこなう。内面はロクロナデでロクロ痕が残る、内底面はユビナデ調整をおこなう。底面に6つの円形の穿孔を施す。胴部下半に石灰が付着する。	口縁外面に浅い1条の圏線と頸部に低い横帯が廻る。肩部よりやや上と胴部下半に貼付横帯が廻り、貼付縦帯により4区画に区分けされる。正面はボージャーの寄棟形のマド枠に屋根の上に略方形の玉飾が貼付される。マドは1方2方で、マド枠上面は瓦屋風に施文し、他は鋸歯文が施される。マド枠左右に型取り法師像を配置し、法師像の下に型取り蓮華文と茎が貼付される。窓の下にも小さめの型取り蓮華文と茎が貼付される。胴部背面に銘書が記されているが不明瞭。肩部から上にマンガン釉を施し、他は要所にマンガン釉をハケ状工具で施す。胴部背面に銘書を記している。	二番ダナ			
		59.9						
		25.2						
4		マンガン掛け	蓋	12.8	縦に伸びた宝珠形の撮みの下に1段の広い撮み台を設ける。低い体部に端部がやや丸い横に伸びた鐙とやや内傾した高いかえしが付く。内部頂点の穿孔が約5cmと大きい。内外面は回転ナデ調整で、外面はマンガン釉のため調整痕は不明瞭。外面の撮みから端部までマンガン釉を厚く施し、鐙の内面からかえしまで露胎する。外面全体に石灰が付着する。	体部内面に銘書は確認できるが、薄く不明瞭。	二番ダナ	
				15.5				
				30.1				
ボージャー	身	38.9	胴部のあまり張らない形状。玉縁状の口縁が立ち上がる。隅丸方形のマドを1つ穿孔する。底部に10点の円形の穿孔するが、数点開いていない孔がある。外面を回転ナデ調整を行い、胴部下半をヘラケズリで調整する。内面はロクロナデ調整で底部内面をユビナデ調整する。	頸部に2条の圏線と上下のマド枠の位置のそれぞれに1条の圏線が廻る。平葺形の屋門で、上下のマド枠上面に凹線文を入れる。屋門の横に縦に浅い沈線と2点の刻みめの組み合わせの窯印がみられる。	二番ダナ			
		66.3						
		26.7						
第IV・14図・図版IV・14	5	ボージャー	蓋	7	撮み及び撮み台を持たない笠形を呈する。内外面は回転ナデ調整で、頂部は粗い調整を行う。体部端部を平坦に成形する。外面体部から端部にかけて石灰が付着する。所々に小さな膨らみや亀裂がみられる。内面は頂部と体部下半で色調が異なることから重ね焼きが行われたとおもわれる。	文様および銘書は確認できない。	一番ダナ	
				10.5				
				29.6				
		身	29.1	頸部から立ち上がる口縁。3つの円形のマドを穿孔する。内外面ヨコナデ調整し、外面胴部下半をヘラケズリをおこなう。内面底部をユビナデ調整を行う。底部に半裁竹管状の7つの穿孔がみられる。器面の一部にアバタがみられ、焼成時に胴部が歪んだとおもわれる。外面に石灰が厚く付着する。	頸部に3条の圏線を廻す。胴部横帯は2つの圏線を廻す。屋門内の横帯は消されずに残る。唐破風の屋門で、上下のマド枠上に圏線を入れる。横帯1の上にカタカナのキ字状の窯印を施す。	一番ダナ		
			55.6					
			23.7					

第IV-3表 B区 69号墓 厨子観察表-2

単位: cm

挿図番号 図版番号	厨子 番号	分類	器種	上部径 器高 下部径	器形・成形など	文様・銘書など	出土地		
第IV・14図・図版IV・14	6	ポージャー	蓋	8.5	撮み及び撮み台を持たない蓋で笠形に成形される。体部端部を平坦に成形し、内外面ともに回転ナデ調整をし、外面の頭頂部やや粗く成形する。内外面は轆轤痕がみられる。外面頭頂部とそれ以下で色調の違いがみられることから重ね焼きが行われたとおもわれる。1/3ほど欠損する。	体部内面に墨書による銘書が記されるが、欠損のため判読できない。	一番ダナ		
				11					
				32.1					
			身	29.6	口縁が方形状で長く、口唇が外側に張る。底部に5点の三日月形の穿孔。外面はロクロナデ調整で、調整痕がみられる。胴部下半はヘラケズリをおこなう。内面はロクロナデで、調整痕が明瞭にみられる。			口縁下に2条の圏線が、頸部に山形突帯が廻る。平葺形の屋門で、マドは破損しているが1方2円とおもわれる。マド枠の上に斜めにした二字状の窯印がみられる。屋門の横に墨書で「奥」の字を記す。	一番ダナ
				54.3					
				20.8					
第IV・15図・図版IV・15	7	上焼きツノ型	蓋	40.1	入母屋形で短い此から妻部が大きく立ち上がる。正面に3つの小さな方形のマドを穿孔する。側面に2つと背面に1つのマドを配置するが、穿孔しない。軒下には垂木を浮かし彫りで表す。全体的に白化粧を施し、褐釉、緑釉で施軸する。妻部内面に褐釉を施す。背面の底面上に沖繩産施釉陶器Ⅲ類の底部が癒着している。	棟の両端に型取り鱗を1対貼付ける。正面に唐破風屋根を貼付け、屋根上にツノ付き型取り龍頭とそれから棟に伸びる龍体を貼付ける。降り棟と庇部間にツノ付き型取りの獅子頭を配する。唐破風屋根下に型取り円形渦巻文を配し両隣に格子窓を施す。側面は上部に円形渦巻文を貼付けし、その下に格子窓を配する。背面に屋根を貼付けし、ツノ付き獅子頭を3つ配する。庇上面に3つ1組のツノが正面・背面に2ヶ所、側面に1ヶ所配置する。ツノ上面にアルミナを施す。妻部から庇上面にかけて褐釉を施軸して、要所に厚め緑釉を施す。庇底面に銘書が記される。	一番ダナ		
				45.5					
				50.4					
			身	49.3	逆台形型の胴部にL形の太めの脚が4つ付く。正面に3つの小さな円形のマドを穿孔する。側面にも6つの円形マドを穿孔する。底部に三日月形の孔を6つ穿孔する。正面下部に白化粧で銘書面を設けるが、文字は記されない。脚底部と上面から内底面にかけて白化粧を施す。外底面は無釉で、葉脈圧痕がみられる。褐釉と緑釉で施軸する。内面は口唇からない底面に白化粧を施し、内側胴部に褐釉を施軸する。			胴部上半に唐破風屋根を貼り付ける。屋根に型取りの龍頭を貼り付ける。龍頭の両隣に渦巻文を配する。屋根の両端に型取り獅子頭を配する。屋根下に唐破風の屋門を貼付けし、内側に型取り菩薩座像と両隣に半球文を配置する。屋門左右に型取り菩薩像、型取り蓮華文、型取り蓮葉文を配置して、茎は粘土紐を貼付ける。側面上部に庇を貼付けし、庇上に型取り渦巻文を3つ配する。庇下に型取り菩薩像、型取り蓮華文、型取り蓮葉文で配置して、茎を粘土紐で貼付ける。背面は庇を貼り付けて、その両端に型取り獅子頭を配する。褐釉を全面に施し、要所に厚めの緑釉を施軸する。	一番ダナ
				45.5					
				38.4					
第IV・16図・図版IV・16	8	マンガン掛け	蓋	10.7	先端の低い宝珠形の撮みの下にやや高い撮み台を設ける。体部の割りにやや長い鈎と厚く低いかえしが付く。内外面ともに回転ナデ調整で、外面はマンガン釉と付着した石灰で調整痕はやや不明瞭。外面の撮みから鈎の端部までマンガン釉をやや厚く施軸する。撮みから鈎にかけて石灰が付着する。	文様および銘書は確認できない。	一番ダナ		
				15.4					
				30.1					
			身	32	口縁直下と頸部に突帯文が廻る。肩部の文様は、波状文が廻り、その波状文の間に圏線が施文される。胴部は瓦屋風屋門を貼付ける。屋門の左右に型取り法師型と型取り蓮華文を貼付けし、茎は又状工具による線彫りする。胴部文様の下に突帯を貼り付け、突帯上面に2条の圏線をいれる。その下に波状文と3~4条の圏線を廻す。銘書面に文字は記されない。			一番ダナ	
				63.5					
				22.7					
第IV・17図・図版IV・17	9	マンガン掛け	蓋	10.5	体部の大きめの割に小さめの鈎付きの蓋で、高めの体部に小ぶりの宝珠形の撮みが付く。撮み台下に1段の高めの撮み台を設ける。かえりは小さいが、鈎がやや反り返るために接地する。内外面を回転ナデ調整する。外面の撮みから鈎までの一部分にマンガン釉を施す。マンガン釉の部分を下にして内面の銘書を見るとききれいに読めることから、蓋の後ろを示したことが考えられる。	鈎端部に浅い凹線が廻る。体部の内面に銘書が認められる。文字の他に内面上部の穿孔の周りを墨書で囲う。	二番ダナ		
				18.1					
				29.8					
			身	25.8	口縁下に2条の圏線を施文する。頸部に突帯を廻す。肩部に又状工具による鋸歯文+波状文を施し、その下に凹線文3条廻す。胴部はアーチ形の屋門と又状工具による線彫り蓮華文を配する。胴部文様下に4条の圏線+波状文+2条の圏線を施す。			一番ダナ	
				53.2					
				19.2					
第IV・17図・図版IV・17	10	マンガン掛け	蓋	11	先端のつぶれた小ぶりの宝珠形の撮みの下にしっかりした2段の撮み台を設ける。体部に横に伸びるものわずかに歪み端部が丸い鈎と小さいかえしが付く。撮み台と体部の間、体部と鈎の間に凹線文を廻す。内外面ともに回転ナデ調整をし、内面は調整痕が明瞭だが外面は調整痕が不明瞭。外面にマンガン釉を施すが、薄い。	墨書による銘書が体部内面に記される。体部に窯印とおもわれるヘラ記号を入れる。	一番ダナ		
				18					
				29.3					
			身	28.3	口縁下に2条の凹線文で頸部に突帯文を廻す。肩部に線彫り波状文を施し、突帯文を廻す。突帯上に3条の圏線を施す。胴部に線彫りの瓦屋形の屋門、線彫りの雲形、縁取りの軍配文を配する。胴部文様下に3条の凹線文+波状文+2条の凹線文+波状文を施す。			一番ダナ	
				53.2					
				22.6					

第IV-4表 B区 69号墓 厨子観察表-3

単位：cm

挿図番号 図版番号	厨子 番号	分類	器種	上部径 器高 下部径	器形・成形など	文様・銘書など	出土地		
第IV・17図 図版IV・17	11	マンガン掛け 庇付き	蓋	11.7	2段構造でつくられた蓋。上段には丸みの宝珠形の撮みの下に1段の撮み台が設けられる。宝珠形の撮みの突起の先端の上面に小さい穿孔がみられる。撮み台から下り棟が4ヶ所つくられ棟先は無文である。下段はややふくらんだ体部に端部が丸みの鈎とやや方形のしっかりしたかえしが付く。全体的に回転ナデ調整し、ハケ状の工具で外面全体と鈎内面にマンガンを施す。	上段の庇は縦線沈線文などで屋根を表し、庇の端部に2条の圏線が廻る。体部内面に銘書が記される。	一番ダナ		
				17.7					
				32.9					
			身	31.4	頸部は直線的にやや外反し、肩部で最大径となって、窄まりながら底部につく。頸部下に瓦屋根を模した庇をつけ、その上に下り棟を4ヶ所貼り付ける。正面に1ヶ所の方形のマドを穿孔する。底部に円形孔の孔を5ヶ所穿孔する。外面をロクロナデ調整し、胴部下半をヘラケズリをおこなう。内面もロクロナデ調整をおこない、内底面にユビナデで器面を整える。全面にマンガンを施し銘書面も塗りつぶすが、マドのある屋門内は塗りつぶさない。			口縁下に圏線を2条廻す。庇の屋根は半裁竹管で瓦屋根を表す。胴部を区画するための縦粘土紐は玉飾りや鋸歯文で施文する。屋門は瓦屋形で、柱貫を鋸歯文や凹線文で施文する。屋門の左右に型取り蓮華文、型取り蓮葉文を貼り、茎は線彫りで表す。胴部文様下に突帯文で区画した文様帯が2つあり、線彫り蓮葉唐草文を施文する。上の文様帯にはさらに2組1つの縦の粘土紐を貼り付ける。銘書面はマンガンを施し塗りつぶされ、銘書はみられない。	一番ダナ
				66.5					
				23.6					
身	—	なで肩で、胴部が膨らむ。口縁部を打ち欠き、頸部から胴部の1/3ほどを打ち欠き、横に置いて蔵骨器として転用する。	頸部から肩部に5～6条の浅い圏線が廻る。胴部に十字状の窠印がみられる。	一番ダナ					
	—								
	—								
第IV・18図 図版IV・18	12	16号 厨子	中型壺 (転用品)	—	胴部の打ち欠きから転用とみられ、細身の胴部から重とおもわれる。内外面をナデ調整し、内面のナデ痕が残る。外面胴部下半をヘラケズリし、内底面をユビナデ調整で器面を整える。外面と内面上部に石灰が付着する。	文様や銘書などはみられない。	一番ダナ		
	13	22号 厨子	壺 (転用品)	31.3					
				29.1					
第IV・19図 図版IV・19	14	マンガン掛け	蓋	7.2	饅頭形の撮みの下に3段の低い撮み台を設ける。体部に一部が反り返り端部の丸い鈎と内傾した低いかえしが付く。破損しているが撮み頂点を穿孔しているとおもわれる。内外面ともに回転ナデ調整を行う。外面の撮みから鈎端部までマンガンを施す。	体部内面に墨書による銘書が記され、明瞭に残る。	一番ダナ		
				13.9					
				27.8					
			身	27.8	頸部から直立気味の口縁で、口唇を平坦にする。あまり張らない胴部で、底部に半円形の5点の穿孔。焼成の際に割れたとおもわれる部分をモルタルで補修する。内外面をロクロナデによる調整で、内面にナデ痕が残る。外面胴部下半はヘラケズリ、内底面をユビナデ調整で器面を整える。全面に厚めのマンガンを施すが、底部付近は露胎させる。銘書面も塗りつぶす。			外面口縁の直下に2条の圏線と頸部と胴部の境に低い突帯が廻る。肩部文様帯は波状文+2条の圏線+波状文を配する。その下に太い突帯を貼り付け、その突帯上に2条の圏線を入れる。屋門は唐破風で、1方のマドを穿孔する。屋門の左右に型取り蓮華文と型取り蓮葉文を貼り付けし、茎を線彫りする。胴部文様下に貼付突帯を廻し、突帯上に2条の圏線を入れる。突帯の下に波状文+4条の圏線が廻る。	一番ダナ
				52.1					
				21.2					
蓋	8.7	笠形に成形される蓋で、体部がやや高い。体部端部を平坦に成形し、内外面を回転ナデ調整し、外面頭頂部は粗く成形する。体部外面は轆轤痕が明瞭に残る。内外面に石灰が付着する。	文様および銘書は確認できないが、体部外面に記号を墨書で記す。平成18年度の神山島家古墓*の4号厨子に記されてもの似た記号とおもわれる。	シルヒラシ					
	11.3								
	29.1								
身	30.4	やや内傾する方形状の口縁で、頸部がへの字状に屈曲し、胴部上半がやや膨らみやや内傾して底部がつく。1方2円のマドを穿孔する。底部に三日月型の孔を4ヶ所穿孔する。外面をナデ調整、内面を回転ナデ調整をおこない、底部内面をイタナデで成形する。胴部下半に石灰が付着する。			口縁下に2条の圏線を施文する。頸部に突帯を貼り付ける。マドに平葺形の屋門を貼り付け、上下の屋門に沿って圏線を圍繞する。上のマド枠に圏線を入れる。屋門の斜め上に斜め線に点を組み合わせた窠印を施文する。	シルヒラシ			
	53.1								
	21.5								
図版IV・20	16	マンガン掛け	蓋	8.7			先端の突起がしっかりした宝珠形の撮みの下に2段の撮み台を設ける。体部に端部が丸く、一部が反り返る鈎と小さいかえしが付く。内面頂部の穿孔がつぶれかけている。内外面ともに回転ナデ調整だが、外面はマンガンを施すにより調整痕が不明瞭。外面の撮みから鈎にかけてやや厚くマンガンを施す。	文様はないものの、体部内面に墨書による銘書が記される。	二番ダナ
				17.3					
				29.5					
			身	30.5	底部からやや外傾した胴部がのび、中ほどで最大径となる。頸がしまり、口縁が外反する。口唇が内側にやや張る。3方のマドを穿孔する。内外面にロクロナデをおこない、内面にナデ痕がみられる。外面の胴部下半はヘラケズリで調整する。底部以外は厚めのマンガンを施す。底部に丸形、半円形、爪形の14点の穿孔がみられる。	口縁下に2条の凹線文を廻し、頸部に深いナデにより幅の狭い突帯を押し出す。肩部に蕉葉文を配し、下に突帯を貼り付け、上面に2条の圏線をめぐらす。胴部にアーチ形の屋門で、屋門内に型取りの菩薩座像を貼り付ける。屋門上部に花卉付けた玉飾りを3点配すが、真ん中は獅子頭か？屋門の他に線彫りで蓮華文、蓮葉文、茎を施す。胴部文様下に3条の凹線文+櫛描波状文+2条の凹線文+3条の凹線文を施文する。	二番ダナ		
				53.8					
				21.8					

*宜野湾市教育委員会編 2011年 『市内埋蔵文化財発掘報告書2』

第IV-5表 B区 69号墓 厨子観察表-4

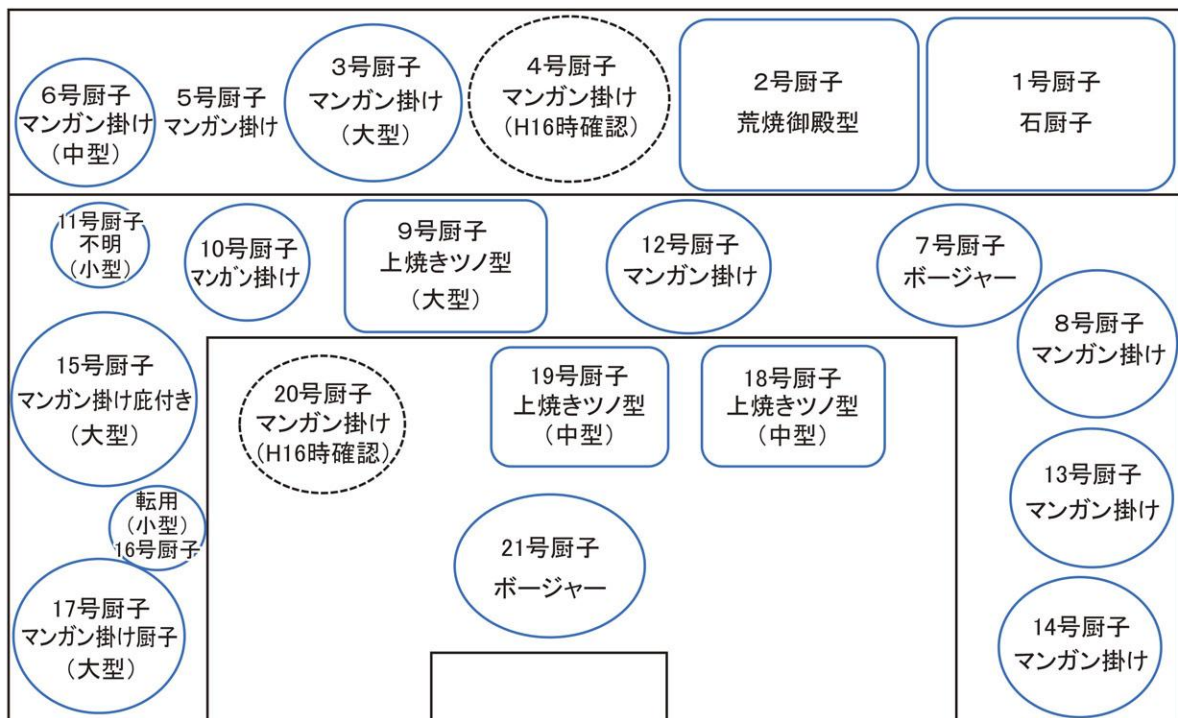
単位: cm

挿図番号 図版番号	厨子 番号	分類	器種	上部径 器高 下部径	器形・成形など	文様・銘書など	出土地		
図版 IV 20	17	マンガン掛け	蓋	8.1	小型の蓋で、2段の撮み台にやや扁平な宝珠形の撮みが傾いて付けられる。ハの字に広がる丸味の体部に、端部の丸い鈿とやや内傾の小さいかえしが付く。内面頂部に大き目の穿孔があり、余った粘土が削られずに残る。内外面をナデ調整する。外面全体にハケ状工具でマンガン釉を施す。	墨書による銘書が体部内面に記される。	二番ダナ		
				11.5					
				25					
			身	25.5	小型のやや胴が張る胴部に口縁が外反し、口唇がやや広めの平坦の成形で内面がわずかに突帯状になる。屋門はアーチ型で1方のマドを穿孔する。底部に6点の爪形の穿孔。ハケ状のもので全面にマンガン釉を施し、口唇、底部に露胎する。内外面をロクロナデで成形し、内面にナデ調整が残る。内底面をユビナデで整える。			外面口縁部下に2条の圏線、頸部に強いナデによる低い突帯が廻る。肩部には蓮弁文を線彫りする。屋門の玉飾りを中心に花卉を数十点貼付する。屋門の左右に蓮華文を線彫りして施文する。胴下部は2条の圏線+波状文+2条の圏線+波状文+3条の圏線が廻る。	二番ダナ
				39.8					
				17.5					
図版 IV 21	18	マンガン掛け	蓋	9.1	全体的に丸みの宝珠形の撮みの下に1段の撮み台を設ける。撮みに対して大きめの体部に端部がやや平坦の鈿と内傾の小さなかえしが付く。かえしは接地しない。内外面はきれいな回転ナデ調整を行う。外面の撮みから鈿の端部にかけてマンガン釉を施す。	文様および銘書は確認できない。	一番ダナ		
				11.2					
				33.5					
			身	33.2	口縁が直口し、口唇を平坦にする。口唇が内側にやや突出する。肩部が張り、底部にむかい窄まる。底部下半が膨らみ、やや不安定。2方のマドを穿孔する。内外面をロクロナデで成形し、内面に粗い調整痕が残る。外面胴部下半はヘラケズリする。底部に半截竹管状の12点の穿孔がみられる。銘書面以外は外面全体にマンガン釉を施す。銘書面に文字はみられない。			口縁下に2条の圏線を廻す。その圏線の下につた状の文様を施すが、薄くて不明瞭。頸部にナデにより突帯を設ける。肩部文様は、波状文+2条の圏線+波状文+貼付突帯でその上に2条の圏線を廻す。唐破風形の屋門を貼り付ける。窓は2ヶ所。左右の蓮華文は型づくりして貼り付ける。茎は又状工具で線彫りし、文様下に貼付突帯を圍繞してその上に2条の圏線を入れる。間を空けて3条の沈線を廻す。	一番ダナ
				65.2					
				24.5					
図版 IV 21	19	マンガン掛け	蓋	8.2	先端のつぶれた宝珠形の撮みの下に、2段の撮み台を設ける。体部に横に伸びる端部が丸い鈿と細く短いかえしが付く。内外面ともに回転ナデ調整で、内外面ともに調整痕がみられる。外面の撮みから鈿にかけてマンガン釉を施し、体部はハケ状の工具で施す。鈿の内面に指状の露胎がみられる。	墨書による銘書が体部内面に記される。	一番ダナ		
				13.2					
				25.2					
			身	24.2	口縁が外反し、口唇を平坦に成形外側にやや張り出す。胴部中ほどで最大径になり、底部にかけて窄まる。枝豆状のマドを2つを穿孔する。底部に爪形の6孔を穿孔する。内外面をロクロナデで成形し、外面胴部下半はヘラケズリで整える。内底面はユビナデでし、ナデ痕がみられる。外面全面に厚めにマンガン釉を施し、口唇・底部付近は露胎する。			口縁下に2条の圏線文を廻し、頸部に強いナデにより粘土が盛り上がり突帯文を成形する。肩部に蕉葉文を施し、その下に2条の突帯文を廻す。アーチ形の屋門で、上部に3つの円文を組み合わせた玉飾りを付ける。屋門の左右に線彫りで蓮華文・蓮葉文を施す。屋門の下は3条の圏線+波状文+3条の圏線+波状文+3条の圏線を配する。	一番ダナ
				44					
				16.7					
図版 IV 22	20	上焼きツノ型	蓋	27.8	入母屋形の蓋で、庇から妻部が立ち上がる。正面に方形のマドを4つ穿孔し、側面にも2つの穿孔する。軒下の垂木を4面とも浮かしぼりて表す。外面から底部内面に白化粧を施し、内面は褐釉を施し、外面は部分的に褐釉やコバルト釉で彩色する。裏面底部に鉄釘が附着する。3つで1セットのツノを表・裏面に2つ、側面に1つ配する。	棟の両端に型取り鯨を配する。表面に唐破風の屋根を貼り付け、屋根中央にツノ付きの龍頭を貼り付ける。唐破風屋根両端と庇部の4隅にツノ付きの型取り獅子頭を配置する。唐破風屋根下に花卉が長めの花文を貼り付ける。側面は円文と2対の格子文を配し、裏面は妻部中ほどに瓦屋根を貼付、両端にツノ付き獅子頭を配する。表面のみ褐釉、コバルト釉で施文する。此裏面に銘書を記す。	シルヒランシ		
				36.5					
				37.5					
			身	37.2	逆台形の長めの胴部に、I字状の脚が4つ付く。方形のマドが裏面をのぞいて2つ穿孔される。底部に丸形の9孔が穿孔される。外面全面に白化粧を施し、部分的に褐釉、コバルト釉で彩色する。内面も全体に白化粧を施し、内面胴部を褐釉で施す。表面に銘書面を設ける。			表面胴上部に唐破風屋根を貼り付ける。屋根両端と中央に型取り獅子頭を配置する。屋根より上の表面に円文を2つ貼り付け、格子文を施す。屋根より下の表面には円文と型取り花卉を組み合わせた花文、型取り蓮華文・蓮葉文を配する。蓮華文、蓮葉文は褐釉やコバルト釉で文様を入れる。表面は他に円文や線取りを配する。側面上部に瓦屋根を貼り付け、屋根下の垂木を浮かし彫りて表す。屋根上の表面には円文と格子文を配する。屋根下には型取りの法師像、蓮華文、蓮葉文、華文、茎を貼付ける。裏面は表面上部に側面同様のしっかりした垂木の瓦屋根を貼り付ける。屋根の上の表面に3つの円文を貼り付ける。表面のみに褐釉やコバルト釉で施文する。	シルヒランシ
				42.4					
				30.2					

第四 - 6 表 B 区 69 号墓 厨子観察表 -5

単位：cm

挿図番号 図版番号	厨子 番号	分類	器種	上部径 器高 下部径	器形・成形など	文様・銘書など	出土地		
図版 IV・ 22	21	上焼きツノ型	蓋	29.3	やや長い庇から妻部が上に伸びる。軒下の浮かし彫りの垂木は全面でみられる。方形のマドを表面に3つ、側面・裏面に2つ穿孔する。外面全面に白化粧を施すが、厚い釉薬のため瓦屋表現が潰れている。褐釉、緑釉、コバルト釉で彩色する。妻部内面は褐釉で施軸し、底部裏面は白化粧を施す。	型取りの鱗を棟の両端に配する。妻上部に唐破風の屋根を貼付、垂木を浮かし彫りで表す。唐破風屋根の両端にツノ付きの型取り獅子頭、屋根中央にツノ付きの型取り龍頭を貼り付ける。屋根下の表面に渦巻き文と円文を組み合わせた花文を貼付、格子文を施す。側面は円文を貼付、格子文を施す。裏面上部に垂木のついた屋根を貼り付け両端にツノ付きの獅子頭を配する。屋根下の表面に3つの円文を貼り付ける。底部4隅にツノ付き獅子頭を配置する。底部裏面に銘書を記している。	シルヒラン		
				41.3					
				40.3					
			身	38.7	底部から外傾して胴部が長く伸びる。底部にL字状の脚を4つ貼り付ける。方形のマドを表面、側面に2つ穿孔し、裏面は円形のマドを3つ穿孔する。底部に丸形の6孔を穿孔する。表面に銘書面を設けるが銘書は記されていない。外面に下地として白化粧を施し、褐釉、コバルト釉で彩色する。内面は口唇から内底面まで白化粧を施し、内胴部は褐釉で施軸する。			胴上部に張り出しの短い唐破風の屋根を貼付、垂木もみられる。屋根中央と両端に型取りの獅子頭を配置する。屋根上の胴部表面に2つの円文を貼り付け、格子文を施す。屋根下の表面は型取りの花文、蓮華文、蓮葉文を配し、円文を貼り付ける。側面は水平の屋根を貼り付け、垂木がみられる。屋根の上の表面は貼付円文と格子文がみられ、屋根下の表面は型取り法師像、蓮華文、蓮葉文、華文を貼り付ける。裏面は側面同様の屋根を貼付、両端に獅子頭を貼り付ける。屋根の上の表面は3つの円文を貼り付ける。	シルヒラン
				44.8					
				31.3					
図版 IV・ 23	22	マンガン掛け	蓋	8.8	先端がつぶれた宝珠形の撮みの下にしっかりした1段の撮み台を設ける。体部に端部の丸いやや垂んだ罫と突起状のかえしが付く。内外面ともにやや強い回転ナデ調整する。外面の撮みから罫にかけてマンガン釉を施す。	文様および銘書は確認できない。	シルヒラン		
				14.7					
				28.5					
			身	28.1	口縁が外反し、口唇は平坦で広めに成形する。長めの胴部に肩部がやや張り、底部に丸形の9点の穿孔。口唇から外面全体にマンガン釉を施軸し、底部に露胎する。内外面をロクロナデ調整し、内面にナデ痕が残る。外面胴部下半はヘラケズリで成形する。			口縁直下に2条の圓線と頸部に低い突帯が廻る。肩部に葉文を線彫りして配する。胴部はアーチ形の屋門で3方のマドを穿孔する。玉飾りの周りに花卉を3点を貼付けする。屋門の左右に線彫りの蓮華文を配置する。胴部下半は4条の凹線文+波状文+3条の凹線文+波状文+2条の凹線文が廻る。	シルヒラン
				56.8					
				20					

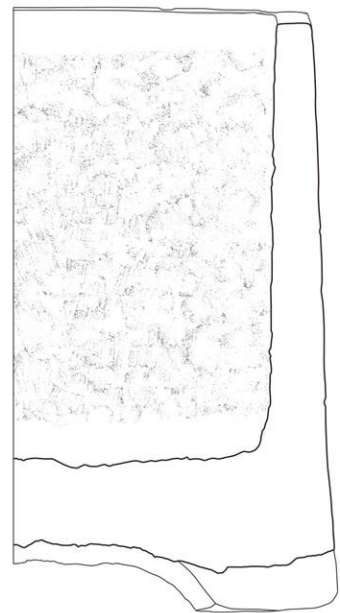
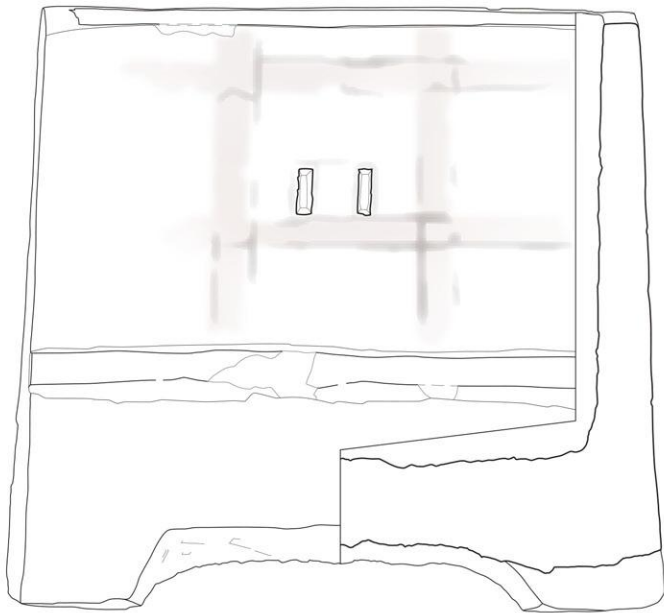
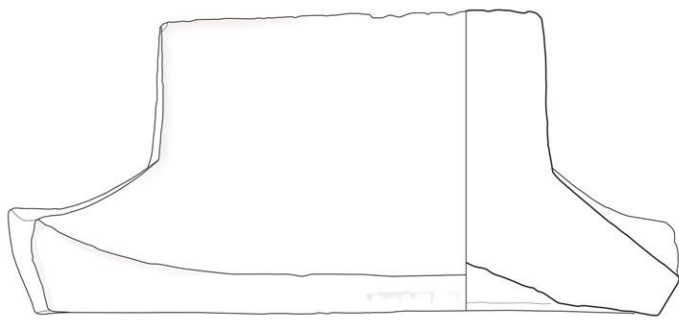


* 点線の円はH16年の分布調査の際に確認された69号墓の墓室内写真より確認。現時点では崩落により確認できていない厨子。

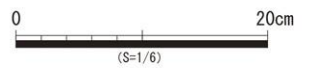
第四 -10 図 B 区 69 号墓 厨子配置の復元 (2019. 07. 11 時点)

第IV - 7表 B区 69号墓 出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm/g)		観察事項	出土地点	
第IV・ 20図・ 図版IV・ 24	105	沖縄産施釉陶器	小杯 III類B	口縁～胴部	口径 器高 底径	8.9 3.25 —	口縁がやや外反し、胴部が張る。厚めの白化粧で、その上から透明釉を施す。見込みは釉剥ぎし、アルミナ痕が残る。	墓庭 造成土
	106	簪	髪差 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	12.0 2.35 0.2~0.4	重量は11.6g。男性用本簪。頭部は弁先が丸い六花弁の花形で、カブが外れて出土。カブ上面は錆で覆われていて、不明瞭。ムディはねじれがなく、細身で、頸との境目は不明瞭。竿の先端は短く丸い。	7号蔵骨器内
	107	簪	髪差 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	11.9 2.65 0.35~0.6	重量は24.9g。男性用本簪。頭部が弁先が鋭い六花弁の花形でカブが外れて出土。カブは高さがあり、上部は錆で覆われていて、不明瞭。ムディはねじれがなく、頸との境目は不明瞭。竿は短く、先端も短く丸い。	13号蔵骨器内
	108	簪	押差 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	11.1 0.5 0.2~0.4	重量は6.5g。男性用副簪。細い耳掻き状のカブで、やや形が歪む。丸い頸に断面が丸味の六角形の竿がつく。全体的に短めで、竿の先端は細く尖る。	6号蔵骨器内
	109	簪	ジーファー 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	13.2 1.3 0.25~0.4	重量は10.3g。女性用本簪。横長の浅いスプーン状のカブ。やや角ばった頸に断面六角形の竿がつく。竿の先端は丸く短い。	8号蔵骨器内
	110	簪	側差 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	18.2 0.65 0.3~0.5	重量は13.2g。女性用副簪。大きめの耳掻き状のカブ。太めの頸で竿の1.5倍以上の長さがあり、頸と竿の境界がはっきりして、頸と比べて竿は細い。竿の先端の尖りはほとんどみられない。	7号蔵骨器内
	111	簪	側差 青銅製	—	長さ 幅 厚さ	18.8 0.45 0.25~0.35	重量は10.5g。女性用副簪。細めのやや長い耳掻き状のカブ。細めの頸からやや太めの竿で、竿の上部が平たく加工される。先端は丸い。竿の真ん中部分でやや曲がる。	13号蔵骨器内
	112	銭貨	寛永通寶 青銅製	—	直径 厚さ 孔径	2.43 0.14 0.61	重量は3.3g。古寛永。背面は無文である。摩滅のためか字が潰れていて不明瞭で、特に「通」の字は錆もあってほとんど判読できない。	15号蔵骨器内
	113	銭貨	寛永通寶 青銅製	—	直径 厚さ 孔径	2.39 0.12 0.62	重量は3.2g。新寛永のマ通。背面は無文である。摩滅が少なく、字がシャープで明瞭にみられる。背は部分的に赤錆に覆われていて、輪が不明瞭。	16号蔵骨器内
	114	銭貨	寛永通寶 青銅製	—	直径 厚さ 孔径	2.31 0.12 0.63	重量は3.1g。新寛永のコ通。背面は無文である。摩滅のためか、字がやや不明瞭。背は青錆に覆われていて、輪が不明瞭で凹凸が薄い。	16号蔵骨器内



1

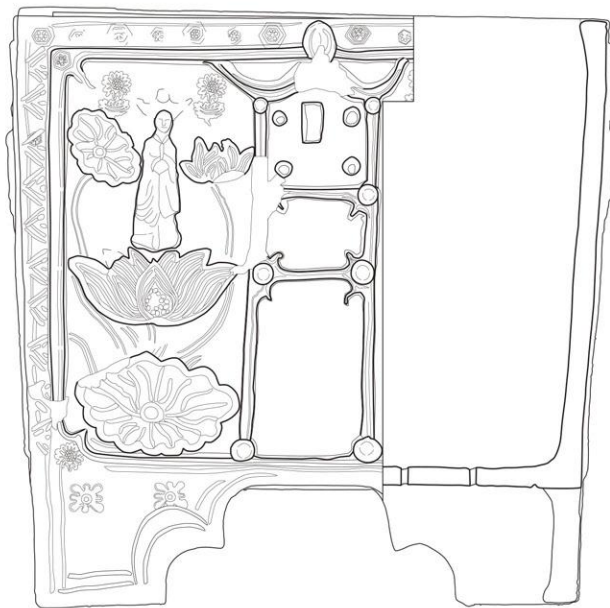
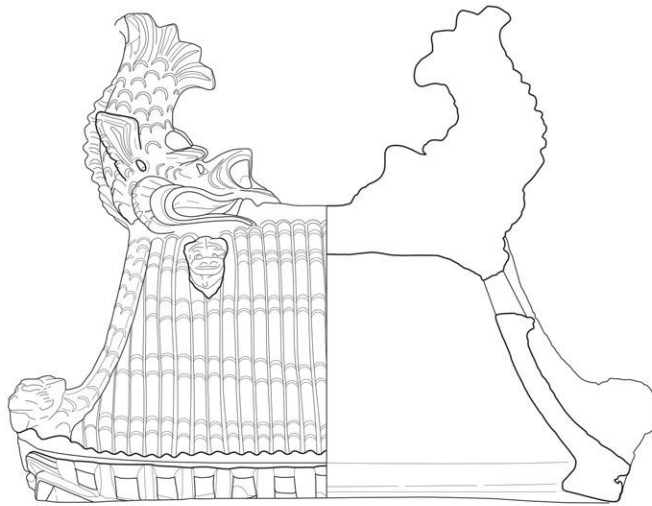


第IV-11图 B区 69号墓 1号厨子(1)

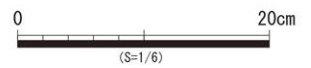


图版IV-11 B区69号墓 1号厨子(1)

浄土に
 往生す
 願す
 住す



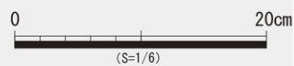
2



第IV-12 図 B区 69号墓 2号厨子 (2)



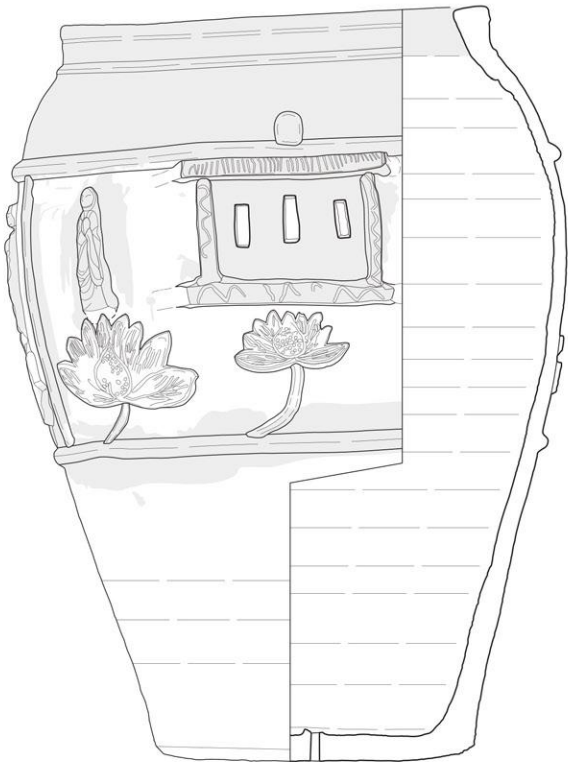
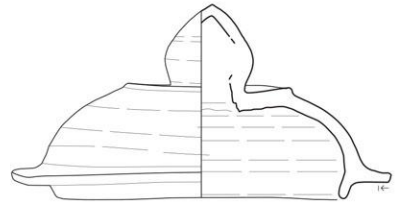
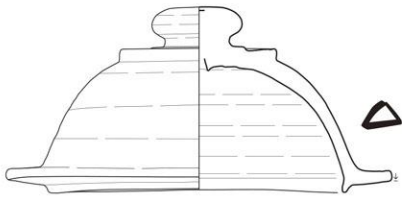
2



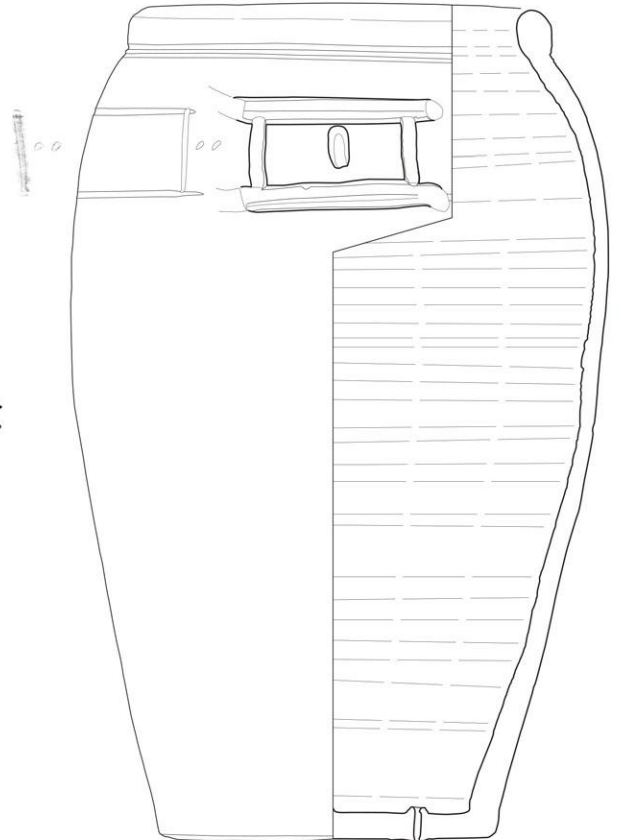
图版IV-12 B区 69号墓 2号厨子(2)

信濃
 彩佐地蔵
 乾徳元年
 三月

信濃
 彩佐地蔵
 乾徳元年
 三月

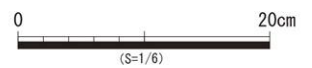


信濃
 彩佐地蔵
 乾徳元年
 三月



3

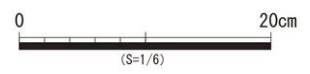
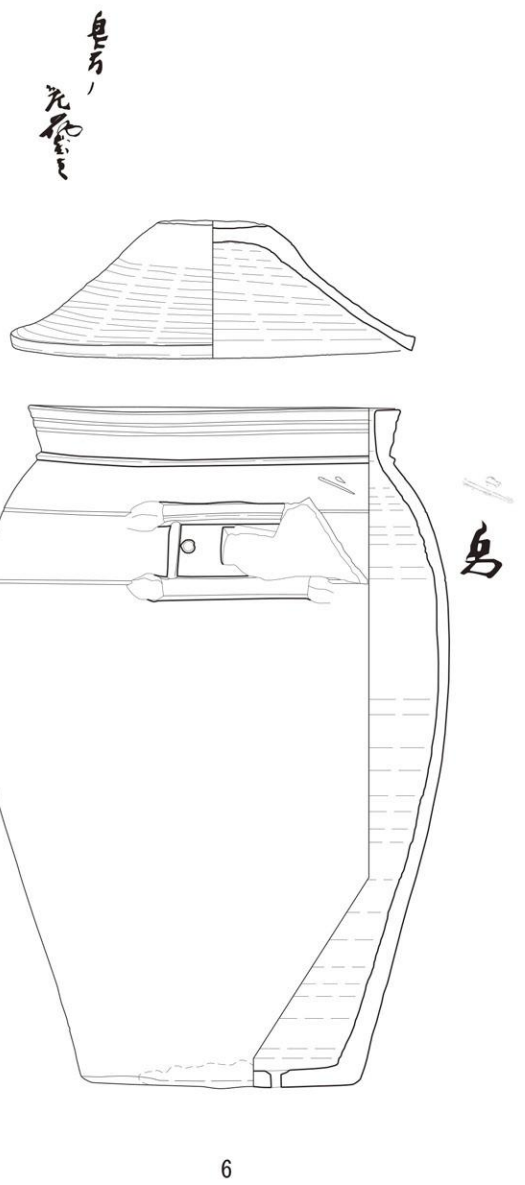
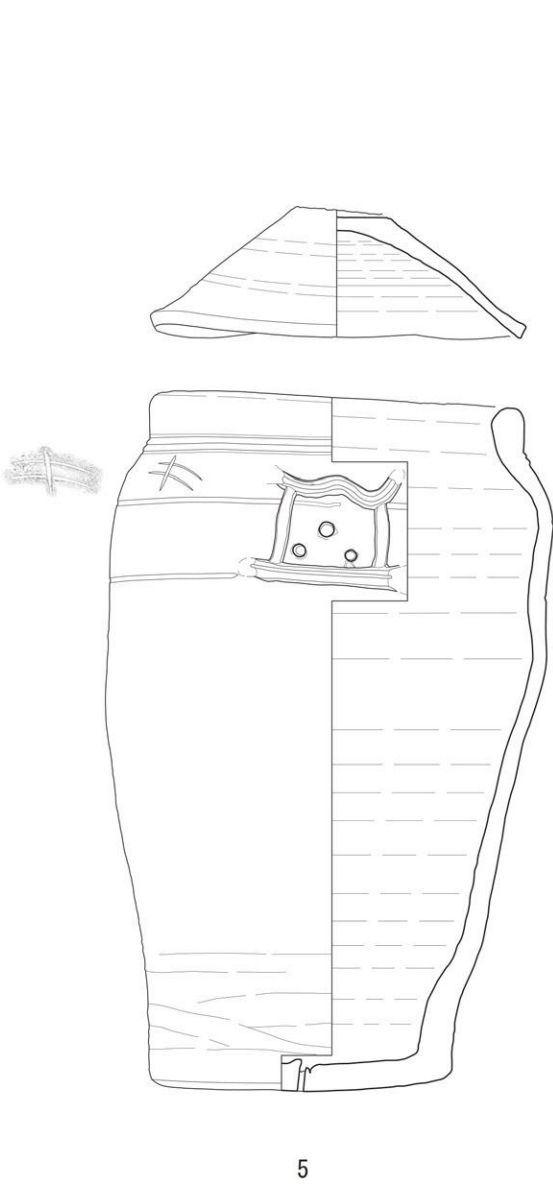
4



第IV-13 图 B区 69号墓 3号厨子 (3) 4号厨子 (4)



图版IV-13 B区 69号墓 3号厨子 (3) 4号厨子 (4)

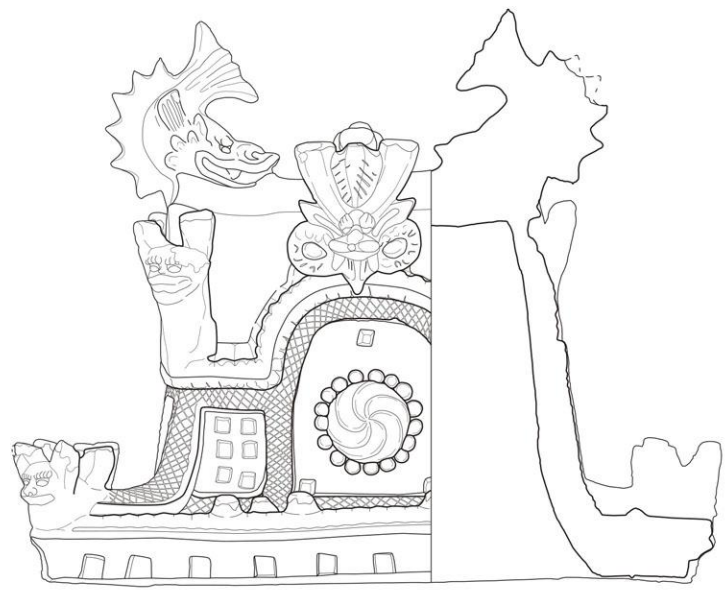


第IV-14图 B区69号墓 7号厨子(5) 11号厨子(6)

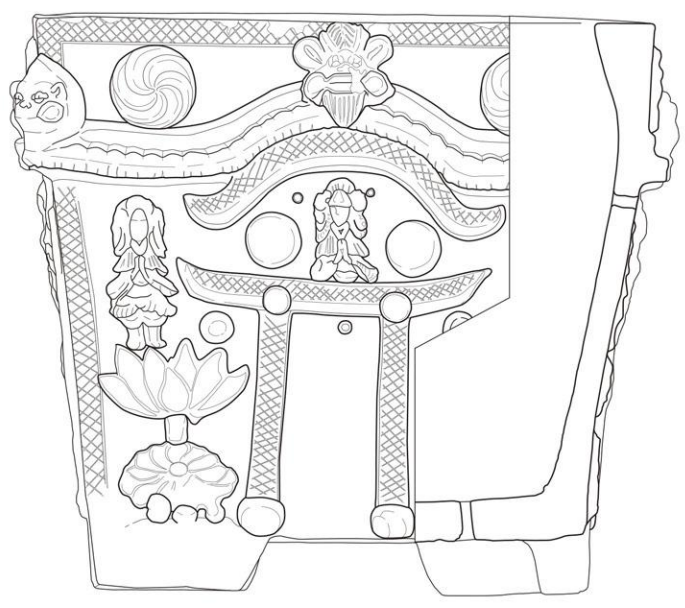


图版IV-14 B区 69号墓 7号厨子 (5) 11号厨子 (6)

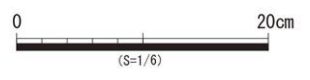
墓主人
光緒二十五年六月廿九日



光緒二十五年六月廿九日



7



第IV-15图 B区69号墓 9号厨子(7)



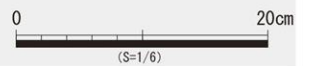
銘書(蓋・鈎裏)



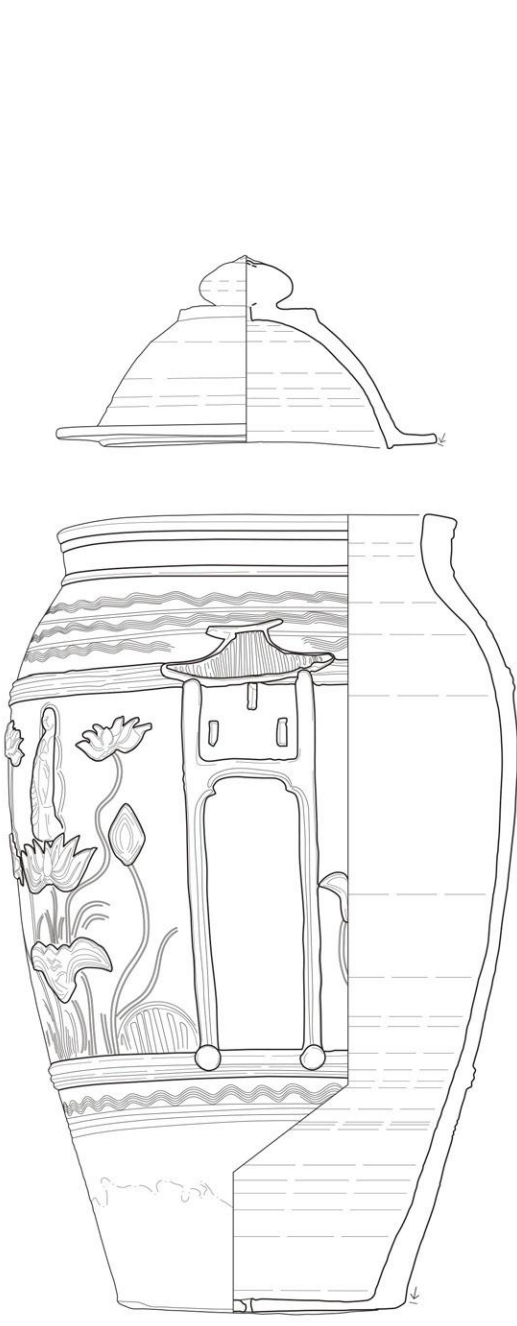
銘書(身・口唇部)



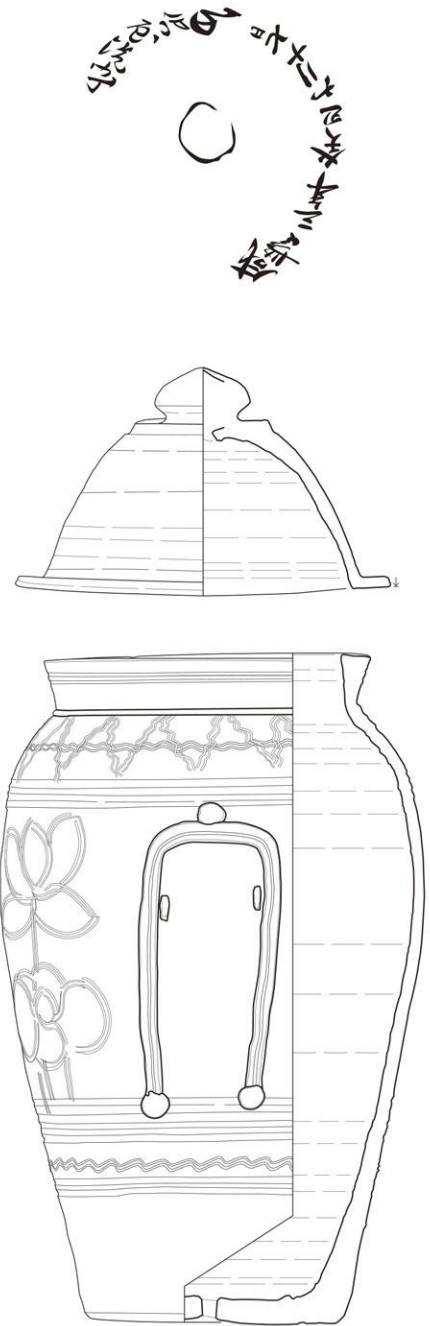
7



图版IV-15 B区69号墓 9号厨子(7)

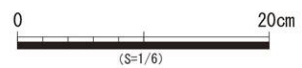


8



9

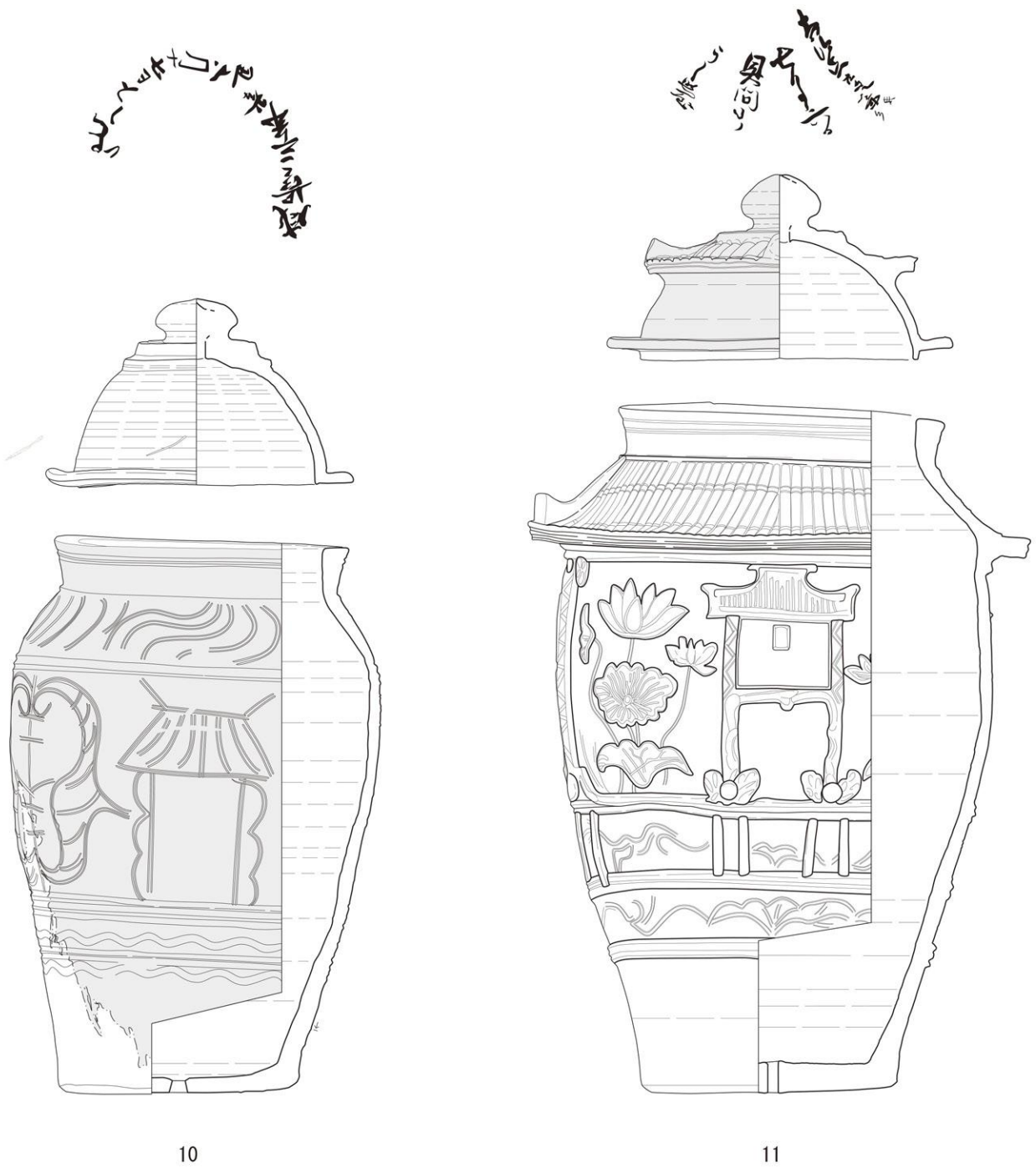
Handwritten text in a circular arrangement, likely a seal or inscription, located above the drawing of Figure 9.



第IV-16图 B区 69号墓 12号厨子(8) 13号厨子(9)



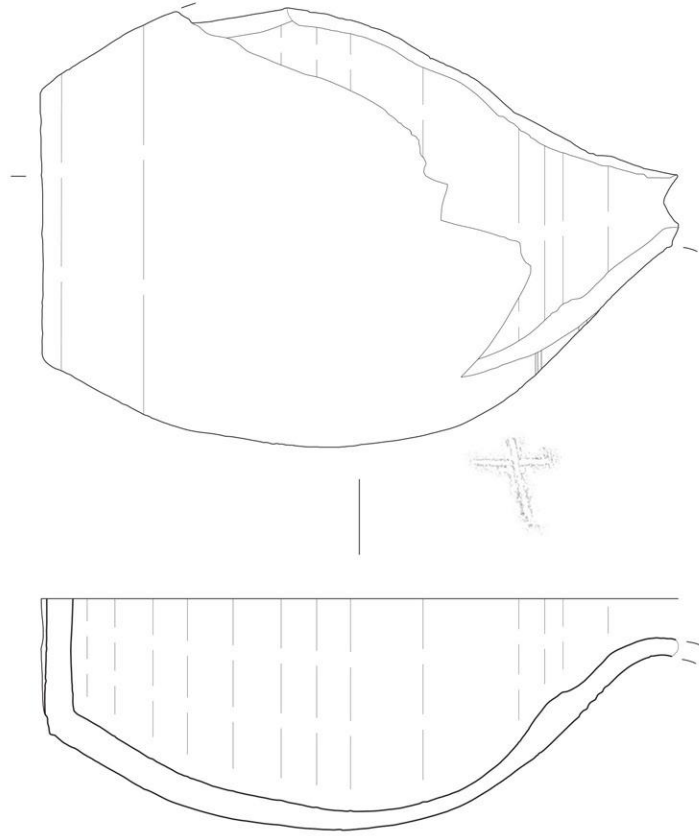
图版IV-16 B区 69号墓 12号厨子(8) 13号厨子(9)



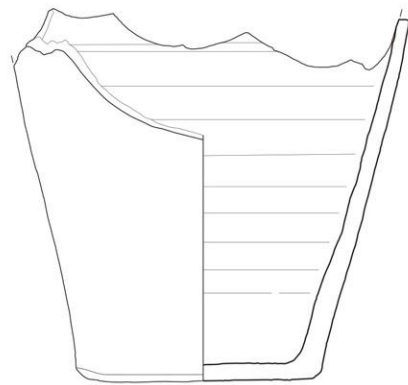
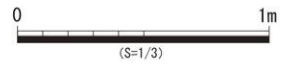
第IV-17图 B区69号墓 14号厨子(10) 15号厨子(11)



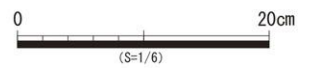
图版IV-17 B区69号墓 14号厨子(10) 15号厨子(11)



12



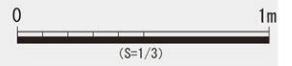
13



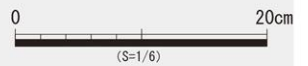
第IV-18图 B区 69号墓 16号厨子 (12) 22号厨子 (13)



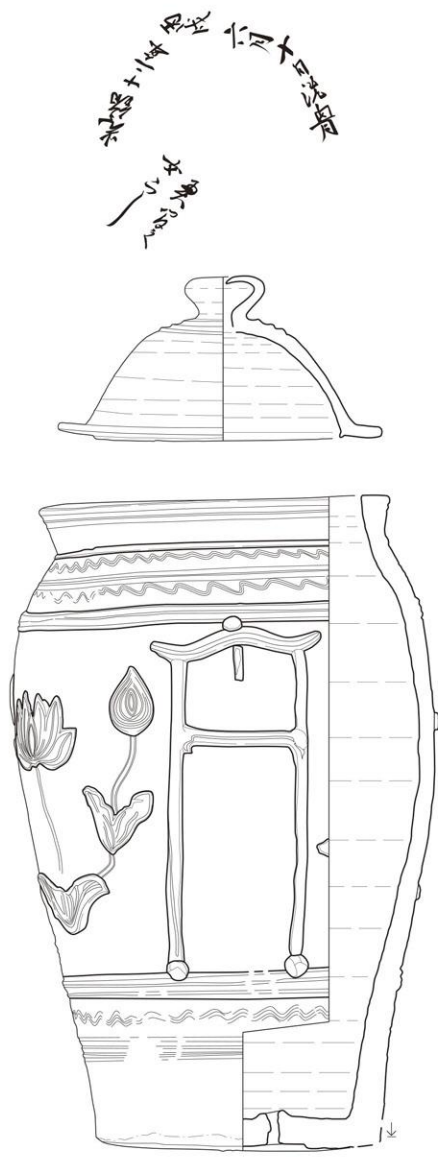
12



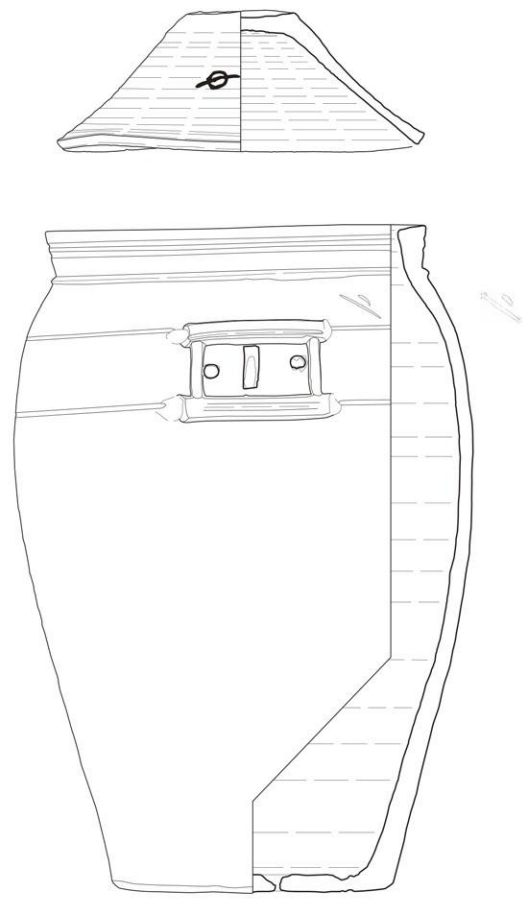
13



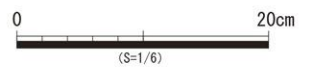
图版IV-18 B区 69号墓 16号厨子(12) 22号厨子(13)



14



15



第IV-19图 B区69号墓 17号厨子(14) 21号厨子(15)



图版IV-19 B区69号墓 17号厨子(14) 21号厨子(15)



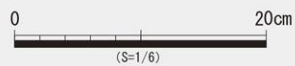
图版IV-20 B区69号墓 5号厨子(16) 6号厨子(17)



18



19

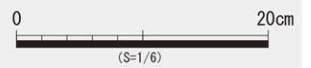


图版IV -21 B区 69号墓 8号厨子 (18) 10号厨子 (19)



20

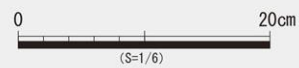
21



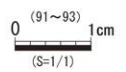
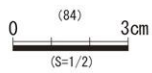
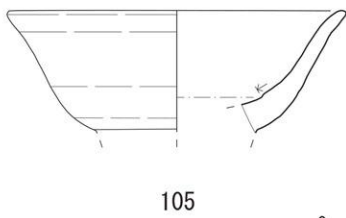
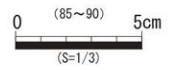
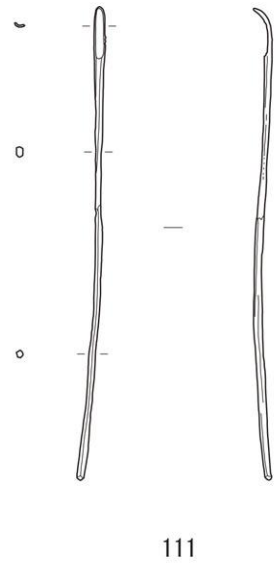
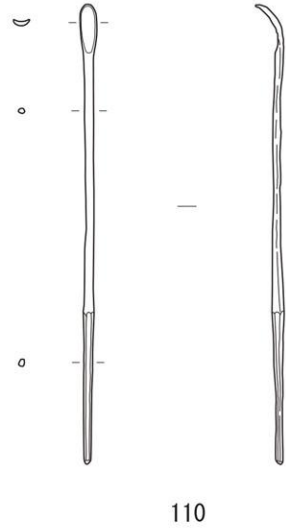
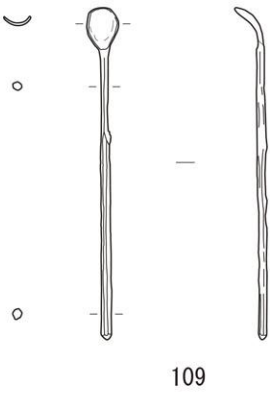
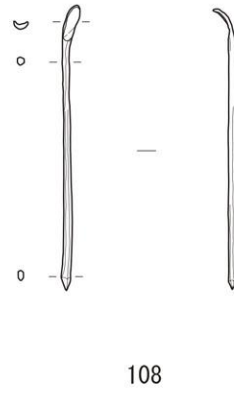
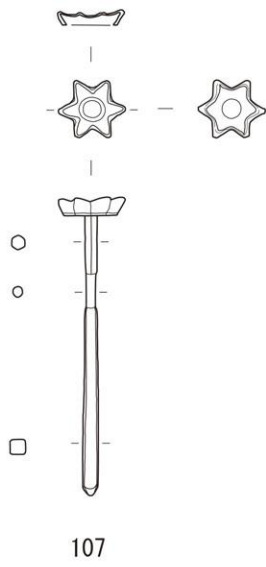
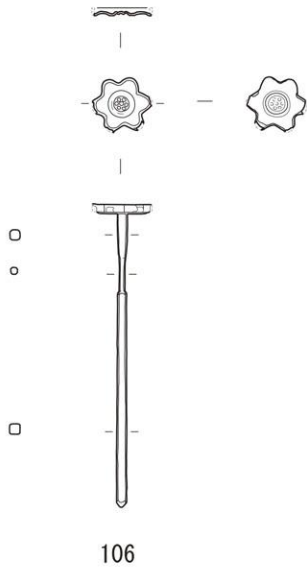
图版IV -22 B区 69号墓 18号厨子 (20) 19号厨子 (21)



22



图版IV-23 B区69号墓 20号厨子(22)



第IV-20图 B区69号墓 出土遺物



图版IV-24 B区 69号墓 出土遗物

第V章 神山後原丘陵古墓群（D区）の調査成果

第1節 基本層序

I層：表土や米軍による造成などで、墓廃絶後の堆積層。

II層：墓使用から墓廃絶までの堆積層。墓使用時の地表面と考えられる。検出箇所により下記のように細分される。

II a層：三味台の使用時の床面。

II b層：墓庭の使用時の床面。

II c層：シルヒラシの床面でレキ層。

III層：墓を構築するさいの造成や石積み構築に伴う造成土。検出箇所により下記のように細分される。

III a₁層：三味台の石列の造成土。

III a₂層：墓庭の造成土。

III a₃層：墓門の石列の造成土。

III a₄層：排水のためとおもわれるレキが多く、しまりのない造成土。

III b₁層：石積みの造成土。クチャブロックを含む。

III b₂層：他から持ってきたクチャによる造成土。沈まないためとおもわれる。

III c層：シルヒラシ造成土。岩盤の上に敷かれる粘性の強めの粘質土。

III d₁層：モルタルの土台となる造成土。表面にモルタルを貼るために扁平な石を敷いていたとおもわれるが、検出時にモルタルが剥がれていたため石がほとんど残っていなかった。

III d₂層：墓屋根のマウンド状を形成する造成土。転圧を受けている。

III d₃層：褐色の粘質土とレキ混じりの砂質シルトが交互に堆積する造成土。

III d₄層：d₃層よりしまりの良い造成土。

※確認掘削により、d₄層より下はレキ造成を確認している。

IV b層：マージの地山。統一層序 VII層に相当。

V層：石灰岩の岩盤。統一層序 VIII層に相当。

第2節 遺構

掘込式の破風墓である。石灰岩丘陵の斜面を利用して構築しており、北東向きに墓口を造る。米軍の基地造成のために墓庭の約1/4が破壊される。

屋根が切妻形で、上に高く水平の眉が短く突き出て後ろの屋根も短い。相方の石積みで囲いモルタルで全体を覆うが、ほとんどが剥がれ落ちている。屋根の左右にも石敷きを構築し、モルタルを施している。眉の横に長形状の白が設置され、水はけのために間に小さな石を挟んでいる。白からモルタル貼りの石積みは庭積みの上の小さな円柱状の白まで伸びている。

墓正面は切石の布積みで表面全体にモルタルを施す。左右の袖石は高めに造られていて、正面同様に表面全体にモルタルで覆う。袖石天井にもモルタルを施すが、一部剥がれ落ちている。墓口は高さ約1.1m、幅約0.6mで、羨道の奥行きは0.9mになる。門石は一枚の石灰岩で上下に何かをかけるための加工が施されている。

三味台は2段あり、墓前はいびつな長方形の一枚石を寝かせてその隙間に相方で石を入れていく。南隅

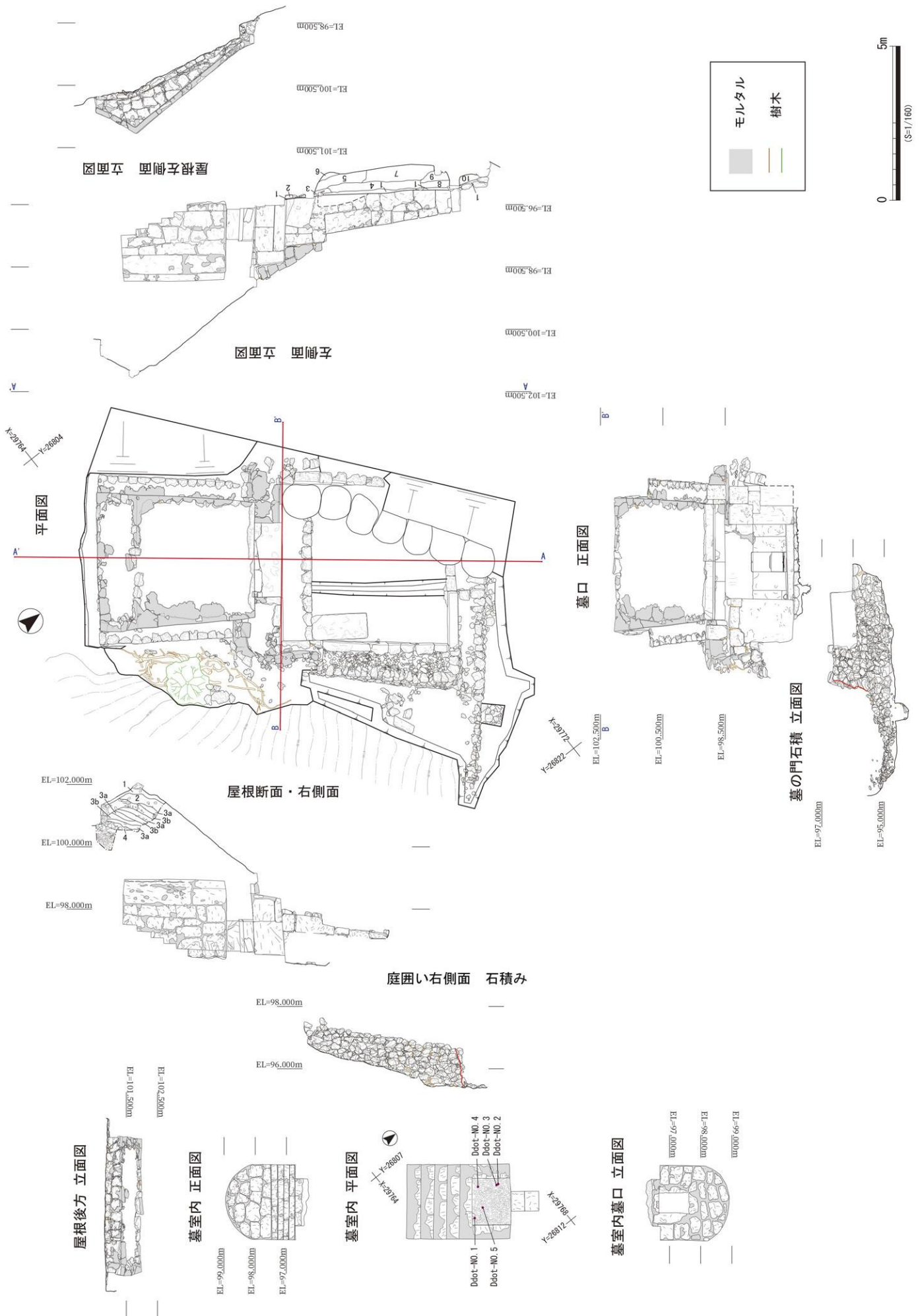
に炭が堆積していてカビアンジとおもわれるが、そこに蓋として使用されていた石はミニチュアサイズの石厨子の蓋を模していた。三味台の前に切石による石列を段状に一段配しており、その内側を石列の上面までレキを含む造成土を充填した造りになっている。2段共に、奥行き約1mになっている。

墓室内は約2.5mの高い天井に平坦コの字の5段で岩盤の上に構築される。墓室の一番ダナはコの字状に石灰岩の切石を配して、石と石との隙間をセメントで埋める。一番ダナの上に切石を配したタナを4段構築する。タナの上に構築する前後左右の壁面は切石を相方積みして、天井は布積みでアーチ状に形成する。目地をセメントで埋め、石積みの石にはノミによる加工痕が明瞭に残る。シルヒラシは幅約1.5m、奥行き約1.2mの略長方形の平面形で平たい石による石敷きを施す。そこから鉄釘等を検出した。墓室内は空で厨子は移葬されたとおもわれるが、墓口は門石と御香炉石できっちり閉められていた。

墓庭は幅約5.0m、奥行き約4.5mでやや横長の長方形になっている。庭囲いは先も述べたが左側は米軍造成により破壊されている。右側のみの残存で、3段構成になっている。内側は切石の相方積みで、L字状になり短い部分は1枚石の大きい長方形を横にして配置される。長いほうの石積みの外側に造成土を盛り、野面積みの石積みをめぐらせる。庭囲いの外に墓道とおもわれる造成土と野面の石積みで構成されたものがみられたが、一人分の道幅で石積みが途中で崩れていることから現調査では墓道かどうかは判断がつかなかった。

第V-1表 D区古墓 基本層序対応関係表

	調査時	報告
I層	墓庭 1層	I
II層	墓庭 2層	II a
	墓庭 4層	II b
	シルヒラシ 1層	II c
III層	墓庭 3層	IIIa ₁
	墓庭 5・6層	IIIa ₂
	墓庭 8・10層	IIIa ₃
	墓庭 7・9層	IIIa ₄
	石積みトレンチ 1層	IIIb ₁
	石積みトレンチ 2層	IIIb ₂
	シルヒラシ 2層	IIIc
	墓屋根トレンチ 1層	IIId ₁
	墓屋根トレンチ 2層	IIId ₂
	墓屋根トレンチ 3a・3b層	IIId ₃
墓屋根トレンチ 4層	IIId ₄	
IV層	石積みトレンチ 3層	IVb層



第V-1図 D区 遺構平面図・立面図



図版V - 1 D区 遺構平面オルソ



着手前状況〔北東から〕



墓口正面 検出状況〔北から〕

図版V - 2 D区-1



墓口正面近影 検出状況



墓室内 掘削前現況〔北から〕



墓室内 掘削前現況〔北から〕



墓室内 掘削前現況〔西から〕



墓室内 掘削前現況〔東から〕



墓室内 掘削前現況〔南から〕



墓室内 掘削前現況〔南から〕



墓室内 シルヒラシ土層〔西から〕



墓室内シルヒラシ 完掘状況〔南から〕



羨道 右側面 検出状況〔北西から〕



カビアンジ墓石 検出状況〔北から〕



墓外 遺物出土状況〔南東から〕



サンミデー土層〔西から〕



墓庭 完掘状況〔南から〕



墓口 完掘状況〔北から〕



庭囲い石積 検出状況〔北東から〕



墓の門 石積〔北から〕



庭囲い石積 検出状況〔東から〕



庭囲い石積 検出状況〔南東から〕



右袖石・右庭囲い〔西から〕



屋根石列 検出状況〔西から〕



屋根後方 検出状況〔南から〕



屋根 土層断面〔南から〕



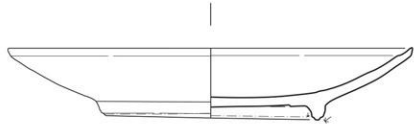
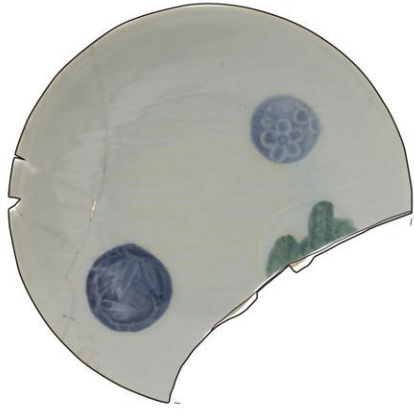
屋根後方 堆積状況〔東から〕

第3節 遺物

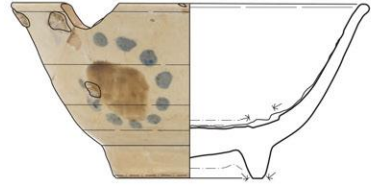
D区の古墓は、墓の改葬がしっかりと行われているとおもわれ、墓室内にはほとんど遺物がなく、きちんと墓口も閉められていた。D区では69点の遺物が出土した。もっとも多く出土したのは平瓦が13点、次いで沖縄産施釉陶器が11点、沖縄産無釉陶器7点となる。他にガラス製品、プラスチック製のクシや小杯等が出土している。出土した厨子はマンガン焼き締め厨子片、上焼ツノ型厨子片で改葬のさいに破棄されたものとおもわれる。またカピアンジの上に置かれた小型の石厨子蓋が出土したが、転用なのか石厨子の蓋を模倣したものなのか今後検討を要する。他にシルヒラシより鉄製の釘と青銅製の釘が出土していて、風葬のさいの棺箱の釘とおもわれる。接收前の改葬が行われたとおもわれるので、ガラス製品やプラスチック製品等の出土品は米軍の可能性が高い。

第V-2表 D区 出土遺物観察表

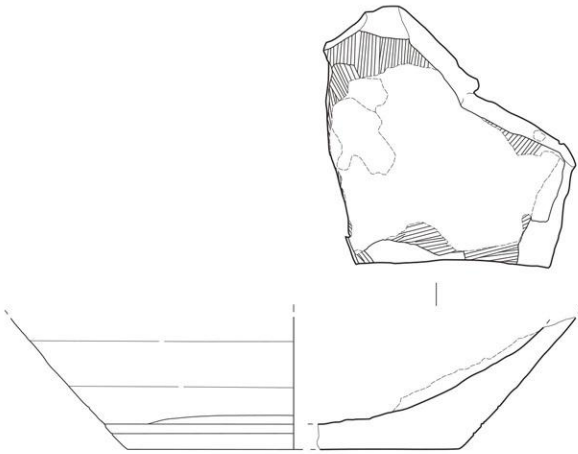
挿図番号 図版番号	種類・器種		部位	法量 (cm/g)		観察事項	出土地点	
第V・2図・図版V・6	115	本土産磁器	皿	口縁～底部	口径 器高 底径	16.0 2.8 8.4	全体に施釉し、高台を釉剥ぎして丸い高台端部を露出する。内面に型成形による文を全体に施し、3つの丸文に「松」「竹」「梅」をそれぞれに施文する。	4 墓上部 清掃中
	116	沖縄産施釉陶器	碗 Ⅲ類B b有	口縁～底部	口径 器高 底径	14.0 6.95 5.75	口縁はゆるい外反で、胴部にナデ調整痕が残る。やや厚い白化粧のに透明釉を施すが、生焼けのため透明度がほとんどない。胴部内面は蛇の目釉剥ぎし、高台端部は白化粧ごと釉剥ぎする。高台にアルミナ痕が付着する。胴部に点花文を3つ配する。内面全体にモルタルが付着する。	13 墓外 盛土一括
	117	沖縄産無釉陶器	擂鉢	胴部～底部	口径 器高 底径	— 5.2 13.2	外に開く胴部に平坦の底部。胴部・底部ともに丁寧なナデ調整。あまい焼成。胴部内面は擂目を潰すようにモルタルが付着。擂鉢以外の目的での使用も考えられる。	3 墓外
	118	ガラス製品	薬品瓶?	口縁～底部	口径 器高 底径	1.6 9.5 4.3×2.8	ネジ栓の口縁で口唇が内面やや下方に外傾して口縁内径を狭める。頸部に1条の突帯を成形する。なで肩のやや長い胴体で、底部は上げ底。底部に「4」「6」の数字と記号状のエンボスがみられる。	10 墓外 盛土一括
	119	プラスチック製品	瓶	口縁～底部	口径 器高 底径	0.8 4.5 1.3	用途不明の小型の瓶。円筒の胴部。	7 墓外 盛土一括
	120	石製家型	蓋	—	上部径 器高 下部径	7.1 13.3 14.0	寄棟形の小型のサンゴ製の蓋。粗い造りで、棟は四角に成形され全体がおにぎりの様な体部で、屋根と垂木との間にぶい稜線がみられる。ノミ状工具で成形後、全体を平滑に仕上げる。下部はノミ痕が明瞭で中央が凹む。カピアンジを蓋するように使用されていた。	23 カピアンジ



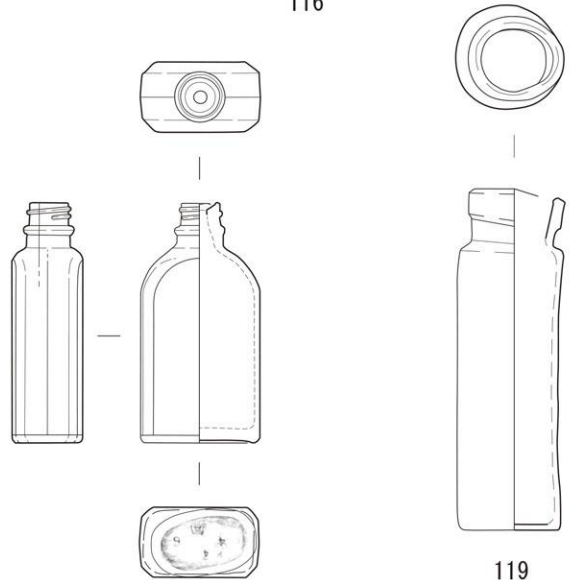
115



116

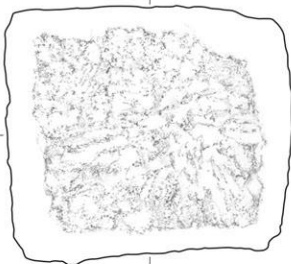
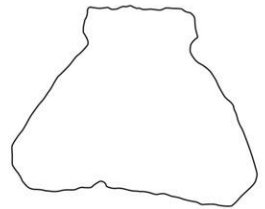
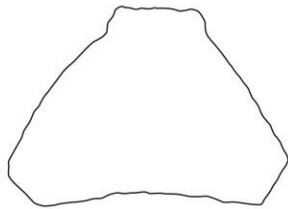
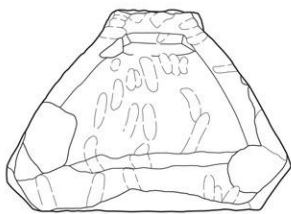
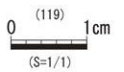
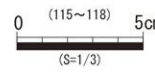


117

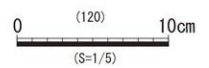


118

119



120



第V-2图 D区出土遺物



图版V-6 D区出土遗物

第VI章 自然科学分析の成果

パリノ・サーヴェイ株式会社

第1節 平成30年度 市道宜野湾11号整備予定地の現地調査

はじめに

市道宜野湾11号は、戦後米軍の接収により普天間飛行場が建設されたため、消失した宜野湾街道（普天間並松）の付け替え道路として国道330号の交通量の緩和を目的に整備されている。

これまでも調査地周辺では、試掘調査が行われており、遺構・遺物の確認と共に、旧地形の検討や自然科学分析を実施し情報を蓄積してきた。

本業務は平成30年度市道宜野湾11号予定地の発掘調査に伴うもので、現地調査と共にサンプリングを実施し、今後の自然科学分析も視野に入れた情報の収集を目的としている。

1. 普天間飛行場の概要

普天間基地は、琉球層群からなる更新世の段丘面上に位置する。宜野湾市域では、更新世の段丘面が中位段丘上位面（標高90m以上）・下位面（50～90m）と低位段丘上位面（30～40m）・下位面（10～30m）の4面に区分されている（上原，2000）。今回の調査地である普天間基地は、中位段丘上位面および下位面に立地している。段丘面の高度分布から、本段丘面は、木庭（1990）の中位段丘面（ESR年代でほぼ20万年前）に対比されることが推定される。中位段丘面上には、島尻マージと称される赤・黄色土が厚く堆積している。中位段丘面の東部には、中新世後期～更新世初期の泥岩を主とする島尻層群からなる丘陵が広がっている。島尻層群は、中位段丘上位面と下位面を境界とする段丘崖付近にも露出している。今回の調査地点は、中位段丘上位面～段丘崖に相当する区域に位置している（上原，2000）。

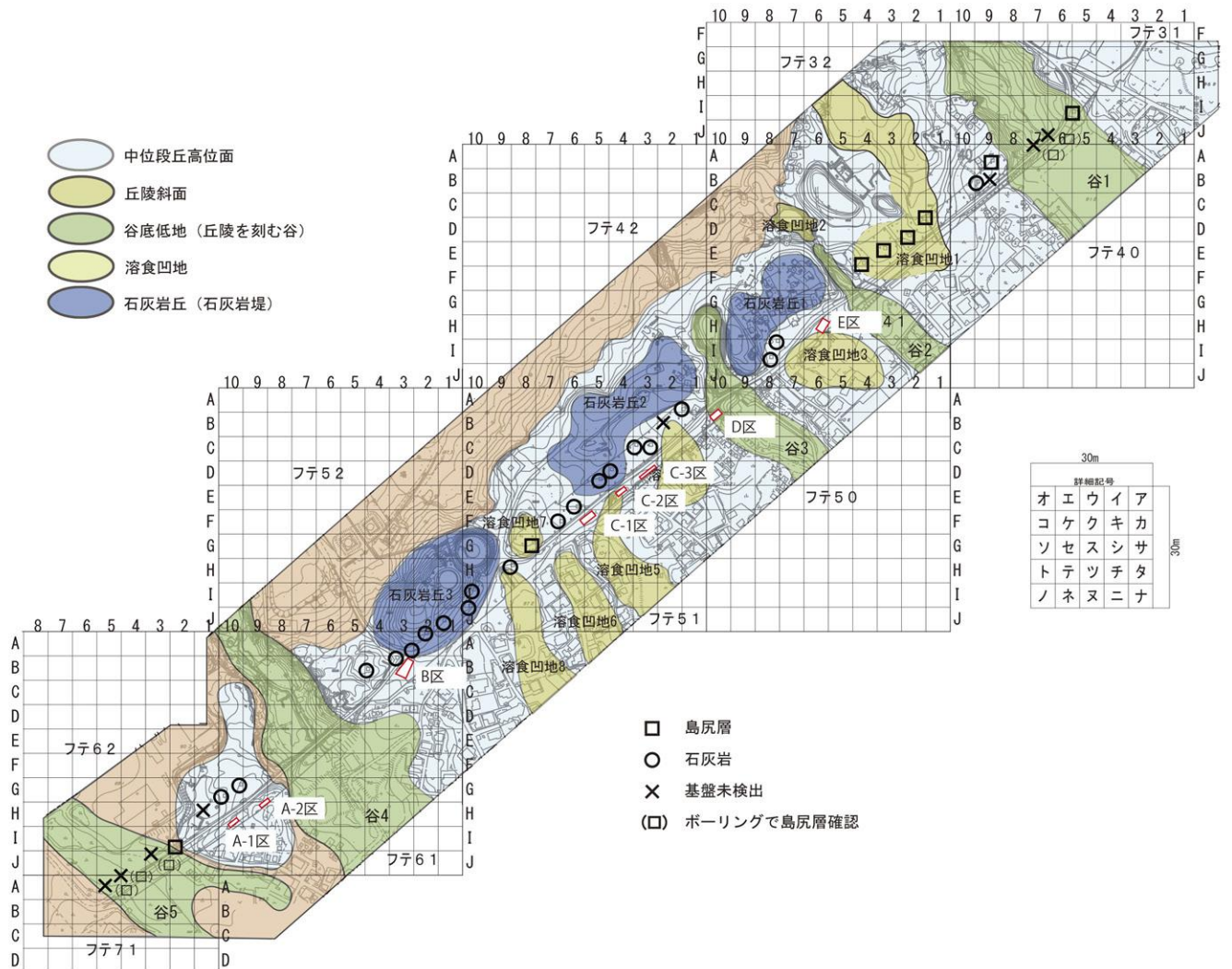
今回の調査地点は、沖縄古来の土壤分類名称では島尻マージの黒土マージにいずれも分類される。これは現代の土壤分類では、成帯内性土壌の石灰質土壌の斑紋型テラフスカ様土に分類される（テラ・フスカとは、ラテン語の「褐色の土」を意味する）。

斑紋型テラフスカ様土は、中位段丘上位面に広く分布し、土層が厚く、下層には角塊状構造が発達し、構造単位の表面には表層から移動集積した粘土によって薄い皮膜が形成され、下層下部と母材上部に多数の鉄やマンガンの斑紋があることで特徴づけられる。しかし、土壌の母材由来については諸説があり、真相はあきらかにされていない。ところで、マンガン斑は一見して有機物と見間違い易く注意が必要であるが、マンガン斑の集積は土層が緻密で排水のやや不良な状態を示している。

2. 調査地の地形と層序の概観

この地域の地形は、調査における堆積物の観察および現地踏査、地形図判読などから、いくつかの地形単元に区分される。今回の調査区は基地南東側の台地面であり、北西側には段丘崖斜面が確認できる。調査地周辺は、石灰岩堤、埋没の痕跡を示す谷状凹地、埋没したドリーネの可能性のある溶食凹地が、これまでの試掘調査などで確認されている。これらの地形面は、宜野湾市史における中位段丘I面（中位段丘高位面）、石灰岩丘、丘陵斜面、丘陵上を刻む谷、谷底低地にそれぞれ対比される（上原，2000）。

第VI-1図の地形分類図は、上原（2000）を元にこれまでの試掘調査成果を踏まえて加筆をしたものである。調査区は基地の南東側の中位段丘I面（中位段丘上位面）位置する。調査区の北西側には石灰岩丘（堤）が



第VI-1図 調査地周辺の地形分類

連なり、石灰岩丘の南西側と基地境界線の間が調査範囲となっている。この台地面ではマージが厚く累重する。特にフテ51区の台地部で顕著であり、平均層厚は2m程度、フテ40付近では最大層厚は3mを超える。ただし、多くの箇所ではマージ上位が改変を受け、本来の層厚は不明な点が多い。基盤は基本的に琉球層群の石灰岩からなるが、一部、島尻層群上位にマージが累重する箇所も見られる。

石灰岩丘(堤)は、北東～南西方向に走向する琉球層群によって構成される基盤岩の高まりである。石灰岩丘上では、基盤層である琉球層群が浅い深度で検出される、あるいは現地表面直下に琉球層群が露出している。基盤岩は、人為的擾乱層であるI・II層ないし、マージの薄層により覆われる。

谷壁斜面および谷底部では、基盤が島尻層群によって構成される傾向がある。この傾向は、これまでの調査時に観察されたものと同様である。島尻層群を基盤とする谷底部では、基盤上位に直接II層が累重する。谷壁斜面部では、マージの累重も見られる。この斜面のマージは分層が困難なものも多く、下位に向けた移動なども推測される。谷壁斜面上部では4m近いマージが直接島尻層群上位に累重する箇所もある。

本調査区には5つの谷地形が認められ、便宜上、北側より谷1～5とした。また、溶食凹地および石灰岩丘についても番号を付し整理した(第VI-1図)。

3. 調査経過

現地での試料採取は発掘調査の進捗状況やその成果に合わせ実施した。試料採取は、発掘担当者との協議し、分析が必要と考えられる箇所において実施した。試料採取の実施日は、7月19日、9月14日、10月3日である。

また、現地における観察および記載は、6月5日、6月20日、7月11日、7月26日、9月26日、9月27日、10月2日に実施している。

試料はA-2区のピット（AS-027、AS-037、AS-040、AS-049）、東壁、北壁、C-2区の礫敷き西壁、C-3区の東壁、E区西壁から採取した。採取した試料は第VI-1表の試料一覧に示し、その採取箇所は附編に示した。

4. 現地調査による成果

(1) A-2区（基本層序）

地形分類図によると、A-2区はマージを基盤とする台地上にあり、比較的平坦な地形を呈している。基本層序からも、マージを母材とした厚い耕作土が確認でき、人の生活に適した地域であったと言える。耕作土は、マージ上位の腐植質な土壌として確認できる。その上位も淘汰の良い砂質の耕作層となっている。表層を含む上部40cmは、3cm以下の石灰岩片などを含み客土にも似るが、基質は砂質で団粒構造を呈し、均質であることから、新しい時期の耕作土の可能性はある。

(2) A区（ピット）

試料採取は、柱穴と想定される4基（AS-027、AS-037、AS-040、AS-049）である。柱穴の掘り込み面は削平されて不明であるが、確認される法量は最上部の直径が85cm～40cm、深さが20cm～60cmを測る。AS-040、AS-049の2基は中央部にやや細い柱痕が明瞭に確認される。直の状態であることや外側の埋土も乱れていないことから、抜かずに放置された可能性もある。AS-027、AS-037の2基については、中央部の最下部に柱の痕跡が確認されるが上部程幅広くなり、外側の埋土も前者の2基に比較すると乱雑の様相を呈することから、柱を取り除く際の攪乱の可能性が想定できる。

また、これら遺構は、平面形は非常に大きいことが特徴である。掘り込み面が上位にあり大型の土坑を呈していたか、そのほかの理由で大きく掘りこんだか、現状では理由を見いだせない。今後の周辺の調査事例を注視したい。

(3) C-2区（礫敷き遺構）

C-2区では、礫敷き遺構が確認された。現状では、道を呈するような連続性は確認できない。上位の堆積を考えると攪乱を受けた可能性もある。基地内の既調査では、C区付近に礫敷き遺構が確認されている。さらに、基地外にある現在の道路とも重なることから、当時からの場所に道が存在した可能性がある。今回、礫敷き遺構の連続性は確認できなかったが、このようなことから、一連の遺構（礫敷きの道）の可能性もあり、引き続き周辺の調査が望まれる。

(4) C-2区（西側谷底部盛土）

最下部ではマージが確認されている。マージ上位はやや暗色で非常に淘汰の良く混入物が少ない。耕作土の可能性もあるが、地形分類図でも示されているように、溶食凹地に位置することを考えると周辺の流れ込みも想定される。この上位は混入物が多く、サイズの異なる土塊と石灰岩片が共に混在し、2次的な層位と考えられる。一定の時間をもって堆積する谷埋土ではなく、土塊が形を残していることを考慮すると、一時期的もたらされた客土と想定される。この整地層の基質は腐植質で耕作土と類似することから耕作土が想定される。

(5) C-3区（基本層序）

下部にマージが確認できる。上位は耕作土で非常に砂質である。これまでの普天間飛行場の試掘調査の成果を考慮すれば、近世から現代の比較的新しい時期の耕作土と想定される。とくに耕作土上部は、団粒構造が顕著である。耕作土は比較的薄い。これは東側に埋没する谷が確認されることから、この谷に向けての流

出が顕著であったと想定される。現表土は堆積状況から考えて整地層である。

この調査区には、長軸で4m程度の暗色部が確認される。この遺構は住居跡などが想定されたが、下部の掘削を行ったところ、遺構の根拠となるような層界が確認できなかった。地表面で定常的に水が使用され、水の浸透によるマンガンなどの化学成分の沈着なども想定される。

(6) E区

E区は、地形分類図の通り溶食凹地に接している。下部は島尻層群泥岩が母材の谷埋め堆積物である。その上位は粘質ではあるが母材がマージである。この境界は不整合となっており、掘削後に周辺マージを投入した可能性がある。この堆積は、均質であることから耕作地の造成の可能性もあるが、このことを見極めるためには、広範囲の調査が必要である。

最下部は、調査終了後に下部を重機で深掘をしたが、青灰色の粘土質の堆積となるものの混入物やその粘土の顔つきから島尻層群ではなく、基盤はさらに下位になると想定する。

5. 今後の展開

分析試料は、目的を想定して採取している。

A-2区の遺構については各層のサンプルを採取している。遺構の時代・時期を検討するために放射性炭素年代測定が検討される。また、遺構の用途の検討のために、微細物分析を行ない、遺構の機能時の痕跡を探ることが肝要である。調査を行ったピットでは可能性が低いもの、植栽痕の可能性なども考慮される場合は、花粉分析や植物珪酸体分析などの植物に関わる情報の収集も有効である。

A-2区、C-3区など基本層序では、遺物の出土が少なかったことを考慮すると、ピットと同様に堆積層の年代測定により年代値を抑えること重要となる。また、基本層序の花粉分析による古環境の検討は、一般的に有効な手法であるが、亜熱帯地域の沖縄では花粉の溶解が想定され、A-2区、C-3区のような好気的環境下ではなじまない。ただし、花粉分析で得られる微粒炭は、無機物であることから残りが良く、その増減により人の影響を考えることができることから、有効な手法の一つと考える。また、土壌の理化学的な分析も耕作を考えるうえで重要な手法である。農耕を行なう上での施肥などの情報を得ることが出来る。一方、古環境の検討においては、微細物分析が有効となる。有機物である花粉とは異なり、微細物分析から回収される炭化種子などは分解に対して強く、有効である。その他微細な遺物も当時の生業を考えるうえで重要な情報となる。

C-2区の石敷き遺構は、年代測定など基本層序と同様な分析が想定されるが、石灰岩の大きさや形状など、微細物分析を含めた状況の記載は必要である。

E区の下部は、溶食凹地縁辺部の低地堆積物である。台地上の好気的環境下にあるA-2区やC-3区と異なり、湿地では花粉などの微化石の保存は良好な傾向があることから、古環境の検討が望まれる。また、ここでは、島尻層群泥岩を母材とする溶食凹地の堆積物を削平し、マージ母材の耕作土?が確認できることから、古環境の検討と合わせて、土地利用を想定した耕作の痕跡の検討も望まれる。

引用文献

上原富二男(2000) 宜野湾市の地形・地質・水。「宜野湾市史 第9巻 資料編8 自然」, p.55-124, 宜野湾市教育委員会文化課。

木庭元晴(1990) 琉球列島第四紀のサンゴ礁形成と島弧変動。サンゴ礁地域研究グループ編 「熱い自然 サンゴ礁の環境誌」, p.155-175。

第VI-1表 試料一覧

地区	採取地	試料番号	試料の質	採取日	調査状況	土壌の状態		備考	
						土色	岩質		
A-2区	AS-027	No. 1	土壌	2018.07.19		10YR	4/6 褐色	砂質シルト	遺構の中央部と外側では差は見られない。柱痕は確認できない。母材は淡い腐植土でマーヅ塊が疎らに混じる。5mm>の黒色塊がある。炭・腐植・マンガンが不明である。
		No. 2	土壌	2018.07.19		10YR	4/6 褐色	砂質シルト	
		No. 3	土壌	2018.07.19		10YR	4/4 褐色	砂質シルト	
		No. 4	土壌	2018.07.19		10YR	4/6 褐色	砂質シルト	
		No. 5	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/4 褐色	砂質シルト	
		No. 6	土壌	2018.07.19		10YR	4/6 褐色	砂質シルト	
	AS-037	No. 1	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4 褐色	砂質シルト	中央部 (No. 1) の砂質 (極細粒砂) シルト。腐植が主体で10~5mmのマーヅが混じる。下部 (No. 2, No. 3) は粘質の腐植土で全体に粘土質シルト。外側 (No. 4, No. 5, No. 6, No. 7) はマーヅを母材とした埋土。明暗のマーヅが霜降り状混じる。この遺構が柱穴とするならば、直径は60cmは非常に大きい。他の用途も含める類例の検討が必要である。
		No. 2	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/3 褐色	粘土質シルト	
		No. 3	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4 褐色	粘土質シルト	
		No. 4	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/6 褐色	シルト	
		No. 5	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/6 褐色	シルト	
		No. 6	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4 暗褐色	シルト	
		No. 7	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/6 褐色	シルト	
	AS-040	No. 1	土壌	2018.07.19		10YR	2/3 黒褐色	粘土質シルト	中央部 (No. 1, No. 2, No. 3) は砂質シルト。炭を多量に含む。下部 (No. 3) は孔隙が多い。またらにマーヅ粒を含む。外側の一部 (No. 8) は腐植が多く、マーヅは少ない。柱穴とするならば、中央部の柱痕は小さい。一方で遺構全体は大きく、柱痕が斜めに傾斜していることが特徴的である。
		No. 2	土壌	2018.07.19		10YR	2/2 黒褐色	粘土質シルト	
		No. 3	土壌	2018.07.19		10YR	3/4 暗褐色	粘土質シルト	
		No. 4	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/4 褐色	シルト	
		No. 5	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4 暗褐色	シルト	
		No. 6	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4 暗褐色	シルト	
		No. 7	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4 暗褐色	シルト	
		No. 8	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4 暗褐色	シルト	
		炭	炭	2018.07.19		No. 1の最下部より採取			
	AS-049	No. 1	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4 暗褐色	砂質シルト	中央部 (No. 1) は層界にマンガンの濃集らしきものがある。外側 (No. 2, No. 3, No. 4, No. 5) はマーヅ (IV・VI) を母材とする埋土を想定。遺構全体的に粘質強い。焼土粒、炭、マンガン (2mm>) が散在。中央部は柱痕と想定される。柱痕の層界は明瞭であることから、抜かずにそのまま放置の可能性も考えられる。
		No. 2	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/4 暗褐色	粘土質シルト	
		No. 3	土壌	2018.07.19		7.5YR	4/4 暗褐色	粘土質シルト	
		No. 4	土壌	2018.07.19		10YR	3/4 暗褐色	粘土質シルト	
		No. 5	土壌	2018.07.19		10YR	3/4 暗褐色	粘土質シルト	
	東壁	No. 1	土壌	2018.07.19		10YR	3/3 暗褐色	砂質シルト	孔隙が多い。現在の耕作土。焼土、ニービ、炭が疎らに入る。砂含む。30mm>の石灰岩が混ざる。淘汰の良い耕作土。VII層母材。初期の耕作層もしくは短期間の耕作層。下層との境は不明瞭な不整合である。マーヅはVII層に似る。
		No. 2	土壌	2018.07.19		10YR	3/3 暗褐色	砂質シルト	
		No. 3	土壌	2018.07.19		10YR	3/4 暗褐色	砂混り粘土シルト	
No. 4		土壌	2018.07.19	10YR		3/4 暗褐色	粘土質シルト		
No. 5		土壌	2018.07.19	7.5YR		4/6 褐色	シルト		
北壁	No. 1	土壌	2018.07.19		10YR	3/4 暗褐色	砂質シルト	現在の耕作土。孔隙多い。炭、焼土が多い。東壁の耕作土と同じ砂が多く、淘汰が良い。下層との境は不整合。マーヅはV層に似る。	
	No. 2	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4 暗褐色	砂質シルト		
	No. 3	土壌	2018.07.19		7.5YR	3/4 暗褐色	粘土質シルト		
C-2区	礫敷き北壁	No. 1	土壌	2018.10.03		10YR	4/4 褐色	砂質シルト	西側の谷を埋めるための盛土。上位は上部の礫敷き遺構である (現代)。西側の谷を埋めるための盛土。下部の礫敷き遺構。礫を敷設するための整地層。谷を埋めるための盛土。マーヅと想定。
		No. 2	土壌	2018.10.03		10YR	4/6 褐色	砂質シルト	
		No. 3	土壌	2018.10.03		10YR	4/6 褐色	砂質シルト	
		No. 4	土壌	2018.10.03		10YR	4/6 褐色	砂質シルト	
		No. 5	土壌	2018.10.03		10YR	3/4 暗褐色	砂質シルト	
		No. 6	土壌	2018.10.03		7.5YR	4/6 褐色	粘土質シルト	
C-3区	南壁	No. 1	土壌	2018.10.03		7.5YR	3/4 暗褐色	砂質シルト	団粒構造を呈し耕作土と想定される。腐植質。本層上位は整地土である。マーヅにも似るが、わずかながら混入物も確認されることから、耕作土と想定。一時的なものか？マーヅと想定。
		No. 2	土壌	2018.10.03		7.5YR	3/4 暗褐色	砂質シルト	
		No. 3	土壌	2018.10.03		7.5YR	4/6 褐色	シルト	
E区	西壁	No. 1	土壌	2018.09.14		10YR	4/6 褐色	粘土質シルト	削平後の盛土である (2回目)。下位と同様に耕作のための盛土の可能性もある。母材はマーヅ。谷埋め堆積物の掘削後 (1回目)、耕作のために盛土をした可能性あり。淘汰が良いことを考慮すると、耕作が行われた可能性あり。谷埋め堆積物 (母材は島尻層群泥岩)。調査後の重機掘削で青灰色の粘土を確認 (混入物や粘土の質から島尻層群の基盤はさらに下位と想定。
		No. 2	土壌	2018.09.14		10YR	4/6 褐色	粘土質シルト	
		No. 3	土壌	2018.09.14		10YR	4/6 褐色	粘土質シルト	
		No. 4	土壌	2018.09.14		10YR	4/6 褐色	粘土質シルト	
		No. 5	土壌	2018.09.14		10YR	4/4 褐色	粘土質シルト	
		No. 6	土壌	2018.09.14		10YR	3/4 暗褐色	シルト質粘土	
		No. 7	土壌	2018.09.14		10YR	3/3 暗褐色	シルト質粘土	

第2節 令和元年度 市道宜野湾11号整備予定地における自然科学分析

はじめに

市道宜野湾11号は、戦後米軍の接収により普天間飛行場が建設されたため、消失した宜野湾街道（普天間並松）の付け替え道路として国道330号の交通量の緩和を目的に整備されている。

これまでも調査地周辺では、試掘調査が行われており、遺構・遺物の確認と共に、旧地形の検討や自然科学分析を実施し情報を蓄積してきた。

本報告では、平成30年度に実施した市道宜野湾11号予定地の発掘調査に伴う現地調査の際に採取した土壌試料を対象に、遺構の時期や用途、耕作や整地に伴う検討を目的として、放射性炭素年代測定、花粉分析・微粒炭分析、微細物分析を実施する。

1. 試料

試料は、平成30年度の発掘調査の際、弊社社員が現地に赴き、発掘担当者と協議の結果分析が必要と考えられる箇所において実施した。試料はA-2区のピット(AS-027、AS-037、AS-040、AS-049)、東壁、北壁、C-2区の礫敷き西壁、C-3区の東壁、E区西壁から採取した。現地調査による成果については、前報を参照願いたい。

採取した土壌、並びに抽出した炭化物を対象に、放射性炭素年代測定9点、花粉分析・微粒炭分析12点、微細物分析11点をを実施する。試料の層相、採取位置などの詳細、および分析項目一覧を第VI-2表に示す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料はAMS法で実施する。炭化物試料は表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理:AAA)。濃度はHCl、NaOH共に最大1mol/Lである。一方、試料が脆弱で1mol/Lでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度のNaOHの状態での処理を終える。その場合はAaAと記す。

土壌試料は、後代の根などをピンセットで除去したあと、1Mの塩酸を加えて含まれる炭酸塩を溶かし、その後中性になるまで水洗を繰り返す。試料をすりつぶして乾燥させ、分析用試料とする(HClと記す)。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、14Cの計数、13C濃度(13C/12C)、14C濃度(14C/12C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。

$\delta^{13}C$ は試料炭素の13C濃度(13C/12C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とし

第VI-2表 試料一覧および分析項目一覧

地区	採取地	試料番号	AMS	花粉・微粒炭	微細物	備考	分析備考	
A-2区	AS-027	No.1				遺構の中央部と外側では差は見られない。 柱痕は確認できない。 母材は淡い腐植土でマージ塊が疎らに混じる。 5mm>の黒色塊がある。炭・腐植・マンガンか不明である。	遺構の用途、時期の検討	
		No.2	1					
		No.3			1			
		No.4						
		No.5						
		No.6						
	AS-037	No.1					中央部(No.1)の砂質(極細粒砂)シルト。 腐植が主体で10~5mmのマージが混じる。 下部の(No.2, No.3)は粘質の腐植土で全体に粘土質シルト。 外側(No.4, No.5, No.6, No.7)はマージを母材とした埋土。 明暗のマージが霜降り状混じる。 この遺構が柱穴とするならば、直径は60cmは非常に大きい。 他の用途も含める類例の検討が必要である。	遺構の用途、時期の検討
		No.2	1		1			
		No.3						
		No.4						
		No.5						
		No.6						
		No.7						
	AS-040	No.1		1			中央部(No.1, No.2, No.3)は砂質シルト。炭を多量に含む。下部(No.3)は孔隙が多い。まだらにマージ粒を含む。外側の一部(No.8)は腐植が多く、マージは少ない。 柱穴とするならば、中央部の柱痕は小さい。一方で遺構全体は大きく、柱痕が斜めに傾斜していることが特徴的である。	遺構の用途、時期の検討
		No.2						
		No.3			1			
		No.4						
		No.5						
		No.6						
		No.7						
		炭						
	AS-049	No.1		1		1	中央部(No.1)は層界にマンガンの濃集らしきものがある。外側(No.2, No.3, No.4, No.5)はマージ(IV・VI)を母材とする埋土を想定。 遺構全体的に粘質強い。 焼土粒、炭、マンガン(2mm>)が散在。 中央部は柱痕と想定される。柱痕の層界は明瞭であることから、抜かずそのまま放置の可能性も考えられる。	遺構の用途、時期の検討
		No.2						
		No.3						
No.4								
No.5								
東壁	No.1					孔隙が多い。現在の耕作土。	耕作とその時期の検討	
	No.2			1		焼土、ニービ、炭が疎らに入る。砂含む。 30mm>の石灰岩が混ざる。		
	No.3		1	1	1	淘汰の良い耕作土。		
	No.4			1	1	VII層母材。初期の耕作層もしくは短期間の耕作層。下層との境は不明瞭な不整合である。		
	No.5					マージはVII層に似る。		
北壁	No.1					現在の耕作土。 孔隙多い。	耕作とその時期の検討	
	No.2		1	1	1	炭、焼土が多い。東壁の耕作土と同じ砂が多く、淘汰が良い。下層との境は不整合。		
	No.3					マージはV層に似る。		
C-2区	礫敷き北壁	No.1				西側の谷を埋めるための盛土。 上位は上部の礫敷き遺構である(現代)。	整地層の検討	
		No.2				西側の谷を埋めるための盛土。		
		No.3				下部の礫敷き遺構。		
		No.4			1	礫を敷設するための整地層。		
		No.5			1	谷を埋めるための盛土。		
		No.6				マージと想定。		
C-3区	南壁	No.1			1	団粒構造を呈し耕作土と想定される。腐植質。 本層上位は整地土である。	耕作とその時期の検討	
		No.2		1	1	マージにも似るが、わずかながら混入物も確認されることから、耕作土と想定。一時的なものか？		
		No.3				マージと想定。		
E区	西壁	No.1				削平後の盛土である(2回目)。 下位と同様に耕作のための盛土の可能性もある。	耕作とその時期の検討 当時の環境の検討	
		No.2			1			
		No.3		1	1	母材はマージ。 谷埋め堆積物の掘削後(1回目)、耕作のために盛土をした可能性あり。淘汰が良いことを考慮すると、耕作が行われた可能性あり。		
		No.4			1			
		No.5			1			
		No.6		1	1	谷埋め堆積物(母材は島尻層群泥岩)。		
		No.7			1	谷埋め堆積物(母材は島尻層群泥岩)。調査後の重機掘削で青灰色の粘土を確認(混入物や粘土の質から島尻層群の基盤はさらに下位と想定)。		
合計点数			9	12	11			

1)AMS:放射炭素年代測定、花粉・微粒炭:花粉分析・微粒炭分析、微細物:微細物分析

た年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach,1977)。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している) 等を用いて作られている。暦年較正に用いるソフトウェアは Oxcal4.3 (Bronk,2009)、較正曲線は Intcal13 (Reimer et al.,2013) を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値 (1 年単位) を記す。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 $5,730 \pm 40$ 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している) 等を用いて作られており、最新のものは 2013 年に発表された Intcal13 (Reimer et al.,2013) である。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値 (1 年単位) を記す。

(2) 花粉分析・微粒炭分析

試料 10cc を正確に秤り取り、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛、比重 2.2) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9、濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。処理後の残渣を定容してから一部をとり、グリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査して、出現する全ての種類を対象に 200 個体以上同定・計数する (化石の少ない試料ではこの限りではない)。同定は、当社保有の現生標本や島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007) 等を参考にする。

また、花粉プレパラート中に含まれる微粒炭 (微細な炭化植物片) の含量が、自然植生に対する人類干渉の指標として有効であるとされていることから (安田,1987 など)、試料中に含まれる微粒炭の含量も求める。微粒炭は花粉プレパラート内に残存するものを対象とし、同定基準は山野井 (1996)、井上ほか (2002) 等を参考にする。計数は、山野井 (1996) などを参考にし、長径が約 $20\mu\text{m}$ 以上の微粒炭を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。微粒炭量は、山野井 (1996) などを参考とし、分析土壌量 (cc)、分析残渣量 (ml)、プレパラート作成量 (μl) を測定し、堆積物 1cc あたりに含まれる個数を一覧表に併せて示す。この際、有効数字を考慮し、10 の位を四捨五入して 100 単位に丸める。

(3) 微細物分析

土壌試料から炭化種実等を分離・抽出するために、試料 70 ~ 1,000g を常温乾燥後、水を満たした容器内に投入し、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す (約 20 回)。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。水洗後、水に浮いた試料 (炭化物主体) と水に沈んだ試料 (砂礫主体) を、

それぞれ粒径 4mm、2mm、1mm、0.5mm の篩に通し、粒径別に常温乾燥させる。

水洗・乾燥後の炭化物主体試料・砂礫主体試料を、大きな粒径から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実の他、主に径 2mm 以上の炭化材や土器片などの遺物を抽出する。

種実同定は、現生標本や石川 (1994)、中山ほか (2010)、鈴木ほか (2018) 等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表と図で示す。また、各分類群の写真を添付して同定根拠とする。

種実以外は、土器片は個数と重量、最大径、炭化材は重量と最大径、炭化材主体、植物片、植物片主体、砂礫主体は粒径別重量を一覧表に併記する。分析後は、抽出物と残渣を容器に入れて保管する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第VI-3表、第VI-2図に示す。試料の測定年代(補正年代)は、A-2区のAS-027 No.2が155±20yrBP、AS-037 No.3が1,750±20yrBP、AS-040 No.1が190±20yrBP、AS-049 No.1が185±

第VI-3表 放射性炭素年代測定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正用	暦年較正年代				Code No.										
						年代値			確率%											
A-2区 AS-027 No.2	炭化物	AAA	155±20	-28.72±0.34	153±20	σ	cal AD 1676 - cal AD 1691	274 - 259	calBP 10.6	pal- 12480	YU- 10962									
							cal AD 1729 - cal AD 1777	221 - 173	calBP 36.1											
						2σ	cal AD 1796 - cal AD 1810	151 - 140	calBP 8.6											
							cal AD 1925 - cal AD 1941	25 - 9	calBP 12.9											
							cal AD 1667 - cal AD 1698	283 - 252	calBP 15.9											
							cal AD 1725 - cal AD 1783	225 - 167	calBP 39.5											
A-2区 AS-037 No.3	炭化物	AAA	1,750±20	-28.61±0.48	1,752±21	σ	cal AD 249 - cal AD 262	1701 - 1688	calBP 13.7	pal- 12481	YU- 10963									
							cal AD 278 - cal AD 328	1672 - 1622	calBP 54.5											
						2σ	cal AD 234 - cal AD 346	1716 - 1604	calBP 95.4											
							A-2区 AS-040 No.1	炭化物	AaA			190±20	-25.45±0.39	192±20	σ	cal AD 1665 - cal AD 1680	285 - 270	calBP 15.9	pal- 12482	YU- 10964
																cal AD 1764 - cal AD 1787	186 - 163	calBP 23.8		
															2σ	cal AD 1792 - cal AD 1801	158 - 149	calBP 7.9		
cal AD 1939 - cal AD -	11 - -	calBP 20.5																		
cal AD 1660 - cal AD 1684	290 - 266	calBP 20.0																		
cal AD 1735 - cal AD 1806	215 - 144	calBP 52.2																		
A-2区 AS-049 No.1	炭化物	AaA	185±20	-28.19±0.39	186±20	σ	cal AD 1797 - cal AD 1803	153 - 147	calBP 5.0	pal- 12483	YU- 10965									
							cal AD 1938 - cal AD -	12 - -	calBP 18.2											
						2σ	cal AD 1663 - cal AD 1684	287 - 266	calBP 18.7											
							cal AD 1735 - cal AD 1806	215 - 144	calBP 54.5											
							cal AD 1930 - cal AD -	20 - -	calBP 22.3											
							A-2区 東壁 No.3	土壌	HCL			1,265±20	-25.79±0.36	1,264±21	σ	cal AD 690 - cal AD 730	1260 - 1220	calBP 44.4	pal- 12484	YU- 10966
cal AD 736 - cal AD 751	1214 - 1199	calBP 15.8																		
2σ	cal AD 761 - cal AD 768	1189 - 1182	calBP 8.0																	
	cal AD 678 - cal AD 774	1272 - 1176	calBP 95.4																	
	A-2区 北壁 No.2	土壌	HCL	1,200±20	-21.21±0.31	1,199±20				σ	cal AD 775 - cal AD 777				1175 - 1173	calBP 2.2	pal- 12485	YU- 10967		
											cal AD 789 - cal AD 830				1161 - 1120	calBP 37.6				
2σ							cal AD 837 - cal AD 868	1113 - 1082	calBP 28.4											
							cal AD 770 - cal AD 888	1180 - 1062	calBP 95.4											
							C-3区 南壁 No.2	土壌	HCL	5,705±25	-21.80±0.42	5,705±26	σ	cal BC 4580 - cal BC 4571	6529 - 6520	calBP 4.7			pal- 12486	YU- 10968
														cal BC 4560 - cal BC 4493	6509 - 6442	calBP 63.5				
2σ	cal BC 4613 - cal BC 4461	6562 - 6410	calBP 95.4																	
	E区 西壁 No.3	土壌	HCL	2,400±20	-17.83±0.33	2,399±21							σ	cal BC 487 - cal BC 407	2436 - 2356	calBP 68.2	pal- 12487	YU- 10969		
														cal BC 541 - cal BC 401	2490 - 2350	calBP 95.4				
													2σ	E区 西壁 No.6	土壌	HCL				
cal AD 748 - cal AD 763							1202 - 1187	calBP 19.5												
2σ							cal AD 660 - cal AD 720	1290 - 1230	calBP 69.3											
							cal AD 741 - cal AD 768	1209 - 1182	calBP 26.1											

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。

2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。

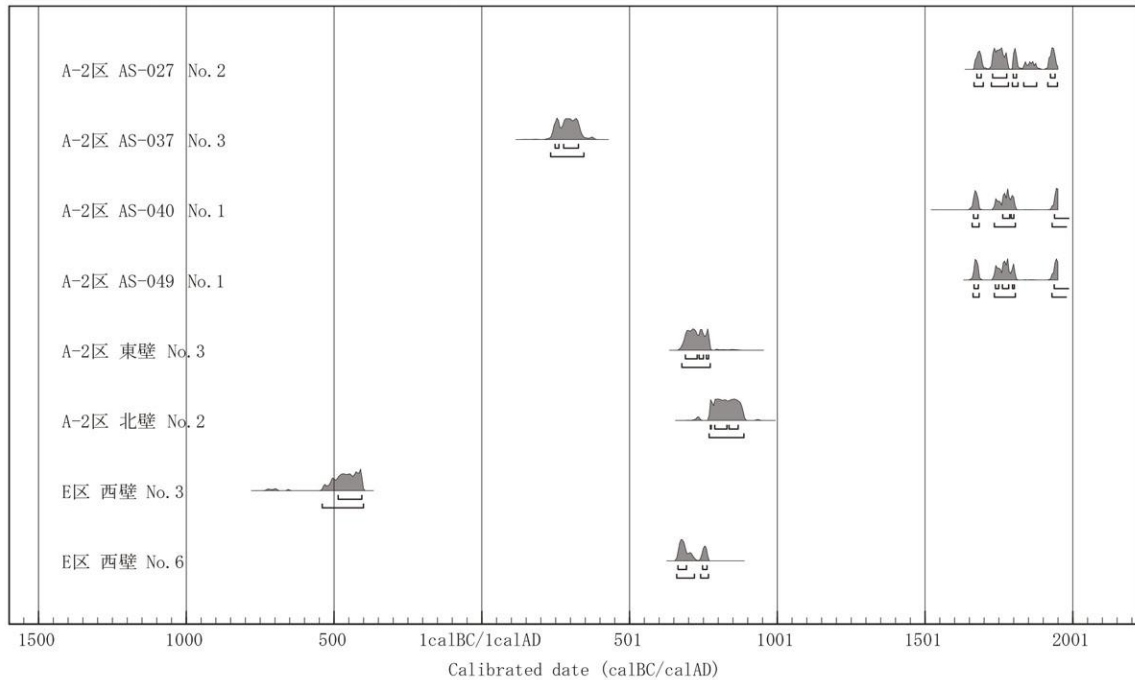
4)AAAは酸-アルカリ-酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理、HCLは塩酸処理を示す。

5)暦年の計算には、Oxcal4.3を使用。

6)暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。

7)桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。

8)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。



※C-3区 南壁 No. 2については、極端に古い値を示したため、図より除いている。

第VI - 2図 暦年較正結果

20yrBP、東壁 No.3 が $1,265 \pm 20$ yrBP、北壁 No.2 が $1,200 \pm 20$ yrBP、C-3 区の南壁 No.2 が $5,705 \pm 25$ yrBP、E 区の西壁 No.3 が $2,400 \pm 20$ yrBP、同じく西壁 No.6 が $1,310 \pm 20$ yrBP の値を示す。

暦年較正年代は、測定誤差を 2σ として計算させた結果、A-2 区の AS-027 No.2 が calAD 1,667 ~ 1,949、AS-037 No.3 が calAD 234 ~ 346、AS-040 No.1 が calAD 1,660 以降、AS-049 No.1 が calAD 1,663 以降、東壁 No.3 が calAD 678 ~ 774、北壁 No.2 が calAD 770 ~ 888、C-3 区の南壁 No.2 が calBC 4,613 ~ 4,461、E 区の西壁 No.3 が calBC 541 ~ 401、同じく西壁 No.6 が calAD 660 ~ 768 である。

(2) 花粉分析・微粒炭分析

結果を第VI - 4表に示す。いずれの試料からも花粉化石はほとんど検出されず、堆積物 1cc 当たりに含まれる花粉・胞子数も 100 個体未満であった。わずかに検出された種類は、木本花粉のマツ属 (マツ属複雑管束亜属を含む)、コナラ属アカガシ亜属、草本花粉のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ科である。

また、微粒炭数も全体的に少なく、E 区の西壁 No.7 で 300 個 /cc、A-2 区の東壁 No.2 ~ No.4、E 区の西壁 No.4 で 200 個 /cc であり、それ以外の 7 試料ではいずれも堆積物 1cc あたり 100 個未満であった。なお、微粒炭はいずれも母材推定が困難な不明型であり、木材組織や草本由来の構造を有するものは確認されなかった。

(3) 微細物分析

結果を第VI - 5表に、試料 1kg あたりに換算した種実遺体群集組成を第VI - 3図に示す。また、種実遺体各分類群の写真を図版VI - 2に示して同定根拠とする。

分析に供された全 11 試料 5.97kg を通じて、被子植物 5 分類群 (イネ、コムギ?、イネ科、カタバミ属、ツボクサ) 22 個の種実遺体が同定された。3 個 (A-2 区 AS-037 の 1 個と C-2 区 No.5 の 2 個) は炭化した微細片で同定ができなかった。種実以外は、炭化材 0.31g、炭化材主体 0.20g、植物片 0.72g、植物片主体 0.48g、砂礫主体 326.11g、土器片 1 個 1.75g (径 1.7cm) が確認された。炭化材は A-2 区 AS-049 No.1 で

第Ⅵ-4表 花粉分析・微粒炭分析結果

種 類	A-2区				C-2区 礫敷き 北壁 No.5	C-3区 南壁 No.2	E区 西壁						
	東壁			北壁 No.2			No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	
	No.2	No.3	No.4										
木本花粉													
マツ属複雑管束亜属	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	
マツ属(不明)	-	2	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	
コナラ属アカガシ亜属	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉													
イネ科	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
カヤツリグサ科	-	1	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	
ヨモギ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
不明花粉													
不明花粉	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
シダ類孢子													
イノモトソウ属	14	16	5	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
他のシダ類孢子	3	11	2	-	7	6	10	-	1	9	18	3	
合 計													
木本花粉	0	2	1	1	3	0	0	0	1	0	0	0	
草本花粉	0	3	0	0	0	0	1	0	1	1	2	0	
不明花粉	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	
シダ類孢子	17	27	7	0	7	6	11	0	1	9	18	3	
合計(不明を除く)	17	32	8	1	10	6	12	0	3	10	20	3	
微粒炭数(個/cc)	200	200	200	<100	<100	<100	<100	<100	<100	200	<100	<100	300
花粉・孢子数(個/cc)	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	<100	0	<100	<100	<100	<100

1)微粒炭数、花粉・孢子数については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている。

2)<100:100個未満。

第Ⅵ-5表 微細物分析結果

分類群	部位・状態/粒径	A-2区							C-2区		C-3区		備考		
		AS-027	AS-037	AS-040	AS-049	東壁	東壁	北壁	礫敷き北壁	南壁					
		No.3	No.3	No.3	No.1	No.3	No.4	No.2	No.4	No.5	No.1	No.2			
草本種実															
イネ	穎(基部)	炭化	破片	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	(個)	
	穎	炭化	破片	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	(個),残存長1.2mm	
	玄米	炭化	破片	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	(個),残存幅1.7mm	
コムギ?	穎果	炭化	破片	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	(個),残存径1.5mm	
イネ科	果実		破片	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	(個),腹面	
カタバミ属	種子		完形	-	-	-	-	-	-	5	1	2	-	(個)	
			破片	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	(個)	
ツボクサ	果実		完形	-	-	-	-	-	-	1	-	3	-	(個)	
不明	不明	炭化	破片	-	1	-	-	-	-	-	2	-	-	(個),AS-037:0.85mm,C-2区:2.38mm	
炭化材				2.68	2.72	3.66	3.09	3.18	4.69	4.59	3.04	2.63	3.76	3.65	最大径(mm)
	2mm			-	-	0.01	0.01	-	<0.01	0.01	0.01	-	0.03	0.01	乾重(g)
	1mm			<0.01	0.01	0.02	0.11	0.02	0.01	<0.01	<0.01	0.01	0.06	0.01	乾重(g)
炭化材主体	1-0.5mm			-	-	-	0.20	-	-	-	-	-	-	-	乾重(g)
植物片	>2mm			-	-	-	-	-	0.17	0.08	0.03	0.02	0.14	0.02	乾重(g)
	2-1mm			-	<0.01	-	<0.01	0.01	0.02	0.07	0.02	0.02	0.01	0.13	乾重(g)
植物片主体	1-0.5mm			-	-	-	-	0.02	-	0.12	-	-	-	0.34	乾重(g),炭化材含む
砂礫主体	>8mm			-	-	-	-	-	4.99	-	126.37	5.72	-	-	乾重(g)
	8-4mm			-	-	-	-	-	-	-	77.09	2.55	-	-	乾重(g)
	4-2mm			-	-	-	-	2.78	-	-	29.31	4.78	0.62	-	乾重(g)
	2-1mm			0.41	0.38	0.33	2.00	2.37	1.50	0.87	25.68	5.15	2.58	2.31	乾重(g)
	1-0.5mm			0.52	0.42	0.65	0.89	1.89	0.78	1.46	14.16	3.32	2.34	1.89	乾重(g),炭化材含む
土器片				-	-	-	-	-	-	-	-	1.75	-	-	乾重(g)1個,径17.42mm
分析量				100	100	70	300	800	500	300	800	1000	1000	1000	乾重(g)

最も多く、0.12gを量る。次いでC-3区の南壁No.1が多く、0.09gを量る。炭化材の最大径は4.7mm(A-2区東壁No.4)を測る。

種実遺体(不明を除く)の出土個数は、A-2区のAS-027 No.3(試料100g)が1個、AS-037 No.3(試料100g)が4個、AS-049 No.1(試料300g)が1個、C-2区の礫敷き北壁No.4(試料800g)が10個、No.5(試料1000g)が1個、C-3区の南壁No.1(試料1000g)が5個であり、A-2区のAS-040 No.3(試料70g)、東壁No.3(試料800g)、東壁No.4(試料500g)、北壁No.2(試料300g)、C-3区の南壁No.2(試料1000g)の5試料からは検出されなかった。

種実遺体群は、全て草本から成る。栽培種は、A-2区から、イネの穎(粃)が3個(AS-027 No.3、AS-037 No.3、AS-049 No.1)、玄米(炭化米)が2個(AS-037 No.3)と、コムギ?の穎果が1個(AS-037

No.3) の、計 6 個が確認され、全て炭化した破片である。

栽培種を除いた分類群は、イネ科の果実が 1 個 (C-2 区の礫敷き北壁 No.4)、カタバミ属の種子が 11 個 (C-2 区の礫敷き北壁 No.4、No.5、C-3 区の南壁 No.1)、ツボクサの果実が 4 個 (C-2 区の礫敷き北壁 No.4、C-3 区の南壁 No.1) の、計 16 個が確認された。いずれも明るく開けた場所に生育する人里植物に属し、中生植物 (湿生植物と乾生植物の中間の性質をもち、適潤な立地に生育する植物) を主体とする。

4. 考察

(1) A-2 区ピット

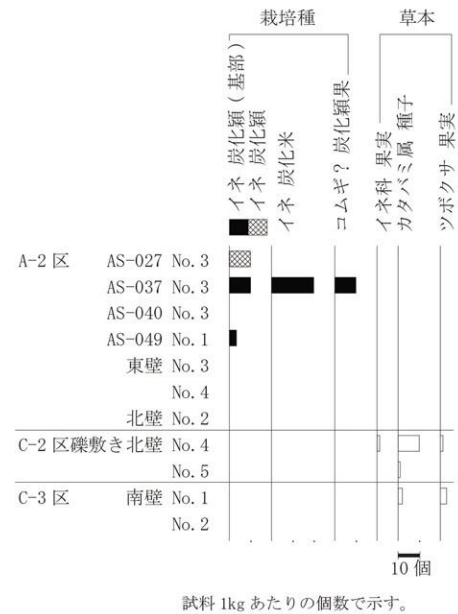
対象としたピット AS-027、AS-037、AS-040、AS-049 は、調査所見から柱穴と想定されている。年代測定結果を見ると、AS-027 No.2、AS-040 No1、AS-049 No.1 はほぼ同時期の値を示し、補正年代で 190 ~ 155±20yrBP、暦年代で 17 世紀後半以降 (calAD 1,660 以降) であった。これに対し AS-037 No.3 は補正年代で 1,750 ± 20yrBP、暦年代で 3 世紀前半 ~ 4 世紀中頃 (calAD 234 ~ 346) と古い値を示した。このことから、AS-027、AS-040、AS-049 は同時期の遺構と言える。これに対し AS-037 は時期の異なる遺構、あるいは古い時代の炭化物が混入するような堆積過程であった可能性がある。調査所見によれば、AS-037 が柱穴とするならば直径が大きく、他の用途も含める類例の検討が望まれている。この点を踏まえると、AS-037 は他の 3 遺構と堆積過程や性格の異なる遺構であった可能性がある。

微細物分析の結果では、栽培種のイネ、コムギ? が確認された。A-2 区の AS-027、AS-037、AS-049 より穎 (粃)、AS-037 より玄米 (炭化米) が確認されたイネ、AS-037 より確認されたコムギ? などの穀類は、当時利用された植物質食料と示唆され、火を受けたとみなされる。イネ、コムギは、当社がこれまでに実施した市道宜野湾 11 号の分析調査においても確認されている。

(2) A-2 区基本層序

地形分類図によると、A-2 区はマージを基盤とする台地上にあり、比較的平坦な地形を呈している。基本層序からも、マージを母材とした厚い耕作土が確認でき、人の生活に適した地域であったと言える。耕作土の可能性のある東壁 No.3、北壁 No.2 の放射性炭素年代測定結果は、補正年代で 1,265 ~ 1,200±20yrBP、暦年代で 7 世紀後半 ~ 9 世紀後半 (calAD 678 ~ 888) の値を示す。これらの層準は、マージ上位の砂質な腐植質な土壌であり、団粒構造を呈し均質であることから、耕作土の可能性が想定されている。一般に耕作はグスク時代頃から始まることを考慮すると、若干古い年代である。年代測定は、いずれも土壌で実施していることから、当時の生活面に由来する腐植を測定しているが、それ以前の腐植を反映した可能性も否定できない。層位の対比や周辺の情報収集し、検討する必要がある。

植物化石について見ると、木本類のマツ属、コナラ属アカガシ亜属、草本類のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの花粉化石が僅かに検出されており、種実遺体は 1 個体も検出されていない。マツ属は海岸沿いから丘陵上などに生育する種類であり、アカガシ亜属も暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素である。どちらも現在の周辺にも普通に生育する種類であることから、当時の森林植生に由来すると思われる。また、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などは、林縁や開けた草地などに生育することから、調査地周辺の草地



第VI-3図 各地点の種実遺体群集

に由来する。なお、耕作に関する可能性があるものは、今回確認できなかった。

(3) C-2 区礫敷き遺構

C-2 区では礫敷き遺構が確認されたが、現状で道を呈するような連続性は確認されていない。植物化石について見ると、花粉化石ではマツ属(複維管束亜属を含む)が確認された。沖縄に自生するマツ属複維管束亜属はリュウキュウマツ 1 種であることから、今回の試料もリュウキュウマツの可能性が高く、周辺の二次林や森林に由来する。種実遺体では草本で中生植物のイネ科、カタバミ属、ツボクサが確認された。これらは調査区周辺域の明るく開けた、やや乾いた草地環境に生育していたと考えられ、これまでの分析調査においても確認されている。

(4) C-3 区基本層序

C-3 区の南壁 No.2 は、測定年代で $5,705 \pm 25$ yrBP という耕作土を想定するには非常に古い値が得られている。この年代は前期貝塚時代に比定される。

本層準は、炭や焼土が確認され、淘汰の良い砂質であることから耕作土と想定された。一方で、本層準の母材は、褐色から明褐色を呈し、下位の地山のマージに類似する。このことを考慮すると、今回の年代は、耕作層を検討するには古い年代であるが、腐植の少ないマージ母材の堆積物であることを考慮すると、当時の堆積年代を示す可能性も否定できない。

堆積年代については、さらなる情報を蓄積し慎重に検討したい。

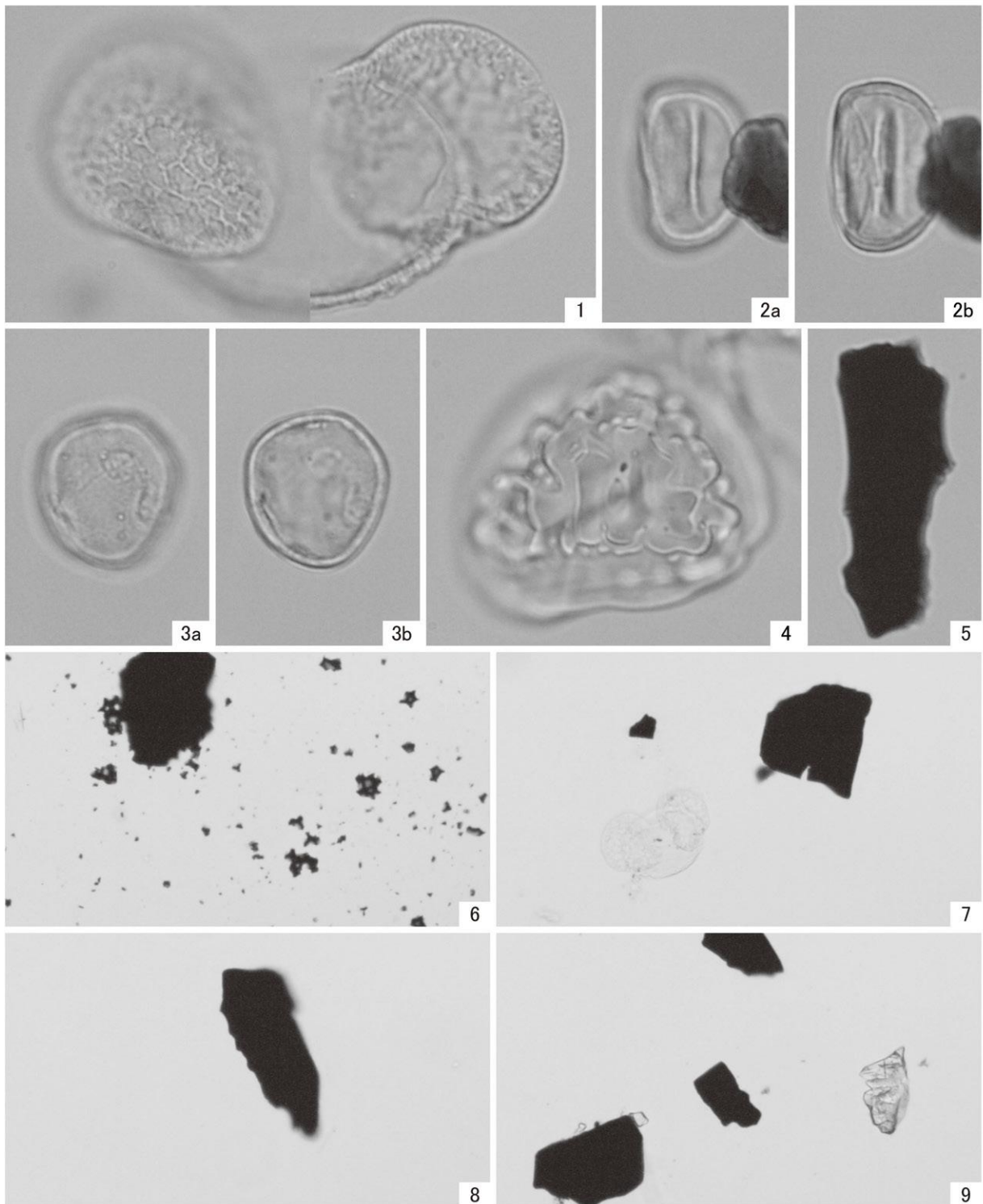
植物化石は、南壁 No.1 から草本で中生植物のカタバミ属、ツボクサが確認され、調査区周辺域の明るく開けた、やや乾いた草地に由来すると考えられる。

(5) E 区基本層序

E 区は、地形分類図の通り溶食凹地に接している。調査所見によれば、下部は島尻層群泥岩が母材の谷埋め堆積物であり、その上位は粘質ではあるが母材がマージとされている。この境界は不整合となっており、掘削後に周辺マージを盛土した可能性が指摘されている。

放射性炭素年代測定結果を見ると、西壁 No.3 が補正年代で $2,400 \pm 20$ yrBP であるのに対し、より下位の西壁 No.6 が $1,310 \pm 20$ yrBP の値を示し、地層の累重関係と年代値が逆転する。前述のように西壁 No.6 は島尻層群泥岩が母材の谷埋め堆積物であり、西壁 No.3 は谷埋め堆積物を掘削後に周辺マージを盛土した可能性が指摘される。このことから、西壁 No.3 は盛土の際に古い時期の土壌が入れられた可能性が高く、堆積年代を反映していないと推測される。よって、E 区の西壁は $1,310 \pm 20$ yrBP 前後からそれ以降の堆積物と推測される。なお、西壁 No.6 の暦年代は 7 世紀後半～8 世紀後半 (calAD 660～768) であり、前述の A-2 区の北壁 No.2 と非常に近い年代である。

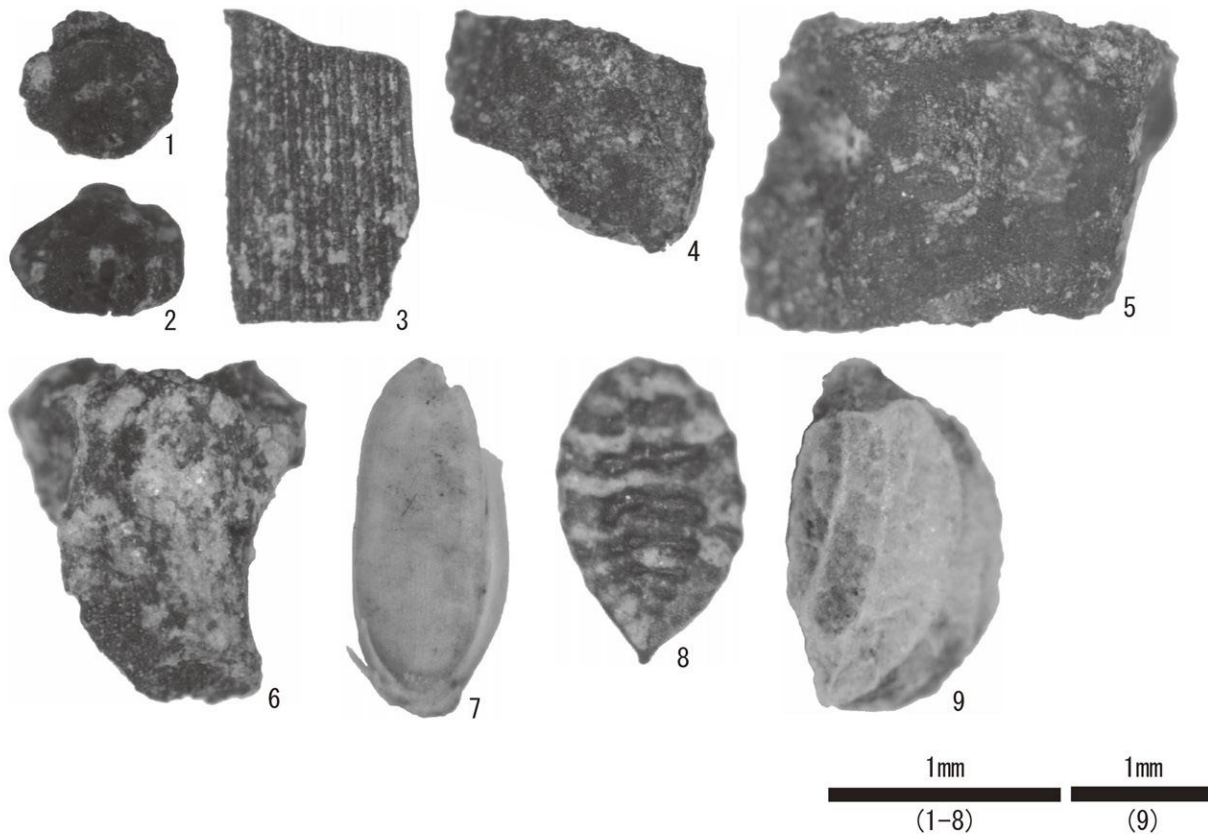
花粉分析結果では、木本類のマツ属、草本類のイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科が僅かに検出されている。これらは周囲の森林植生や草地植生を反映すると考えられる。



1. マツ属 (A-2区 東壁; No. 3)
2. コナラ属コナラ亜属 (A-2区 東壁; No. 4)
3. カヤツリグサ科 (A-2区 東壁; No. 3)
4. イノモトソウ属 (A-2区 東壁; No. 3)
5. 微粒炭 (A-2区 東壁; No. 3)
6. 分析プレパラート内の状況 (A-2区 北壁; No. 2)
7. 分析プレパラート内の状況 (C-2区 礫敷き北壁; No. 5)
8. 分析プレパラート内の状況 (C-3区 南壁; No. 2)
9. 分析プレパラート内の状況 (E区 西壁; No. 4)

50 μ m 50 μ m
 (1-5) (6-9)

図版VI - 1 花粉化石・微粒炭



- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1. イネ 穎(基部) (A-2区 AS-049;No. 1) | 2. イネ 穎(基部) (A-2区 AS-037;No. 3) |
| 3. イネ 穎(A-2区 AS-027;No. 3) | 4. イネ 玄米(A-2区 AS-037;No. 3) |
| 5. イネ 玄米(A-2区 AS-037;No. 3) | 6. コムギ? 穎果(A-2区 AS-037;No. 3) |
| 7. イネ科 果実(C-2区 礫敷き北壁;No. 4) | 8. カタバミ属 種子(C-2区 礫敷き北壁;No. 4) |
| 9. ツボクサ 果実(C-3区 南壁;No. 1) | |

図版VI - 2 種実遺体

引用文献

Bronk, R. C., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.

藤木利之・小澤智生, 2007, 琉球列島産植物花粉図鑑. アクアコーラル企画, 155p.

井上 淳・吉川周作・千々和一豊, 2002, 琵琶湖周辺域に分布する黒ボク土中の黒色木片について. 日本第四紀学会講演要旨集, 32, 74-75.

石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.

中村 純, 1980, 日本産花粉の標徴 I II (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集, 91p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2000, 日本植物種子図鑑(2010年改訂版). 東北大学出版会, 678p.

Reimer, P. J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J. W., Blackwell, P. G., Bronk Ramsey, C., Grootes, P. M., Guilderson, T. P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatté, C., Heaton, T. J., Hoffmann, D. L., Hogg, A. G., Hughen, K. A., Kaiser, K. F., Kromer, B., Manning, S. W., Niu, M., Reimer, R. W., Richards, D. A., Scott, E. M., Southon, J. R., Staff, R. A., Turney, C. S. M., and van der Plicht, J., 2013, IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.

島倉巳三郎, 1973, 日本植物の花粉形態. 大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集, 60p.

Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of 14C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.

鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2018, 草木の種子と果実—形態や大きさが一目でわかる734種 増補改訂—. ネイチャーウォッチングガイドブック, 誠文堂新光社, 303p.

山野井 徹, 1996, 黒土の成因に関する地質学的検討. *地質学雑誌*, 102, 526-544.

安田喜憲, 1987, 文明は緑を食べる, 読売新聞社, 227p.

第3節 令和2年度 市道宜野湾11号整備予定地における自然科学分析（69号墓）

はじめに

市道宜野湾11号は、戦後米軍の接収により普天間飛行場が建設されたため、消失した宜野湾街道（普天間並松）の付け替え道路として国道330号の交通量の緩和を目的に整備されている。2020年12月に一部は供用が開始された。これまでも調査地周辺では、試掘調査が行われており、遺構・遺物の確認と共に、旧地形の検討や自然科学分析を実施し情報を蓄積してきた。

本報告では、市道宜野湾11号予定地から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を実施する。

1. 試料

試料は、市道宜野湾11号整備予定地から検出された炭化材1点である。令和元年度に実施した宜野湾シリガール流域古墓群内の古墓（69号墓）の墓室内タナのトレンチより出土した。

2. 分析方法

試料の周囲を削り落として付着物等を取り除き、50mg程度に調整する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理 AAA:Acid Alkali Acid）。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）はElementar社のvario ISOTOPE cubeとIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。測定はタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を用いる。スタンダードとして、米国国立標準局（NIST）の標準試料（HOX-II）、国際原子力機関の標準試料（IAEA-C6等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。δ13Cは試料炭素の13C濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver & Polach 1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、OxCal4.4(Bronk,2009)、較正曲線はIntCal20(Reimer et al.,2020)である。

3. 結果

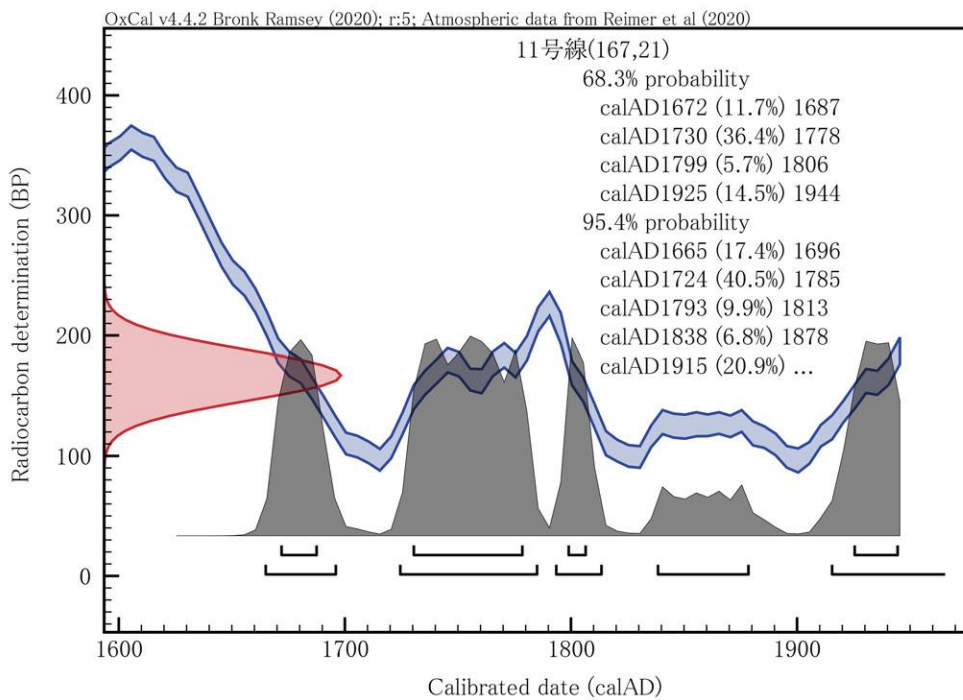
結果を第VI-6表、第VI-4図に示す。樹種はマツである。保存状態は良く、定法での分析処理が可能で、測定に必要なグラファイトが得られている。1950年を基点とし、165年前の年代測定が出た（20年前後の誤差あり）。1760年代～1800年代の造墓の可能性がある。

暦年較正は、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、その後訂正された半減期（14Cの半減期5730±40年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、IntCal20(Reimer et al.,2020)を用いる。2σの値は、calAD1665～と広範囲であるが、これは第VI-4図でみられるように、この時期の較正曲線が蛇行しているのが原因である。

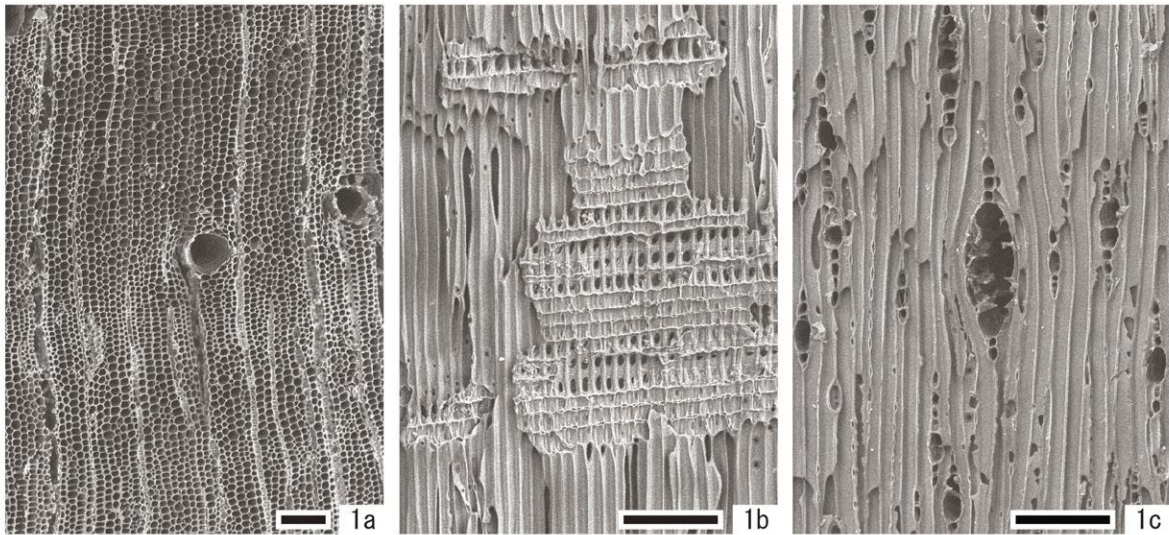
第VI - 6表 放射性炭素年代測定結果

試料名	樹種	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正年代							Code No.			
					年代値									確率%	
					σ	cal AD	-	cal AD	-	cal AD	-	cal BP	YU- 12736		pal- 13178
11号線	マツ属 複雑管束 亜属	AAA (1M)	165 ± 20 (167 ± 21)	-30.59 ± 0.47	σ	cal AD	1672	-	cal AD	1687	279	-		263	
						cal AD	1730	-	cal AD	1778	220	-	172	calBP	36.4
						cal AD	1799	-	cal AD	1806	152	-	144	calBP	5.7
						cal AD	1925	-	cal AD	1944	25	-	6	calBP	14.5
					2 σ	cal AD	1665	-	cal AD	1696	286	-	255	calBP	17.4
						cal AD	1724	-	cal AD	1785	226	-	166	calBP	40.5
						cal AD	1793	-	cal AD	1813	157	-	137	calBP	9.9
						cal AD	1838	-	cal AD	1878	112	-	72	calBP	6.8
cal AD	1915	-	cal AD	1950	35	-		calBP	20.9						

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ （測定値の68.2%が入る範囲）を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。
- 5) 暦年の計算には、OxCal v4.4を使用
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットは、IntCal20を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 σ が68.2%、2 σ が95.4%である



第VI - 4図 暦年較正結果



1. マツ属複維管束亜属

a:木口 b:板目 c:板目
スケールは100 μ m

図版VI - 3 炭化材

引用文献

Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*,51,337-360.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-chulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0-55 cal k BP). *Radiocarbon*, 62,1-33.

Stuiver M., & Polach AH., 1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of ^{14}C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.

第七章 結語

第VI章までの調査成果について述べてきた。今回調査した遺跡は「赤道渡呂寒原古墓群（E区）」「神山後原丘陵古墓群（C・D区）」「宜野湾シリガーラ流域古墓群（B区）」「宜野湾後原遺物散布地（A区）」の4箇所である。

A区では、全体の9割の遺物が出土しており、他の調査区と比較すると遺構も多く検出された。遺物の内訳をみると沖縄産施釉陶器（2281点）が最も多く、その中でも小碗が最多であり碗の4倍以上出土している。碗も小碗もI類が多く、次いでIII類となる。II類がもっとも少なく、I類の1/5以下の出土となっている。I類は他の器種でも多く見られ、壺・鍋・酒器はI類のみの出土で、皿・瓶・火入・火炉でもI類が多く、器種不明でもI類が多い。沖縄産施釉陶器ではI類が優位ではあるものの、急須・香炉ではIII類が多く、鉢はII類が多く出土した。次いで出土量が多いアカムヌー（2027点）では鍋がもっとも多くみられ、次いで急須、鉢の順に多い。本土産磁器では小碗の出土が一番多く、次に多い皿は沖縄産より多く出土している。碗の出土点数の3/4は砥部産であった。多くの陶磁器が出土しているが、土器はなく、青磁や褐釉は少量であり沖縄産施釉陶器やアカムヌーが多く出土していることから、グスク期までは遡らず近世末～近代（戦前）頃の遺跡と見られる。ピット群が確認されているA-1区からの出土が多く、ピットと合わせて周辺で人々が生活していた様子が示唆できる。

一方でA-2区はアカムヌーの出土がなく、本土産磁器が沖縄産施釉陶器より多いことから基地接收後も活動が想定される。

C区では戦前のものと見られる溝状遺構が検出された。排水用の溝と見られるが、西側に隣接する洞穴の吸込み口には向っておらず、南北方向に走っている。軸としては航空写真で確認できる道と同方向のため、道に関連する遺構の可能性も示唆される。

C-1区では197点、C-2区では196点、C-3区では20店の遺物が確認されている。C-1区では一番多い遺物が沖縄産施釉陶器で、次いで本土産磁器・アカムヌーとなる。C-2区では本土産磁器が最も多く、次いで沖縄産施釉陶器・沖縄産無釉陶器となる。A区と同様に遺物から活動時期を示唆すると、C-1区では沖縄産施釉陶器とアカムヌーが多いことから戦前、C-2区では本土産磁器が多いことから戦後も周辺で活動があったと考えることもできるが、C-2区は米軍基地造成の影響で攪乱を受けているため、その影響も考えられる。

B・D区については亀甲墓と破風墓の調査を行った。B区の123号墓とD区の古墓については改葬済みで被葬者に関する情報は得られなかったが、B区の69号墓については未改葬で厨子甕が残存していたことから被葬者の情報を得ることが出来た。その中で最も古いものとして「乾隆五拾六年」と記載された銘書である。乾隆56年は1791年で今から230年以上も前のものとなる。年号に続けて干支が「子」と記載されているが、乾隆56年は「亥」年となるため、十二支を誤って記した可能性も高いと見られる。明治38年の銘書が最も新しく、それ以降の年号は見られない。2019年7月11日時点の厨子の配置が墓使用時から動いていないと想定すると、21号厨子が最後に入れられた可能性も示唆できるが、明治38年後は新しい厨子はほとんど追加されず、戦後の混乱でお墓の継承がなされることがないまま現在に至ると見られる。

以上が本緊急発掘調査の報告となる。今回は市道宜野湾11号道路整備事業のため行われた調査で、普天間飛行場の東側沿いの返還に伴うものであった。普天間飛行場の全体の面積からするとわずかではあるが、

これまで基地の中だったことで窺う事の出来なかった宜野湾市の歴史の一端を知ることができた。一方で、E区の切石集積のようにかつてあったであろう古墓や、A・C区では米軍基地造成の影響で地山まで攪乱され、当時の足跡をたどることもできない状況も見られた。普天間飛行場内にはまだまだ多くの遺跡が未調査のままである。今後さらなる発見が期待される。

第Ⅶ-1表 69号墓 厨子甕銘書一覧

番号	蓋/身	銘書内容
2	蓋	□□四年未八月/呉屋□□之/仕立□
3	蓋	乾隆五捨六年子/□□□/新垣掟親雲上 ※身と蓋が別と見られる
3	身	□□様/山□/□村正□/□□□ ※身と蓋が別と見られる
4	蓋	□□□□日 □□□□ □□□ □ 花
5	蓋	巳年十月廿九日死去/知花ノ女/子人/う田?
6	蓋	知花ノ女子うし/□子女子/うし/知花女子/う田?
10	蓋	□□□ /甲? □□月□九日骨洗/知花ノ□□□□/ うし□□
9	蓋	奥間小□□/□玉那覇/光緒十二年丙戌六月十日洗骨
9	身	□玉那覇光緒十二年丙戌六月十二日洗骨
11	蓋	奥間ノ/□屋筑登上之
13	蓋	咸豊三年癸□六月十七日/□呉屋洗骨
14	蓋	咸豊三年癸□六月十七日・・・
15	蓋	大清嘉慶八年癸亥七月□六日/奥間小ノ/うし呉屋
17	蓋	光緒十二年丙戌六月十日洗骨/奥間之/女うし
18	蓋	明治廿五年辰八月廿八日洗骨奥間小戸良/宮城/妻□□
18	身	奥間小戸良宮城/妻蒲戸
19	蓋	明治散世八年巳旧七月七日洗骨/玉/那/覇/加□/三十才/ □□□/洗骨/□時/三十六/玉那覇/蒲□/□□□

(凡例：□は判読できない。・は文字が消えているもの。)

第Ⅶ-2表 遺物集計表

地区		A-1区	A-2区	A区計	B区	R01 B区	C-1区	C-2区	C-3区	C区計	D区	E区	計
種類	中国産	青磁	23				1						48
		青花	130	1			5	1		6		1	275
		褐釉	23										46
外国産磁器													
本土産	磁器	360	48	408	4		22	36	2	60	3	3	946
	陶器	5	1	6	1								13
沖縄産	施釉	2281	29	2310		5	79	32	6	117	11	10	4880
	無釉	1376	17	1393		2	23	21	2	46	7	5	2892
	アカムス-	2072	4	2076		1	29	19	7	55		1	4264
	瓦質	1		1									2
	現陶	38		38									76
瓦	平瓦	9		9			3	9		12	13		55
	丸瓦	2		2			1	2		3	4		14
	不明	27		27				8		8	4		74
蔵骨器	石製 蓋					1					1		2
	石製 身					1							1
	赤焼 蓋					1							1
	赤焼 身					1							1
	ホ-ジヤ-蓋					3							3
	ホ-ジヤ-身					3							3
	マンガソ 蓋				2	12					1		15
	マンガソ 身	1		1	5	12					4		23
	ツノ型 蓋					3					5		8
	ツノ型 身					3					3		6
	転用					2							2
円盤状製品	青花	1		1									2
	沖施	3		3									6
	沖無	4		4			1			1			10
	瓦	1		1									2
石類	石灰岩	3	1	4							1		9
	不明	61		61									122
銭貨	ハリ状							1		1			2
	近世銭	1		1		6							8
	近代銭	1		1									2
	現代銭					5							5
	無文銭	1		1									2
	外貨							1		1			2
	不明							1		1			2
鉄製品	釘	1		1			3	7		10	3		25
	錠							1		1			2
	蓋							1		1			2
	札												0
	鉄滓							1		1			2
	スプーン	1		1									2
	針金	3		3									6
	不明	46	1	47			3	14		17		1	129
青銅製品	簪	2		2		8							12
	煙管	4		4									8
	釘										1		1
	不明	3		3			4	4		8			22
ガラス製品	飲料品	16		16							1		35
	調味料	1		1				1		1			2
	化粧品	5	1	6				1		1			14
	薬品	10		10			2	3		5			30
	瓶	16		16				2	1	3	3		41
	ランプ 笠	2	2	4									8
	不明	104	16	120							11		262
プラスチック	ボタ	1		1				1		1			4
	小杯										1		1
	歯ブラシ	1		1									2
	クシ										1		1
	不明	14		14	1			2	2			33	
タイル													
		4	1	5			2			2	2		16
獣骨	獣歯	17		17									34
	サメ歯								1	1			2
	イノシ					1							1
	不明	65		65			1	1		2		1	135
貝類	巻貝	6		6			1	4		5			22
	二枚貝	7	1	8				2		2		1	21
炭化物													
		2		2			1	1		2			8
種子片													
		1		1									2
焼土													
		101		101			14	4	1	19			240
その他													
		6		6			2	3		5		2	24
計		6863	123	6986	13	70	197	196	20	413	69	25	14975

第七 - 3 表 沖繩産施釉陶器集計表 - 1

種別・器種	区名		C-1区	C-2区	C-3区	D区	E区	小計	合計
	A-1区	A-2区							
碗	I 類	口縁 A	3				1		
		口縁 B	3						
		口~底 Aa							
		口~底 Ba							
		胴部 a							
	II 類	胴部 b							
		胴部 (有文)							
		口縁 a	2						
		口縁 b							
		胴~底							
	III 類	胴部 a							
		胴部 b							
		底 a							
		底 b							
		底 (有文)							
鉢	I 類	口縁 A	1						
		口縁 B	1						
		口~底 a	1						
		口~底 b	1						
		胴部	1						
	II 類	胴部 (有文)							
		口縁 a							
		口縁 b							
		胴~底							
		底							
	III 類	底 a							
		底 b							
		底 (有文)							
		底 (有文)							
		底 (有文)							
小 碗	I 類	口縁 A	1						
		口縁 B	1						
		口~底 a	1						
		口~底 b	1						
		胴部	1						
	II 類	胴部 (有文)							
		口縁 a							
		口縁 b							
		胴~底							
		底							
	III 類	底 a							
		底 b							
		底 (有文)							
		底 (有文)							
		底 (有文)							

第七 - 4 表 沖繩産施釉陶器集計表 - 2

種別・器種	区名		C-1区	C-2区	C-3区	D区	E区	小計	合計
	A-1区	A-2区							
皿	I 類	口～底	1					15	18
		口～胴	1						
		胴部	2						
		口縁	2						
	II 類	口～底	1					3	
		口～胴	1						
	III 類	口～底	4					1	
		胴部	1						
		口縁	1						
		底	1						
急須	I 類	口～底	1					24	88
		注口	1						
		胴部	9						
		把手	2						
	II 類	口～底	1					1	
		胴部	1						
	III 類	口縁	3					5	1
		底	1						
		注口	1						
		把手	1						
瓶	I 類	口～底	30					64	88
		胴部	1						
		蓋	1						
		柄	1						
	II 類	注口	2					2	
		把手	1						
	III 類	口縁	14					1	
		胴部	1						
		底	3						
		蓋	1						
香炉	I 類	口～底	2					8	13
		底	1						
		口縁	1						
		胴部	2						
	II 類	口～底	1					1	
		口～胴	1						
	III 類	口縁	2					2	5
		胴部	1						
		底	1						
		蓋	1						
火入	I 類	口～底	1					16	22
		口～胴	1						
		胴部	3						
		口縁	5						
	II 類	口～底	3					1	
		口～胴	3						
	III 類	口縁	1					3	6
		胴部	1						
		底	3						
		蓋	1						
火入	口～底	2					1	1	
	口～胴	1							

種別・器種	区名		C-1区	C-2区	C-3区	D区	E区	小計	合計
	A-1区	A-2区							
酒器	I 類	口縁	1					15	17
		口～底	2						
		口～胴	1						
		胴部	6						
	II 類	口～底	1					2	
		口～胴	1						
	III 類	口～底	3					1	
		胴部	1						
		底	1						
		蓋	1						
鍋	I 類	口～底	11					17	
		口～胴	4						
		胴部	2						
		口縁	4						
	II 類	口～底	1					7	12
		口～胴	1						
	III 類	口～底	4					1	
		胴部	1						
		底	1						
		蓋	1						
蓋	I 類	口～底	2					7	12
		注口	1						
		胴部	1						
		把手	2						
	II 類	口～底	1					5	
		胴部	1						
	III 類	口縁	3					1	
		底	1						
		注口	1						
		把手	1						
徳利	I 類	口～底	11					449	
		口～胴	25						
		胴部	3						
		底	3						
	II 類	口～底	1					8	3
		口～胴	1						
	III 類	口縁	94					1	
		胴部	3						
		底	8						
		蓋	2						
不明	I 類	口～底	22					50	976
		口～胴	25						
		胴部	7						
		底	1						
	II 類	口～底	10					1	2
		口～胴	23						
	III 類	口縁	1					1	1
		胴部	9						
		底	24						
		蓋	86						
不明	口～底	269					10	4	
	口～胴	7							

第七 - 5 表 沖縄産無釉陶器集計表

種別・器種	区名		C-1区	C-2区	C-3区	R01 B区	D区	E区	合計
	A-1区	A-2区							
壺	I 類	5							
	II 類	2							
	II a2類	1							
	II b類	2							
	I or III	6							
	III 類	12					1		119
	IV 類	2							
	口~胴	1							
	頸部(有文)								
	胴部(有文)	70							
	胴部	12		1	1				
	把手	1		1					
甕	I 類	1							
	II 類	1							
	III類(有)	1							
	口~胴	11							19
	胴部(有文)	2							
	胴部	2							
	胴~底	2							
	底部	1							
	I a類	2							
	I b類	2							
揃鉢	II 類	2							
	III 類	5							
	IV 類	6							
	IV 類	23				1			184
	IV 類	2							
	IV 類	3							
	III or IV	1							
	胴部	1							
	胴部	120		4					
	胴~底	5		1					
	底部(胴台)	4							1
	鉢	I a類	3						
I b類		1							
II 類		5							
III 類		1							
IV 類		2							
III(有)		1							
III(有)		5							
IV 類		1							
I a類		1							
III 類		1							
IV 類		2							
碗		口縁	2						
	胴部	1							
	I a類	1		1					
	胴部	1							
	胴~底	3							
	底部(胴台)	1							1
	口縁	2							
	口縁	3							2
	口縁	1							
	注口	3							9
	把手	1							
	蓋	1					1		
火炉	II a類	1							
	有文	2							
	口縁	1							
	胴部	1							
	II a類	1							
	底部	1							
	口縁	1							
	口縁	1							
	注口	3							6
	把手	1							
	蓋	1							1
	瓶	II a類	1						
有文		2							
口縁		1							
胴部		1							
II a類		1							
底部		1							
口縁		1							
胴部		1							
口縁		1							
口縁		1							
口~底		1							
不明		有文	3						
	胴部	12							
	口縁	18							
	胴部	928				1			1061
	胴~底	12							4
	底部	48							
	口縁	1							
	胴部	1							
	口縁	1							
	胴部	1							
	口~底	1							

第七 - 6 表 アカムヌー集計表

種別・器種	区名		C-1区	C-2区	C-3区	R01 B区	E区	合計
	A-1区	A-2区						
鍋	I 類	73	4	1	1			
	II 類	2						
	II a類	37						
	II b類	18						
	不明							213
	口縁	2						
	胴部	56						
	把手	15		2				
	底部	1						
	I 類	7		1				
	II 類	8						
	鉢	I a類	2					
I b類		2						
II 類		1						
口~底		1						
胴部		2						
胴~底		15						
底部		3		1	1			
I 類		6		1	1			
II a類		2						
II b類		10						
II 類		2						
IV 類		1						
V 類	3			1				
火炉	II 類	2						65
	V 類	11						
	口縁	1						
	胴部	7		2	1			
	把手	4						
	胴~底	1						
	底部	6		2				
	I 類	1						
	II a類	18						
	II a類	7						
	II b類	1						
	II 類	2						
急須	胴部	2						
	胴部	6						
	注口	2						
	把手	6						
	碗または蓋	1						
	蓋	13						
	胴部	1						
	口縁	8						
	口~底	1						
	口~胴	2						
	胴部	17						
	胴~底	7						
底部	3							
口縁	28							
胴部	1660		25	14	5			
底部	21						1	
把手	1							
胴~底	6							

第七四 - 7 表 本土産陶磁器集計表

種別・器種	区名							合計
	A-1区	A-2区	B区	C-1区	C-2区	C-3区	D区	
碗 (砥部産)	口縁	9						
	口~胴	3			1			
碗(瀬戸・美濃産)	胴部	12			3			33
	胴~底	2						
	底部	3	2					3
	口縁	1	1		4			
碗	口縁	1	1		5			75
	口~胴	7	1					
	口~底	1	1					
	胴部	2			3			33
	胴~底	1			1			
碗(肥前産)	底部	1			3			6
	口縁	1			1			
	胴部	1						
	口縁	5	3					
	口~胴	5						
	口~底	1						
小碗 (瀬戸・美濃産)	胴部	2						21
	胴~底	1						
	底部	2						
	口縁	1						
小碗	口縁	36	7		1	2	1	1
	口~胴	9	7					
	口~底	6	1					
	胴部	21	2	1				109
	胴~底	8	1					1
	底部	1	1					
	口縁	24	1		2			
	口~胴	6	2					41
	口~底	1						
	胴部	2						
碗また は小碗	口縁	2						6
	胴部	1						
	胴~底	1						
	底部	1						
	口縁	1						
	口~胴	1						
	口~底	1						
小杯	口縁	1						3
	口~胴	1						
皿 (瀬戸・美濃産)	口縁	5						1
	口~底	4	1					12
	底部	2						
	口縁	23						
	口~胴	1						
	口~底	3						
	胴部	4	2					48
皿	口縁	1						1
	口~底	1						
	胴部	4						
	胴~底	1						
	底部	4	1					1
	口縁	1						
	口~底	4	1					12
急須 蓋 瓶 徳利 袋物	急須	1						1
	蓋	3						4
	瓶	1						1
	徳利	1						1
	袋物	1						3
	無文	1						1
	口縁	1						
	口~底	1						3
	胴部	1						
	胴~底	1						
不明 (瀬戸・美濃産)	不明	3						4
	有文	60	4		3			67
	口縁	3						
	胴部	51	2		4	3		69
	胴~底	5			1			1
	底部	1						
	口縁	1						
	口~底	1						3
	胴部	1						
	胴~底	1						
不明 陶器	不明	1						1
	有文	1						1
	胴部	4						5
	底部	1						6

第七四 - 8 表 中国産陶磁器集計表

種別・器種	区名				合計
	A-1区	A-2区	C-1区	C-2区	
青花	口縁	3			
	口~胴	4			
	胴部	20		2	
	胴~底	2			
	底部	5		1	
	口縁	6			
	口~胴	2			
	胴部	5			
	胴~底	1			
	底部	7			
青磁	口縁	2			
	口~胴	9			
	口~底	1			
	胴部	1			
	胴~底	1			
	底部	1			
	口縁	1			
	口~胴	1			
	口~底	1			
	胴部	1			
褐釉陶器	口縁	1			
	口~底	1			
	胴部	1			
	胴~底	1			
	底部	1			
	口縁	1			
	口~底	1			
	胴部	1			
	胴~底	1			
	底部	1			
転用品	口縁	58	1		
	口~胴	2			
	胴部	1			
	胴~底	1			
	底部	1			
	口縁	1			
	口~底	1			
	胴部	1			
	胴~底	1			
	底部	1			
不明	不明	23			
	不明	2			
	不明	2			
	不明	1			
	不明	1			
	不明	1			
	不明	1			
	不明	1			
	不明	1			
	不明	1			

第七四 - 9 表 蔵骨器集計表

種別・器種	地区	A-1区				合計
		B区	R01 B区	D区	小計	
石製	家型	蓋	1			1
		身	1			2
		蓋	1			1
		身	1			2
		蓋	3			3
		身	3			6
		蓋	3			3
		身	3			6
		蓋	1			1
		身	1			2
陶製	髷形	蓋	12			12
		体部	1			1
		髷	1			1
		髷	1			1
		髷	1			1
		髷	1			1
		髷	1			1
		髷	1			1
		髷	1			1
		髷	1			1
転用品	沖無	蓋	1			1
		蓋カヌ	1			1
		蓋	1			1
		蓋	1			1
		蓋	1			1
		蓋	1			1
		蓋	1			1
		蓋	1			1
		蓋	1			1
		蓋	1			1

【参考・引用文献】

- 宜野湾市史編集委員会編 1985 『宜野湾市史』 第五巻資料編四 民俗
- 宜野湾市史編集委員会編 2000 『宜野湾市史』 第九巻資料編八 自然
- 宜野湾市教育委員会編 2012 『ぎのわんの地名 - 内陸部編 -』
- 宜野湾市教育委員会編 2007 『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』 (宜野湾市文化財調査報告書第 39 集)
- 宜野湾市教育委員会編 2008 『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』 (宜野湾市文化財調査報告書第 41 集)
- 宜野湾市教育委員会編 2011 『市内埋蔵文化財調査報告書 2』 (宜野湾市文化財調査報告書第 47 集)
- 宜野湾市教育委員会編 2012 『大山前門原第一遺跡』 (宜野湾市文化財調査報告書第 49 集)
- 宜野湾市教育委員会編 2017 『市内埋蔵文化財調査報告書 3』 (宜野湾市文化財調査報告書第 53 集)
- 宜野湾市教育委員会編 2017 『普天間飛行場地区埋蔵文化財発掘調査報告書』 (宜野湾市文化財調査報告書第 55 集)
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2019 『神山古集落』 (沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集)
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2022 『普天間石川原第一遺跡 普天間グスクンニー遺跡 普天間下原古墓群』 (沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 111 集)
- 沖縄県立埋蔵文化財センター編 2022 『基地内文化財 9』 (沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 112 集)

報告書抄録

ふりがな	あかみちとろかんぼるこぼぐん かみやまくしぼるきゅうりょうこぼぐん ぎのわんしりがーらりゅういきこぼぐん ぎのわんくしぼるいぶつさんぶち							
書籍	赤道渡呂寒原古墓群 神山後原丘陵古墓群 宜野湾シリガール流域古墓群 宜野湾後原遺物散布地							
服書名	平成30年度・令和元年度 市道宜野湾11号整備における埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	宜野湾市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第61集							
編著者名	金城 りお・池原 悠貴・長濱 健起							
発行機関	宜野湾市教育委員会							
所在地	郵便番号901-2203 沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号 TEL098-893-4430							
発行年月日	2023(令和5)年2月28日							
所有遺跡名	所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あかみちとろかんぼるこぼぐん 赤道渡呂寒原古墓群	沖縄県 宜野湾市 赤道	472501	293	26° 16' 24.6"	127° 45' 04.8"	20180912 ～0920	143.27㎡	支障除去
かみやまくしぼるきゅうりょうこぼぐん 神山後原丘陵古墓群	沖縄県 宜野湾市 神山	472501	287	26° 16' 19.3"	127° 45' 57.2"	20180611 ～1003	445㎡	支障除去
ぎのわんしりがーらりゅういきこぼぐん 宜野湾シリガール流域古墓群	沖縄県 宜野湾市 宜野湾、 神山	472501	272	26° 16' 8.8"	127° 45' 43.5"	20181011 ～1018 20190708 ～0904	388㎡	支障除去
ぎのわんくしぼるいぶつさんぶち 宜野湾後原遺物散布地	沖縄県 宜野湾市 宜野湾	472501	260	26° 16' 04.8"	127° 45' 39.3"	20180423 ～0724	199㎡	支障除去
所有遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
赤道渡呂寒原古墓群	古墓	近世～近代		切石集積		沖縄産施釉陶器、 本土産磁器		
神山後原丘陵古墓群	古墓	近世～近代		墓、溝状遺構、 柱穴痕		沖縄産施釉陶器、本土産磁器、 瓦、鉄製品、ガラス製品、 貝類等		古墓1基
宜野湾シリガール流域古墓群	古墓	近世～近代		墓		沖縄産施釉陶器、本土産磁器、 蔵骨器、銭貨、青銅製品、 獣骨等		古墓2基
宜野湾後原遺物散布地	生産遺跡、 集落跡	近世・近代		柱穴痕、溝状遺構、 土坑、畝状遺構		中国産陶磁器、沖縄産施釉 陶器、本土産磁器、瓦、簀、 煙管、ガラス製品、獣骨等		
要約	5地区で調査を計画し、近世～戦後の遺構などが確認できた。A区の宜野湾後原遺物散布地で遺物から近世～近代頃を想定できるピット群と溝状遺構が検出された。B区の宜野湾シリガール流域古墓群では破風墓1基と亀甲墓1基を対象とした。銘書がある厨子甕が見られた。C・D区の神山後原丘陵古墓群ではC区でピット数基、溝状遺構が確認され、D区では破風墓1基が対象。墓庭、墓室、屋根など各部の造り及び造成方法などが把握された。E区の赤道渡呂寒原古墓群では古墓跡の検出を想定していたが、破壊が著しく、墓石等の部材が集中している状況が確認された。遺物ではワンブーのほぼ1個体が出土。							

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権(発行者)の承諾なく、この報告書を複製して利用できます。なお、利用にあたっては、出典を明記してください。

宜野湾市文化財調査報告書 第61集

**赤道渡呂寒原古墓群
神山後原丘陵古墓群
宜野湾シリガーラ流域古墓群
宜野湾後原遺物散布地**

平成30年度・令和元年度
市道宜野湾11号整備における埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年 2023(令和5)年2月28日

編集
発行 沖縄県宜野湾市教育委員会

住所 〒901-2203
沖縄県宜野湾市野嵩1丁目1番2号
TEL 098-893-4430

印刷 文進印刷株式会社
沖縄県島尻郡八重瀬町字宜次706-4
TEL 098-996-3356